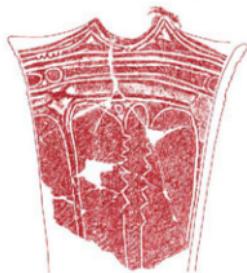


茨城県稲敷郡美浦村

陸 平 貝 塚

－調査研究報告書4・1987年度確認調査の成果－



2010

美浦村教育委員会

「茨城県福島郡美浦村 陸平貝塚 一調査研究報告書4・1987年度確認調査の成果一」 正誤表

箇所	誤	正
17頁右段22行目	「浮島式Ⅰ a～Ⅲ式」	「浮島Ⅰ a～Ⅲ式」
18頁表「トレンチ」欄	MNΩ27-⑤列	MN27-⑤列
20頁左段29行目	P 18-a列	P 16-a列
20頁右段6～7行目	台地平坦部	台地縁辺部
23頁左段21～22行目	両極打法の剥離痕を残す石片11点、	両極打法の剥離痕を残す石片10点、
25頁第12図トレンチA-B断面実測図		
41頁右段18行目	灰褐色粘土層のⅣ層	灰褐色粘土層のIV層
42頁写真13		写真左右逆
61頁写真24キャプション	A貝塚No 1 トレンチ西部	A貝塚No 1 トレンチ東部
69頁左段最下行	長軸2.4m、短軸1.45m	長軸1.2m、短軸0.72m
75頁右段26行目	180±1	182±1
83頁左段12行目～16行目	6, 7は口縁部が内側に肥厚し、その内面に沈線と角押文が施された阿玉台式直前段階の土器で、6の外面上には隆起線が、8の口縁部外面と口唇部には角押文がみられる。又状の口縁をなし、施文部位が1列の角押文が施された7, 9は阿玉台Ⅰa式に該当し、7は	8は口縁部が内側に肥厚し、その内面に沈線と角押文が施された阿玉台式直前段階の土器で、口縁部外面と口唇部には角押文がみられる。又状の口縁や、隆起線に付随した1列の角押文がみられる6, 7, 9は阿玉台Ⅰa式に該当し、6, 7は
101頁右段35～39行目	しかし、それがa, b層とc, d層の時期差を示すものかは、小片のため判断し難い。	削除
106頁第65図a層	87	87a
106頁第65図b層	87	87b
107頁左段31行目	87	87a
107頁左段33～34行目	R Lの縄文と隆線が施された87と、	87～94は縄文土器。 R Lの縄文と隆線が施された87bと。
118頁第72図		
124頁左段14行目	5mmメッシュ	5mm及び5mmメッシュ（本章内では以下「5mmメッシュ」）
124頁左段17行目	5mm及び5mmメッシュ	5mmメッシュ
160頁表19第45回207「種類」欄	両極打法石片	剥片
161頁表20「図版番号」欄	第66図69, 70, 71	第64図64, 65, 66

茨城県稲敷郡美浦村

陸 平 貝 塚

—調査研究報告書 4・1987 年度確認調査の成果—

2010

美浦村教育委員会



上空から見た霞ヶ浦と安中台地



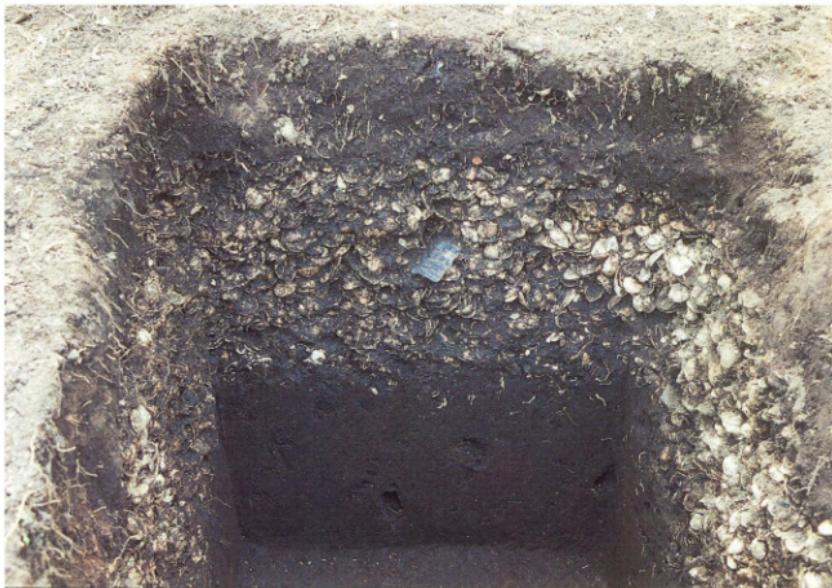
陸平貝塚全景 白線部は貝層 白点は湧水



台地平坦部試掘調査風景



D貝塚東部検出縄文時代早期後葉の斜面貝層（D貝塚No.2 トレンチ 下部の貝層が早期、上部の貝層は中期のもの）



E貝塚検出縄文時代前期後葉の斜面貝層（E貝塚No.1トレンチ拡張区西壁）



B貝塚西部検出縄文時代中期初頭の斜面貝層（B貝塚No.1トレンチ深掘部南壁）

序

明治 12 年（1879 年）、陸平貝塚において、当時東京大学の生徒であった佐々木忠二郎氏と飯島魁氏が、日本考古学の原点ともいえる、日本人の手による最初の発掘調査を行いました。この調査は若い情熱によって成し遂げられた、日本近代科学黎明期における金字塔といえます。

それから 108 年後の昭和 62 年（1987 年）、陸平の地は再び、若い学生の熱気に包まれました。「遺跡保存と開発は並列同義」という新しい発想のもと、美浦村安中地区総合開発計画の中で、陸平貝塚のより良い保存が検討され、それを実現するための確認調査が実施されたのです。この調査は現在陸平貝塚が美浦村の文化シンボルとして位置付けられ、保存とさまざまな活用が展開されるようになった、まさに第二の出発点といえるものでした。

本書はその確認調査の正式な報告書になります。現地での調査実施から長い月日がたってしまい、刊行が遅くなってしまったことをお詫びするとともに、本書に記した成果が地域の歴史研究に貴重な情報を加え、そして、地域に根差した遺跡の保存と活用を今後さらに推進していく上で、振り返るべきひとつの原点になることを願う次第です。

調査の実施にあたっては、株式会社西洋環境開発をはじめ、研究者の方々、そして多くの地域の方々に、ご尽力・ご支援を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成 22 年 3 月

美浦村教育委員会
教育長 葉梨 修

例　　言

1. 本書は、茨城県稻敷郡美浦村大字馬見山字貝壳 391-2 外地内に所在する陸平貝塚に関して、昭和 62 年度に実施された発掘調査の報告書である。
2. 調査は、安中地区総合開発に伴う陸平貝塚の保存対策の一環として、株式会社西洋環境開発の協力のもと、美浦村から委託を受けた陸平調査会によって実施されたもので、平成 20 年度からは美浦村教育委員会が事業を継承し、本報告書を刊行した。
3. 現地調査が実施された昭和 62 年度の陸平調査会と、本格的な整理作業及び報告書刊行がなされた平成 20・21 年度）の美浦村教育委員会の組織は以下のとおりである。

陸平調査会（昭和 62 年度）

〔顧問〕坪井清足 〔会長〕市川紀行 〔副会長〕鈴木三千雄、坂本芳心、戸沢充則 〔理事〕茨城県文化課長、川崎純徳、萩田正義、浜田忠枝、木村芳雄、小松崎卓、小沢起一、小泉堅三郎、川崎吉男、武田勘、古田茂、茂呂豊平、小泉美明、飯塚廣 〔監事〕松葉忠春、本橋圭雄 〔事務局長〕中澤光夫 〔事務局員〕伊藤秀、鈴木素行、齊藤幸恵、中村哲也
〔調査団調査指導委員〕戸沢充則、岩崎卓也、麻生優、安藤政雄、鈴木公雄、小林達雄、赤澤威、西田正規、宮内良隆
〔助言者〕岡村道雄

美浦村教育委員会（平成 20・21 年度）

〔教育長〕葉梨修 〔生涯学習課長〕大橋幸雄（～平成 21 年 3 月）、岡田守（平成 21 年 4 月～）

〔文化財庶務係長〕中村哲也 〔文化財保護係長〕川村勝（～平成 21 年 3 月）、中村哲也（平成 21 年 4 月～）

〔学芸員〕馬場信子 〔主任〕糸賀久子（～平成 21 年 3 月）、阿井朋子（平成 21 年 4 月～）

4. 調査の組織・参加者は以下のとおりである。

貝塚範囲確認調査

〔調査団長〕戸沢充則 〔調査指導者〕安藤政雄、木村芳雄、宮内良隆 〔参加者〕阿部芳郎、小杉康、小菅特夫、齊藤幸恵、清水和、鈴木素行、相馬生奈子、鶴田典昭、中村哲也 〔明治大学考古学専攻実習〕小林三郎、熊野正也、石川日出志、小林桂子、須藤降司、黒沢浩、安藤道由、池田直樹、竹内直文、中村享史、宮代榮一、1987 年度専攻 1 年生台地平坦部試掘調査

〔調査団長〕戸沢充則 〔調査指導者〕安藤政雄、前田潮、西田正規、山田昌久、宮内良隆 〔調査主任〕鈴木素行、阿部芳郎、小杉康 〔調査副主任〕小菅特夫、相馬生奈子、鶴田典昭 〔涉外〕齊藤幸恵、中村哲也

〔参加者〕浅野治、浅野由美子、浅野利一、阿部修二、有田貴紅葉、五十嵐一治、池谷信之、池谷初恵、生田治之、石川日出志、石島筑郎、石島文雄、遠田己代次、石塚政江、石鍋敏夫、糸原清、糸谷玲子、岩瀬令治、岩本京子、植木武、氏家敏之、臼杵勲、宇田川浩一、浦志真恵、江橋正浩、大竹憲昭、小笠原永隆、小川直裕、

小川みづほ、沖松信隆、尾田倫一、小野紘、小島由香里、片柳崇、金森昭憲、加納金幸、上守秀明、木川正大、

菊地信吾、木村聰、小玉秀成、近藤克己、齊藤明広、齊藤岳、齊藤礼子、板巻美徳、佐久間秀子、桜井健治、佐藤啓、

佐藤幸恵、佐藤誠、瀧村雄一郎、瀧崎和宏、鈴木大司、鈴木加津子、鈴木正博、須藤降司、園部美佳、臺由子、

高橋勝幸、高橋伸子、滝沢千鶴、武井知子、武田治雄、武田涉、田中純、田中正三、谷和隆、田村由美、長義之、

坪井佐知子、勅使河原彰、照井貞子、豊田淑子、中島直子、西村鵬広、西山誠、沼崎義治、沼尻利政、野口繁雄、

橋本裕行、花岡智行、馬場悠男、馬場信子、原田成浩、日暮児一、福田美穂子、古里与志子、本田岳秋、松内實二郎、

松本栄、松本右子、三木由紀子、水谷健介、道上文、皆葉明生、宮地尚道、宮田永子、村田大、柳山昌夫、矢島國雄、

安井健一、山田康弘、山本薰、山本美佳、山本有子、横山万里子、吉田瑞絵、四柳隆、渡辺新

〔村民調査参加者〕阿井健、浅野正彦、阿部綾祐、安藤邦典、飯島俊大、飯田和徳、飯田淳二、飯田藤男、飯塚美咲、石井勢津子、石川大志、石橋敬子、市川歩、糸賀みすみ子、井原俊行、上野武雄、上野真樹、梅沢聰、榎本貴志、

江原慶子、蛇名貴史、蛇名武彦、達藤彌彦、往古惠美、大川政行、大津正剛、大和田心、岡野久子、柏崎元樹、

川去とき江、川村猛史、神田充正、木村綾子、桐山寿美子、久保勉、栗山秀樹、栗山広幸、栗山真、桑野甚平、

小泉慶子、向後春江、醍醐洋美、齊藤和義、斎藤貴弘、酒井宏、酒井孝之、酒井照子、坂本克裕、坂本昌彦、坂本光良、佐川知孝、佐々木真紀子、佐藤静枝、椎名哲也、芝崎雅也、清水誠、霜崎修、白野孝一、白野優子、進藤留美子、鈴木三枝子、仙波克友、齋果守信、高橋和久、高橋峰子、武田藤一、武田将人、田嶋寛之、田辺邦彦、殿岡慎一郎、谷原智博、塚本将司、塚本義弘、中泉貴之、中泉睦子、永長弘幸、中沢福雄、永椎友実、中島重一、中島千鶴子、中島正教、中島よしの、浪方宏和、榆木正秀、沼崎近、沼崎秀昭、沼崎光男、根本秀征、根本正史、野口章、野口直人、長谷部麻理、葉梨孝治、葉梨朋秋、葉梨美仁、林昌美、人見あい子、平野範子、広瀬学、福田久美子、福田純、福田真一、藤枝幸男、古川保子、古館規和、古山哲、保志学、細田悟、堀越浩治、堀越悟、松島チエ子、松田かおる、御手洗健一、宮本明子、茂呂豊平、諸岡昌弘、谷畠大輔、谷畠文子、八巻正好、山口俊治、山崎純子、山崎満男、山田透久、山本博智、梁田紀幸、吉田健一、渡辺敏幸、渡辺智也

整理作業（上記重複者を除く）

阿部きよ子、大津則子、亀井翼、清原つね子、佐藤トキ、島田裕子、殿岡和子、戸ノ岡浅子、堀恭介、宮下聰史、宮本千代子〔第Ⅰ期陸平貝塚を皆で調べよう講座生〕石神靖裕、春日清一、須崎敏之、高野雅之、田島早苗、殿岡敏子、中山義信、西木和彦、沼崎正美、野口洋一、堀越實、堀越靖子

5. 地下レーダー探査は桜小路電機有限公司に委託し、貝類、脊椎動物遺体の分析は樋泉岳二に、微小貝類の分析については黒住耐二に依頼した。

6. 本書の編集とI～IV-1、Vの執筆は中村哲也が、IV-2の執筆は樋泉が、IV-3の執筆は黒住が行った。

7. 出土遺物及び貝層サンプルについては、美浦村教育委員会が保管している。

8. 本調査の実施にあたって下記の方々並びに諸機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝する次第である。

阿久津久、伊東重敏、糸賀邦男、達藤好、鴨志田篤二、川井正一、木村正、木村愛子、窪田恵一、工楽普通、後藤広子、酒井彰、坂部實、佐原真、下川浩一、鈴木嘉彦、関根孝夫、田口崇、武田有弘、中川峻一、西本豊弘、橋本信吉、林慶康、諸星政得、山本泰全、湯浅寿輝、茨城県教育庁文化課、茨城県県南教育事務所、茨城県考古学協会、JRA美浦トレーニング・センター、産業技術総合研究所、文化庁、美浦村史編さん室、美浦村社会福祉協議会、美浦村役場
(敬称略、五十音順)

凡　例

1. 文章中のゴチック数字は遺物番号を示す。
2. 図中の「住」は住居跡を、「上」は上坑を、「溝」は溝状遺構を示す。
3. トレンチ実測図における、△網点は只層の検出範囲を、薄い網点は粘土質土（基本土層を除く）の範囲を、濃い網点は焼土の範囲を、長い破線は床面硬化部の範囲を、一点破線は擾乱の範囲を示す。また、グリッドに合せて設定したトレンチでは、両端のセクションポイントは基本的にグリッド杭の位置と一致するが、ずれる場合には+印でグリッド杭の位置を示した。
4. 土器実測図における、●印は須恵器であることを、網点は黒色処理が施された範囲を示す。また、石器実測図における空白部は磨滅部を示す。
5. 縮尺は、トレンチ実測図が1/60（部分図、個別遺構図、E貝塚No.1トレンチを除く）、土器復元図が1/4又は1/3、土器破片図、石皿、磨石、嵌石、櫛器、砥石が1/3、石礫、石核、両極打法の剥離痕を残す石片、二次加工剥片、剥片（第17図9のみ1/2）、骨角器、貝製品が2/3、土製品、磨製石斧（第32図1のみ2/3）、打製石斧、石錐、鉄器が1/2である。
6. 平面基準となるグリッドの座標（日本湖地系）は、P 10 グリッド北東角がX = 1653.199, Y = 46649.559、P 20 グリッド北東角がX = 1674.055, Y = 46747.319である。

目 次

口絵／序／例言／目次／凡例

I. 遺跡と調査の概要	
1. 遺跡の立地と歴史的環境	1
遺跡の位置と地形／周辺の遺跡／調査略史	
2. 確認調査の概要	3
調査に至る経緯／調査の目的と経過	
II. 貝塚の範囲確認調査	
1. 貝層の分布調査	5
調査の方法／貝層の分布／各貝塚の状況	
2. 地下レーダー探査	11
探査の方法／貝層の反応	
III. 台地平坦部の試掘調査	
1. 調査の概要	13
調査区の設定／土層の堆積と遺跡の古地形／検出された遺構の概要／出土した土器の概要 ／出土した土製品・石器・骨角器・貝製品の概要	
2. 検出された遺構と遺物	24
P 12 - a 列トレンチ／P 14 - a 列トレンチ／P 16 - a 列トレンチ／P 18 - a 列トレンチ ／P 20 - a 列トレンチ／P 22 - a 列トレンチ／P 24 - a 列トレンチ／P 26 - a 列トレンチ ／P 28 - a 列トレンチ／MNO 17 - ⑤列トレンチ／T 27・28 - e 列トレンチ／H 28 - ①列トレンチ ／H 30 - ①列トレンチ／MN 27 - ⑤列トレンチ／W 28 - ①列トレンチ／Y 28 - ①列トレンチ ／A 貝塚No.1 トレンチ／B 貝塚No.1 トレンチ／B 貝塚No.2 トレンチ／D 貝塚No.1 トレンチ ／D 貝塚No.2 トレンチ／E 貝塚No.1 トレンチ／G 貝塚No.1 トレンチ	
IV. 貝層出土の動物遺体群の分析	
1. 貝層の分析方法	122
貝層のサンプル採取／現地採集資料／動物遺体の選別と分析の対象	
2. 貝類・脊椎動物遺体の分析	124
分析資料と分析方法／分析結果／考察	
3. 陸平貝塚から得られた微小貝類遺体	145
方法／結果及び考察	
V. まとめと課題	155
引用・参考文献／巻末付表／写真図版／報告書抄録	

I. 遺跡と調査の概要

1. 遺跡の立地と歴史的環境

遺跡の位置と地形

縄文時代の大規模貝塚遺跡である陸平貝塚は、霞ヶ浦の南岸、茨城県稻敷郡美浦村安中地区に所在する。霞ヶ浦南岸と利根川下流の間には、「稻敷台地」と呼ばれる更新世の地形面を基盤とする台地が形成されており、遺跡は霞ヶ浦に突き出たその北端部に位置する。

遺跡が立地する台地は、稻敷台地本体とは沖積地によって切り離された周囲約 7.5km の島状台地で、上面は標高 20 ~ 30 m で推移する。北側と東側は狭い湖岸低地を挟んで霞ヶ浦に面し、現在干拓地になっている南側は、1950 年代までは「余郷入」と呼ばれる霞ヶ浦の入り江であった。さらに、縄文海進時（約 5,000 年前）には、台地自体が当時海域であった霞ヶ浦に浮かぶ島であったことが、珪藻分析によって推測されている〔鹿島・阪口 2009〕。台地内には「谷津」と呼ばれる樹枝状に発達した狭い開析谷が複雑に形成され、陸平貝塚はその谷頭が集まつた台地中央部に展開する。

四方から入り込んだ谷津に区切られた標高 26 ~ 28 m、面積約 30,000 m² に及ぶ台地上平坦部を取り囲むように、A ~ G、I 貝塚と呼称する 8 個所の斜面貝塚が分布する（第2図）。特に B、D 貝塚は長さ 130 m 以上、幅 50 m 以上にわたって台地縁辺から谷底にかけて広がりを有する大規模な貝塚である。各貝塚は尾根部や尾根状に張り出した斜面地を塊に分離しており、E 貝塚だけは尾根部で隔てられた狭い平坦部に面して形成されている。

周辺の遺跡

霞ヶ浦沿岸は縄文時代の貝塚密集地帯として知られ、陸平貝塚周辺以外の美浦村内では、旧余郷入に注ぐ小河川・高橋川とその支流によって開析された谷筋沿いに斜面貝塚が集中する。谷奥から順に「興津式」土器の標準式遺跡である前期後葉の興津貝塚〔西村 1968 他〕、前期前

葉と中期初頭の斜面貝塚を有する虚空藏貝塚〔大川・大島編 1977〕、前期中葉と中期後葉の貝層が検出されている大谷貝塚〔駒澤 2009〕、後期の平木貝塚〔酒井 1959〕があげられるが、これらは貝塚によって時期が異なる傾向が認められる。

陸平遺跡群（第1図） 一方、陸平貝塚が立地する島状台地内では、詳細な分布調査〔陸平調査会 1989、美浦村教委 2001〕等によって、旧石器時代～近世に及ぶ計 39ヶ所の遺跡が確認されており、「陸平遺跡群」「小杉 1990」と総称されている。島状台地という地理的に限定された範囲に立地するこれら各時期の遺跡同士は、何らかの有機的繋がりを持って営まれたものと推定され、遺跡群研究の対象として有意な単位といえる。

縄文時代早・前期の陸平遺跡群では、陸平貝塚で早期後葉と前期後葉の斜面貝塚や早期の炉穴が確認されているのをはじめ、陣屋敷遺跡〔陸平調査会 1992〕（003 以下番号は第1図に対応）、天神平 I 遺跡（012）、木の根田遺跡（026）、内出遺跡（027）、下の下遺跡（030）で住居址や炉穴、地点貝塚が検出されている。対して、陸平貝塚において複数の地点にわたって貝層が形成され、住居址も認められる縄文時代中・後期では、周囲に集落遺跡はほとんど確認されておらず、陸平貝塚に近接する押井戸遺跡（015）で中期阿玉台 I b 式期の住居址 1 軒が検出されているに過ぎない。代って縄文時代後期や晩期の陸平遺跡群では、谷津の谷底に焚き火址とともに後期の粗製土器が多量に廃棄されていた陣屋敷低湿地遺跡〔陸平調査会 1990〕（004）や、晩期の製塙遺跡である法堂遺跡〔戸沢・半田 1966〕（032）など、特定の活動の痕跡を示す遺跡が存在する。

また、陸平貝塚では弥生時代から奈良・平安時代の遺物や遺構も検出されているが、当該期は陸平遺跡群でも多くの集落遺跡が存在する。弥生時代では、台地の東方から入り込んだ谷津に面した多古山 I・II 遺跡（010, 011）から中期の土器が検出されており、西方から入り込んだ



第1図 陸平貝塚周辺の地形と遺跡

谷津に面した台地上には、後期の集落跡である宮脇遺跡（002）、陣屋敷遺跡（003）、根本遺跡〔陸平調査会 1996〕（005）がまとまって存在する。

古墳時代前～中期の集落跡は、宮脇遺跡（002）、陣屋敷遺跡（003）、根本遺跡（005）、ミコヤ遺跡（014）、木の根田遺跡（026）、内出遺跡（027）など、5,000 m以下 の尾根状台地に立地するのに対し、古墳時代後期を主体とした遺跡は、陸平貝塚を代表して御室平遺跡（006）、天神平Ⅰ・Ⅱ遺跡（012、013）など10,000 m以上 の広い平坦部を有する台地上に形成される傾向が認められる。

奈良・平安時代になると集落は台地全体に跨まれるようになり、宮脇遺跡（002）、陣屋敷遺跡（003）、根本遺跡（005）、御室平遺跡（006）、多古山II遺跡（011）、天神平I遺跡（012）、天神平II遺跡（013）、ミコヤ遺跡（014）、押井戸遺跡（015）、内出遺跡（027）で、発掘調査によって住居址が検出されている他、池端遺跡（140）〔美浦村教委 2004〕で火葬墓がみつかっている。

調査略史

陸平貝塚は1879（明治12）年、E. S. モース氏の薰陶を受けた東京大学の佐々木忠二郎氏と飯島魁氏によつて、日本人の手による最初の学術発掘が実施された遺跡

として著名であり〔佐々木・飯島 1980, I.IIJIMA, C.SASAKI 1883〕、その後も大野雲外氏をはじめ多くの研究者によって調査や踏査が行われている〔大野 1896他〕。これらのうち昭和戦前期までの調査については、別に報告してあるので〔美浦村教委 2006〕。ここでは今回の調査に関わる昭和戦後期の調査を列記するに留め、詳細については、次章以降の関連項目の中で触ることにする。

〔酒詰仲男 1951〕 1948年、酒詰仲男氏等によって、B貝塚西端谷頭付近の発掘と電気探査による調査が行われた。

〔庄司克 1981〕 1963年、庄司克氏はA貝塚において露出土層断面の観察と土器の採集を実施している。

〔茨城県 1979〕 1968年、茨城県史編纂事業の一環として、明治大学考古学研究室によって陸平貝塚の測量調査が実施された。この調査によって、8箇所の斜面貝塚が確認され、その分布範囲を含めた遺跡の地形実測図がはじめて作成された。

〔美浦村教委 2004〕 1997年、便宜施設建設に伴い、A貝塚北側の台地平坦部上の発掘調査が、美浦村教育委員会により実施された。調査面積は約170 m²で、A貝塚の末端部にあたる斜面貝層と縄文時代中期後葉と後期前葉の住居跡等が検出されている。

2. 確認調査の概要

調査に至る経緯

古くから知られていた陸平貝塚であったが、その保存対策の進展は近年になってからである。1970年代後半には、貝塚を含む安中台地一帯に、一大レジャーランドと住宅団地を造成する開発計画が持ち上がり、造跡破壊の危機に直面する。これにあたっては、地元の研究団体「常総台地研究会」が主体となった全国的な保存運動が展開され、結果、景気の下降とも相まって開発計画が中止に至った経緯がある〔常総台地研究会 1975〕。

しかし、この開発計画に伴う土地の村外への流失や、農村構造の変化によって、畑作や山の放棄などが進み、貝塚周辺は人も入れないような荒れ地となり、盗掘も横

行するような状態になってしまった。

このような状況の中、村では放置された土地の有効利用と地域の活性化を目的に、企業を誘致しての新たな大規模リゾート開発「美浦村安中地区総合開発」を計画する。この新たな開発計画の中では、以前の経緯を踏まえ、「陸平貝塚そのものと開発は並列同義」〔市川 1987〕という理念の下、当初から陸平貝塚のより完全に近い形での保存と、将来にわたる保全と活用が検討されることになった。

開発計画が正式に開始された1986年、美浦村長を会長に、村民や地元研究者をメンバーとした「陸平貝塚保存対策委員会」が発足し、翌1987年には、具体的な調査と保存計画を推進するため、坪井清足氏を顧問に、専門研

究者を調査指導委員に委嘱した「陸平調査会」へと発展・改組された。

調査会ではまず、遺跡の現状を正確に把握し、保存範囲を確定するための情報を得ることを目的に、貝塚の範囲確認と、台地平坦部の地下レーダー探査及び試掘を柱とする、確認調査を行うことにした。また、これらの調査と並行して、開発区域内における遺跡の有無を確認する分布調査と、周辺地域の古環境復元を柱とする自然科学分野調査を、同年から開始した〔美浦村教委 2009〕。1990 年にはそれらの成果を受けて、周辺の谷部も含めた約 14ha の現状保存範囲が、開発区域の中に確保されることになる。

その後、調査会では、「働く博物館構想」「戸沢 1991, 1993」をかけ、開発企業の協力のもと遺跡整備計画の策定にはいるが、景気の急激な悪化にともない、開発計画自体が縮小を余儀なくされ、整備計画も中断せざるを得なくなる。しかし、遺跡の草刈りボランティアなど貝塚の保全と活用をめぐる様々な住民活動が広がると相まって、保存範囲内の土地の多くが開発企業である株式会社西洋環境開発から美浦村に寄付され、1998 年には我が国を代表する貝塚遺跡として、国の史跡に指定された。

調査の目的と経過

調査会では、1987 年度確認調査の実施にあたり、調査員を兼ねる事務局員の充実を図るとともに、明治大学考古学研究室をはじめ多くの大学研究機関の協力を得て、戸沢充則氏を団長とする「陸平調査会」を編成した。また、5 月には調査の事前準備として、篠竹やススキ等のブッシュに覆われていた遺跡の草刈り作業を開始し、7 月には測量基準杭の設置を行っている。

貝塚の範囲確認調査 当調査は、保存範囲の策定に関わる周辺地形の現況把握と、遺跡の主要要素である貝塚の正確な分布範囲を把握する目的で、1987 年 6 月 5 日～8 日の期間に実施された。

周辺地形の現況把握は、明治大学大学院生 6 名の参加を得て、遺跡周囲の地形を歩行観察したもので、密生する山林や藪に阻まれながらも、2 日間をかけて該当地域を全周することができた。その結果、歴史的景観を確保する上で重要な、貝塚が面する谷部の地形が、大きな改

変を受け良好に残されていることが確認され、保存区域の検討にあたっては、この谷部の保存と将来にわたる整備と活用のためのスペース確保が考慮されることになる。

貝塚の分布調査は、既成の貝塚実測図〔茨城県 1979〕に補正を加えるために、6 月 7 日に明治大学考古学専攻 1 年生の実習を受け入れ、約 100 名の参加者のもと実施された。ボーリングステッキ等を用いて各地点の貝塚の範囲を確認し、併せて遺物の表面採集も行っている。

地下レーダー探査 陸平貝塚は貝層部の調査は古くから行われていたが、貝塚を残した人々の生活痕跡の存在が予想される、貝塚に囲まれた台地平坦部の内容はほとんど把握されていなかった。そのため、台地平坦部における遺構群の有無や広がりを確認するために、地下レーダー探査を実施した。探査は桜小路電機有限公司に委託して、1987 年 7 月 6 日から、ほぼ 1 ヶ月間にわたって行われた。

台地平坦部の試掘調査 貝塚の分布調査や地下レーダー探査の結果を、発掘によってさらに具体的に確認するために、台地平坦部を対象に部分的な試掘調査（トレンチによる遺構確認調査）を 1987 年 8 月 6 日～9 月 4 日の期間実施した。

事前の 8 月 2 日に、テストピットによる基本堆積土層の確認を行い、本調査は、第Ⅰ期（8/6～8/14）、第Ⅱ期（8/16～8/24）、第Ⅲ期（8/26～9/3）に分けて実施した。調査には、明治大学、筑波大学、学習院大学、千葉大学、日本大学、南山大学、帝京大学の学生をはじめ、茨城県考古学協会員や地元高校生等が集まり、延べ人数では、調査指導委員 57 名、事務局員や大学院生の調査員 232 名、学生等の作業員 865 名の参加があった。8 月 17 日～8 月 20 日には、村内の中学生や住民、延べ 200 名による村民参加調査が実施され、期間中の延べ見学者数は約 650 名に及ぶ。また、10 月 19 日には検出された人骨土塊の取り上げを行った。

なお、本書刊行までに長い年月がかかってしまったが、整理作業は、現地での調査終了直後の 10 月 21 日から、断続的に実施している。

II. 貝塚の範囲確認調査

1. 貝層の分布調査

調査の方法

貝層の分布調査実施にあたっては、明治大学考古学研究室が以前作成した貝塚実測図【茨城県 1979】を事前の参考資料にしたが、8ヶ所に分かれて分布する貝塚の地点名が無かったため、A～H貝塚の名称を付与した【陸平調査会 1989】。地点名については、他の文献において記載例があるが、統一されておらず、今回は酒詰仲男氏の調査報告【酒詰 1951】と瓦吹堅氏の報告【瓦吹 1984】を参考に新たにふり直している。

調査は明大実測図と、表面に露出している貝の在り方を参考にしながら、長さ約1mのボーリングステッキやピンボールを用い、各貝塚における地中の貝層の有無を探査した。探査によって把握された範囲境界には旗を口間に立て、測量の測点としている。

貝層の分布

調査によって把握された貝層の分布を第2図に示す。A～G貝塚の位置は、明大実測図とほぼ一致しているが、明大実測図で記載されていたE貝塚南方の谷頭斜面に位置するH貝塚が今回の調査では確認できなかった。代わりに、B貝塚とG貝塚の間に位置する貝塚は、今回の調査によって新たに確認されたもので、I貝塚と名付けた。

各貝塚の範囲は、明大実測図よりも概して広範囲に及ぶことが明らかになったが、後述する試掘調査や、1997年度の発掘調査によって、第2図の範囲よりさらに広がりをもつことが、部分的ではあるが確認されている。

各貝塚の状況

次に、各貝塚ごとの分布状況と表面採集遺物について記す。また併せて、試掘調査の成果や過去の調査記録に基づき、各貝塚の形成時期を想定しておく。

A貝塚 本貝塚は、1879年に佐々木・飯島両氏が発掘した「丘ノ西南隅」の地点にあたる【美浦村教委 2006】。西方から入り込んだ谷津に面した貝塚で、やや高まりを有する台地端部から谷頭斜面にかけて、長さ約100m、幅約50mの範囲にわたって貝の分布がみられる。後日実施した谷部の試掘調査では、斜面下方まで二次堆積と思われる破碎貝を含む土層が確認されている。

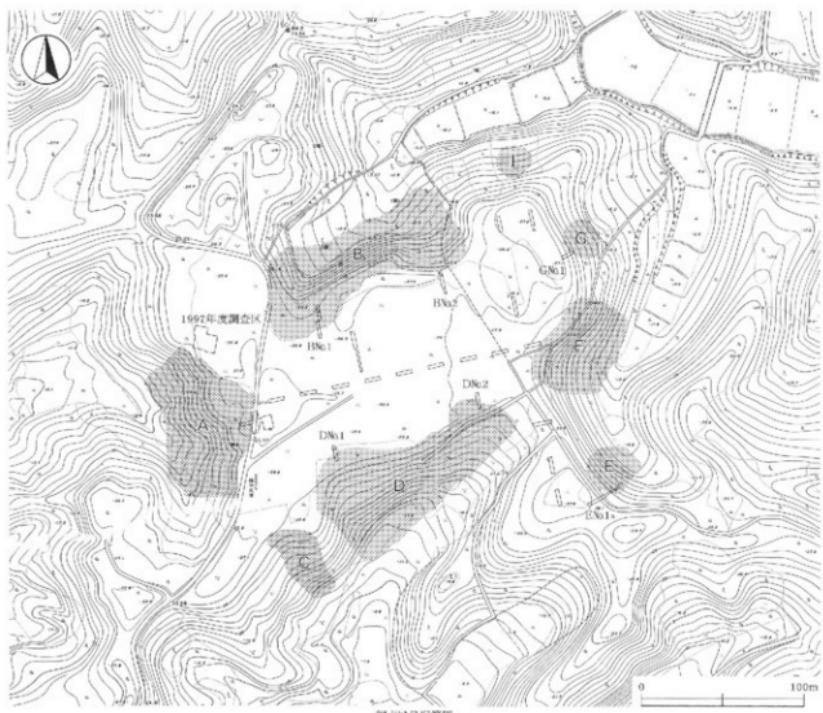
第3図1～5は、今回表面採集した資料である。1～4は縄文土器で、1, 2, 4は中期中葉～後葉の、3は後期前葉の破片と思われる。5は研磨が施されたベンケイガイ製の貝輪破片。

A貝塚の台地上には以前八幡様が祀られていたが、大野雲外氏は1896年頃、「西隅八幡社ノ南中腹崖」を発掘し、「土壤一尺貝殻三尺計リ」「渦形ノ厚手土器破片」が出土したことを記録している【大野 1896】。

1963年の庄司氏による露出貝層断面の観察では、「台地上平坦部より3～4mほど低い斜面途中」の地点で、阿玉台式期の3枚の貝層を確認しており、Ⅲ層としたハマグリを主体とする「第2混上貝層」から阿玉台Ⅱ式に相当する土器を、下位のⅣ層とした「ハマグリ純貝層」から阿玉台Ⅰa式に相当する上器を採取している。「台地縁辺の肩部に相当する」地点では「豎穴住居址の一部が出現し、その床面上には堀之内Ⅰ式土器を大量に含む貝層群の堆積が認められた」とする。【庄司 1981】

貝塚の北側の台地縁辺で行われた1997年度発掘調査時に、埋没斜面から貝塚の北端部にあたる阿玉台Ⅰb式～Ⅱ式期の貝層が検出されている【美浦村教委 2004】。

以上の調査記録から、縄文時代中期阿玉台Ⅰa式～Ⅱ式期、後期の堀之内Ⅰ式期の貝層の存在が確認できる。また、貝層中出土かどうか不明だが、東京大学に所蔵されている佐々木・飯島発掘資料には、中期初頭の阿玉台式直前～後期中葉の加曾利B式までの土器大型破片が認められることから【美浦村教委 2006】、中期中葉～後期中葉の時期の貝層が存在する可能性も多い。



第2図 陸平貝塚の地形と貝層範囲



写真1 貝層範囲確認調査風景



写真2 地下レーダー探査風景

B貝塚 北東方から入り込んだ谷津に平行する台地北斜面に位置し、台地端部から谷底にかけて、長さ約130m、幅約50mの範囲にわたって貝の分布がみられる。東部と谷頭にあたる西部の斜面は湾曲しており、その部分では貝の分布が台地側に膨らむ。

第3図6～11は表面採集資料で、6は縄文時代後期前葉の塙之内1式土器、7～9は後期中葉の加曾利B式土器である。10は研磨によって整形された鹿角製刺突具の破損品で、径0.6cm。11は石英粗面岩製の磨石で、表裏面に磨滅と浅い凹みがみられ、側面に敲打痕が観察される。長さ13.5cm、幅7.1cm、厚さ4.5cm、重さ700g。

1948年、酒詰仲男氏等によって、西緒谷頭付近の発掘が行われている〔酒詰1951〕。「谷頭より南へ寄った桑畠の中央」の4m四方の発掘区では、「下層に阿玉台式を出す貝層があって、その上に上から下まで加曾利E式を出す貝層が重り」、電気探査結果の確認をするために掘られた同谷頭部の「穴」では「なおその上に塙之内式があつた」とされる。なお、この地点では「四・七メートルまで掘つてついに貝層下土層」に達している。

今回の試掘調査で、貝塚の東部と西部にあたる台地端部にそれぞれトレーニングを設定した結果、西部のB貝塚No.1トレーニングでは五領ヶ台II式～阿玉台Ia式期までの貝層が、東部のB貝塚No.2トレーニングでも、五領ヶ台II式～阿玉台式期の貝層が確認された。

以上の情報から、縄文時代中期初頭（五領ヶ台II式～阿玉台Ia式期）と、中期後葉の加曾利E式期、後期前葉の塙之内式期の貝層の存在が確認できる。また、酒詰氏の報告では「東南寄の表面採集で、加曾利B式も採集された」と記されているが、試掘調査のB貝塚No.1トレーニングの出土からも、後期中葉の同式土器が多数出土しており注目される。

C貝塚 南西方から入り込んだ谷津に面した、台地南東斜面西部の凹状の場所に位置し、台地縁から斜面にかけて、長さ約40m、幅約25mの範囲にわたって貝の分布がみられる。

表面採集資料の第3図12～17のうち、12は縄文時代中期後葉の加曾利E式土器、13、14は後期前葉の塙之内式土器、15～17は後期中葉の加曾利B式土器である。

D貝塚 南西方から入り込んだ谷津に平行する台地南東斜面に位置し、台地端部から谷底にかけて、長さ約130

m、幅約65mの範囲にわたって貝の分布がみられる。東部の谷頭付近と斜面が湾曲する西部では、貝の分布が台地側に膨らむ。

第3図18～20は表面採集された縄文土器で、18は中期後葉の加曾利E式、20は後期前葉の塙之内1式、19は後期中葉の加曾利B式である。

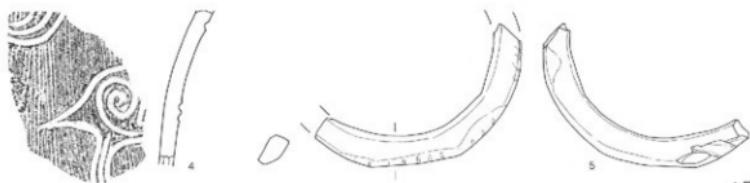
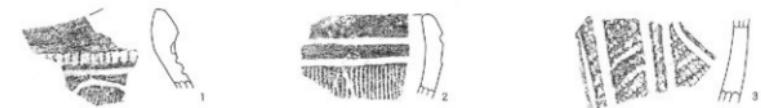
前述した大野氏は、A貝塚とともに、D貝塚にあたる「東南二延長セル南面ノ岸」において「長サ七間 幅一間余ノ場所ニシテ貝殻層を継断セリ、土壌一尺貝殻六尺五寸或ハ八尺ニ至ル」という大がかりな調査を実施し、「阿玉台貝塚ヨリ出ズル雲母ヲ含ム厚平ノ土器ニ類シタルモノ割合ニ多」いことを記録している〔大野1896〕。

今回の試掘調査では、貝塚の東部と西部にあたる台地端部にそれぞれトレーニングを設定している。西部のD貝塚No.1トレーニングでは縄文時代後期初頭の称名寺式期の貝層が、東部のD貝塚No.2トレーニングでは、早期後葉の条痕文期と中期前葉の阿玉台Ib式期の貝層が確認され、さらに、No.1トレーニングでは多数の後期前葉～中葉の上器破片が、No.2トレーニングでは中期中葉の完形に近い土器が、それぞれ貝層上から出土しており、これらの時勢の貝層が重層している可能性が高い。

E貝塚 主体となる台地平坦部とは、尾根状部で隔てられた狭い台地平坦部の北東斜面に位置し、北方から入り込んだ谷津に面している。貝の分布範囲は径約30mの広がりを持つ。酒詰氏の『日本貝塚地名表』〔酒詰1959〕では、「馬見山（台上）」貝塚として登録されている。

試掘調査では、E貝塚No.1トレーニングの斜面部から、縄文時代前期後葉の浮島III式期の貝層が検出された。また、第4図に示したように、表面採集では数多くの土器大型破片が得られたが、そのほとんどが前期後葉の浮島式、興津式、諸磯式土器であり、E貝塚が主に当該期の貝層から構成されていることが予測される。

縦位の刺突列や連続爪形文、撲糸文がみられる21～25は浮島Ia式に、幅の狭い変形爪形文が施された26と、無文地に平行沈線文がみられる27は浮島Ib式に該当する。幅広の変形爪形文が施された28、29は浮島II式に、変形爪形文間に縦位の刻みが施された30、31は浮島III式と思われる。磨消縄文の32と浮線文が施された33は諸磯式土器。34は興津II式に類似した菱形を基調としたモチーフを持つが、沈線区画内は貝殻腹縫文ではなく



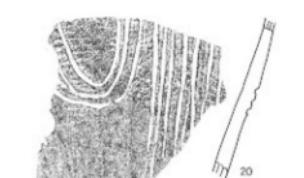
A貝塚



B貝塚

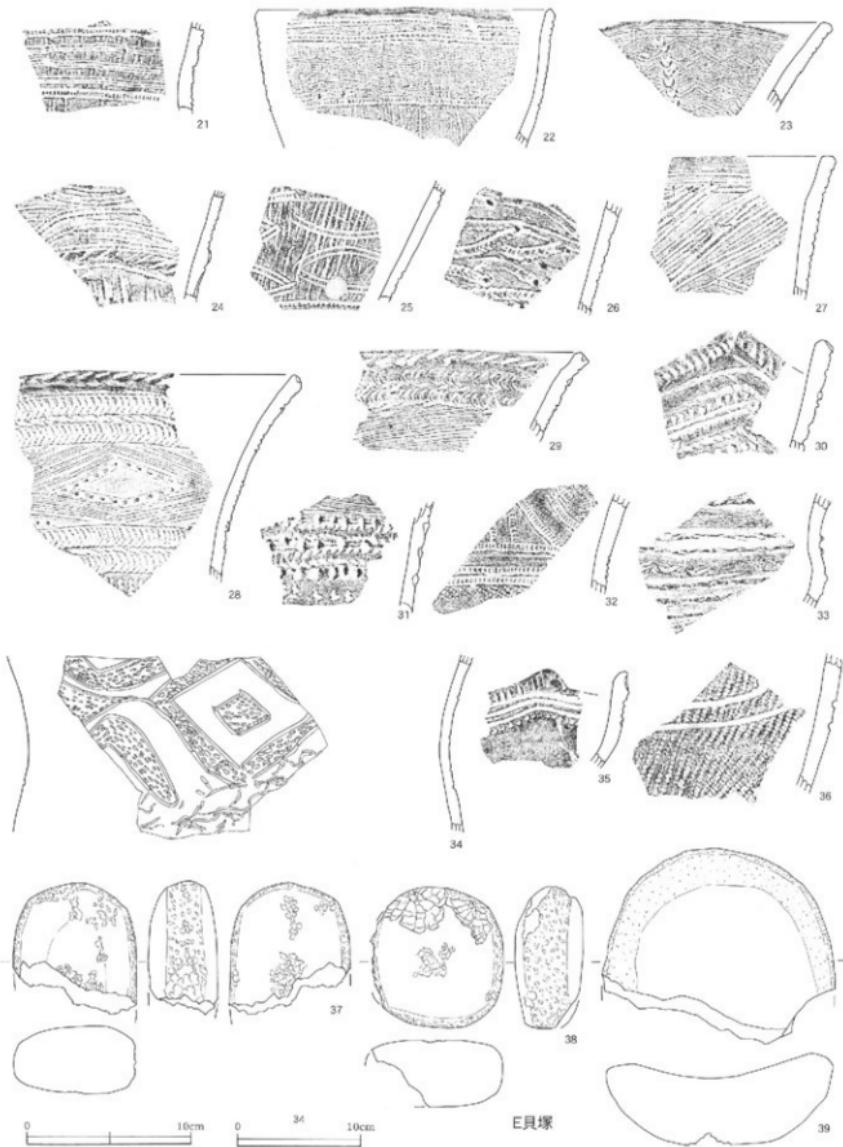


C貝塚

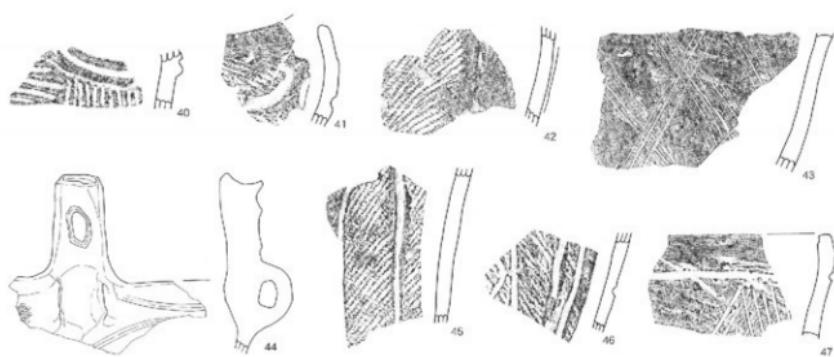


D貝塚

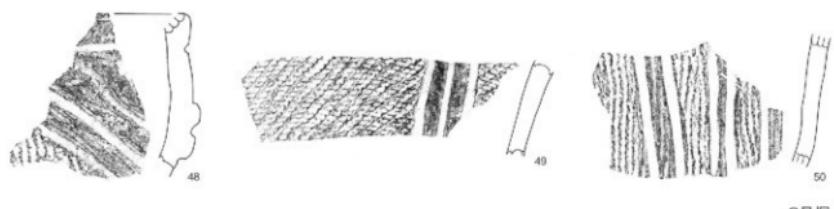
第3図 陸平貝塚貝層表面採集遺物 (A~D貝塚)



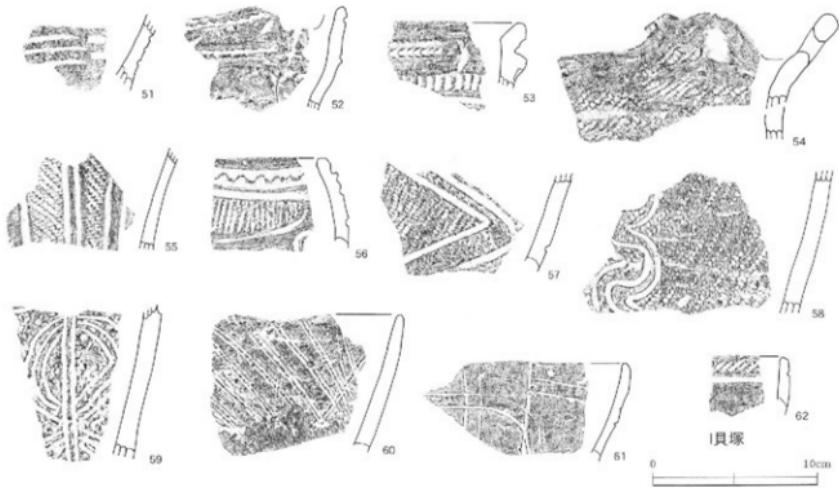
第4図 陸平貝塚貝層表面採集遺物（E貝塚）



F貝塚



G貝塚



0 10cm

第5図 陸平貝塚貝層表面採集遺物 (F, G, I貝塚)

刺突文を充填している。下部に不整な縄文がみられる。35は中期初頭の五領ヶ台II式である。37、38は敲打によつて側面が平坦になった磨石で、表裏面が磨滅し、浅い凹みを有する。37は安山岩製で、幅7.3cm、厚さ4.2cm、重さ360g、38は安山岩製で、長さ8.7cm、幅7.9cm、厚さ4.2cm、重さ440g。39は安山岩製の石皿破損品で、幅13.6cm、厚さ4.2cm、重さ820g。

F貝塚 北方から入り込んだ谷津に面した、台地東斜面に位置し、台地縁辺部から斜面にかけて、長さ約25m、幅約20mの範囲にわたって貝の分布がみられる。

第5図40～47は表面採集された縄文土器で、40は中期中葉、41、42、44は中期後葉の加曾利E式、45、46は後期前葉の堀之内1式と思われる。試掘調査で台地縁辺部に設けられたP28-a列トレンチにおいて、阿玉台Ib式期の貝層が検出された。

G貝塚 北方から入り込んだ谷津に面した、台地東斜

面に位置し、台地縁辺部から斜面にかけて、長さ約25m、幅約20mの範囲にわたって貝の分布がみられる。

第5図48～50は表面採集された縄文土器で、48は中期中葉、沈縞間が磨消された49、50は中期後葉の加曾利E II～III式と思われる。試掘調査で台地縁辺部に設けられたG貝塚No.1トレンチにおいては、加曾利E II式期の貝層が確認されている。

I貝塚 北東方から入り込んだ谷津に面した、台地北斜面に位置するが、他の貝塚と異なり、台地縁辺から一段下がった緩斜面部に、径約20mの範囲にわたって貝の分布がみられる。

第5図51～62は表面採集された縄文土器で、51は早期中葉の田戸下層式、52は中期の阿玉台I式、53、54は中期中葉、55、56は中期後葉の加曾利E式、57～59は後期前葉の堀之内1式、60、61は堀之内2式、62は後期中葉の加曾利B式に該当すると思われる。

2. 地下レーダー探査

探査の方法

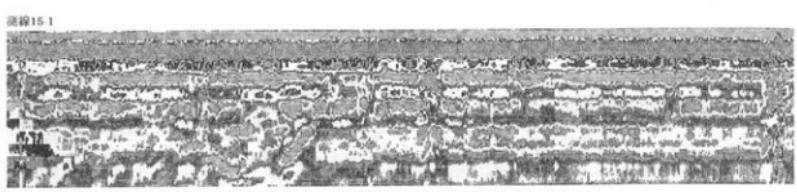
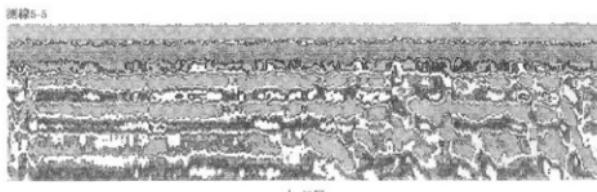
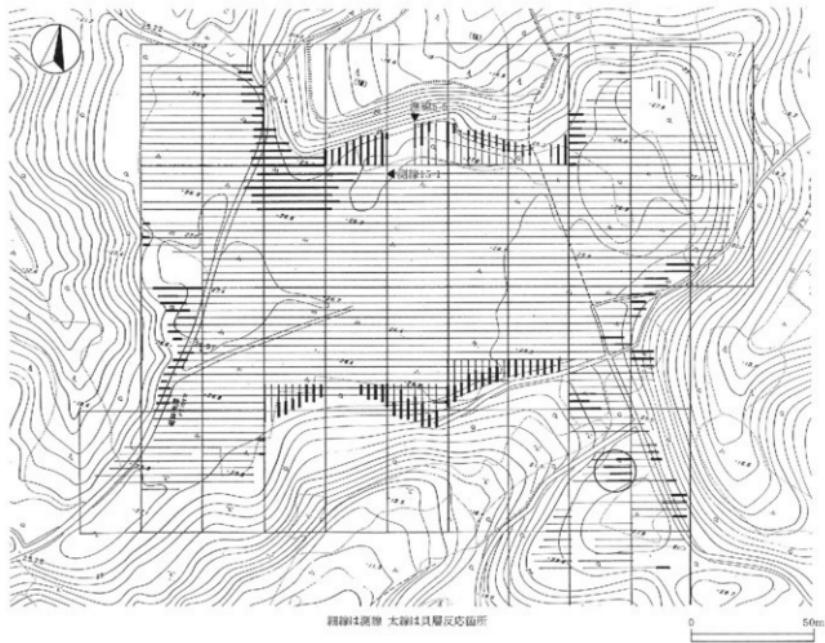
地下レーダー探査は、地表面を移動するアンテナ部から地中に電波を発射し、地中の物標から反射してくるエコー電波を受信して、その反射特性から地下埋設物、空洞、地盤構造などの地中の情報を得る探査方法である。遺跡での応用については、地下に痕跡が残された遺構の有無や分布を、掘削せずに把握できる利点があるが、エコー電波を信号処理して得られたアンテナ走査断面の画像を、どのように読み取り、豊作・住居跡や貝層といった遺構ごとの特性を判別するかが重要となる。今回の探査では、特徴的な反応データがみられた箇所を、試掘調査によって実際に確認する方法をとり、遺構別の画像パターンの把握に努めた。

測定にあたっては、第6図に示したように、東西方向を基本とする3m間隔の測線を台地平坦部全域に設定してアンテナの走査を行った。さらに、特徴的な反応がみられた箇所については、一辺25m以下の方形区画を設定し、0.5m間隔メッシュを測線とする詳細な探査も実施している。

貝層の反応

試掘調査の結果を踏まえた画像判読によって、明瞭にパターンが認識できたのは貝層であり、住居跡等の掘り込みによる遺構については、個々の画像反応と試掘結果が一致したものはあったが、明確なパターンを把握できたとは現状では言い難い。そのため、ここでは貝層についてのみ報告し、他の遺構については、更なる解析を待ちたい。

台地平坦部で捉えられたデータは、通常水平堆積している地質土層を反映して横縞状の画像となる。貝層が存在する場合、貝殻が電磁波を強く反射するため、横縞の大きな乱れとして把握される。第6図に示した測線上の太線部が貝層の反応がみられた部分であり、ボーリングステッキ等による貝層の分布調査の成果(第2図)とよく一致している。ただし、E貝塚に隣接する台地平坦部で認められた反応箇所(図中の○印)については、試掘を実施したところ(W28-①列トレンチ)、貝層や遺構の存在は確認できていない。



第6図 地下レーダー探査による貝層範囲推定

III. 台地平坦部の試掘調査

1. 調査の概要

調査区の設定

試掘調査にあたっては、北—10度—西を軸とするグリッド（方眼）を設け、調査区設定の基準となる平面区画とした（第7図）。まず、遺跡全域に10m四方の方眼を大グリッドとして設け、東西方向に連なるグリッドを北からA～Z列、南北方向に連なるグリッドを西から1～33列と呼称し、その組み合わせで個々の大グリッドを表記した。

さらに10m四方の大グリッド内を、2m四方の25区画に分割し小グリッドとした。呼称は、東西方向に連なるグリッドを北からa～c列、南北方向に連なるグリッドを西から①～⑤列とし、やはりその組み合わせで表記している。

以上のグリッドを基準に、計23ヶ所の2m×10mを基本とする溝状の発掘区（トレンチ）を設定した。これらのトレンチ群は調査の目的により大きく二つに分けられる。

一つは、台地平坦部における土層の堆積と住居跡や土坑等の遺構の在り方を探るために設けられた一群で、P-a列に東西方向に設けられた9ヶ所の中央トレンチ群（P 12—a列、P 14—a列、P 16—a列、P 18—a列、P 20—a列、P 22—a列、P 24—a列、P 26—a列、P 28—a列）と、7ヶ所のトレンチ群（MNO 17～⑤列、T 27～28—e列、H 28—①列、H 30—①列、MN 27～⑤列、W 28—①列、Y 28—①列）である。また、これらのトレンチ群は地下レーダー探査の反応データを解析するための情報を得ることも目的とした。

もうひとつは、斜面貝塚の台地平坦部縁辺における在り方と住居跡等の遺構群の関係を把握するために設けられた計7ヶ所のトレンチ群（A貝塚No.1、B貝塚No.1、B貝塚No.2、D貝塚No.1、D貝塚No.2、E貝塚No.1、G貝塚No.1）である。

土層の堆積と遺跡の古地形

基本土層

台地平坦部を構成する基本的な土層群をI層からVI層に分層した。

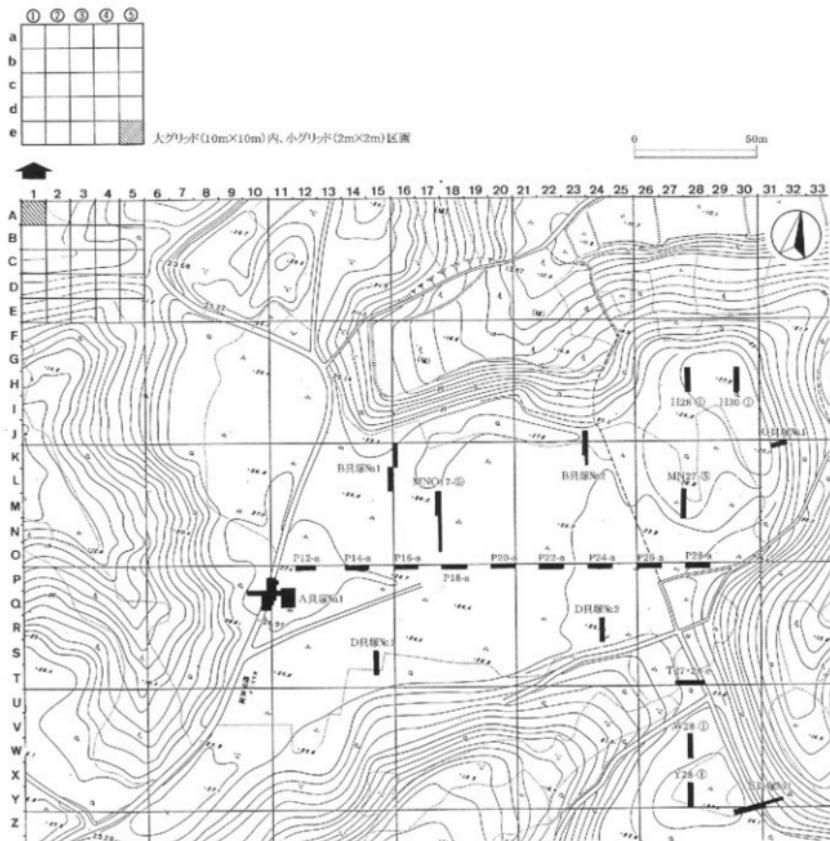
I層 いわゆる表土層で、IH耕作土や客土、それに植物の根による擾乱が著しい表層が対応する。

II層 上位のI層と下位のローム層（III層）の間に形成された土層で、縄文時代以降の遺物包含層である。土質から基本的にIIa～IIc層に分けられる。IIa層は黒褐色～暗茶褐色を呈する土層で、中央トレンチ群では、土器粒子、焼土粒子、炭化物、骨片・骨粉を含む場合が多い。IIb層は暗黃褐色～茶褐色を呈する土層で、ロームブロックやローム粒子を多く含む。IIc層は黃褐色～黃茶褐色を呈する、ローム土を基調とした土層である。ただし、II層は場所によって土質に違いも認められ、IIa～IIc層への対応が困難なトレンチもあった。その場合、そのトレンチのみの細分層名を付している。

III層 ローム層。黃褐色を基本とするが、下位の粘土層（IV～VI層）に近い部分では、褐色～茶褐色を呈する場合がみられた。

IV～VI層 更新世に対応すると思われる粘土層で、IV層は灰褐色粘土層、V層は黄～橙褐色粘土層、VI層は青灰褐色粘土層である。やはりトレンチによって、多少色味が異なる。

なお、IIa～IIc層とした土層に包含される遺物の時期は、各トレンチ間で必ずしも共通性は認められない。以前概報〔陸平調査会1989〕で、中央トレンチ群西部の状況を基に各層の時期を想定したが訂正する。共通性がみられない理由には、土質の違いが堆積後の土壤化などの影響により生成された場合、包含遺物が恒常的な自然等の営力により移動している場合、調査時の土層対応の錯誤、などが考えられる。堆積時期については今後の課題とする。



第7図 グリッド設定及び調査区（トレーニ）位置図

土層の堆積状況と古地形

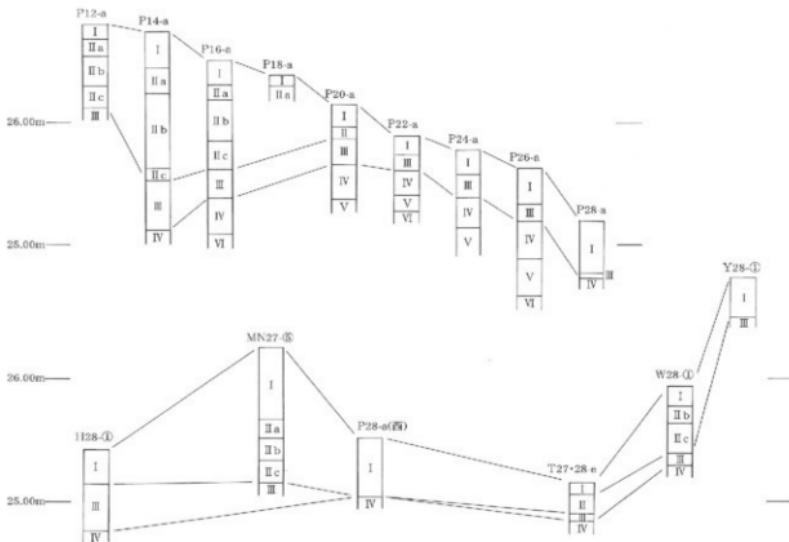
第8図に台地平坦部における土層の堆積状況を示す。

まず、中央トレーニ群で確認された土層をもとに、東西方向の状況をみると、地表はほぼ平坦であるが、東に向かって緩やかに傾斜している。西端のP 12-a列の地表が標高26.8 mなのにに対し、東端のP 28-a列では25.2 mを測る。一方、ローム層（Ⅲ層）上面の在り方は、P 12-a列で標高26.1 m、P 14-a列で25.5 m、P 20-a列で25.9 m、P 28-a列で24.8 mを測り、台地西側にP

14-a列付近を最深とする深い埋没窪地があることを示す。ローム層下の粘土層上面（IV層上面）も、ローム層上面の在り方と同様な高低差を持つことから、この埋没窪地地形の基盤は、ローム堆積以前に粘土層が浸食され形成されたものと捉えられる。

表土層（I層）とローム層の間に堆積した遺物包含層

のII層は、P 12-a列～P 20-a列まで認められ、埋没窪地が最も深いP 14-a列で最も厚く約90cmを測る。また、P 22-a列以東では表土層（I層）直下がローム



第8図 基本土層堆積模式図

層となることから、耕作等による後世の削平が多少あつた可能性も念頭に置いておく必要がある。

次に、南北方向の土層堆積状況を、台地平坦部東部からE貝塚に接する小台地に連なる28列付近でみると、地表が最も高いE貝塚の小台地(W28-①, Y28-①列)では、Ⅲ層上面の標高も他に比べて高くなっている。対して、それ以北では、地表高は場所によって最大1m以上の差があるが、Ⅲ層上面の高さには大差なく、地表面の高低差がⅡ層の有無や厚さを反映したものであることがわかる。Ⅱ層形成期以後の侵食や削平が現地形に影響を及ぼしていると思われる。

一方、湾曲した台地斜面に接した、台地北端と南端の平坦部に設定された、B貝塚No.1, 2及びD貝塚No.1, 2トレンチでは、貝層やⅡ層によって埋められた埋没斜面が確認されており、前述したP14-a列付近の埋没斜面は、B貝塚No.1トレンチもしくはD貝塚No.1トレンチで認められた埋没斜面に統く可能性がある。また、現況における台地平坦部と斜面との変換点は明瞭で、平坦な台地縁辺から急激に斜面へと移行するが、E貝塚No.1トレンチの調査では、この急斜面がローム層堆積以前の粘

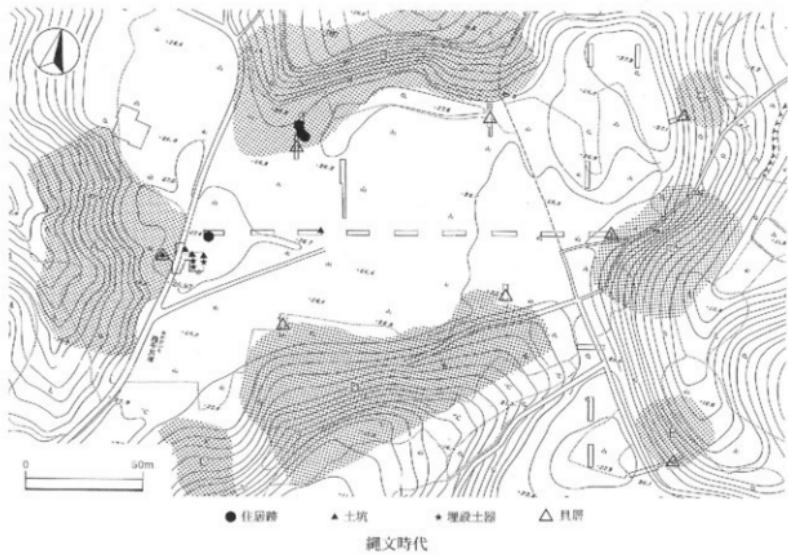
土層の浸食や崩落により形成されたことが把握できた。一方、D貝塚No.2トレンチにおける埋没斜面の形成も、ローム層堆積以前の粘土層の浸食、崩落に起因することを確認したが、埋没後の現況急斜面の形成要因については別途検討が必要である。

以上のように、Ⅱ層及び貝層堆積前の台地平坦部は現在よりも起伏に富んだ複雑な地形であったと考えられる。現況の広大な平坦部の形成には、自然の營力や後世における多少の改変とともに、貝層の堆積をはじめとする遺跡の形成が深く関わっているといえよう。

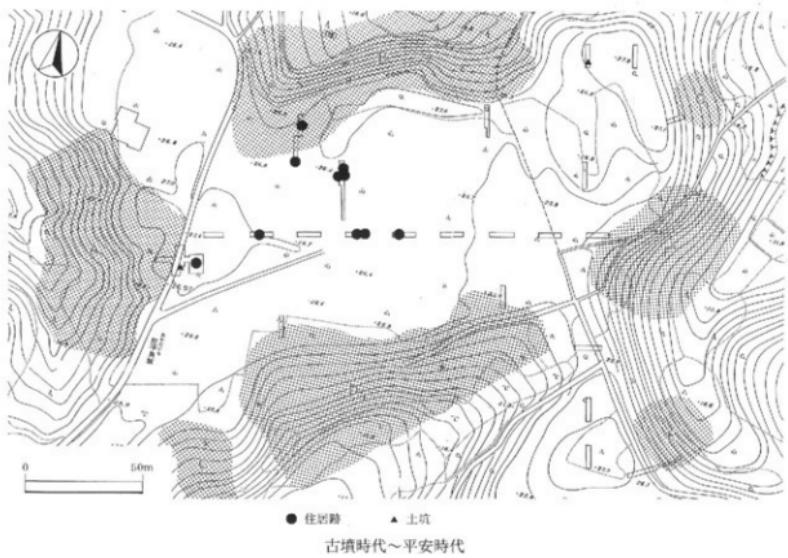
検出された遺構の概要

各トレンチから検出された遺構は、貝層7ヶ所、住居跡19軒、土坑84基、埋設土器4基、溝状遺構10条である。これらの遺構については、基本的に平面の確認にとどめ、一部を除き覆土の発掘はおこなっていない。そのため、構築時期を把握できていないものが多いが、時期が認定できた遺構についてその分布を第9図に示す。

縄文時代の遺構 早期については、後葉の斜面貝層が



绳文時代



古墳時代～平安時代

第9図 時代別検出遺構位置図

D貝塚東部 (DNo.2) で検出され、その東隣にある台地上 (T 27・28-a列) で、炉穴の可能性がある土坑数基が確認された。前期はE貝塚 (ENo.1) で後葉の斜面貝層が確認されたが、隣接する小台地上のトレンチからは、当該期の遺構は検出されていない。

中期では複数地点で斜面貝層が検出され、住居跡や上坑の存在も確認された。斜面貝層については、初頭のものをB貝塚西部 (BNo.1) と東部 (BNo.2) ?で、前葉のものをA貝塚 (ANo.1)、D貝塚東部 (DNo.2)、F貝塚 (P 28-a列)、B貝塚東部 (BNo.2) ?で、後葉のものをG貝塚 (GNo.1) で確認した。また、A貝塚寄りの台地上 (P 12-a列, ANo.1) で住居跡1軒と土坑3基を、B貝塚西部の台地縁辺部 (BNo.1) で重複する3軒の住居跡を確認している。後者の住居跡群は貝層を掘り込んだもので、内1軒には住居内貝層と思われる地点貝塚がみられた。後期の斜面貝層については、D貝塚西部 (DNo.1) で初頭の貝層が検出され、A貝塚寄り台地上 (ANo.1) で後期前葉の埋設土器4基が確認されている。

以上は、今回の限られた試掘調査によって確認できたもので、過去の調査成果や出土上器の在り方を加味すれば (I, II-1参照)、後期前葉以降の貝層の存在と、中期と後期前葉の住居跡が台地縁辺部に展開する傾向が指摘できる。

古墳時代以降の遺構 台地平坦部の中央から西部を中心に、古墳時代の住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡4軒と人骨が検出された墓壙を含む土坑2基、それに当該期に想定される籠を持つ住居跡4軒が確認された。

出土した土器の概要

縄文土器の分類

土器類は総数23,700余点出土し、縄文土器、弥生土器、十輪器、須恵器、陶磁器類が認められた。分類可能な土器は計5,700点余りで、その内の5,000点以上が縄文土器で占められる (表1)。出土した縄文土器は早期から晩期に及ぶが、ここでは編年単位である既存の型式等に沿って概説する。なお、時期が特定できない櫛描文あるいは縄文のみが施された破片や無文の土器について、表1では分類不明としている。

早期前葉 櫛糸文系土器が該当するが、G貝塚No.1ト

レンチから小片2点が出土したのみである。

早期中葉 沈線文系土器が該当する。型式では「田戸下層式」 [赤星1935] が主体を占め、他は細い沈線で鋸歯状のモチーフが描かれた「三戸式」 [赤星1936] が1点確認されたのみである。田戸下層式は尖底を有する器形に沈線文や刺突文、貝殻文が施された土器で、沈線文には半截竹管状工具の外側を器壁に向け、押しながら削り取るよう施文された「太沈線文」と、箋状工具を引きことによって表出された「細沈線文」が用いられている [鈴木1990]。

早期後葉 胎土に纖維を混入し、外外面に条痕文を施した条痕文系土器が該当する。型式としては、絶条体圧痕文が施された「子母口式」 [山内1941]、細隆線文がみられる「野島式」 [赤星1947]、円形刺突文が付随する細隆線や沈線で文様を描いた「鶴ヶ島台式」 [岡本1961]、刺突列や太い沈線、細隆線のみで文様を表出した「茅山下層式」 [赤星・岡本1957] が認められた。

前期前葉 胎土に纖維を含み、櫛歯状文が施された「植式」 [西村1957] が1点出土している他、竹管文や貝殻文、羽状構成をとる繩文等が施された上器が、少量出土している。

前期後葉 「浮島式 I a ~ III式」 [西村1966, 1967, 和田1973] と、同時期に関東西部に分布する「諸磯式」 [山内1939] が出土している。浮島式では、地文燃糸文、連續爪形文、縦位の刺突列を特徴とする I a 式、無地に平行沈線や両端が深く明瞭に印刻された変形爪形文 A類 [中村2009] が施された I b 式、断面が平坦で端部に器面を残す変形爪形文 B類 [中村2009] を特徴とする II 式、口縁に条線を配し、三角文や刻みを加えた変形爪形文 B類を施した III式が認められ、他に波状貝殻文や口縁部に輪積痕を残す土器などが該当する。諸磯式では磨消繩文や爪形文、浮線文が施された土器が出土している。

中期初頭 本報告で中期初頭としたのは、「五領ヶ台式」 [西村1984]、「阿玉台式直前」、「阿玉台 I a 式」 [西村1972] とされた上器である。出土した五領ヶ台式土器は、縄文地に沈線や角押文、彫刻文、鋸歯状文が施された五領ヶ台 II式に相当する。阿玉台式直前段階の土器も沈線や角押文、彫刻文などで装飾され、爻状のU縁や肥厚した口縁部、外縁の貼付文や内縁の彫刻文を特徴とする。阿玉台 I a 式は、隆起線に付随して施文单位1列の

表1 出土土器分類・集計表

一個体と鑑別できた破片は1点としてカウント。但し、複数の部位・断柄に分かれて出土した個体は重複して数えている。

トレンチ	縄文土器														計						
	早期		前期		中期				後期				晚期	有孔 土器	上層 器	切妻 器	脚部 器	分類不明			
	縄系 文系	沈縄 文系	条痕 文系	前葉	後葉	初頭	前葉	中葉	後葉	初頭	前葉	中葉	後葉								
P12-a列				3				4	9	188	1	43	84	1	1	1	18	5	1	692	1051
P14-a列				2					1	9	23	25				17	20	9	1935	1141	
P16-a列				2			1	4	7	2	17	21	9	7		1	6		331	408	
P18-a列							4	3	5	8	61	74	49	2		88	103	6	1256	1659	
P20-a列										2	8	3	2		1	2	6	1	81	106	
P22-a列									1		1	1	1		2	1	2	2	83	95	
P24-a列										2			1		3	1	6	4	56	67	
P26-a列										1	2	1			3	6	29	145	157		
P28-a列				1	1			11	4	6	1	2	3		3	2	4	4	145	187	
MNO17-a列																					
M17-⑤列				4				5	1	15	2	15	104	20	1	3	16	8	3	833	1030
N17-⑤列				2			1	2	6	3	17	28	18	3	1	2	3		286	370	
O17-⑤列				2			2	4	8	3	25	50	27	18	9	1	2	8	430	589	
一括								2	1	6	3	6	15	11	10	2	1	4	1	286	348
T27-28-e列				13	1			1								1			37	53	
H28-①列									1		5	16	9	2		7	3	2	171	216	
II30-①列										1									40	42	
MNO27-⑤列								2		2			3	1	4		1	3	5	211	232
W28-①列																4		2	47	53	
Y28-①列																1		2	19	22	
A貝塚No.1																					
西郷	10	60	3	5	5	188	6	16		3	9					2	1	1	434	743	
中部		40					13	6	53		5	6	1			2			371	497	
東部	3	29			3	31	13	429	6	117	233	3	1			36	88	5	4468	5465	
B貝塚No.1																					
L15-⑫列				85		1	54	146	19	120	1	19	422	7	1		4	13		1582	2474
K16-①列				5		1	1	26	46	39	2	6	34	5			5	11		859	1039
B貝塚No.2	1	29					23	36	24	386	10	17	50	8	8		6	5		1508	2141
D貝塚No.1	1							5	45	38	153	113					4	24	1	2203	2588
D貝塚No.2	3	130						51	6	4	1	4					1	1	6	177	384
E貝塚No.1				43	6	105				1									77	232	
G貝塚No.1	2	5	1				7	3	26			3	2			1	2	2	272	326	
計	2	24	451	10	113	86	532	159	1376	72	485	1324	201	111	13	12	225	325	95	18099	23715

角押文が施されたもので、それに反状の口縁や内面の貼付文、粘土棒を芯とする突起や襞状文が加わる。また、中期初頭には扁平な隆起線が付いた縄文施文土器や、断面三角形の隆起線が施された、粗く修正された輪積痕を残す土器もみられる。

中期前葉 「阿玉台I b、II式」[西村1972]を当期の土器とした。阿玉台I b式としたのは、隆起線に付随して施文単位が1列の角押文が施された土器で、口縁部に扁状の把手や区画状文を形成し、粘土棒を芯にした突起や、襞状文、刻目文、波状文が施される。なお、1列の

角押文が施された小片など、阿玉台I a式と区別のできない文様を有する破片については、当期の上器として扱っている。阿玉台II式は半截竹管状工具等を用いた施文単位が複数列の角押文が認められる土器である。

中期中葉 本報告で中期中葉としたものは、「阿玉台III、IV式」[西村1972]と「中岐式」[下総考古学研究会1976]、関東西部の「勝坂式」[山内1943、我孫子1974]、東北南部の「大木8式」土器であり、さらにこれらの型式及び後続する加曾利E I式に類似する土器を加えている。阿玉台III式は、半截竹管状工具の外面や、幅広く平坦な工

具によって表出された爪形文や幅広の角押文を隆起線に付随させたもので、楔状の刺突列もみられる。阿卡台IV式は隆起線に沈線文を付隨させたもので、縄文が加わる場合もある。今回出土した中Ⅲ式は、条線を施した口縁部に交互刺突による小波状文や沈線が認められる土器である。なお、中期中葉とした以上の土器群には隆線と縄文だけが施された土器が伴う。

中期後葉 「加曾利E I～IV式」 [山内 1940, 谷井他 1982, 金子 1996] が相当する。また、当期には撫糸文地に張状文様を描いたいわゆる「連弧文土器」や、中部高地に分布する「曾利式」[藤森 1965] 系の土器も含まれる。加曾利E I式は隆線によって上下を区画した縄文地の口縁部に、隆線でクランク状や渦巻状の文様を描くもので、胴部は縄文のみもしくは縄文地に直線や蛇行する懸垂文が施されたものをあてた。なお、口縁部区画内に縄文のかわりに条線を充填したものも認められる。II式は、括れの弱いキャリバー形の器形を呈し、口縁部に太日の隆線や沈線による渦巻文や梢円形区画文が、胴部に間が磨消された懸垂沈線が施された土器である。III式については、口縁部の文様帶が略され、懸垂状の磨消部の沈線が連結したものや、縄文間に微隆起線を配した土器を該当させた。IV式としたのは沈線や微隆起線によって縄文部と無文部が区画された土器で、この中にはおそらく後期初頭まで下るものも含まれる。

後期初頭 「称名寺I, II式」 [吉田 1960, 今村 1972] が出土している。称名寺式はJ字状などのモチーフを沈線で描いたもので、沈線間にI式は縄文を、II式は刺突文や櫛描文を充填したものである。また、今回は算入しなかったが、無文の口縁部を隆線や沈線で区画し、以下に櫛描文を描く土器も当期に伴う可能性がある。

後期前葉 「堀之内I, 2式」 [山内 1940, 阿部 1998] が認められる。I式は口唇部に円孔や沈線による文様帶を有するものや、縄文地に1～数条の単沈線によって垂下する文様を中心に描いたもの。2式は口縁部に無文帯を設け、胴上部に沈線や縄文による幾何学的な文様を表出した土器と、半截竹管状工具や櫛歯状工具による集合沈線によって幾何学的な文様を描いたもの、さらに口縁に細い縦線や、口縁内面に細い沈線を巡らした土器等をあてている。

後期中葉 「加曾利B式」 [山内 1939], 「曾谷式」[山

内 1964] を相当させた。平行線状・帯状・弧状の磨消縄文が施されたものや、斜線文や条線が加えられたもの、口縁や括れ部に沈線をめぐらせ、そこに刻みを加えた土器等が認められ、これらを精製土器とした。一方格子目文や、口縁に押捺が加えられた紐線をめぐらし縄文地に単沈線や条線、半截竹管状工具による平行沈線を施した土器、口縁内面に四線をめぐらした縄文施文の土器等を粗製土器として分類している。また、「遠部第三類」[池上 1937, 阿部 2001] と呼ばれる、縦線を弧状に配したり、沈線を重層させた壺形土器も当期に含まれる。

後期後葉 「安行1, 2式」 [山内 1940] が出土している。安行1式は横走する隆起した帯縄文や、縦長の貼瘤を特徴とし、列点や胴部に弧状の磨消縄文が施される。安行2式は帯縄文とともに、刻みの付された隆線がみられるもので、刻みや圧痕が付いた貼瘤が加わる。なお、当時期に併行する東北地方のいわゆる「塗付土器」が1点出土している。

当期の粗製土器については、後期中葉のものと判別が難しいが、次の土器をあてた。列点や沈線を口縁やくびれ部にめぐらせ、無地に条線を施したもの。密な押捺が加えられた紐線を配した土器のうち、無地に条線を施したもの、または口縫が肥厚もしくは内傾するもの。

晚期 「安行3a～c式」 [山内 1941, 金子 1979], 「前浦式」[西村 1961] が出土している。安行3a式では、やや隆起した帯縄文で三角形状や棒状等のモチーフを描くもの、三叉状の沈刻文を加えた磨消縄文を表出したもの、突起をめぐらした鉢形土器などが認められた。安行3b式には「始山II式」[鈴木 1963, 1966] とされた土器も含めている。弧状や入り組み状の文様を表出したものや、口縁部が外屈する鉢形土器、細密沈線が施された土器がみられる。安行3c式とそれに併行する前浦式の出土は少ない。沈線間に刺突や沈線を充填した土器、幅広の沈線と縄文で「の」の字状の文様を表出したものが該当する。

晚期の粗製土器として、口縁が肥厚内傾し、紐線や条線とともに沈線による区画が施されたもの、同様の土器で紐線や縦区画を欠くものを該当させた。前者には後期末葉に遡る土器も確実に含まれるが、区別が難しいため本書では一括して晚期として扱っている。

製塩土器 ヘラ削りが施された薄手無文の土器で、後

期末葉～晩期に伴うものと思われる。

土器の出土状況（第10、11図）

土器のトレンド別出土数を表1に、時期別の分布状況を第10、11図に示す。なお、調査面積が広いMNO 17-⑤列とA貝塚No.1トレンドは調査区を3分割して、B貝塚No.1トレンドは2分割して出土分布を表示している。

縄文時代早・前期 早期中葉の沈線文系土器は、出土量こそ少ないが、台地縁辺部の各トレンドから出土している。早期後葉の条痕文系土器は、該期の貝層や包含層が検出されたD貝塚東部（DNo.2）やE貝塚（ENo.1）で多数出土した他、A貝塚やB貝塚の台地縁辺部（ANo.1、BNo.1、BNo.2）でまとまった出土がみられた。前期後葉の土器は、該期の貝層が検出されたE貝塚（ENO.1）に集中する。

縄文時代中期 初頭の五領ヶ台Ⅱ式～阿玉台Ia式土器は、貝層が検出されたB貝塚（BNo.1、BNo.2）に集中するが、阿玉台Ia式土器はA貝塚付近（ANo.1）でも認められた。前葉の阿玉台Ib～II式では、貝層が各地点に形成されるのに伴って、台地縁辺部全域で出土している。阿玉台III～IV式や中叶式等を含む中葉とした土器は、數は少ないが全域で散見される。後葉の加曾利E式土器は、B貝塚（BNo.1、2）と、貝層が確認されたG貝塚（GNo.1）でまとまって出土した他、土坑が検出されたA貝塚寄りの台地上（ANo.1、P 12-a列）で多量に出土している。

縄文時代後期初頭～中葉 後期初頭の称名寺式土器は、貝層が検出されたD貝塚西部（DNo.1）に分布の主体があり、台地中央部西寄りのトレンド群（MNO 17-⑤列、P 18-a列）でも少量出土している。前葉の堀之内式土器は、台地縁辺部のD貝塚西部（DNo.1）や、埋設土器が集中するA貝塚寄りの台地上（ANo.1、P 12-a列）で多く検出され、台地中央部西寄りのトレンド群でもまとまった出土が認められる。中葉の加曾利B式土器は、台地縁辺部のB貝塚（BNo.1、2）、A貝塚付近（ANo.1、P 12-a列）、D貝塚西部（DNo.1）と、台地中央部西寄りのトレンド群から多量に出土している。

縄文時代後期後葉～弥生土器 安行式土器を主体とする後期後葉～晩期の土器は、台地中央部西寄りのトレンド群にはば集約した出土状況を示し、少量の製塙土器をと

もなう。弥生土器は台地中央部のトレンド群から、中期の十器小片など極少量が出土した。

以上の分布状況を概観すると、縄文時代早期後葉～中期後葉までの土器は、当該期の貝層または住居跡・土坑が検出された台地縁辺部に集中する傾向があり、台地中央部からの出土は極端に少ない。これらの時期は台地平坦部が、主な活動域であったと思われる。

一方、後期初頭～中葉になると、引き続き台地縁辺部に多くの土器が残されるとともに、台地中央部西寄りの埋没地周辺とその北東側にまとまった出土がみられるようになる。この現象は、居住城が台地の内側に拡張もしくは移動したことを想像させる。そして、後期後葉～晩期では、台地中央部に集中するようになる。台地縁辺部での出土が稀になる状況は、当該期の斜面貝層が確認されていないことに関連しよう。

出土した土製品・石器・骨角器・貝製品の概要

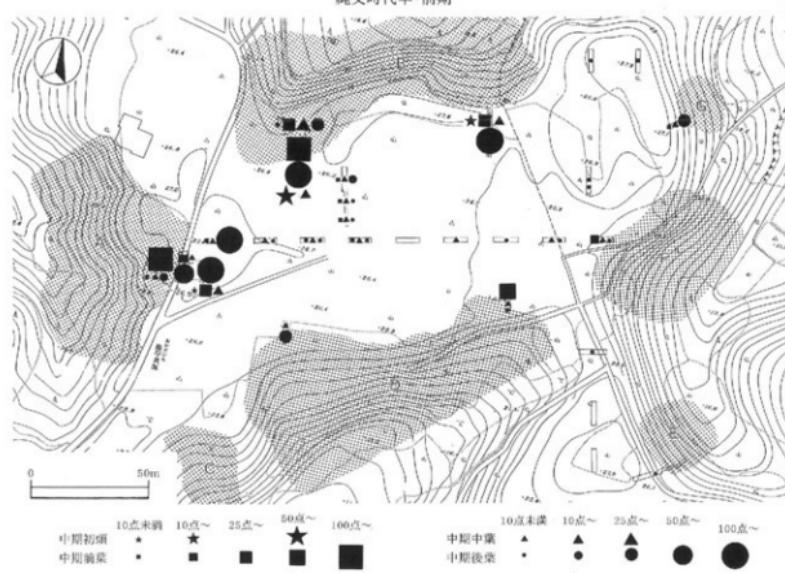
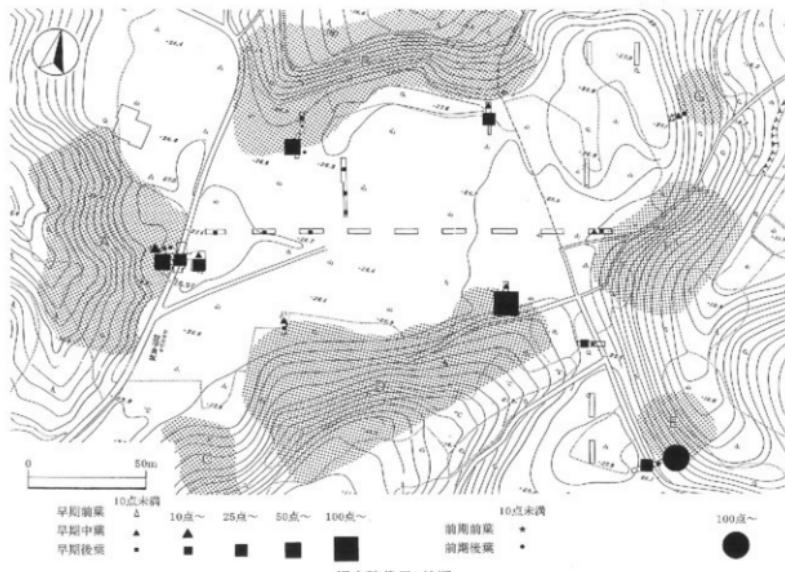
土製品（卷末表18）

出土した土製品は、土偶10点、土版1点、十製块状耳飾2点、土器片錐91点、土製円盤22点、有孔円盤5点、環状土製品1点、球状土錐3点、管状土錐4点である。

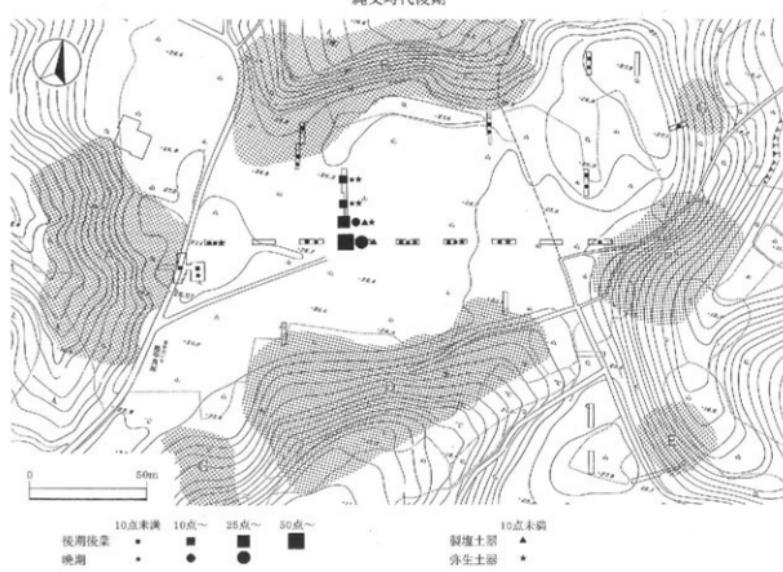
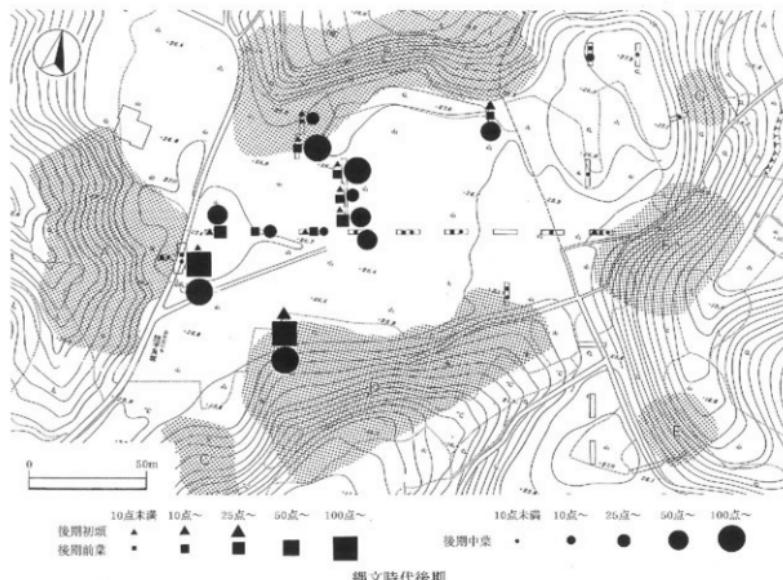
土偶 出土したものはいずれも破片である。縄文時代後期中葉の土器が多数出土したB貝塚No.1トレンドからは、いわゆる山形土偶の破片が6点出土し、縄文時代後期後葉の土器がまとまって検出されたP 18-a列トレンドでは、いわゆるミニズク土偶と中空土偶の脚部と思われる破片が出土している。

土器片錐 土製品の中で最も多く出土したのは、縄文土器の破片を利用した土器片錐で、素材となる土器は縄文時代中期前葉～後期前葉のものが多数を占める。いずれも土器の破片を長方形～橢円形に整形し、対面する二側面に切目が付けられている。

本稿（表18）では、切目を通る軸を、土器の水平方向にとっているものをI類、垂直方向にとっているものをII類とするが、I類のものが多い。また、土器の断面にあたる側面には、割れと、摩れが認められ、割れは整形のために打ち欠かれたものと考えられる。一方、摩れは整形のための研磨痕とも、使用に伴う摩滅痕とも考えられるが、摩れの痕跡が無いものや、部分的にしか摩れが



第10図 時期別土器出土状況（1）



第11図 時期別土器出土状況（2）

認められないものが多いことから、ここでは使用に伴う摩滅の痕跡と捉えておく。本稿では、側面が全周摩れたものをa類、割れと摩れが認められるものをb類、割れのみのものをc類とし、軸方向の採り方とともに表18に示した。

土製円盤・有孔円盤 七製円盤と有孔円盤も焼成前に成形された1点を除き土器の破片を利用したものである。土製円盤は多角形もしくは円形に整形されたもので、側面の状況は上器片錐と同様にa～c類が認められる。素材には縄文時代後期中葉の上器が目立つ。

有孔円盤はいずれも破片ないしは欠損品であるが、内3点は、外形、孔ともきれいな円形に磨れており、意図的に研磨されたものと思われる。

なほ、土製丸状耳飾りは、その出土位置と形態から縄文時代前期に、球状・管状土錐は古墳時代以降の所産と捉えられる。

石器（巻末表19）

出土した石器は、槍先形尖頭器1点、石鏃7点、磨製石斧4点、打製石斧？3点、礫器1点、石皿3点、磨石14点、敲石11点、門石1点、砥石2点、石錐2点、二次加工のある剥片3点、両極打法の剥離痕を残す石片11点、石核6点、剥片・碎片102点、研磨痕や鉄器による分割痕の残る剥片3点、火打石1点である。このうち旧石器時代の槍先形尖頭器と研磨痕や鉄器による分割痕の残る剥片（粘板岩、滑石）、火打石以外のものは、縄文時代の石器と思われる。

小型の石器とその素材 小型の石器としては石鏃が該当する以外、石匙等の定型的なスクレーパー類はみられない。石鏃の石材は黒曜石とチャートであるが、これは石核や剥片に多くみられる石材に対応する。また、黒曜石やチャート製の石核の剥離面や剥片の大きさをみても、その対象が主に石鏃であったことが想定できる。本書では剥片について、石鏃の素材になり得る大きさのものを図示したが、黒曜石とチャートの剥片は最大でも長さ3.6cm、幅3.5cmのものである。黒曜石の石核はいずれも小型のもので、作業面を打面に転用しながら、多方向からの剥離痕を残す。チャート製の石核や剥片には、礫面を残すものがみられ、中には円礫を両極打法により分割したものもあり、その素材が拳大以下の小さな円礫であつ

たことが想定される。

一方、石核としたもの以外に、両極打法による剥離痕を残す石片が多数出土している。これらはそれ自体が石鏃の素材となるような小型の剥片や残核？を用いており、石材としてはやはり黒曜石とチャートが多い。いわゆる楔形石器に該当するものも含まれると思われるが、本報告では両極打法による剥離を石器製作のための素材加工と捉え〔阿部1996〕、これらを「両極打法の剥離痕を残す石片」として一括した。

骨角器・貝製品（巻末表20）

出土した骨角器と貝製品は、刺突具6点、切断痕の残る鹿角1点、貝輪1点、貝輪未成品3点、貝刃15点、ツノガイの垂飾品？2点である。貝刃素材は、カガミガイ1点を除き全てハマグリである。ツノガイ製品については、加工の痕跡が明確に捉えられなかったため、輪切り状になった分割品のみを垂飾品として扱った。また、内面からの打撃によって孔が開いた二枚貝が多数確認されたが、人為的な加工か否か判断が難しいものが多くいたため、今回は取り上げていない。

2. 検出された遺構と遺物

本節では、各調査区（トレンチ）ごとの調査成果について記載する。なお、土層や遺構覆土の状況、及び検出遺構の想定深度については、図中の注記を、土器の時期別出土数は表1を、土製品・石器・骨角器・貝製品の法量や材質、出土数については、巻末に掲載した表18～20を参照されたい。

P 12-a列トレンチ

トレンチの設定と検出された遺構（第12図）

本トレンチは、台地平坦部中央トレンチ群の西端に相当する、P 12-a ①～a ④グリッドに設定された南北2m×東西8mの調査区である。地表面の標高は、東端で26.25 m、西端で26.28 mを測り、ほぼ水平で平坦な場所に位置する。

厚さ約20cmの表土（I層）を発掘した段階で、II a層が現れ、その上面で、住居跡1軒（第9号住居跡）と土坑8基（第29～36号）が確認された他、調査区西寄りのa ①グリッドにおいて、道状遺構と思われる、幅約30cmの硬化面が南北に延びている状況が認められた。なお、第9号住居跡と第31、32、34号土坑に囲まれた部分（断面図のII層）は、II a層と異なりローム粒子やブロックの混入が少なく、地山ではなく遺構覆土の可能性がある。

a ③、④グリッドで検出された第9号住居跡は、東側が調査区外に延びており、確認面において径30cm程の貝ブロックも検出されている。平面観察による遺構群の覆土同土の切り合ひ関係は、道状遺構→第30号土坑→第

31号土坑→第32号土坑、第9号住居跡→第32、34、35、36号土坑である。以上のII a層上面で確認された遺構群は平面を確認したのみで、覆土の発掘は実施していない。

さらにII a層上面において遺構が検出されなかつたa ①、a ②グリッドにまたがる箇所に、下位の土層の堆積状況を調べる目的で、1m×0.8mの範囲の深掘部を設け掘り下げた。その結果、厚さ約15cmのII a層の下位に、II b層（厚さ約30cm）、II c層（厚さ約20cm）、ローム層（III層）の堆積が認められた。また、II b層の下部を掘り込み面とし、II c層やIII層を掘り込む遺構が検出され、第10号住居跡と命名している。深掘部南壁と北壁で住居跡の壁の立ち上がりが確認でき、西側に広がることが想定される。

II a層からは縄文時代中期後葉～後期中葉の土器が主体的に出土したが、38の平安時代の楕形土器をはじめとする土師器皿も出土しており、その下限が古代まで下るものと思われる。II b層からは47の縄文時代中期後葉の上器大型破片をはじめ、同時期の上器が28点検出されているが、後期前葉の破片2点も出土しており、本トレンチにおいては縄文時代後葉以前の包含層と捉えられる。II c層からは3点の上器小片が出土したのみで、堆積時期を判定し難いが、最も新しい時期の土器として、縄文時代中期後葉の加曾利E式土器が認められたことから、中期以前の包含層の可能性がある。

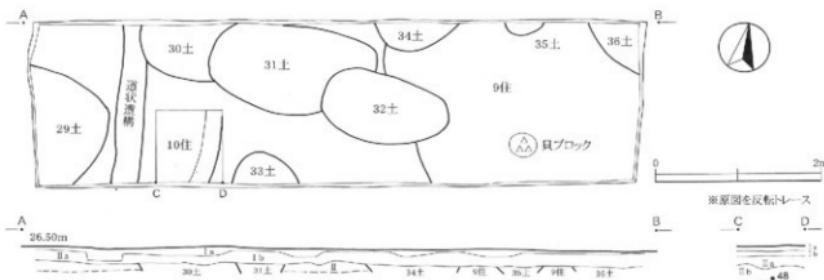
検出された遺構からは、確認時に繩文土器が出土しているが、小片のため遺構の時期認定資料とは捉え難い。II a層上面で検出された遺構群については、II a層の堆積時期の下限が古代まで下ることから、いずれも古代以降の時期のものと捉えられる。II b層中を掘り込み面とする第10号住居跡については、遺物の出土が無いが、II b、II c層の堆積時期と、掘り込み面上に包含されていた土器47の在り方から、縄文時代中期後葉のものと想定される。

出土遺物（第12～14図）

出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器類、土偶、土器片錐、土製円盤、磨石、両極



写真3 P 12-a列トレンチ全景



1a層：茶褐色土層 表土層、径3mm以下のローム粒子を含む。白色粒子、炭化物、土器粒子を微量含む。

I b層：茶褐色土壁 I a層と同質だが、縦まりが無い

II a層：黒褐色土層
塗まり有り、粘性やや無し。径5mm以下のローム・ブロック・粒子を少數含む。土器粒子、炭化物、骨片を微量含む。

II b層に明褐色上層部に比してローム粒子を多く含む。土器粒子(径2~6mm)、炭化物を若干含む。

Ⅱc層：黄褐色土層 ローム粒子が大半を占める。他の混入物は目立たない。

Ⅱ層：明黒褐色土層　Ⅱa層に比べロームブロック・粒子の含有率が低く、結まりに欠ける。
Ⅲ層：黄褐色～茶色

■層：黃褐色口一ム層

第三輯 教學法研究（二）

第10号住居跡地上

1層:明褐色土 繊まり、粘性有り。ロームブロック(径2~10mm)、焼土(径3mm程)、炭化物を含む。II c層に比べて繊まりがある。

1層に比べてロームブロックが少なく、給まりが無い。

第29号土坑覆土：明黒褐色土
土細粒子、径5mm以下のローム粒子を多く含む。炭化物をやや多く、骨片を微量含む。

第30号土壌風土：黒褐色土 上部粒子をやや多く含む。径10mm以下のロームブロック・粒子を含む。深さ

第31号土坑覆土：明黒褐色土
締まりやや無し。土器粒子、径3mm以下のローム粒子を含む。深さ推定25cm。

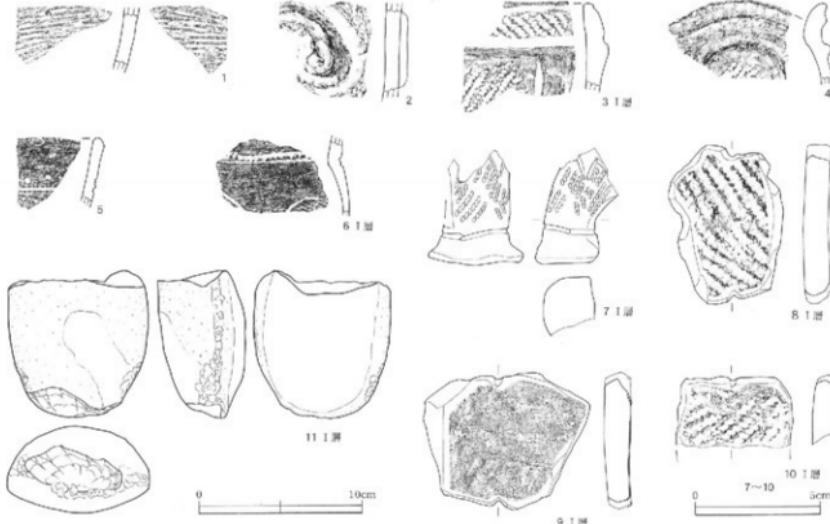
第32号上坑壤土：黒褐色土
pH6.5~7.2、EC0.05~0.15ms/cm²

第34号土坑覆土：明黒褐色土、土器粒子、径5mm以下のローム粒子を含む。炭化物を少量含む。深さ推定6m。

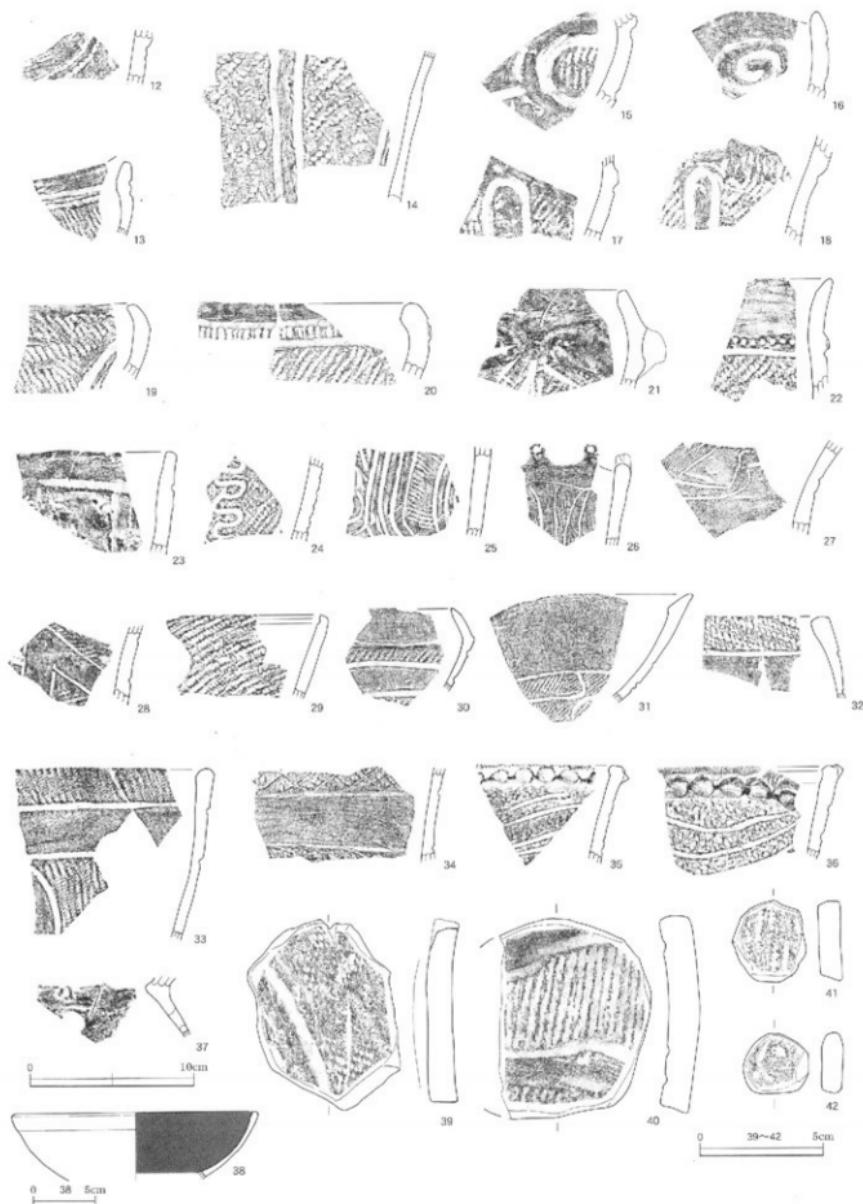
第35号土坑覆土：黒褐色土、縮まりやや無し。径10mm以下のロームブロック・粒子を少量含む。

第36号土坑覆土：明黒褐色土 締まりやや無し。径5mm以下のローム粒子を含む。深さ推定40cm。

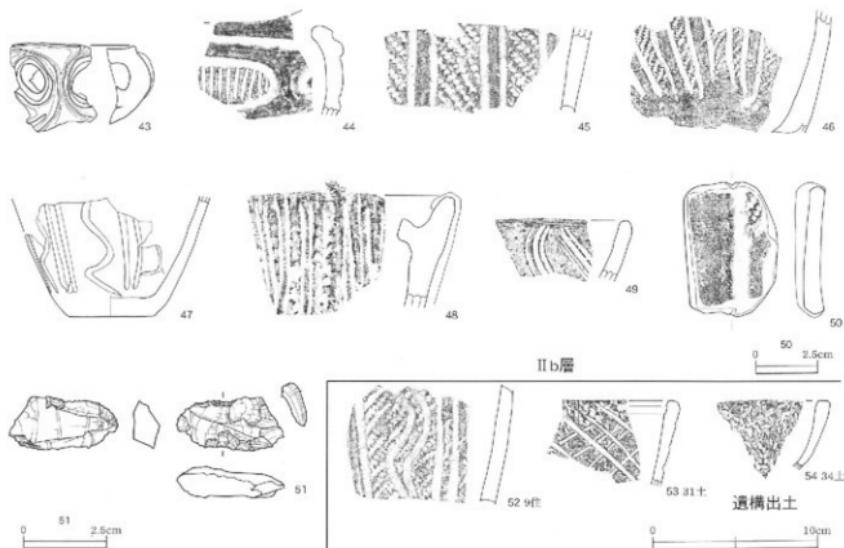
※連構の深さ推定はボーリングステッキによるロームまでの値。



第12図 P12-a列トレンチ塞測図及び出土遺物（I層）



第13図 P12-a列トレンチ出土遺物 (IIa層)



第14図 P12-a列トレンチ出土遺物（II b層・遺構）

打法の剥離痕を残す石片、剥片砂片である。

I層出土遺物（第12図） 1～6は縄文土器。1は表面に条痕文が施された早期後葉の土器で、胎土に纖維を含む。2は隆起線に沈線文を付隨させた中期中葉阿玉台IV式土器。RLの縄文もみられる。3、4はRLの縄文が施された中期後葉の加曾利E式土器。3は肩部に磨消縄文帯を有し、沈線で区切られた簡略化された口縁部の在り方からIII式に、微隆起線で縄文部と無文部が区画された4はIV式に想定される。5は沈線と円形の刺突文が施された口縁部破片で、後期前葉の土器か。6はくびれ部の2本の沈線間に三角形の列点が施され、下位に磨消縄文が認められる後期後葉の安行1式の胸部破片。

7は土偶の脚部破片で、RLの縄文施文後に、腰部には鋸齒状の沈線が施され、足首部には沈線が一周する。8～10は土器片錐で、9は無文、8、10にはRLの縄文が施文されている。11は円窓を用いた磨石の欠損品で、表裏面に磨減部が、側面に敲打による剥離痕やつぶれが認められる。

II a層出土遺物（第13図） 12～37は縄文土器。12は隆起線に沿って2列同時施文の角押文がみられる、中期前葉の阿玉台II式土器。13、14は中期中葉の破片で、13は隆帶状の口縁に沿ってペン先状工具による押引文が2列施され、以下にはRL?の縄文がみられる。14はRLの縄文を縦方向に施文した後に、単沈線2条による懸垂文が描かれている。

15～21は中期後葉の加曾利E式土器。15は口縁部の破片で、胸部との区画が低い隆線と沈線で行われ、16には沈線による渦巻文が描かれている。17、18は同一個体で、上部が閉じた磨消帶がみられ、19は口縁部から間が磨消されたが懸垂沈線が施されている。20の口縁部には沈線間に刺突列が施されている。21は口縁部に沿って、微隆起線がみられる加曾利E式土器。縄文は全てRL。

22～29は後期前葉の土器。22は刺突列が施された隆線と沈線によって、無文の口縁部とRLの縄文部を区画している。23は沈線によって無文の口縁部が区画された土器で、以下に縦位の平行沈線が認められる。24、25はL

Rの縄文地に単沈線で文様が描かれたもので、堀之内1式に該当する。26～28は沈線で描かれたモチーフ間に縄文等が充填された堀之内2式。27には無節Lの縄文が、28にはLRの縄文が充填され、26には縄文の代わりに櫛齒状工具による短い条線が充填されている。29はLRの縄文が施された口縁部破片で、内面に細い沈線が1条めぐる堀之内2式土器。

30～36は後期中葉の加曾利B式土器。30、31には沈線で区切られたLRの縄文帯がみられ、32、33では沈線間の縄文(RL)を磨消すことによって文様を描いている。34～36は粗製土器で、34は無文帶の上下に、縄文を地文とする格子目文がみられる。35、36は不整な縄文施文後に沈線と押捺が加えられた細線がつけられている。

37は晩期の異形土器の破片か。38は輪轂成形の土師器楢形土器で、内面が磨かれ黒色処理が施されている。復元口径20cm。

39は土器片錐で、切目は1ヶ所にしか認められない。素材は微隆起線がみられることから加曾利E IV式の土器か。40～42は土製円盤。40はRの燃糸文を地文に連弧状の文様が描かれた加曾利E式土器を素材としている。

II b層出土遺物(第14図43～51) 43～50は縄文土器。43は沈線で縁どりされた中期中葉の眼鏡状の把手部破片。44～47は加曾利E式土器。44は口縁部に沈線を充填した区画を有し、45、46は懸垂する沈線間の縄文が磨消されている。縄文は45がLR、46がRL。47にも懸垂文がみられるが、地文に縄文はない。底部径5.0cm。48は縦位の平行沈線と隆線で口縁部が装飾された中期後葉の曾利式系の土器で、口縁内面に太い隆線がめぐる。口縁部の内面と断面に煤が付着する。

49は櫛齒状工具で文様が描かれており、堀之内2式土器と思われる。50は加曾利E式土器を素材とした土器片錐。51はチャート製の両極打法の剥離痕を残す石片で、上下端に細かい剥離痕がみられる。素材は全面ネガティブな剥離面から構成された石核状の石片である。

遺構出土遺物(第14図52～54) 52は第9号住居跡出土のRLの縄文地に懸垂する沈線が施された加曾利E式土器。53は第31号土坑出土の縄文上に沈線で格子目を描いた加曾利B式土器。54は第34号土坑出土の縄文が施された鉢形土器。

P 14-a列トレント

トレントの設定と検出された遺構(第15図)

本トレントは、台地平坦部中央トレント群の西部に相当する、P 14-a①～a⑤グリッドに設定された南北2m×東西10mの調査区である。地表面の標高は、東端で26.70m、西端で26.75mを測り、ほぼ水平で平坦な場所に位置する。

厚さ約30cmの表土(I a, b層)下のII a層上面で、土坑4基(第16～19号)と溝状遺構2条(第4、5号)が確認された。これらの遺構群は平面を確認したのみで、覆土の発掘は実施していない。遺構が検出されなかつたa②グリッド東半部において、1m×2mの範囲を深掘部として掘り下げた。その結果、厚さ約20cmのII a層の下から暗茶褐色の土層が現れ、包含層のII b層と仮定して調査を進めたが、50cm程掘り下げたところで硬化した床面が検出され、当該土層が住居跡の覆土であることが判明した。第5号住居跡と名付けたこの住居跡の床面は、ローム層(III層)からなり、その上面において2基のビットが検出されている。ボーリングステッキ探査によると、ビットの深さはそれぞれ約30cmを測る。また、a⑤



写真4 P 14-a列トレント全景

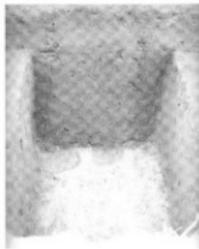
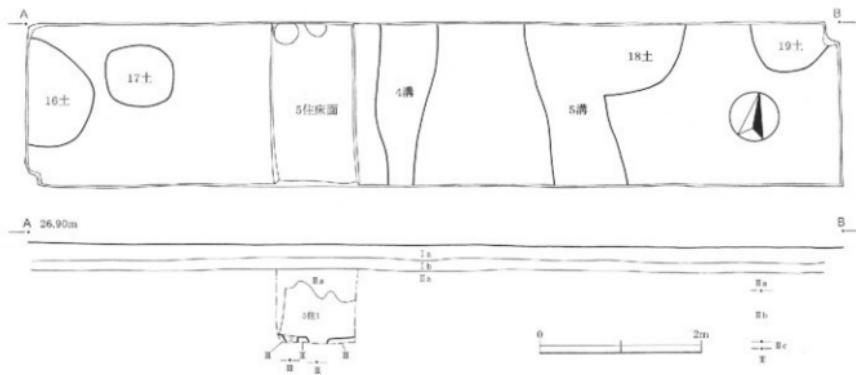


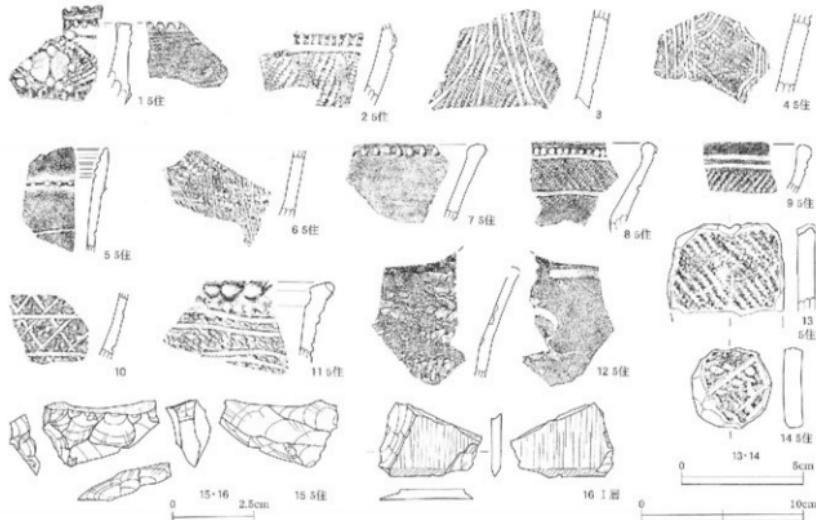
写真5 第5号住居跡深掘部



I a層：暗褐色土層 繼まり、粘性や無し。
 I b層：茶褐色土層 繼まり、粘性有り。土器粒子（径1~2mm）、炭化物（径2~3mm程）、ローム粒子（径2mm前）を若干含む。
 II a層：黒褐色土層 繫まり有り、粘性やや無し。ローム粒子（径3mm程）を含む。土器粒子を少量、骨片を微量含む。
 III層：黄褐色ローム層 繫まり、粘性非常に有り。

第5号住居跡覆土

- 1層：暗茶褐色土 繫まり有り、粘性やや有り。ローム粒子（径5mm程）を含む。ローム含有率は上部の方が高い。
- 2層：明茶褐色土 ロームに細弱角土が混じったもの。繫まり非常に有り、粘性有り。炭化物を含む。
- 第16号土坑覆土：明黒褐色土。土器粒子を多く含み、骨片を少量含む。
- 第17号土坑覆土：灰褐色土。繫まりやや無し。土器粒子、炭化物、骨片を少しある。
- 第18号土坑覆土：明黒褐色土。繫まりやや無し。土器粒子を多く含み、骨片、炭化物を微量含む。
- 第19号土坑覆土：明黒褐色土。土器粒子を少鼠、骨片を微量含む。
- 第4号溝状遺構覆土：明黒褐色土。B a層と同質だが、水の保有率が異なる。
- 第5号溝状遺構土：明黒褐色土。第4号溝状遺構と同質だが、骨粉をやや多く含む。



第15図 P14-a列トレンチ実測図及び出土遺物

グリッドにおけるボーリングステッキ探査の結果、II a 層下に厚さ約 60cm の II b 層と厚さ約 10cm の II c 層、さらに III 層の存在が確認された。

第 5 号住居跡覆土からは、縄文土器とともに体部が直線的に開く壺を含む須恵器の小破片が 11 点出土しており、住居跡の時期を奈良・平安時代に想定できる。そのため住居跡覆土を覆って堆積した II a 層や、その上面で検出された遺構群は、奈良・平安時代以降に形成されたものと捉えられる。

出土遺物（第 15 図）

出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶器類、土器片錐、土製円盤、石核、研磨剥片である。

1～12 は縄文土器。1 は胎土に纖維を含む早期後葉の鞠ヶ島台式土器。交点に円形刺突が施された細縦線区間に U 口縁部に設け、刺突列を充填している。2 は中期中葉と思われる土器で、RL の縄文と沈線間に刻みを加えた文様がみられる。3, 4 は RL の縄文地に単沈線で文様が描かれたもので、後期前葉の堀之内 1 式に該当する。

5 は口縁部の外面に円形刺突が加えられた細い紐線が貼り付けられ、内面には 4 条の沈線がめぐる。胴上部の沈線下は撫でられている。6 は RL の縄文地に平行沈線によって文様が描かれたもので、5 とともに堀之内 2 式と思われる。7～12 は後期中葉の加曾利 B 式土器。7 の口唇部には刻みが、8 の口縁部には棒状工具による刻みと、磨消による RL の縄文帶がみられる。9 は鉢形土器で、口縁部に引かれた 2 条の沈線下に LR の縄文が施されている。10～12 は粗製土器で、10 には縄文地に格子目文が、11 には縄文施文後に紐線と沈線が描かれている。12 は LR の縄文が施され、内面には U 口縁に沿った凹線の他に弧状の凹線もみられる。

13 は RL の縄文がみられる土器片錐の破片。14 は縄文地に格子目文が施された後期中葉の土器片を用いた土製円盤。15 はチャート製の小型の石核。下面が概理に沿った折れ面になっており、縫面を打面とする表の貝殻状の剥離痕と、側面方向からの裏の縦長の剥離痕との前後関係は不明だが、表には打点方向が異なる古い剥離面もみられる。16 は両面に研磨が施された粘板岩製の薄い剥片で、二辺が折れ面になっている。残りの一辺は両面から研磨され穂が作られているが、摩耗は認められない。

P 16-a 列トレーンチ

トレーンチの設定と検出された遺構（第 16 図）

本トレーンチは、台地平坦部中央トレーンチ群の西部に相当する。P 16-a①～a⑥グリッドに設定された南北 2 m × 東西 10 m の調査区である。地表面の標高は、東端で 26.50 m、西端で 26.65 m を測り、ほぼ水平で平坦な場所に位置する。

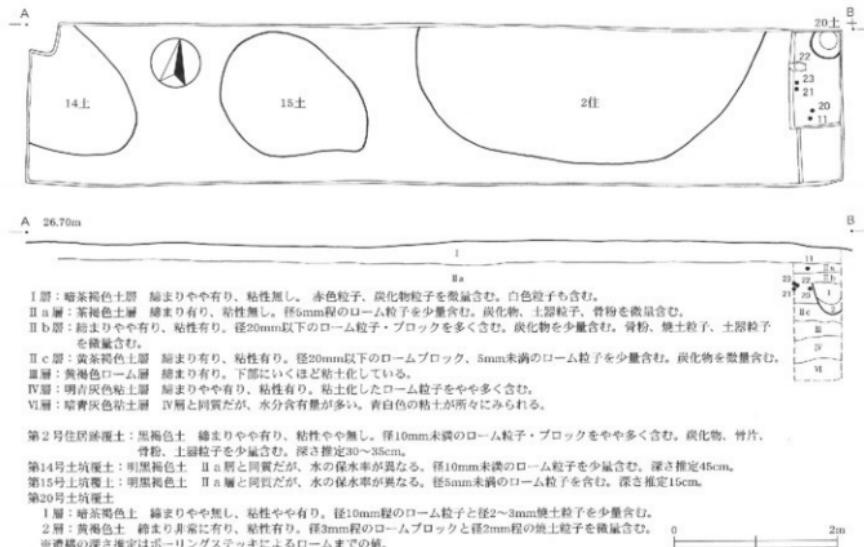
厚さ約 20～25cm の表土（I 層）下の II a 層上面で、住居跡 1 軒（第 2 号）と土坑 2 基（第 14, 15 号）が確認された。これらの遺構群は平面を確認したのみで、覆土の発掘は実施していない。II a 層上面で遺構が検出されなかった a⑤グリッド東端において、0.5 m × 2 m の範囲を深掘部として掘り下げた。その結果、厚さ約 10cm の II a 層下に、II b 層（厚さ約 40cm）、II c 層（厚さ約 20cm）、ローム層（III 層；厚さ約 20cm）、粘土層（IV 層；厚さ約 30cm）、VI 層の堆積が認められた。また、深掘部からは、II b 層中を掘り込み面とし、II c 層を底面とする径、深さとも 40cm の土坑（第 20 号）が 1 基検出された。

II a 層からは縄文時代後期後葉～晚期の上器片や土師器片が出土しているのに対し、深掘部の II b 層からは、最も新しい時期の土器として後期前葉・堀之内 1 式の破片 1 点（24）が出土した他、縄文時代中期中葉の 20 や後期初頭・称名寺 I 式土器（22, 23）の大型破片が包含されていた。また、II c 層中からは縄文時代中期の土器と思われる。胎土に金色雲母粒を含んだ 25 が 1 点のみ出土している。第 20 号土坑の時期については、覆土 1 層から後期前葉の上器小片が出土していることと、II b 層の包含遺物からみて縄文時代後期前葉以前が想定される。

出土遺物（第 17 図）

出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、土器片錐、球状土錐、磨製石斧、磨石、剥片碎片である。

I 層出土遺物 1～6 は縄文土器。1 は内削した短い口縁部に刺突と棒状の沈線が施された、後期前葉の堀之内 1 式土器。胴部の縄文は LR ?。2 は縄文 RL を施文後に沈線を引き、以下を磨消した後期中葉の加曾利 B 式土器。3 は後期後葉の安行 2 式の台付鉢形土器と思われる破片で、点刻のある半隆起帯が横走し、その間に矢羽状に沈線が施されている。圧痕のある瘤も付く。4 は U



第16図 P16-a列トレンチ実測図

縁か内傾・肥厚する後期後葉に相当する粗製土器。縄文地に沈線を施した後、縦線を貼り付け押捺を加えている。5は刻みの付いた突起を有する、晩期の安行3a式土器。6は底面に網代痕がみられる底部破片。復元底径6.8cm。7は土器片錐の欠損品で、縄文が認められる。8は球状土錐。9は黒色安山岩製の横長薄片で、側縁と下端が折れている。10は円錐を用いた磨石の欠損品で、表面に磨滅部を、側縁部に敲打痕を残す。

II a層出土遺物 11は蛇紋岩製の磨製石斧の破片。全面研磨が施され、平坦な側面を有する。刃部は画面から研ぎ出されている。

12~19は縄文土器。12は後期前葉の堀之内1式土器。緩く内屈した口縁部に沈線で楕円形の柄状文を描き、波頂部下には刺突が施されている。屈曲以下にはLRの原体を回転方向を違えて表出した矢羽状の縄文がみられる。13は後期中葉の曾谷式土器。口唇部が内削ぎ状をなし、矢羽状の条線施文後に、口縁に沿って沈線を3条引いている。焼成後の穿孔がある。14は後期中葉の粗製土器。LRの縄文施文後に紺線と平行沈線が施されている。15



写真6 P 16-a列トレンチ全景

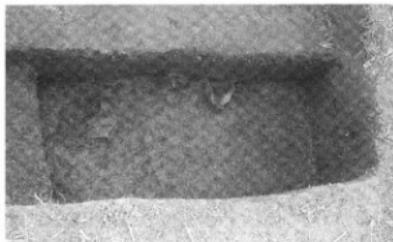
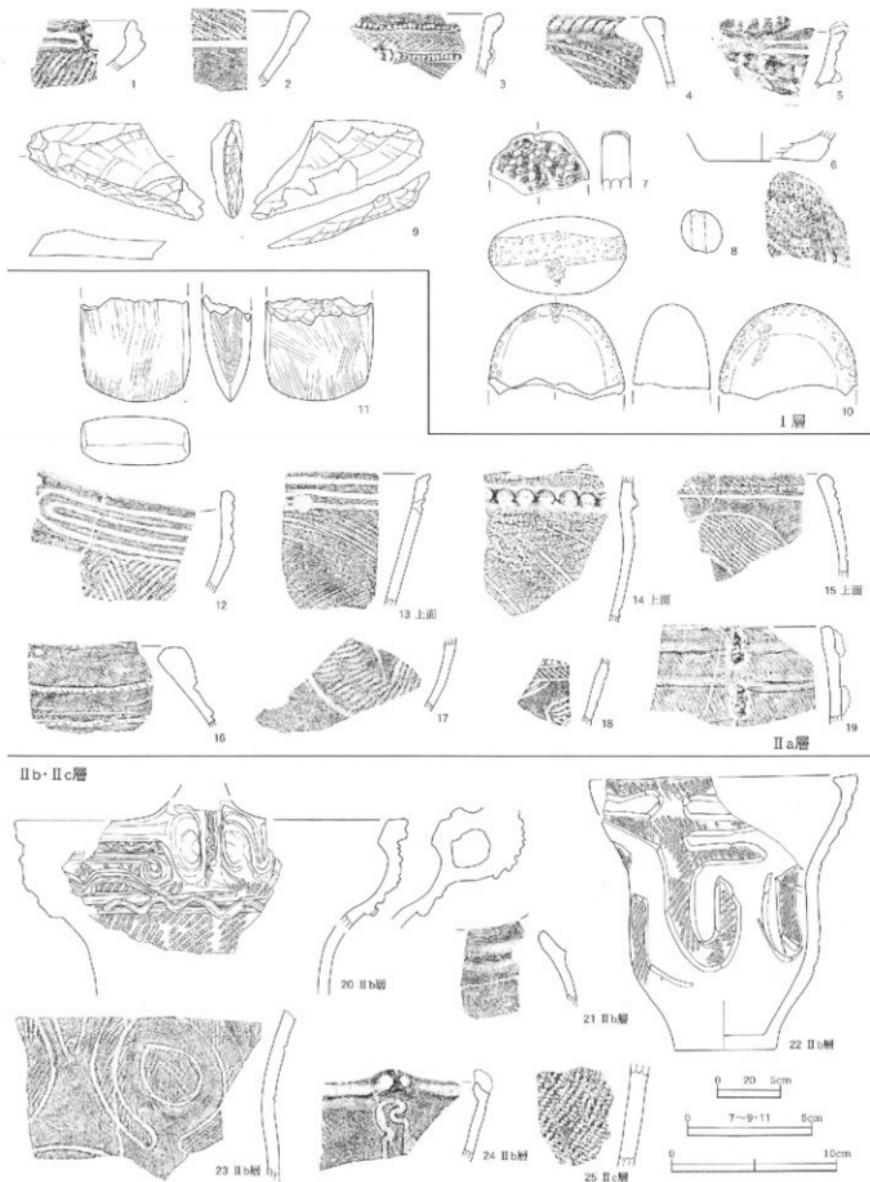


写真7 P 16-a列トレンチII b層土器出土状況



第17図 P16-a層トレンチ出土遺物

～17は後期後葉の安行1式土器で、縄文帯や列点、磨消繩文が認められる。繩文は15、16がRL、17がLRである。18、19は晩期の安行3a式土器と思われる破片。18は沈線で区切られたRLの帶繩文の上部に刺突列が、下位に3本の単沈線で表出された文様がみられる。19は条線地に凹線を施し、最後に横位の刻みの付く縦長の瘤を貼り付けている。

II b・c層出土遺物 20はキャリバー形を呈する中期中葉の上器。突起部に繋がる眼鏡状の把手を有し、RLの繩文施文後に、口縁部に隆線の貼り付けや交叉刺突による小波状文で文様を描いている。下端を区画する隆線は1本づつ貼り付けているが、区画内の蕨手状や弧状の隆線は、沈線を引くことによって2本に分割されている。復元口径31.4cm。21は微隆起線が施された中期後葉・加曾利EIV式の注口土器の破片。微隆起線以下は無文である。22、23は沈線間にRLの繩文を充填した文様を持つ、後期初頭の称名寺I式土器。22の口唇部は内側に底状に突出し、充填繩文によって口縁部に窓枠状の、胴部にJ字状のモチーフを描く。復元口径16.4cm、高さ16.6cm、底径6.0cm。24は口唇部に沈線と刺突による狭い文様を持ち、胴部に沈線で蕨手状の文様が描かれた、後期前葉の軸之内1式土器。地文はみられない。25はRLの繩文が施され、胎土に金色雲母粒を含む胴部破片。

P 18-a列トレンチ

トレンチの設定と検出された遺構（第18図）

本トレンチは、台地平坦部中央トレンチ群の中央部に相当する、P 18-a①～a⑤グリッドに設定された南北2m×東西10mの調査区である。地表面の標高は、東端で26.25m、西端で26.40mを測り、ほぼ水平で平坦な場所に位置する。

表上（I層）を約10cm掘り下げた段階で、西側のa①グリッドでIIa層と思われる暗茶褐色土が、a②～④グリッド付近で黒褐色土が検出された。しかし、表土層との境界が明確に判別できなかつたため、トレンチの北壁と東壁に沿って、幅30cmのサブトレンチを設定し、土層の堆積状況を確認することにした。その結果、a①グリッドでは表土層下に、骨片や土器25をはじめとする縄文時代後・晩期の土器と若干の土師器や須恵器の破片を

含するIIa層の堆積が認められた。一方、a②～⑤グリッドでは、表土層下面（IIa層上面）を確認面とする2軒の重複する住居跡（第6、7号）の存在が明らかになった。最終的に、トレンチ全域をさらに15cm程掘り下げ、2軒の住居跡のプランを平面的に確認している。

第6号住居跡 本住居跡はa②～⑤グリッドにかけて検出されたもので、確認面から床面までの深さは約60cmを測る。東壁は第7号住居跡に壊されて遺存していないが、庵と思われる黄褐色砂を含む土層が東端で確認されており、それを参考にすると東西7.7m強の規模を有するらしい。覆土は上位の黒褐色土層（1層）と床面を覆う下位の黄褐色系土層（2～5層）に大別されるが、いわゆる焼失住居で、床面から黄褐色系土層中にかけて多くの炭化材や焼土ブロックが認められた。

1層からは土器1～4のような平安時代の土師器や須恵器が出土したが、床面直上から古墳時代の土師器杯形



写真8 P 18-a列トレンチ全景

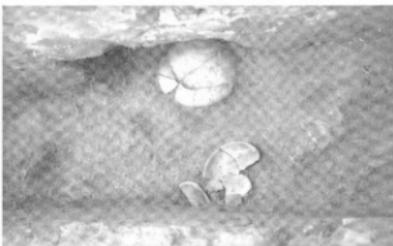
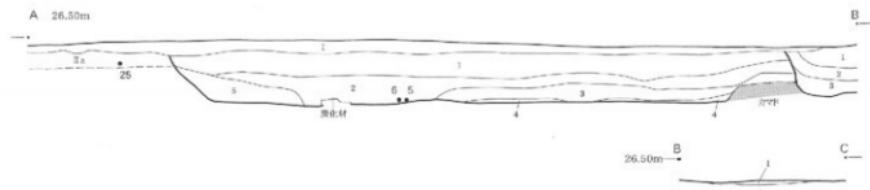
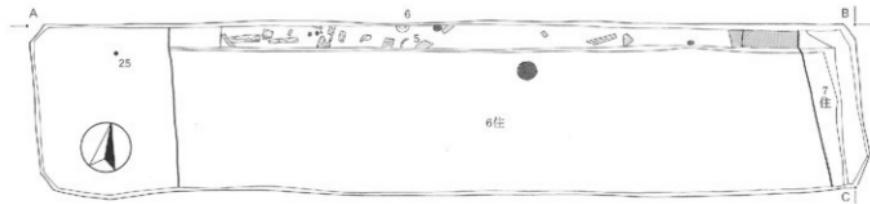


写真9 第6号住居跡土器出土状況



I層：茶褐色土層 細まり有り、粘性無し。橙色スコリアを少量含む。

II a層：暗茶褐色土層 細まり有り、粘性無し。径1~3mmのローム粒子、炭化物、骨片・骨粉を多く含む。燒土粒子も含む。

第6号住居跡屢土

1層：黒褐色土 細まりやや無し、粘性無し。径0.5~1mmの橙色スコリアをやや多く含む。

2層：褐色土 細まりやや有り、粘性無し。径1~3mmの橙色スコリアを多く含む。ローム粒子、炭化物を含む。

3層：黄褐色土 細まり無し、粘性有り。径2~3mmの橙色スコリアを多く含む。燒土と炭化物を多量に含む。

4層：黄褐色土 細まり無し、粘性非常に有り。炭化物を多量に含む。白色粘土を少量含む。

5層：黄褐色土 細まりやや無し、粘性無し。径1~3mmの橙色スコリアを少量含む。上層に比べてローム粒子を多く含み、径20mm程のロームブロックも含む。

6層：海褐色土と黄褐色粘土。黄褐色砂が混じたもの。燒土粒子も含む。

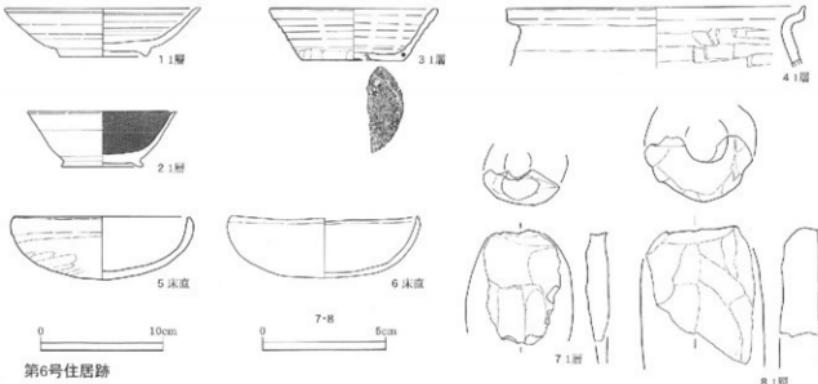
床面：明黄色ローム 直上に焼土と炭化物が広がる。

第7号住居跡屢土

1層：褐色土 細まりやや無し、粘性無し。径0.5~3mmの橙色スコリアを多量に含む。炭化物を少量含む。

2層：褐色土 細まりやや無し、粘性無し。径0.5~3mmの橙色スコリアを多量に含み、ローム粒子を多く含む。西寄りでは、第6号住居跡の竈構造のブロックが多量に混じる。

3層：褐色土 2層に比べてやや暗い褐色。細まりやや無し、粘性やや有り。橙色スコリア（径0.5~3mm）とローム粒子を含み、燒土を少量含む。床面：明黄色ロームに褐色土が混じる。



第6号住居跡

第18図 P18-a列トレンチ実測図及び出土遺物（第6号住居跡）

土器2点(5, 6)がほぼ完形の状態で検出されており、造構の時期は古墳時代と思われる。

第7号住居跡 本住居跡はa@グリッドにおいて、その西端が僅かに確認されたに過ぎない。第6号住居跡の覆土や甕を壊してつくられており、床面は第6号住居跡とはほぼ同じ高さである。覆土は1~3層に分かれ、最上位の1層から平安時代の須恵器坏(9)が出土しており、造構の時期も当該期が想定される。

出土遺物

以下、住居跡、II a層、一括に分けて出土遺物を記述するが、古代の住居跡内から出土した縄文土器と土偶、石器については、混入したものとして一括の項で扱う。

第6号住居跡出土遺物(第18図) 出土した遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、土錘、縄文土器、石器類である。1, 2は輪轆成形の土師器・高台付楕円形土器。1の底部は回転糸切り後ナデ整形。復元口径16cm、高台径7.0cm、器高4.0cm、残存率1/3。2は内面に黒色処理が施され、底部にはナデ調整が認められる。復元口径12.2cm、高台径6.8cm、器高4.5cm、残存率1/2。3は輪轆成形の須恵器坏で、胎土に白色・透明粗粒、白色雲母粒を含み、底面と体部下端に手持ちヘラ削りが施されている。復元口径13.6cm、復元底径8.2cm、器高4.2cm、残存率1/4。4は土師器の菱形土器で、復元口径24.2cm。5, 6はほぼ完形の土師器杯形土器。5は体部に削りが、口縁部にヨコナゲが施されている。口径14.2cm、器高5.2cm。6は表面の状態が悪く整形は不明。口径15.2cm、器高5.0cm。7, 8は管状土錘の破片。

第7号住居跡出土遺物(第19図9~11) 出土した遺物は、土師器、須恵器、土錘、縄文土器、鐵器片である。

9は輪轆成形の須恵器坏で、胎土に白色・透明粗粒、白色雲母粒を含み、底面と体部下端に手持ちヘラ削りが施されている。復元口径13.8cm、底径7.2cm、器高4.7cm、残存率1/2。10は輪轆成形の土師器・高台付土器で、底部に糸切り痕が残る。復元高台径7.2cm、残存率は図示した範囲の約1/2。11は管状土錘。

II a層出土遺物(第19図12~34) II a層からは、縄文土器、土師器、須恵器、磨石、剥片が出土している。図示した土器は縄文土器のみであり、12~14, 18, 19は後掘中葉のものと思われる。12, 13は加曾利B式の破

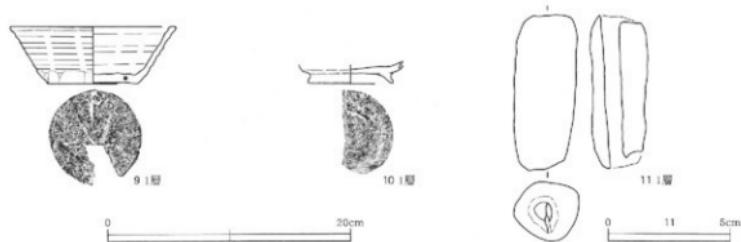
片で、12の屈曲部には刻みが施され、以下は条線となる。13は口縁部下に段状の屈曲を有する、無文の浅鉢形土器。14はRLRの複節縄文施文後に紐線を2条貼り付け、押捺を加えた粗製土器。18, 19は縄文地に横位の条線を施し、紐線を貼り付けた粗製土器で、19には間を磨消した縦位の沈線区画がみられる。

15~17はRLの隆起する帯縄文や列点がみられる後期後葉の安行1式土器。20, 21は無地に押捺が加えられた紐線と条線が施された粗製土器で、21は口唇部が肥厚し内傾する。後期後葉のものか。

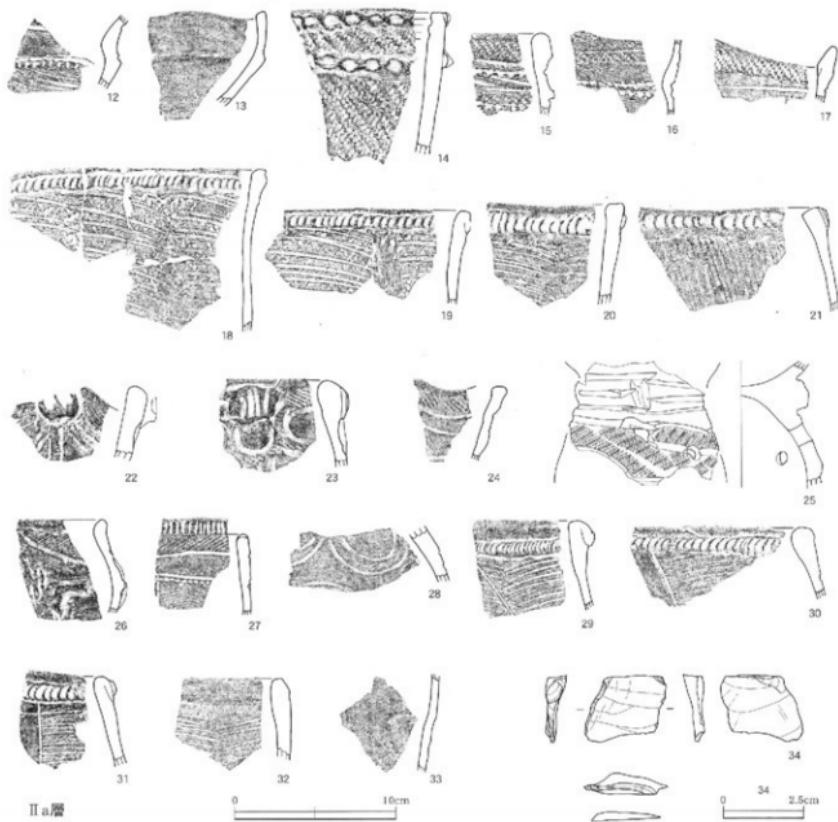
22~31は晩期の土器。22~24は帯縄文がみられる安行3a式土器で、22, 23は帯縄文で三角形や棒状のモチーフを表出し、縦位の刻みの付いた瘤が付く。23と24の縄文はRL。25は台付土器の破片。台部には1条だけが太い直前段3条の縄文LRが施され、三叉状や円形の透かしがみられる。台部の付根付近は、縦長の瘤を貼り付けた後に3条の沈線をめぐらせていている。26, 27は安行3b式土器。26には弧状の沈線で区画された中にLRの縄文が施され、薄い瘤や隆線が貼り付けられている。27には細密沈線と列点がみられる。28は安行3c式土器で、弧状の沈線区画の中に細密沈線を充填している。29~31は条線地に、押捺が加えられた扁平な紐線と、沈線による縦区画が施された晩期の粗製土器。30, 31の縦区画内には磨消されている。34は泥岩製の剥片で、一侧縁と末端が折れ面となる。

一括出土遺物(第20図) 一括として扱うのは、I層出土遺物、及び第6, 7号住居跡出土の縄文時代遺物である。該当する遺物には縄文土器、土偶、石皿、二次加工剥片、石核、両極打法の剥離痕を残す石片、剥片碎片がある。

35~53は縄文土器。35は交互刺突による小波状文と縄文が施された中期中葉の土器で、隆線が剥がれた跡もある。36はRLの縄文地に2条の沈線をめぐらした、後期中葉の鉢形土器口縁部破片。37~41はRLの帶縄文がみられる後期後葉の安行式土器。列点が施された37は安行1式に、刻みの付いた隆線が認められる38は安行2式に相当する。39~41は粗製土器で、39, 40は沈線と列点を口縁に巡らせ、以下は条線となる。41は口縁が肥厚し内傾し、縄文地に条線と紐線が施されている。42~52は晩期の土器。42~46は帯縄文や三叉状の沈線が認められ



第7号住居跡



IIa層

第19図 P18-a列トレーン出土遺物（第7号住居跡・IIa層）



第20図 P18-a列トレンチ出土遺物(一括)

る安行3a式土器。42には縦位の刻みが付いた瘤が、43には沈線で装飾された円筒状の突起が、44には二頭状の突起が付く。縄文は42、45、46がLR、43、44がRL。47～49は沈線区画に細密沈線を施した安行3b式土器。50～52は条線地に、沈線による区画が施された晩期の粗製土器。50、51には押捺が加えられた扁平な紐線が付き、51の区画内は磨消されている。53は製埴土器と思われる底部破片で、外側はヘラ削りで整形されている。

54はいわゆるミニズク土偶の胸部～腰部の破片で、沈線や刻みの付いた隆線が施され、腰部にはRLの縄文もみられる。55は中空土偶の脚部と思われる破片で、上部に沈線がめぐり、その間の一部に刻みが付けられている。

56は石IIIの破片で、表の平坦面が磨滅する。57は風化が進んだ剥片状の黒曜石を用い、二側縁に連続する剥離を加えたもの。58は黒曜石製の角錐状を呈する石核で、打面転移を繰り返している。59、60は両極打法の痕跡を残す石片で、上下端に細かい剥離痕がみられる。59は表中央または裏のネガティブな面が、60は裏のネガティブな面が、最終剥離面である。59はチャート製で、一部に礫面を残す。60は黒曜石製。

P 20-a列トレント

トレントの設定と検出された遺構（第21図）

本トレントは、台地平坦部中央トレンチ群の中央部に相当する、P 20-a①～a⑤グリッドに設定された南北2m×東西10mの調査区である。地表面の標高は、東端で26.10m、西端で26.20mを測り、ほぼ水平で平坦な場所に位置する。

厚さ約15cmの表土（I層）下は、IIbもしくはIIc層に対応する黄褐色土層（IIb・c層）となる。ただし、トレント東端のa⑤グリッドでは、その上位にIIa層が僅かに存在した。IIb・c層上面で、住居跡2軒（第1、11号）と、土坑6基（第37～41、45号）、溝状遺構1条（第7号）が検出された。これらの遺構群は、基本的に平面を確認したのみで覆土の発掘は実施していないが、第1号住居跡は、東壁に竈と思われる焼土が存在し、覆土上面から土師器壺形土器の口縁部破片が出土したことから、古代の時期が想定される。平面観察による遺構群の覆土同士の切り合い関係は、第1号住居跡～第37・38

号土坑、第45号土坑～第40号土坑である。遺構確認の際、IIb・c層の上部から縄文時代後・晩期の土器と、弥生土器、土師器、須恵器、陶器類が出土したが、その量は少ない。

さらに、a⑤グリッド東半部において、1m×2mの範囲を深掘部として掘り下げたところ、厚さ約10cmのIIb・c層の下位には、厚さ約30cmの粘土化したローム層（III層）、厚さ約30cmの灰褐色粘土層（IV層）、黄褐色ローム質粘土層（V層）の堆積が順に確認された。また、深掘部のIII層上面からは、小規模な土坑3基（第42～44号）が検出され、覆土の発掘を実施している。そのうちの1基から縄文時代後期中葉の土器小片6が出土している。

出土遺物（第21図）

1～10は縄文土器。1～2は後期前葉の壙之内式土器で、LRの縄文地に単沈線が描かれた2は1式に、RLの縄文地に4本歯の櫛描文が施された1は2式に相当しよう。3～8は後期中葉の加曾利B式土器。3にはLRの縄文帯と刺突文がみられ、鉢形土器の4の内面には沈線と刻み列、それに刺突文が施されている。5～8は粗製土器で、5、6には縄文施文後に単沈線と押捺された紐線が、7、8には平行沈線が施されている。縄文は5がRL、7、8がLR。9は晩期の安行3a式の突起部の破片と思われる。口縁部にRLの帶縄文がみられ、2条の沈線が周回する突起の上面には沈線で「の」の字状の文様が描かれている。10は晩期の粗製土器で、条線を描いた後に、薄い紐線と内部が磨消された縦位の沈線区画が施されている。11は弥生時代中期の土器で、細い平行沈線がみられる。

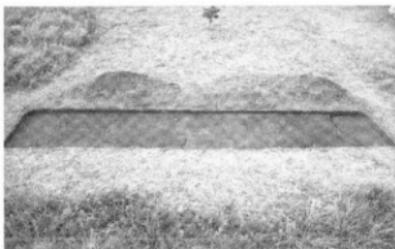
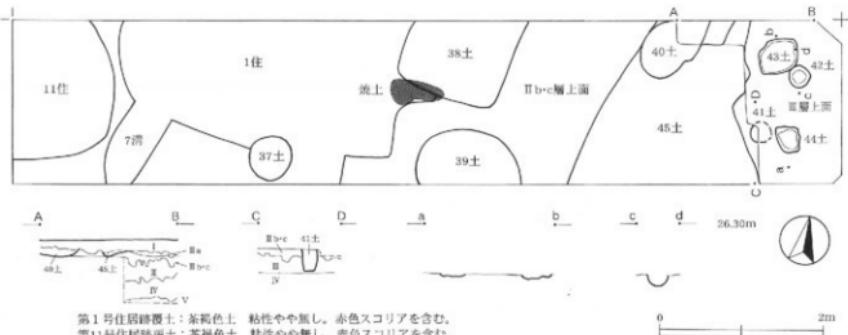
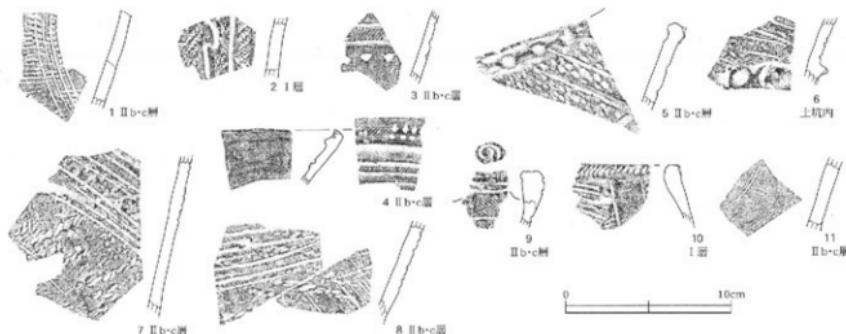


写真10 P 20-a列トレント全景



- 第1号住居跡覆土：茶褐色土 粘性や無し。赤色スコリアを含む。
 第11号住居跡覆土：茶褐色土 粘性や無し。赤色スコリアを含む。
 第37号土坑覆土：茶褐色土 粘性非常に有り。
 第38号土坑覆土：茶褐色土 粘性有り。
 第39号土坑覆土：茶褐色土 粘性無し。
 第40号土坑覆土：茶褐色土 粘性有り。II b - c 層と38号土坑覆土に近似。
 第41号土坑覆土：茶褐色土 粘性や無し。ロームの混入多。
 第42号土坑覆土：黄褐色土 ロームを少し含む。粘性無し。
 第43号土坑覆土：明褐色土 細粒より有り、粘性や無し。多量のロームを含む。
 第44号土坑覆土：34号土坑覆土と同質。
 第45号溝状構造覆土：暗茶褐色土 粘性や無し。
 第7号溝状構造覆土：暗茶褐色土 粘性や無し。ロームの混入有り。

- I層：茶褐色土層 細粒より無く、粒子細かい。
 II a層：暗茶褐色土層 締まり、粘性有り。
 II b - c層：締まり有り、粘性非常に有り。
 III層：茶褐色ローム層 粘土化している。
 IV層：灰褐色粘土層
 V層：黄褐色ローム質粘土



第21図 P20-a列トレンチ実測図及び出土遺物

P 22-a列トレンチ

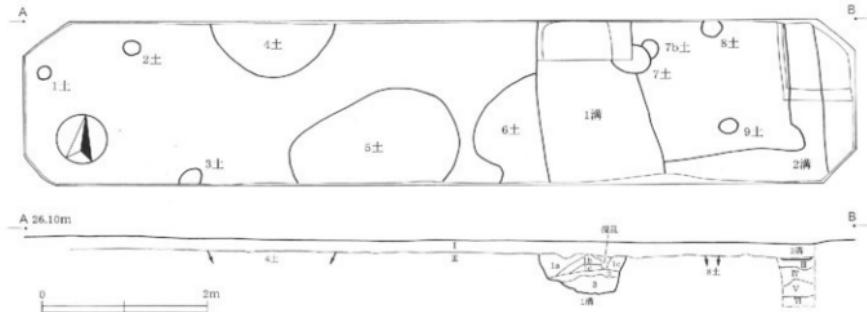
トレンチの設定と検出された遺構 (第22図)

本トレンチは、台地平坦部中央トレンチ群の中央部に相当する。P 22-a①～a⑤グリッドに設定された南北2m×東西10mの調査区である。地表面の標高は、東端で25.90 m、西端で26.00 mを測り、ほぼ水平で平坦な場所に位置する。

厚さ約20cmの表土(Ⅰ層)下のローム層(Ⅲ層)上面で、土坑10基(第1～9号)と溝状構造2条(第1, 2

号)が確認された。これらのうち土坑群は基本的に平面を確認したのみで、覆土の発掘は実施していないが、溝状構については、サブトレンチや深掘りによって、覆土の一部を発掘している。平面観察による遺構群の覆土同土の切り合い関係は、第6号土坑・第2号溝状構→第1号溝状構→第7号土坑である。

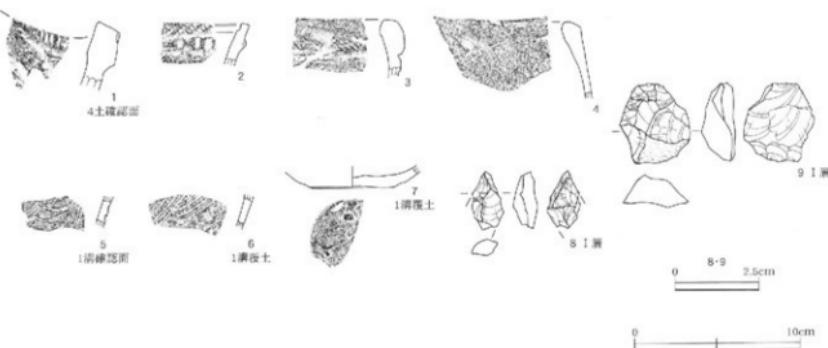
第2号溝状構がかかるa⑤グリッド東北端に1m×1mの深掘部を設定し掘り下げた結果、厚さ約15cmのⅢ層下に、灰褐色粘土層のIV層(厚さ約20cm)、橙褐色粘土質土層のV層(厚さ約20cm)、青灰褐色粘土層の



I層：暗褐色細砂質土層 繼まり有り。
 II層：黄褐色コーム質土層 繼まりやや有り。
 IV層：灰褐色粘土層
 V層：橙褐色粘土質土層
 VI層：青灰褐色粘土層 桔褐色粘土質土を含む。

- 第1号土坑覆土：暗褐色シルト質土 繼まり有り。燒土粒子を多少含む。
 第2号土坑覆土：黒褐色シルト質土 繼まりやや有り。燒土粒子を多少含む。
 第3号土坑覆土：黒褐色シルト質土 繼まり有り。燒土細粒子と炭化物を少數含む。
 第4号土坑覆土：黒色シルト質土 繼まりやや有り。燒土・炭化物粒子と灰褐色ロック（径20~30mm）を少量含む。
 第5号土坑覆土：黒褐色シルト質土 繼まりやや有り。IV層由来と思われる灰褐色粘土ブロック（径40~50mm）を多量に含む。
 第6号土坑覆土：黒褐色シルト質土 繼まりやや有り。燒土・炭化物粒子と灰褐色ロックを少量含む。
 第7号土坑覆土：黒褐色シルト質土 繼まりやや有り。燒土細粒子を僅かに含む。
 第8号土坑覆土：黒褐色シルト質土 繼土塵粒子を僅かに含む。
 第9号土坑覆土：黒褐色シルト質土 繼まりやや有り。燒土細粒子を僅かに含む。
 第1号溝状構築土
 1 a層：黒褐色シルト質土にIV層出来と思われる灰褐色粘土ブロックとV層由来と思われる橙褐色粘土ブロック（径40~60mm）が樹の子状に入る。
 燃土細粒子を僅かに含む。
 1 b層：1 a層と同質だが、ブロック径が5~30mm程。
 1 c層：1 a層と同質

- 2層：黒褐色シルト質土にIV層由来と思われる灰褐色粘土とV層由来と思われる橙褐色粘土がブロック状（径5~20mm）に混じる。
 3層：IV層由来と思われる灰褐色粘土とV層由来と思われる橙褐色粘土がブロック状（径5~20mm）に混じり、間に茶褐色粘土を含む。炭化物を含む。
 第2号溝状構築土：黒褐色シルト質土 繼まりやや有り。燒土粒子を多少含む。



第22図 P22-a列トレンチ実測図及び出土遺物

VI層の堆積が認められた。また、深掘部の断面によると、第2号溝状遺構は深さ2~3cm程の浅いものであった。

第1号溝状遺構については、北部にサブトレンチを設定し、覆土の発掘を実施した。遺構の断面形は逆台形で、幅105cm、深さ50cmを測り、VI層を底面とする。覆土は5層に分けられたが、いずれもIV、V層を起源とするブロックを含み、人為的な土層と捉えられる。覆土中からは7の土師器が出土しており、平安時代以降の時期が想定される。他の遺構については、確認面から土器の小片が出土したのみで、時期については不明である。

出土遺物（第22図）

出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器類、石鏃、両極打法の剥離痕を残す石片である。

1~4は縄文土器。第4号土坑の確認面から出土した1は、隆線が貼り付けられた口縁部破片で中期中葉の土器か。2はLRの縄文施文後に、縦線が貼付された後期中葉・加曾利B式の粗製土器。3は口縁に隆起したRLの帶縄文を有し、それに沿って点列が施された後期後葉の安行1式土器。4は肥厚し内傾する口縁を持った無文の土器で、晚期の粗製土器と思われる。5、6は弥生土器で、5には細い平行弦線によって連弧状の文様が描かれ、6には附加条1種附加2条LR+2Rの縄文がみられる。7は底部に回転糸切り痕を残す、輪轂成形の上土器。

8はチャート製の石鏃で基部を欠損しているが、尖基鏃になるものと思われる。9は両極打法の剥離痕を残すチャートの石片。裏面にネギタイプの最終剥離面がみられ、上下端には細かい剥離痕を残す。

P 24-a列トレント

トレントの設定と検出された遺構（第23図）

本トレントは、台地平坦部中央トレント群の東部に相当する。P 24-a①~a⑤グリッドに設定された南北2m×東西10mの調査区である。地表面の標高は、東端で25.80m、西端で25.90mを測り、ほぼ水平で平坦な場所に位置する。

厚さ約25~30cmの表土（I層）下のローム層（III層）上面で、土坑4基（第10~13号）と溝状遺構1条（第3号）が確認された。また、西端のa①グリッドで、長径45cm以上にわたって粘土の広がりが検出された。これらのうち土坑群は平面を確認したのみで、覆土の発掘は実施していない。平面観察による遺構群の覆土同士の切り合ひ関係は、第3号溝状遺構→第13号土坑→第12号土坑である。

遺構が検出されなかったa⑤グリッド東北端に1m×1mの深掘部を設定し掘り下げた結果、厚さ約20cmのIII層下に、灰褐色粘土層のV層（厚さ約20cm）、灰黃褐色粘土層のV層の堆積が認められた。

出土遺物（第23図）

遺物はI層及びIII層上面から、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器類、石鏃、火打石が検出された。1は列点と条線が施された縄文時代後期後葉の粗製土器。2は弥生土器で、附加条1種附加2条LR+2Rの縄文がみられる。3はチャート製の凸基有茎の石鏃で、先端部を欠損している。4は石英製の火打石。全面が剥離面で覆われ、稜部に打撃によるつぶれが認められる。

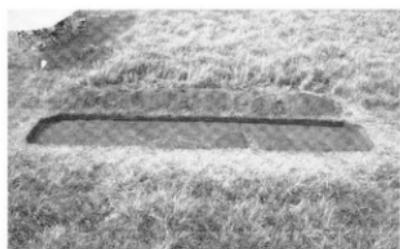


写真11 P 22-a列トレント全景

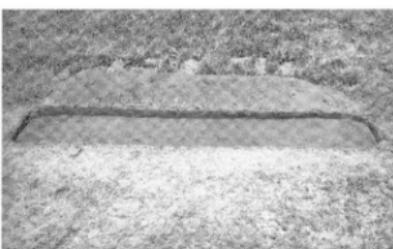
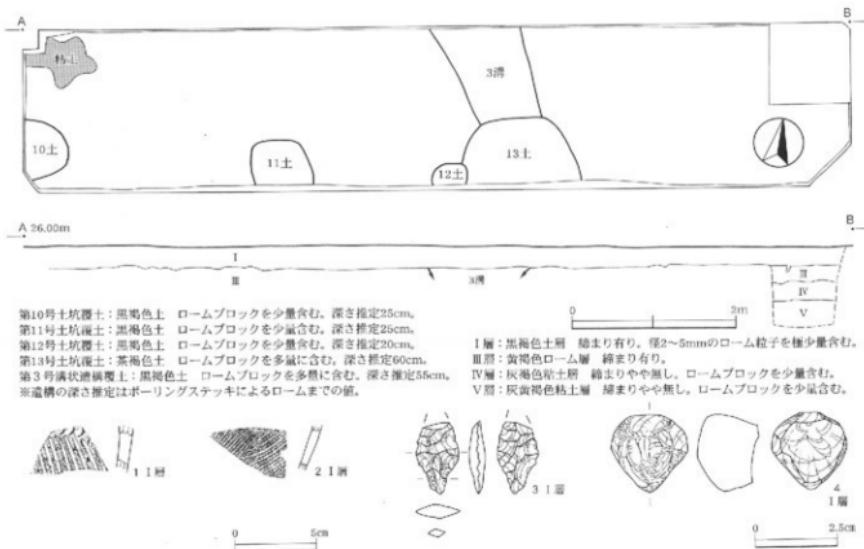


写真12 P 24-a列トレント全景



第23図 P24-a列トレンチ実測図及び出土遺物

P 26-a列トレンチ

トレンチの設定と検出された遺構（第24図）

本トレンチは、台地平坦部中央トレンチ群の東部に相当する、P 26-a①～a⑤グリッドに設定された南北2m×東西10mの調査区である。地表面の標高は、東端で25.50m、西端で25.60mを測り、ほぼ水平で平坦な場所に位置する。

表土は厚さ約10～20cmの客土（Ia層）と、厚さ約10～20cmの耕作土？（Ib層）からなり、その下はローム層（III層）となる。III層上面には部分的に重機の爪痕が残り、ローム層上部に及ぶ削平や、搅乱が近年おこなわれたらしい。III層上面からは土坑1基（第21号）と溝状構造1条（第6号）が検出されたが、平面を確認したのみで、覆土の発掘は実施していない。

トレンチ北壁に沿って幅約30cmのサブトレンチを設定し、III層の発掘とa①グリッドにおける深掘りを実施したところ、厚さ約15cmのIII層下に、灰褐色粘土層のIV層（厚さ約25cm）、灰黃褐色粘土層のV層（厚さ約30～40cm）、青灰褐色粘土層のVI層の堆積が認められた。

第21号土坑の確認面から2の縄文土器が出土したが、遺構の時期を決める資料とは捉え難い。その他は全てI層出土である。

出土遺物（第24図）

出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器類、磨石、剥片等である。

1はチャート製の剥片で、背面に礫面を残す。2は隆起線に沿って幅広の角押文が施された土器破片で、縄文時代中期中葉の阿玉台Ⅲ式に相当する。3は磨石の破片

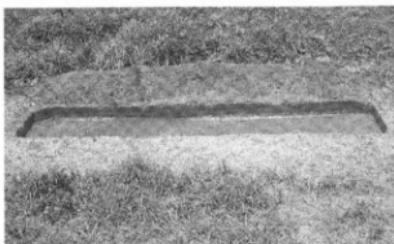
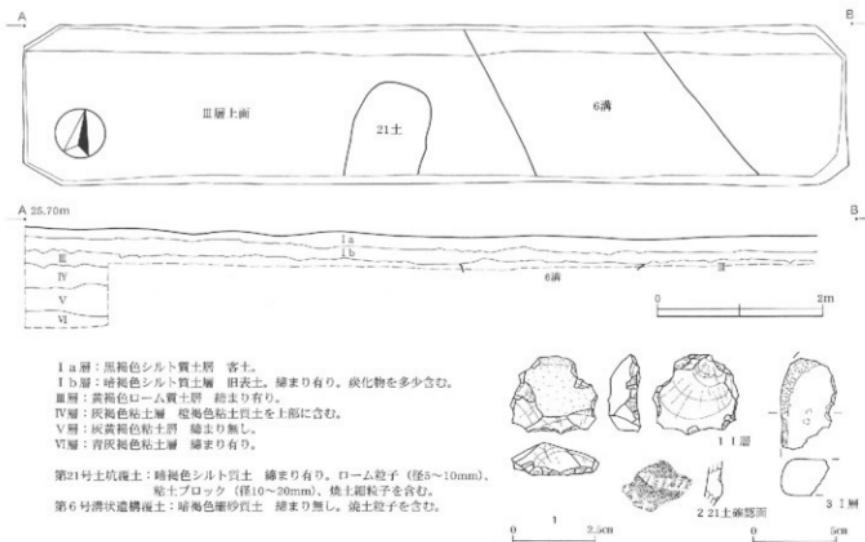


写真13 P 26-a列トレンチ全景



第24図 P26-a列トレンチ実測図及び出土遺物

で、凹部がある平坦な表面が磨面となり、側面から裏面にかけて敲打痕と弱い磨滅が認められる。

P 28-a列トレンチ

トレンチの設定と検出された遺構（第25図）

本トレンチは、台地平坦部中央トレンチ群の東端に相当する、P 28-a①～a⑤グリッドに設定された南北2m×東西10mの調査区である。東側はF貝塚が存在する急斜面になっているが、トレンチの地表面は、東端で標高25.20m、西端で標高25.55mを測り、斜面に向かって緩やかに傾斜する。

厚さ約40～45cmの表土層（Ia, b層）の下は、a①～④グリッドではIV層の灰褐色粘土層になっており、その上面で土坑1基（第77号）が確認された。一方、東端のa⑤グリッドでは、F貝塚の台地側末端部に相当するサルボオ、ハマグリを主体とする混貝土層が検出されたが、貝層には厚さ約5～10cmの暗茶褐色土層（II層）が覆っていた。また貝層西側のIV層には僅かながらローム（III層）の堆積が認められた。土坑、貝層とも平面

を確認したのみで、それ以上の発掘は実施していない。

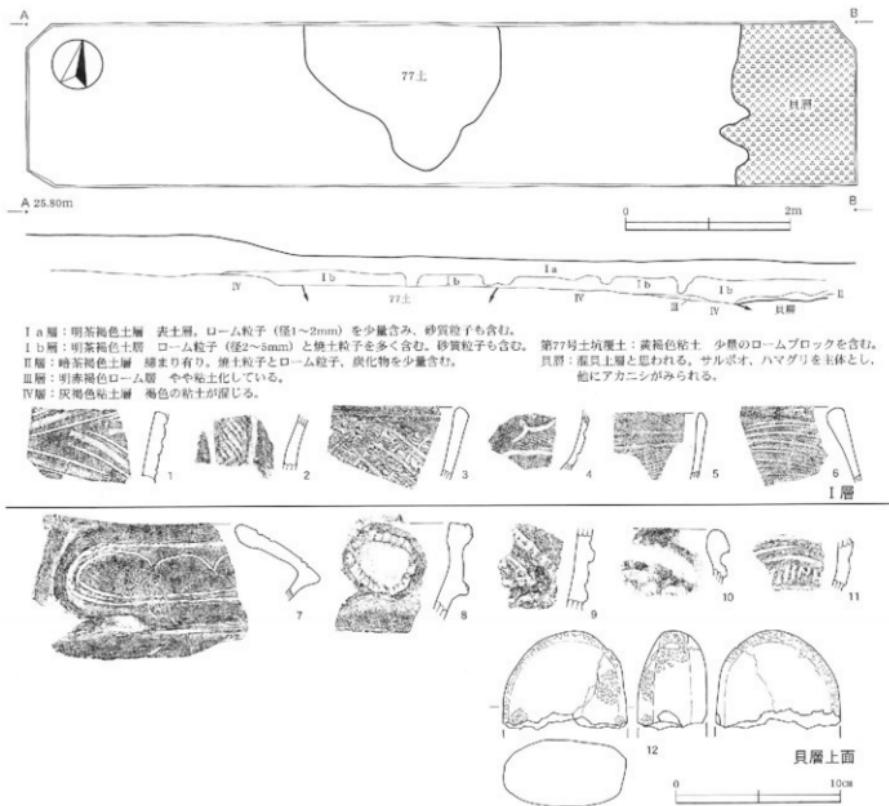
貝層上面からは、縄文時代早期～後期の土器をはじめ、陶磁器類の小片も1点出土しているが、カルシュウム分が付着した阿玉台Ib式土器の大型破片7の存在から、貝層の時期を縄文時代中期前葉と捉える。

出土遺物（第25図）

出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器類、球状土錘、磨石、剥片碎片である。

I層出土遺物（1～6） 1～6は縄文土器。1は太沈線文と細沈線文が施された早期中葉田戸下層式土器。2は沈線でX切られたL Rの縄文帯と磨消部が認められる中期後葉の加曾利E式土器。3は縄文地に格子目文が描かれた後期中葉の加曾利B式土器。4～6は晩期の土器で、三叉状の沈線文とR Lの縄文がみられる4は安行3a式に、細密沈線文が施された5は安行3b式に該当する。粗製土器の6には条線のみが施されている。

貝層上面出土遺物（7～12） 7～11は縄文土器。7は隆起線に沿って施文単位が1列の角押文がみられる中期中葉の阿玉台Ib式の浅鉢形土器。内屈する口縁部外



第25図 P28-a列トレンチ実測図及び出土遺物

面には赤色塗彩の痕跡とカルシュウム分の付着が認められる。8, 9は隆起線に沿って幅広の角押文が施された中期中葉の阿玉台III式土器。10, 11は中期後葉の加曾利E式土器で、10には隆線が施され、11にはRの撓糸文を地文に弧状のモチーフが描かれている。12は磨石の破片で2片が接合したものである。表裏面と一側面が磨面となつており、他の側面には敲打痕が残る。また、接合面の表面際が黒味を帯びる。

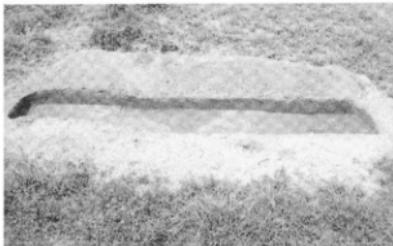


写真14 P28-a列トレンチ全景

M N O 17 - ⑤列トレンチ

トレンチの設定と検出された遺構（第 26 図）

本トレンチは、台地平坦部中央北寄りに相当する、M 17-a ⑤～e ⑤、N 17-a ⑤～e ⑤、O 17-a ⑤～c ⑤ グリッドに設定された南北 25m の調査区で、M 17 グリッドでは東西 2m、N・O 17 グリッドでは東西 1m の幅を有する。地表面の標高は、北端の M 17-a ⑤ グリッドで 26.55 m、南端の O 17-c ⑤ グリッドで 26.45 m を測り、ほぼ水平で平坦な場所にあたる。

厚さ約 15cm の表土（1 層）下に、厚さ約 25cm の II a 層が存在し、さらに下位に II b 層が認められた。発掘は II b 層上部まで実施し、住居跡 5 軒（第 16～20 号）と土坑 12 基（第 60～71 号）が検出されている。断面観察により、第 69 号土坑の掘り込みが II b 層上面から確認できたが、他の遺構の実際の掘り込み面については明確でない。これらの遺構群は基本的に平面を確認したのみで、覆土の発掘は実施していない。平面観察における遺構群の覆土同士の切り合い関係は、第 16 号住居跡→第 18 号住居跡→第 20 号住居跡→第 19 号住居跡、第 66 号土坑→第 65 号土坑である。

M 17-⑤列の第 18 号住居跡では、北壁に砂を多く含む竈と思われる部分が検出された。第 18 号住居跡と重複する第 19、20 号住居跡は、竈と想定される部分のみが確認されたもので、他のプランは不明瞭であり、e ⑤ グリッドで確認された南壁のラインがどの住居跡に属するものか判然としない。以上の 3 軒の住居跡は竈の存在から、古代の所産と思われる。

O 17-c ⑤ グリッドにおいて、平面 1m × 60cm の範囲を深掘部として掘り下げた。その結果、厚さ約 25cm の II b 層の下から、厚さ約 20cm の II c 層、厚さ約 30cm のローム層（III 層）、灰褐色粘土層（IV 層）の堆積を確認した。本トレンチの II a 層や II b 層から検出された土器は、縄文土器が主体であったが、土師器や須恵器も両層から出土しており、遺物から包含層の時期を区別できなかった。そのため以下の出土物の項は、グリッド別に掲載する。

出土遺物

M 17-⑤列出土遺物（第 27 図） 出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器類、管状土



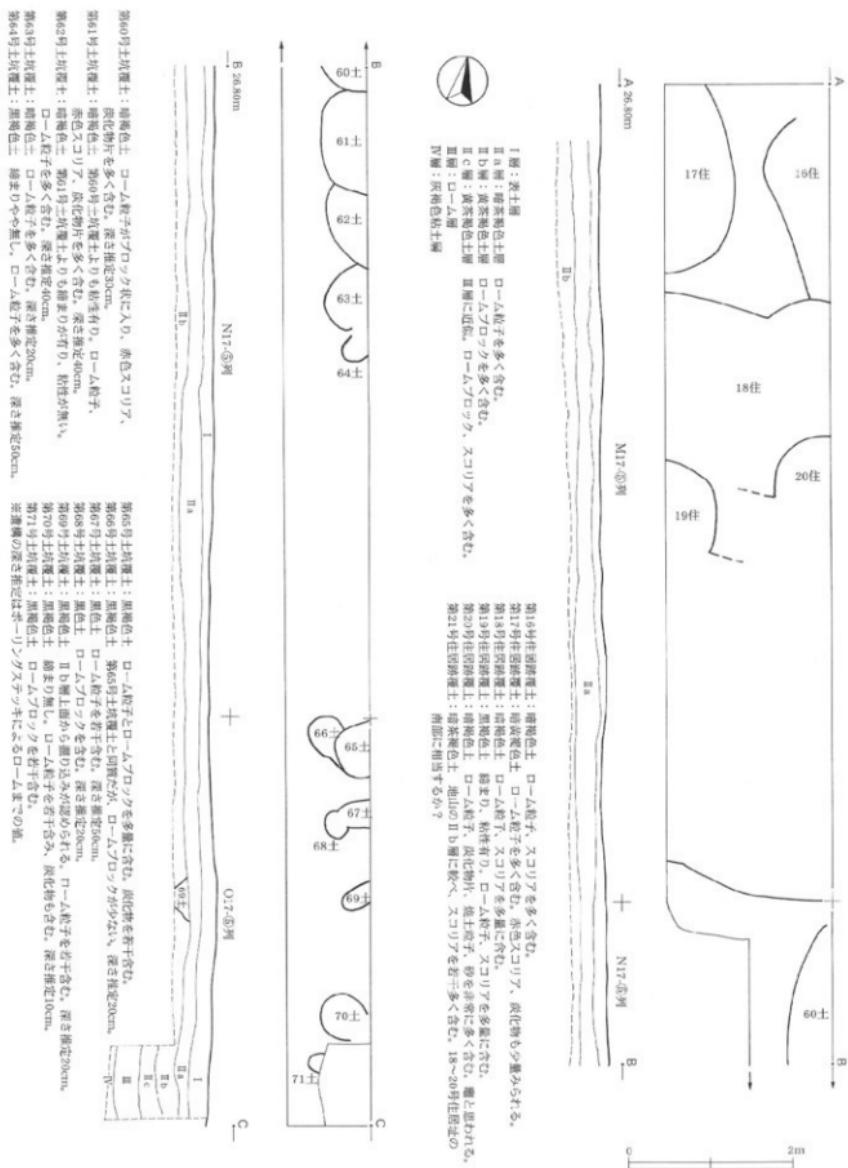
写真 15 M N O 17 - ⑤列トレンチ全景

錐、土器片錐、土製円盤、剥片である。

1～18 は縄文土器。1 は早期後葉の条痕文系土器で、胎土に纖維を含む。2 は中期後葉の加曾利 E 式土器で、R L の縄文部と懸垂文間が磨消された無文部が認められる。3 は曲線的な沈線間に縄文を充填した、後期初頭の称名寺 I 式土器。4～6 は後期前葉の堀之内式土器。4 は口唇部に沈線による文様帯を持つ、5 は R L の縄文地に単沈線で文様を描く堀之内 1 式。6 は縄文地に平行沈線でモチーフを描く堀之内 2 式。7～13 は後期中葉の土器。7、8 は縄文施文後に帶状の沈線区画を描いたもので、対弧状の区切り文もみられる。9、10 には沈線に沿って棒状工具による刺空列が、平坦な波頂部を呈する 12 には沈線に沿って刻みが施されている。11 は口唇部が内削ぎ状を呈する鉢形土器で、口縁部を区画する沈線と粗い斜線文がみられる。13 は縄文地に押捺が加えられた紐線と平行沈線が施されている。7、12、13 の縄文は L R で、7～10、13 が加曾利 B 式に、12 は曾谷式に相当する。14～18 は後期後葉の安行式土器で、列点が添う隆起した R L の帶縄文と、刻みの付された隆線を有する 14 は安行 2 式土器。15～17 は列点と条線が施された粗製土器で、17 には沈線による縱区画も認められる。口縁部が内傾する 18 も粗製土器で、縄文地に条線と紐線がみられる。19 は弥生時代中期の土器で、沈線区画の中に L R の縄文を充填している。

20 は管状土錐の欠損品。21 は土製円盤、22 は切目が 1ヶ所の土器片錐で、どちらも R L の縄文がみられる。23 は黒曜石製の剥片に二次加工が施されたもので、石礫の未成品か。24 は四辺が折り取られた黒曜石製の剥片。

O 17-⑤列出土遺物（第 27、28 図） 出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、須恵器、陶磁器類、土器片錐、土



製円盤、敲石である。

25～69は縄文土器。25は早期後葉の条痕文系土器で、胎土に纖維を含む。26は降線間に爪形列が施された中期中葉の土器。27、28は中期後葉の加曾利E式土器で、微隆起線でR Lの縄文部と無文部が区画された。27はIV式に、微隆起線の両側にR Lの縄文を施し、撫でを加えた。28はIII式に該当する。29、30は後期初頭の称名寺式土器で、J字状の沈線間に縄文を充填した。29はI式に、沈線間に刺突列を加えた。30はII式に相当する。31～36は後期前葉の壠之内式土器。31は壠之内1式で、LRの縄文地に単沈線で文様を描く。32～34は単沈線とLRの縄文によって弧状や渦巻き状のモチーフが描かれた壠之内2式だが、32が充填縄文であるのに対し、33、34は地文縄文である。35と鉢形土器の36も壠之内2式で、細い紐線や内面沈線が施されている。

37～43は後期中葉の土器。浅い条線文が施された37は加曾利B式に、3条の沈線に鋭い刻みが加えられた38は曾谷式に該当しよう。39～43は粗製土器で、39にはLRの縄文のみが、40、42、43には縄文地に薄い紐線と条線が、41には紐線と条線が施されている。45～54は後期後葉の安行式土器。44～51は隆起したRLの帶縄文や列点がみられる安行1式で、48～51は鉢形土器と思われる。52は無文の鉢形土器であるが、口唇部が片口状に凹む形態が49の土器と共通する。53はLRの帶縄文と刻みの付いた隆線が認められる安行2式土器。円孔が存在することから、異形台付土器の破片か。54は条線のみが描かれた粗製土器。55～65は晩期の土器。棒状のLRの帶縄文に縦位の刻みが付いた瘤を有する55と、張出した胸部に突起状の貼付文がめぐる56は、安行3a式と思われる。LRの縄文帯が施された口縁部が外屈する57と、無文地に三叉文や入り組み文を沈線で描いた58、59、さらに沈線区画内に細密沈線を充填した61は安行3b式に相当しよう。62～65は条線地に薄い紐線や沈線による縦区画が施された粗製土器。いずれも区画内の条線は弱く磨消され、65には紐線が認められない。66～69は外面がヘラ削りで整形された、製塩土器と思われる破片。66の底面には木葉痕が残る。

70は加曾利E式土器を素材とした土器片錐の欠損品。71は棒状の縄を使用した敲石で、上下端部に敲打痕がみられる。

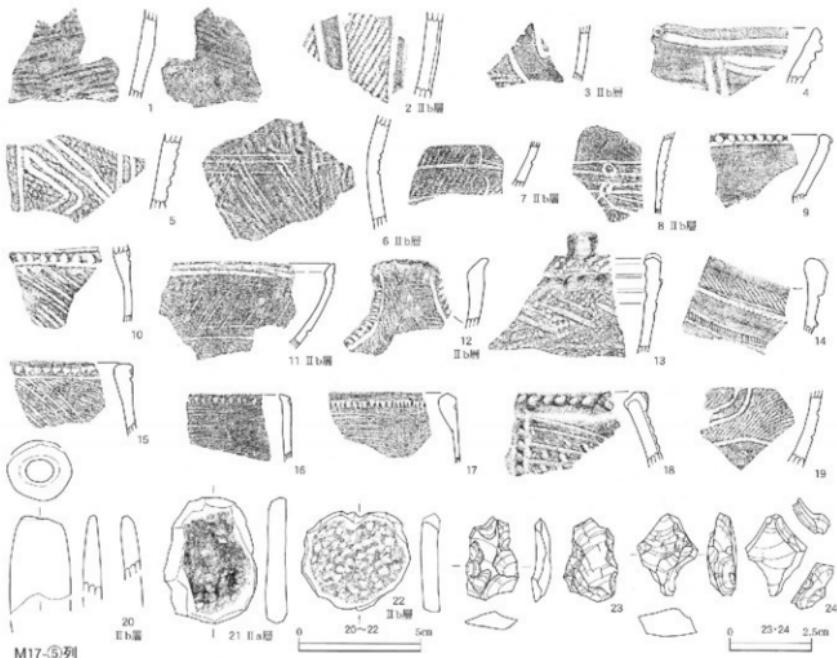
N 17-⑤列出土遺物（第29図）出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、須恵器、陶磁器類、土器片錐、土製円盤、両極打法の剥離痕が残る石片、剥片である。

72～83は縄文土器。72は早期後葉の条痕文系土器で、胎土に纖維を含む。73は施文単位が2列の角押文がみられる、中期前葉の阿玉台II式土器。74は縄文地に単沈線でモチーフが描かれた後期後葉の壠之内1式土器。75は細い紐線と内面沈線が施された壠之内2式土器。74、75の縄文はLR。76はLRの縄文と円形の刺突が施された鉢形土器、横位の沈線が重層する77は、後期中葉・加曾利B式の遠部3類土器。78～81は隆起する帶縄文や、綫長の瘤が付された、後期後葉の安行1式土器。縄文は79、81がLR、80がRLで、80は台付鉢。81は異形台付土器の破片と思われる。82、83は晩期の土器で、RLの帶縄文で三角形の区画を構成する82は安行3a式、弧状の沈線区画にLRの縄文を充填した83は、安行3b式と思われる。84、85は弥生時代中期の壺形土器の破片。84は肩部破片で、ひと筆書きの沈線で渦巻文を描き、無文部と交互になるよう、LRの縄文を充填している。85は肩部の破片で、区画沈線の下位に横書きによる細かい条線文がみられる。

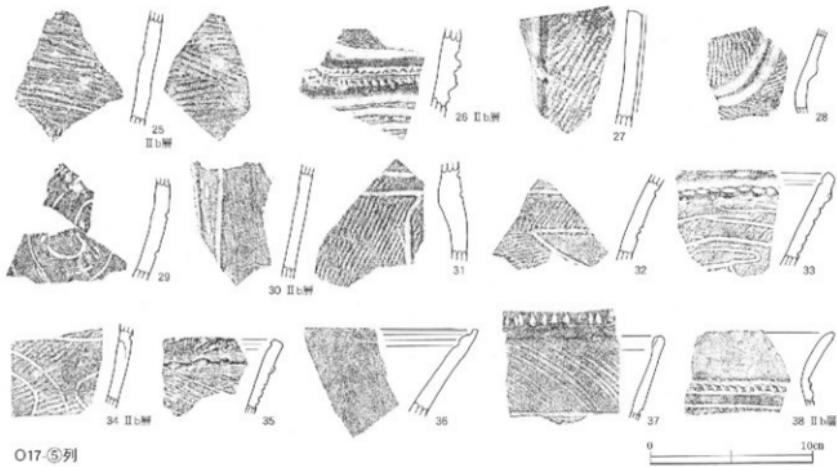
86は沈線と刺突がみられる称名寺II式土器の破片を使った土器片錐。87、88は土製円盤で、87には縄文と浅い条線文が認められる。89は黒曜石の剥片を素材にしたと思われる、両極打法の剥離痕が残る石片で、素材剥片の側縁を打点に細かい剥離痕が認められる。90はチャート製の剥片。91は円錐を用いた敲石で、敲打による凹みがみられる。

MNO 17-⑥列一括出土遺物（第29図）該当する遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器類、土器片錐、磨石、砥石である。

92～106は縄文土器。92、93は中期の阿玉台式土器で、隆起線に沿って施文単位が2列の角押文が施された。92は前葉の阿玉台II式に、幅広の角押文がみられる。93は中葉の阿玉台III式に該当する。隆線で区画された口縁部に、条線と沈線によって文様を描く。94は中期中葉の中峰式土器と思われる。95は隆線で渦巻文が表出された中期後葉の加曾利E式土器。96～98は後期前葉の壠之内2式土器で、96は木の葉状の沈線区画の中にLRの縄文を充填し、97、98は縄文地に平行沈線でモチーフを描く。99、

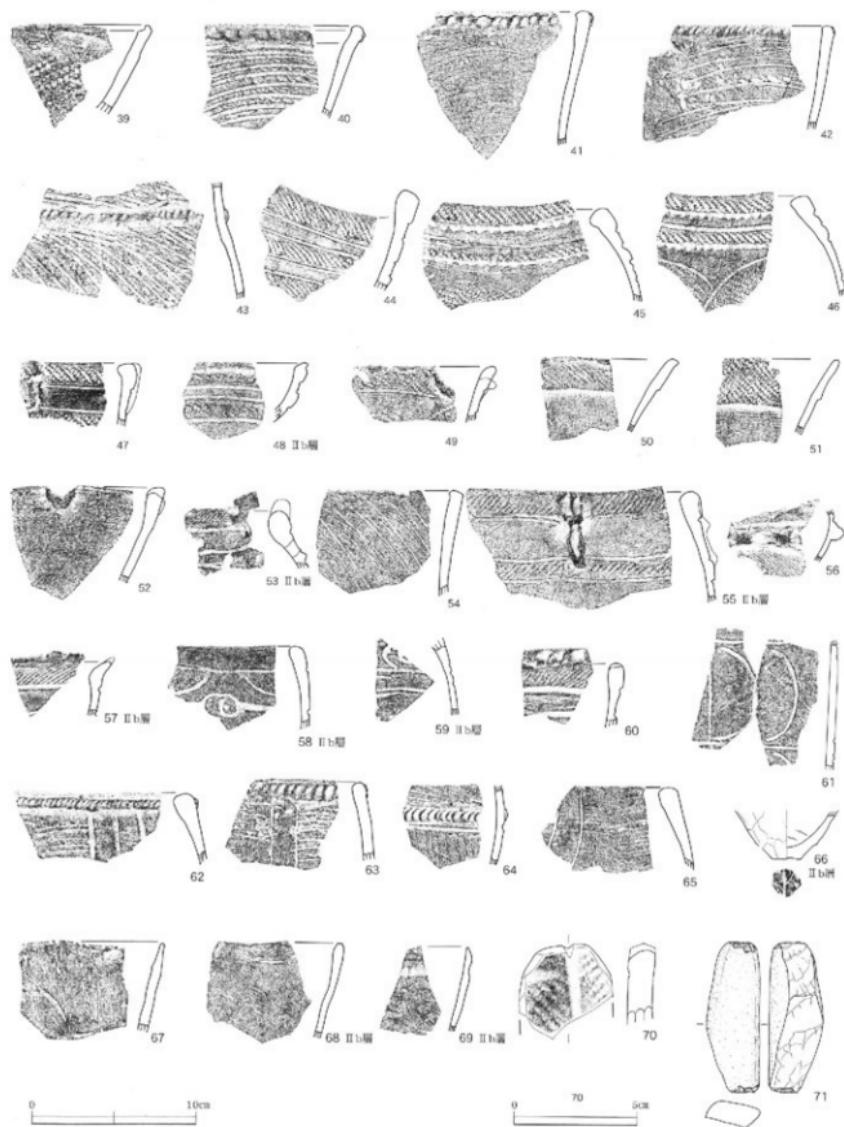


M 17-⑤列



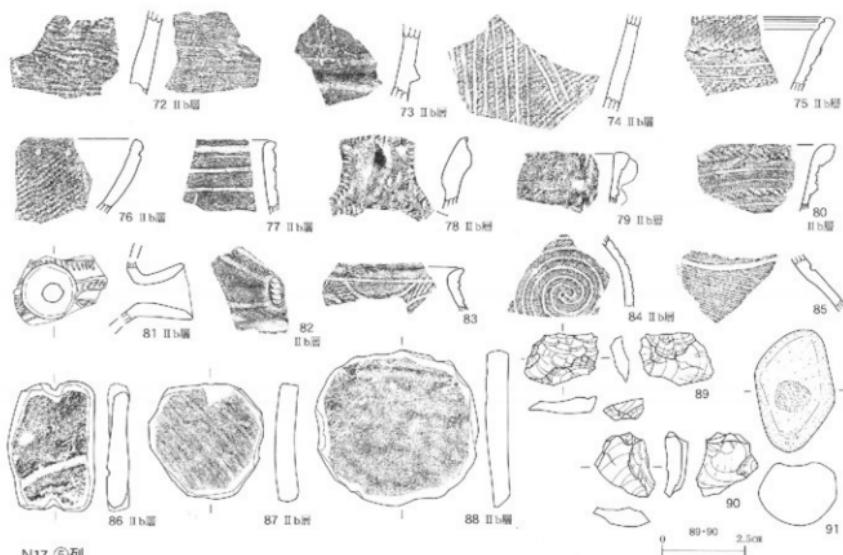
O 17-⑤列

第27図 M N O 17-⑤列トレンチ出土遺物 (M 17-⑤列・O 17-⑤列)

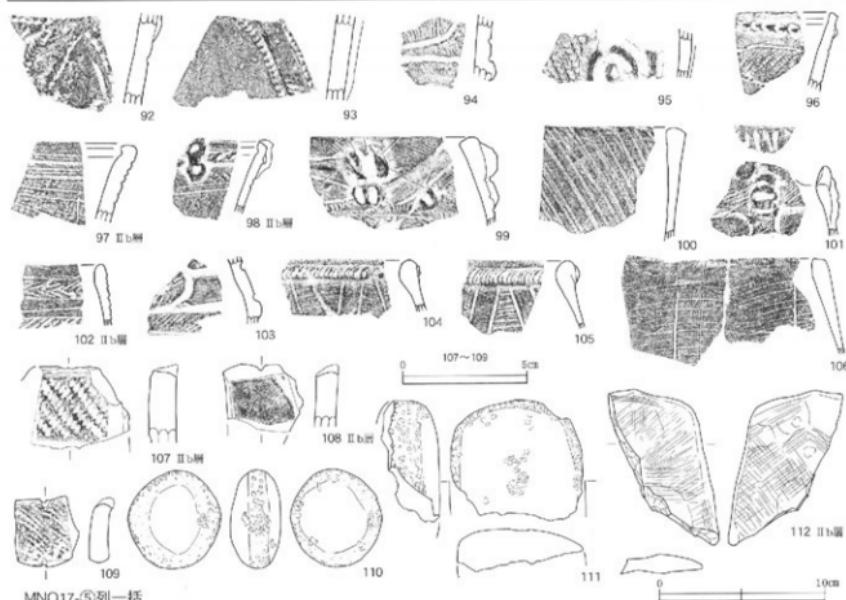


O 17-⑤列

第 28 図 M N O 17-⑤列トレンチ出土遺物 (O 17-⑤列)



N17-⑤列



MNO17-⑤列一括

第29図 M N O 17 - ⑤列トレンチ出土遺物 (N 17 - ⑤列・M N O 17 - ⑤列一括)

100は後期後葉の安行式土器。99はR Lの縄文部とともに、刻みの付いた隆線や豚鼻状の瘤が認められ、安行2式に比定される。100は条線のみが施された粗製土器。101～106は晩潮の上器で、帶縄文と内面に刻みが付いた突起がみられる。101は安行3a式に、細密沈線が施された102は安行3b式に相当する。103は彫刻的な幅の広い沈線で区切られたL Rの縄文帯で「の」の字状の文様を表出した前浦式土器。104～106は条線地に扁平な紐線や沈線による縦区画が施された粗製土器。区画内の条線は磨消され、106には紐線が付かない。

107～109は土器片錐で、107にはR Lの縄文が、109には無節Lの縄文が認められる。110は円筒の表裏面が磨滅し、側縁には敲打痕が残る磨石。111は敲打によって側面が平坦になった磨石で、表裏が磨面となり表面には敲打による浅い凹みが認められる。112は凝灰質砂岩製の板状の砥石。研磨痕の残る表裏面は緩い凹凸がある。

T 27・28-e列トレンチ

トレンチの設定と検出された遺構（第30図）

本トレンチは、台地平坦部とE貝塚に接する小台地をつなぐ尾根状部に相当する。T 27-c③～e⑤、T 28-a①～e④グリッドに設定された南北2m×東西12mの調査区である。西側はD貝塚が存在する谷津の谷頭を臨む。地表面の標高は、東西両端が25.20mなのに對し、T 27グリッドとT 28グリッドの境では25.40mを測り、中央がやや高い。調査は村民参加でおこなわれた。

厚さ約10～15cmの表土層（I層）下には、厚さ約10～15cmの茶褐色土層（II層）が認められ、その下はローム層（III層）となるが、III層上面も地表面とほぼ同様な起伏を示す。調査はIII層上面まで掘り下げをおこない、1坑5基（第78～82号）を確認したが、実際の検出層はII層上面になる。遺構が検出されなかったT 28-e③、④グリッドに幅約40cm、長さ約90cmのサブトレンチを設定して、さらに下位の状況を調べた結果、III層は5cm程の厚さしかなく、その下は粘土層（IV層）となっていた。

第78号土坑ではサブトレンチを設定し、覆土の発掘を実施したが、深さ20cmで平坦な底面が検出されている。他の土坑については平面を確認したのみであるが、第80

～82号土坑の覆土には多くの焼土が認められた。本トレンチのI、II層からは、縄文時代早期後葉の条痕文系土器が出土しており、これらの土坑は当該期の炉穴の可能性がある。

出土遺物（第30図）

出土した遺物は、縄文土器、土師器である。

1～7は縄文土器。1～6は早期後葉の条痕文系土器で、胎土に纖維を含み、内外面に条痕が施されている。1の肩曲部と、5の口唇部内外端には刻みがみられる。6は前期前葉の土器で、胎土に纖維を含み、R LとI Rの縄文が羽状に施されている。7は中期前葉の阿玉台式土器で、刻目文が認められる。8はかわらけで、底面に回転糸切り痕を残す。復元口径7.7cm、復元底径5.0cm、器高1.6cm。

H 28-①列トレンチ

トレンチの設定と検出された遺構（第31図）

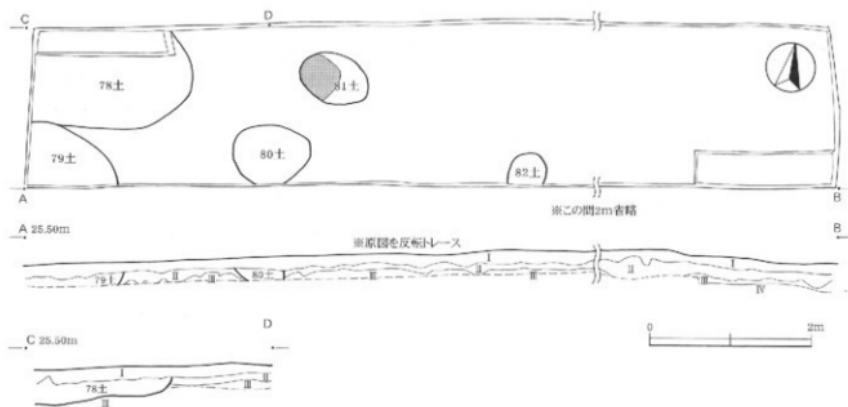
本トレンチは、北側に1貝塚を控える台地平坦部の北東部に相当する。H 28-a①～c④グリッドに設定された南北10m×東西2mの調査区である。トレンチの地表面は、北端で標高25.45m、南端で標高25.85mを測り、北方に向かって緩やかに傾斜する。

厚さ約20～40cmの表土層（I層）下の、ローム層（III層）上面で、土坑2基（第48、49号）と溝状遺構1条（第9号）が確認された。これらの遺構群は平面を確認したのみで、覆土の発掘は実施していない。平面観察による遺構群の覆土同士の切り合ひ関係は、第48、49号土坑→第9号溝状遺構である。遺構が検出されなかつたa①グリッドの北東隅に、幅約60cm、長さ約1mの深掘部を設け掘り下げた結果、厚さ約50cmのIII層下に灰褐色粘土層のIV層が確認された。

第48号土坑は、覆土上面から11～13とした土師器大型破片がまとまって検出されたことから、平安時代の遺構と捉えられる。一方、第9号溝状遺構は、覆土がI層と連続しており、近年の所産と思われる。

出土遺物（第31図）

出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器



I層：黒褐色土層 表土層、結まり有り、粘性無し。赤色スコリア（径1~2mm）を含む。
 II層：茶褐色土層 結まり非常に有り、粘性やや有り。赤色スコリア（径2~3mm）と白色粒子（径1mm）を含む。
 III層：茶褐色ローム層 結まり非常に有り、粘性やや有り。径1~2mmの赤色スコリアと白色粒子をまばらに含む。
 IV層：粘土層

第78号土坑覆土：黒褐色土、I層より暗い色調。赤色スコリア（径2~3mm）と、ロームブロック（径6~7mm）を含む。
 第79号土坑覆土：暗茶褐色土、黒褐色土に黄褐色のロームブロックが混入する。結まり有り、粘性無し。径1~5mmの進土・炭化物、白色粒子を少許含む。
 第80号土坑覆土：黒褐色土、結まり有り、粘性無し。径10mm以下の燒土・ロームブロックをやや多く含む。
 第81号土坑覆土：暗黃褐色土、結まり有り、粘性やや有り。径1mm程の燒土・白色粒子を多く含み、白色粘土がブロック状に入り込む。
 第82号土坑覆土：茶褐色土、結まり、粘性有り。径2~5mmの燒土粒子を多量に含む。

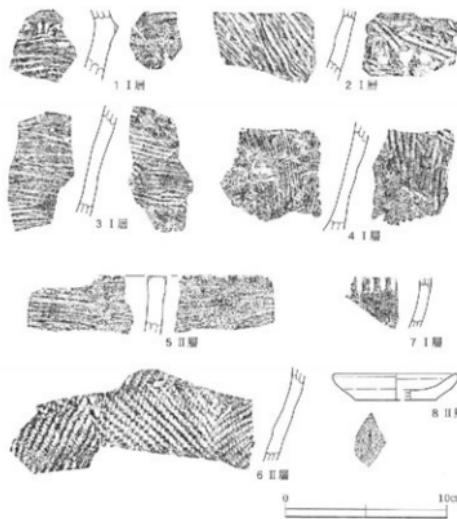
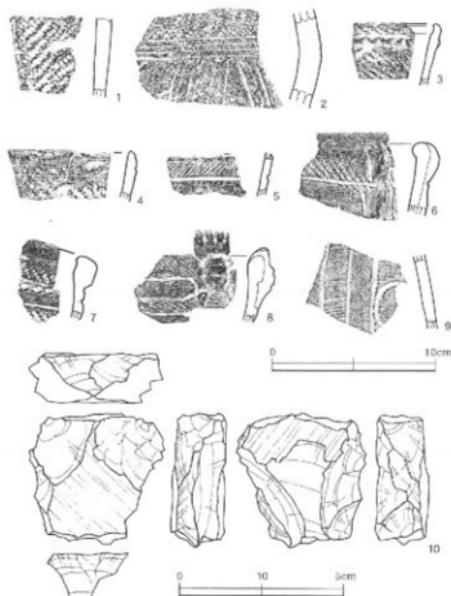
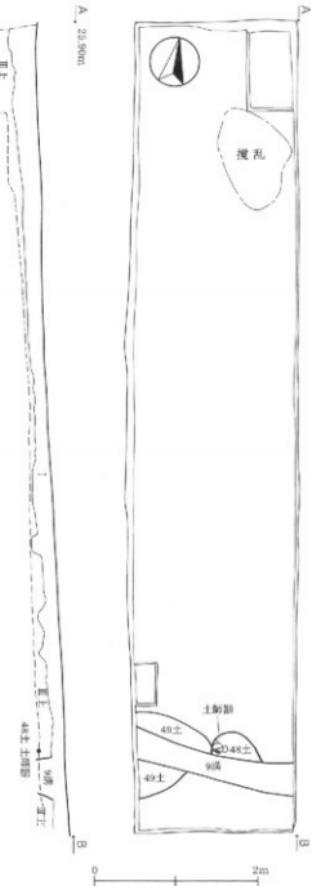
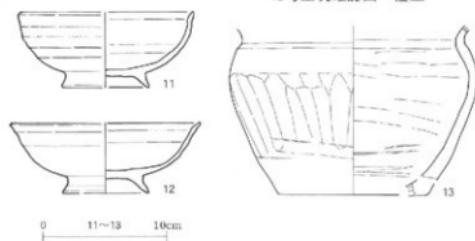


写真 16 T 27・28-e列トレンチ全景

第30図 T 27・28-e列トレンチ実測図及び出土遺物



I層
48号土坑確認面～覆土



I層：黒褐色土層 繊まりやや無し、粘性やや有り。ローム粒子を含む。
 II上層：黄茶褐色ローム層 ハードロームブロックを散在含む。
 II下層：暗黃茶褐色ローム層 繊まり、粘性有り。スコリアとやや黒っぽい粒子を散在含む。
 IV層：灰褐色粘土層 繊まり非常に有り、粘性有り。橙色の土の塊を含む。

第48号土坑覆土：暗褐色土 繊まりやや無し、粘性やや有り。炭化物とローム粒子を含む。
 第49号土坑覆土：暗褐色土 繊まり有り、粘性やや無し。ローム粒子、土膠粒子、炭化物を含む。
 第9号溝状遺構復土：暗褐色土 繊まり有り、粘性やや有り。ローム粒子と炭化物を含む。

第31図 H 28-①列トレンチ実測図及び出土遺物

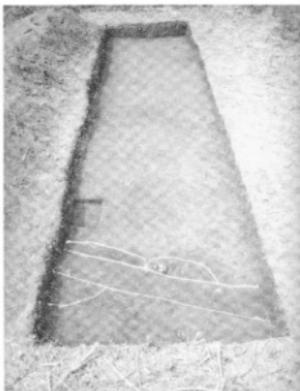


写真 17 H28 - ①列トレンチ全景



写真 18 第48号土坑土器出土状況

H 30 - ①列トレンチ

トレンチの設定と検出された遺構と遺物(第32図)

本トレンチは、北側にI貝塚を控える台地平坦部の北東部に相当する、H 30-a①～e④グリッドに設定された南北10m×東西2mの調査区である。トレンチの地表面は、北端で標高25.40m、南端で標高26.05mを測り、北方に向かって緩やかに傾斜する。東側でトレンチの形が入り組んでいるのは、立木を避けたためである。

厚さ約15～30cmの表土層(I層)下は、南半部ではローム層(III層)に、北半部では灰褐色粘土層(IV層)となる。両層の層序を確認するために、トレンチ西壁に沿つて、幅約30cmのサブトレンチを設定し調査を行ったところ、III層の厚さは10～15cm程度、下位にはIV層が北半

類、石核、剥片碎片である。

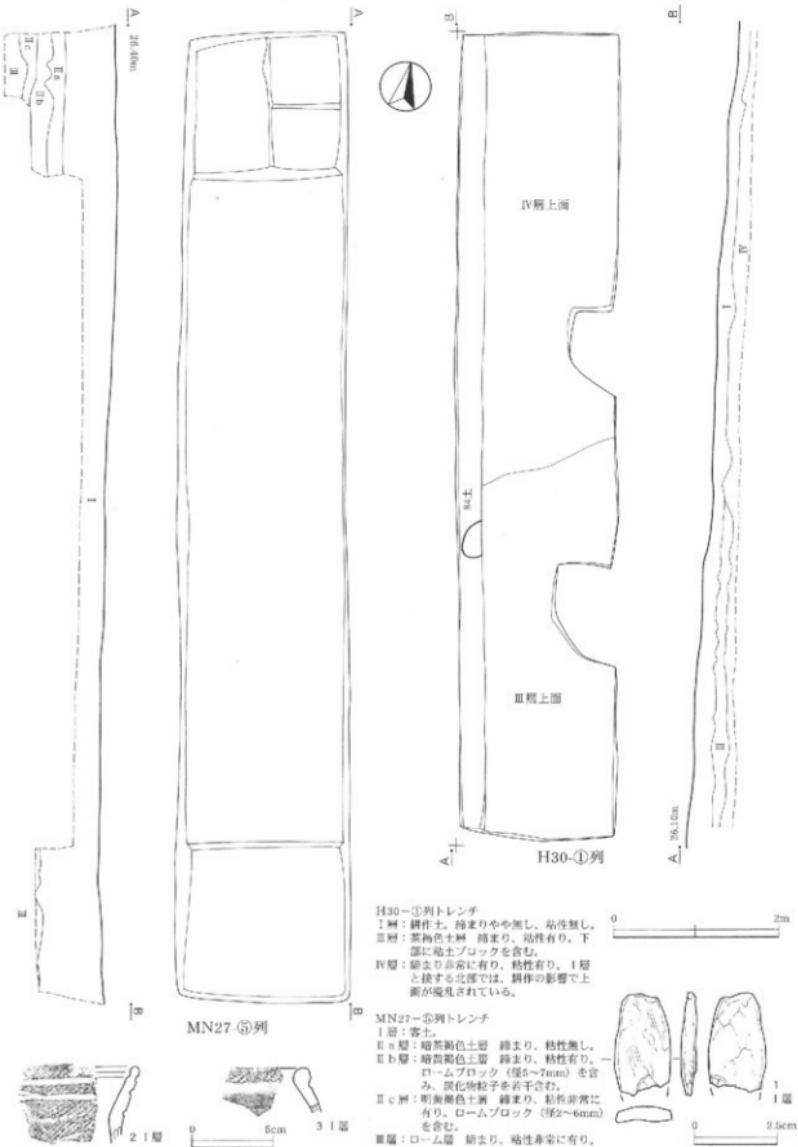
I層出土遺物(1～10) 1～9は縄文土器。1はR Lの縄文と顕著な沈線が認められる胴部破片で、中期後葉の加曾利E式か。2～4は後期前葉の堀之内2式土器で、2、4は縄文地に平行沈線で文様が描かれ、3は細い紐線と内面沈線が施されている。縄文は2がLR、3、4がRL。5は後期中葉の加曾利B式土器で、LRの縄文帯がみられる。6、7は隆起したRLの帶縄文がみられる後期後葉の安行1式土器で、6には瘤が、7には列点が加えられている。8はRLの帶縄文によって棹状の文様が表出され、刻みのついた突起と瘤が付された、晩期の安行3a式土器。9は浅い条線の上から沈線区画を描き、区画内を磨消している晩期の土器。

10は頁岩製の石核で、表裏に摺理面を残す板状の石片を素材とする。多方向からの剥離が認められるが、最終作業面は、上面を打面とする表の2面である。

第48号土坑出土遺物(11～13) 11、12は輪轤成形による上部器・高台付楕形土器。内面には弱い磨きが、底面にはナデ整形が施され、胎土に白色の微粒を含む。11は復元口径9.2cm、復元高台径7.0cm、器高6.1cm、残存率1/3。12は復元口径15.2cm、復元高台径7.0cm、器高5.7cm、残存率1/2。13は上部器の小型の楕形土器で、口縁部にヨコナデ整形痕を、胴部にヘラ削り痕を残す。復元口径2.0cm、復元底径12.2cm、残存率は図示範囲の1/3。胎土に白色粒子を含む。



写真 19 H30 - ①列トレンチ全景



第32図 H 30-①列トレンチ及びMN 27-⑤列トレンチ実測図及び出土遺物

部から続いて堆積していた。また、サブトレンチ内で土坑1基（第84号）が検出されている。

遺物の出土は少なく、土器では縄文時代中期と後期の土器小片1点ずつが認められた他は、時期が分かれる土器は検出されていない。第32図の1は小型の磨製石斧で、刃部が欠損する。研磨は全面で認められるが、裏面では部分的にしか研磨痕がみられず、素材剥片の主要剥離面が観察される。

MN 27-⑤列トレンチ

トレンチの設定と検出された遺構と遺物（第32図）

本トレンチは、台地平坦部の中央東寄りに相当する、M 27-a ⑤～e ⑤、及び N 27-a ⑤グリッドに設定された南北12m×東西2mの調査区である。トレンチの地表面は、北端で標高26.25m、南端で標高26.10mを測り、ほぼ水平で平坦な場所に位置する。なお、本トレンチの調査は村民参加のもと実施されている。

表土層（I層）は客土であり、30～40cm掘り下げるでも下位の土層が検出できなかったため、北端のM 27-a ⑤グリッドと、南端のN 27-a ⑤グリッドの2ヶ所を深掘りし、土層の堆積状況を確認することにした。南端では厚さ約70cmのI層下から、ローム層（III層）が検出されたのに対し、北端では厚さ約60cmのI層下に、IIa層（厚

さ約20cm）、IIb層（厚さ約20cm）、IIc層（厚さ約15cm）、III層の堆積が認められた。調査はこの段階でとめている。

遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器類が検出されたが、全てI層中の出土である。第32図の2、3は縄文時代晚期の土器、2は無節Lの縄文地に沈線で三爻状の文様を描く、口縁がやや外屈する破片で、口縁内面に沈線がめぐる。3は肥厚した口縁にL.Rの縄文が施された粗製土器。

W 28-①列トレンチ

トレンチの設定と出土遺物（第33図）

本トレンチは、地下レーダー探査で遺構と思われる反応が顯著にみられたE貝塚に接する小台地北部を実際に発掘し、地下レーダー探査データの検証及び、E貝塚に伴う住居跡等の遺構確認を目的に設定された。当初、W 28-a ①～e ①グリッドに相当する南北10m×東西2mの調査区として設定したが、調査の進行に伴い、a ①～d ①グリッドにあたる、南北8mに変更している。トレンチの地表面は、北端で標高25.90m、南端で標高26.20mを測り、北に向かって緩やかに傾斜する。

厚さ約15cmの表土層（I層）下からは、IIb層が検出された。トレンチの東壁に沿って、幅約30cmのサブトレンチと、a ①グリッドの北西隅に、1×1mの深掘部を

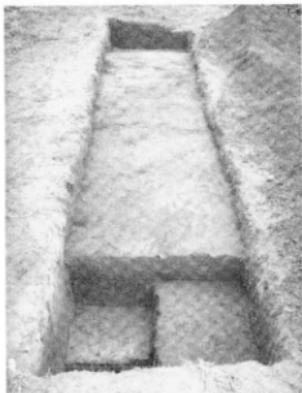


写真20 MN 27-⑤列トレンチ全景

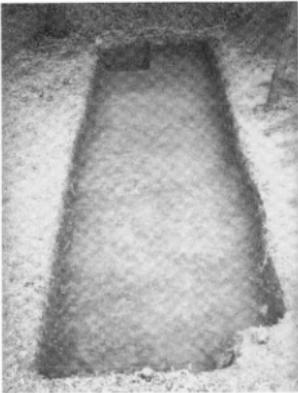
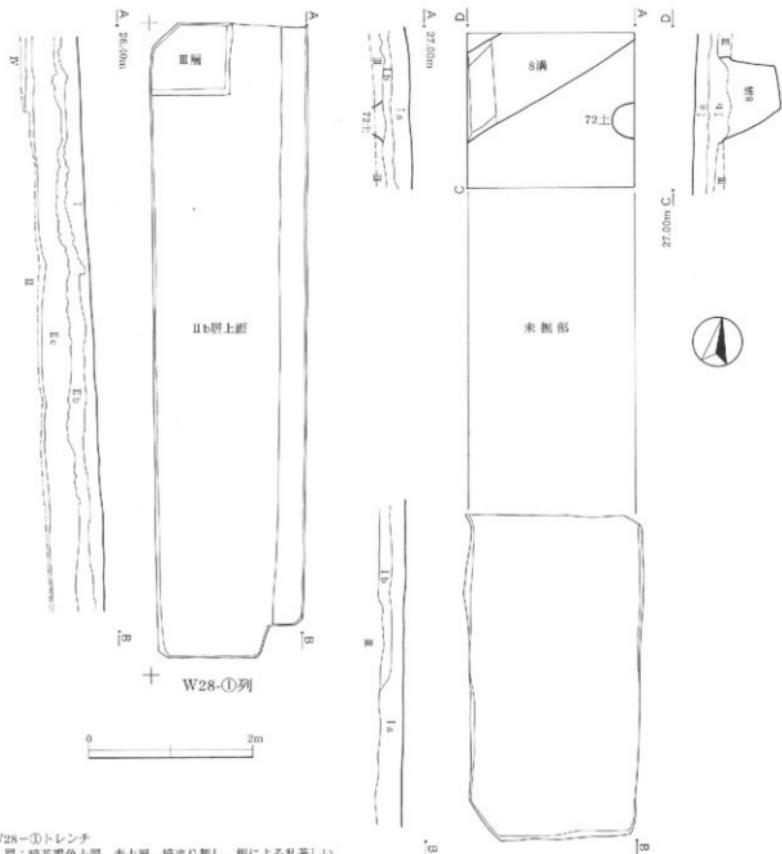


写真21 W 28-①列トレンチ全景



W28-①トレンチ
I 層：暗茶褐色土層 表土層。締まり無し。根による乱着しい。

II b 層：暗茶褐色土層

II c 層：明茶褐色土層

質層：明茶褐色ローム層 粘性有り。径30~40mmのハードロームブロックを所々に含む。

IV 層：灰褐色粘土層

Y28-①トレンチ

I a 層：暗茶褐色土層 表土層。締まり、粘性無し。径5mm程の焼土粒子や炭化物片を含む。シノダケの根による搅乱が著しい。

II b 層：暗茶褐色土層 坊作土と思われる。I a 層より明るい色調。締まりやや有り、粘性無し。焼土粒子（径2~3mm）や炭化物片（径3~5mm）、白色粒子を少數含む。Ⅲ層由来のロームブロック（径3~20mm）を含む。

Ⅲ層：黄褐色ローム層 締まり有り、粘性やや有り。径1mm前後の黒色粒子を含む。

第2号土坑覆土：暗茶褐色土 締まり、粘性無し。焼土粒子（径2~3mm）とロームブロック（径5~6mm）を少數含む。

第8号溝底構造土：暗茶褐色土 締まり、粘性無し。上半部にⅢ層由来のロームブロックを密に包含する。

第33図 W 28-①列トレンチ及びY 28-①列トレンチ実測図

設定し、下位の土層を調査した結果、厚さ約10～20cmのII b層下から、II c層（厚さ約30cm）、ローム層（III層、厚さ約10cm）、灰褐色粘土層（IV層）の堆積が認められた。

遺構の検出は無く、遺物もI層とII層から、土師器と陶磁器類の小片が出土したに過ぎない。

Y 28-①列トレント

トレントの設定と検出された遺構と遺物（第33図）

本トレントは、W 28-①列トレントに引き続き、E貝塚に接する小台地における遺構の確認を目的に設定された。当初、Y 28-a①～e①グリッドに相当する南北10m×東西2mの調査区として設定したが、篠竹の根にはばまれ、表土発掘が思うように進まなかったため、途中からa①グリッドとd①、e①グリッドのみを調査する計画に変更した。トレントの地表面は、北端のa①グリッドで標高26.80m、南端のe①グリッドで標高26.70mを測り、ほぼ水平で平坦な場所に位置する。

両調査区とも、厚さ約30cmの表土層（I a、b層）下に、ローム層（III層）が堆積しており、a①グリッドではIII層上面から、上坑1基（第72号）と溝状遺構（第8号）が検出された。第8号溝状遺構については、調査区西壁沿って幅約30cmのサブトレントを設定し、一部覆土の調査を実施した。溝の断面は逆台形を呈し、深さは75cmを測る。覆土にはロームブロックが多く混入しており、内黒土師器の小片が1点出土している。このことから当遺構の時期は平安時代以降と捉えられる。他にはI層から土師器や陶磁器類の小片が僅かに出土したのみである。



写真22 Y 28-①列トレント北部

A貝塚No.1トレント

トレントの設定と検出された遺構（第34図）

本トレントは、縄文時代の住居跡とA貝塚の台地縁辺部における在り方を調べる目的で設定された。調査区の平面形は、調査の進行にともなって拡張を繰り返したため複雑な形となっている。

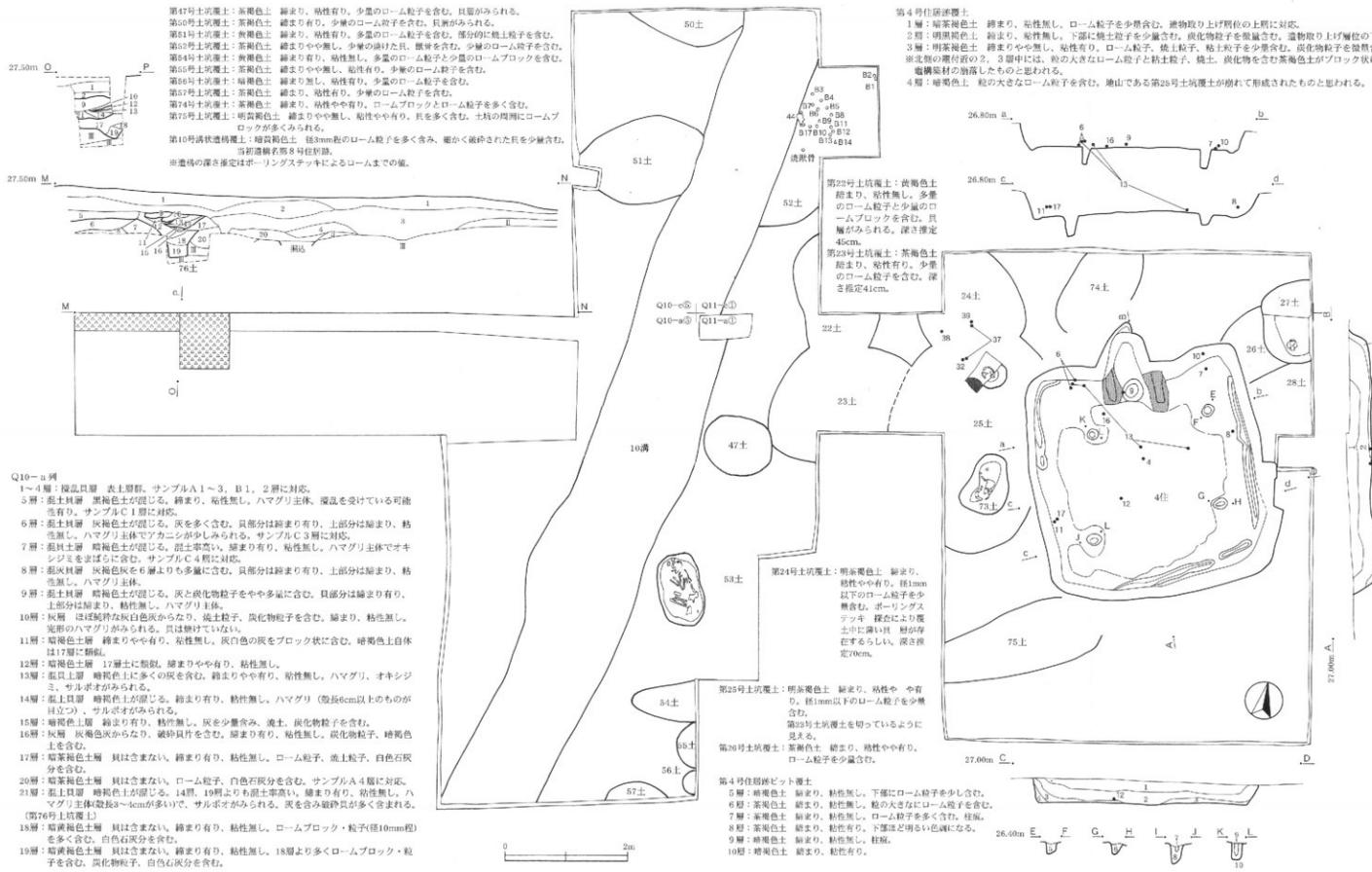
最初は、住居跡の確認を目的に、地下レーダー探査で反応が認められた、Q 11-a①～⑤グリッド（Q 11-a列）に、南北2m×東西10mの調査区を設定した。結果、西端のa①グリッドから住居跡と思われる遺構の一部が確認され（第8号）、その平面プランと、A貝塚の在り方を把握する目的で、西隣のQ 10-a①～⑤グリッド（Q 10-a列）まで調査区を延長した。

さらに、住居跡の南北方向の広がりを確認するため、調査区をQ 10-b～d④、Q 10-b～d⑤、Q 11-b①、P 10-d、e⑤、P 11-d、e①グリッドまで拡張したが、結局、第8号住居跡としたものは、南北に延びる溝状の痕跡（第10号溝状遺構と改称）であることが判明した。そのため住居跡調査の対象を、Q 11-a列で確認されていたもう1軒の住居跡（第4号）に変更し、北側のP 11-e③～⑤グリッドと、南側のQ 11-b～d列の③～⑤グリッドまで調査区を広げ、住居跡の全域調査を実施している。

大筋、以上のような経過をたどった調査区のうち、本書ではQ 11-a列と第4号住居跡のための拡張区を「東部」と、A貝塚の末端が確認されたQ 10-a列（a①～④グリッド）を「西部」と、その間の第10号溝状遺構に沿った拡張区を「中部」とそれぞれ呼称する。

なお、トレントの東西方向の地表面は、東端のQ 11-a⑤グリッドで標高26.80m、西端のQ 10-a①グリッドで標高27.50mを測り、若干西に向かって高度を上げる。南北方向では、北端のP 11-c①グリッドで標高26.95m、南端Q 10-d④グリッドで標高26.85mを測り、ほぼ平坦である。

東部では、厚さ約20cmの表土層（I層）下のII b層？上面で、古代の住居跡1軒（4号）と縄文時代後期の埋設土器4基（第73号新旧、第25号と第27号上坑の一部）、土坑9基（第22～28、74、75号）が検出された。中部では厚さ約20cmの表土層直下がローム層（III層）上面であ



第34図 A貝塚トレンチ実測図

り、その面で平安時代の上塙墓を含む土坑9基（第47, 50～57号）、溝状造構1条（第10号）を検出した。西部では、表層から貝を含んでいたため、表面を剥いた段階で全城の掘り下げを取りやめ、北壁に沿って幅約30cmのサブトレンチを設け、貝層の堆積・遺存状況を把握した。その結果、a①、a②グリッドから、攪乱を受けていない縄文時代中期前葉の貝層と土坑1基（第76号）が検出されている。

上記の造構群は基本的に平面プランの確認にとどめたが、第4号住居跡、埋設土器4基、第27, 53, 76号土坑については覆土の発掘を実施し、貝層についてはサンプル採取を実施している。また、覆土上面からまとまった遺物が検出された第24, 52号土坑については、その遺物の取り上げと記録をおこなった。



写真 23 A貝塚No.1 トレンチ中部

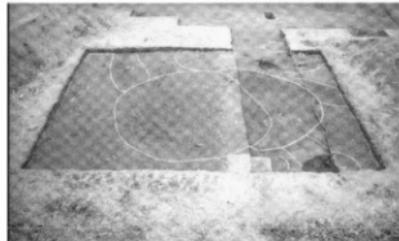


写真 24 A貝塚No.1 トレンチ西部

第4号住居跡

遺構の規模と形態（第34図） 本住居跡は、確認時に多くの縄文土器が検出されたため、当初は縄文時代を想定し、その構造を把握する目的で、覆土の発掘を実施した。しかし、調査中に竈を有する古代の住居跡であることが判明している。

Q 11-a③～⑤、b③～⑥、c③～⑤グリッドに位置する。東西3.8m、南北4.0mの隅丸方形の平面形を呈し、北壁中央に竈を有する。竈を通る主軸は北-20度-西を指し、壁の高さは約40cmを測る。方形に並ぶ深さ20～35cmの柱穴が4基検出され、柱穴の内側の床面は硬化していた。また、壁に沿って幅約20cm、深さ5cm程の周溝が断続的にめぐる。竈は焼道防壁より外に約70cm飛び出し、袖部は粘土混じりの土によって築かれている。焼部にあたる場所に焼土は認められなかったが、皿状の揮みが存在する。

覆土は上層の1層と下層の2～4層に分けられ、下層からは床面直上出土の須恵器壺（4）や甕（13）を含め、須恵器や土師器の大型破片、刀子などが検出されている。柱穴の覆土では、2基で柱痕部が認められた。

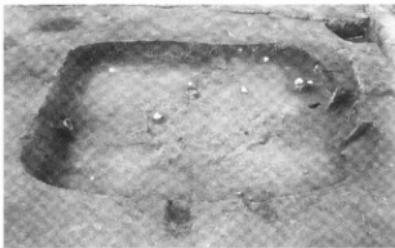
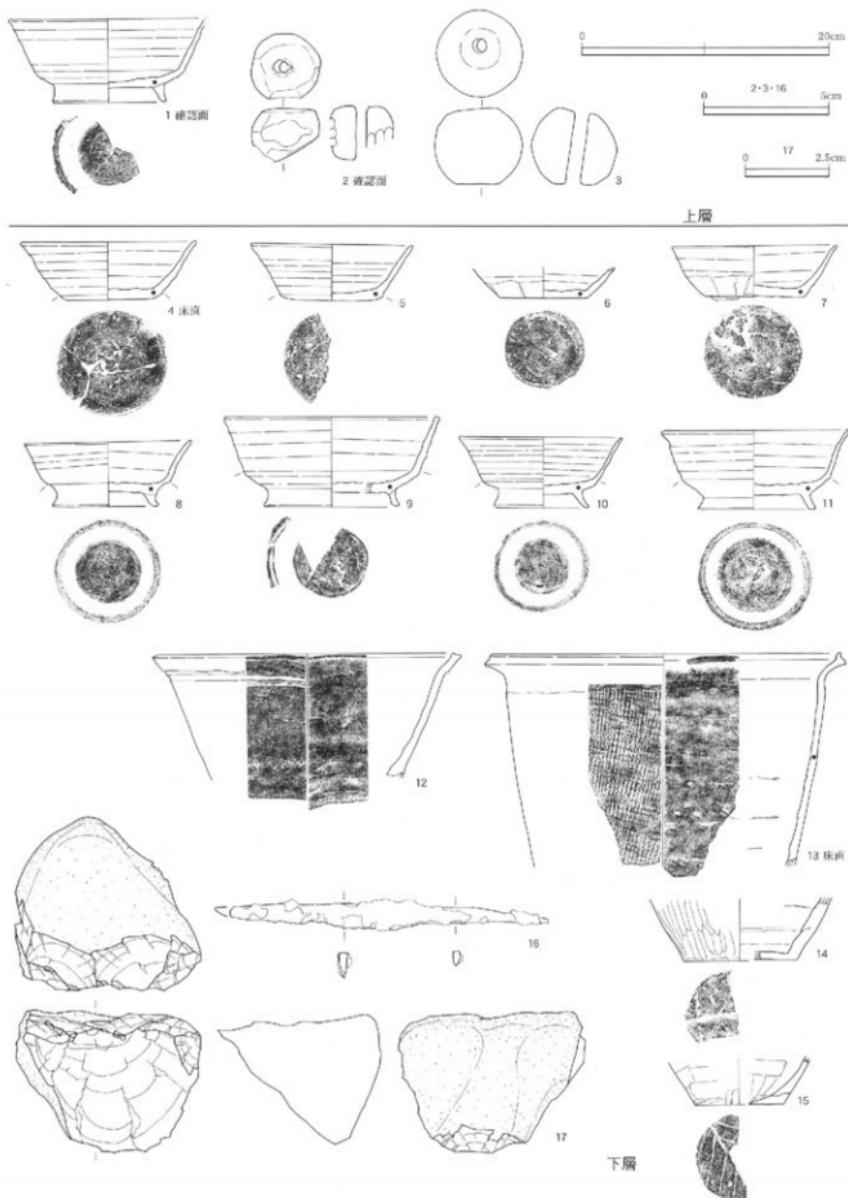


写真 25 第4号住居跡遺物出土状況



写真 26 第4号住居跡完掘状況



第35図 A貝塚No.1 トレンチ出土遺物（第4号住居跡）

出土遺物（第35図） 本住居跡内からは、土師器、須恵器、縄文土器、土器片錐、土偶、鉄製品、石器類が出土している。このうち縄文時代の土器、土器片錐、土偶と、石核を除く石器類は混入とみなされることから、遺構外出土遺物の項で扱う。

1～3は覆土上層出土遺物。1は須恵器の高台付窯で、底部は回転ヘラ削りによって整形されている。復元口径16cm、復元高台径9.2cm、器高6.8cm、残存率約1/3、淡灰色。胎土に白色粒子を含む。2、3は孔周辺に平面を有する球状の土錐。

4～17は下層及び床面直上出土遺物。4～7は輥輪成形の須恵器窯。4、5の底部は回転ヘラ切りの後、ナデ整形が体部下端にかけて施されている。6、7は体部下端に手持ちヘラ削りが認められ、底部は回転ヘラ切りの後、6には一回一方向の手持ちヘラ削りが、7にはナデ整形が施されている。

4：口径14.2cm、底径7.0cm、器高4.8cm、残存率約5/6、淡灰色。胎土に白色・透明粗粒、白色雲母粒を含む。

5：復元口径13.2cm、復元底径8.4cm、器高4.6cm、残存率約1/4、淡灰青色。胎土に白色・透明粗粒、白色雲母粒を含む。

6：底径7.2cm、残存率は図示範囲の約4/5、橙褐色。胎土に白色・透明粗粒、白色雲母白色粒を含む。

7：復元口径13.4cm、底径7.8cm、器高4.3cm、残存率約3/4、淡灰青色。胎土に白色・透明粗粒を含む。

8～11は輥輪成形の須恵器高台付窯。8、10の底部は回転ヘラ削りによって、9、11の底部はヘラ切り後、ナデによって整形されている。

8：口径13.5cm、高台径8.6cm、器高5.4cm、残存率約5/6、淡灰色。胎土に白色・透明粗粒、白色雲母粒を含む。

9：復元口径17.6cm、復元高台径11.1cm、器高7.4cm、残存率約1/3、暗橙褐色。胎土に白色・透明粗粒、白色雲母粒を含む。

10：口径13.2cm、高台径7.3cm、器高5.9cm、残存率約9/10、淡灰青色。胎土に白色粒子を含む。

11：口径17.6cm、高台径11.1cm、器高7.4cm、口縁の一部を欠く、灰青色。胎土に白色・透明粗粒、黑色粒子を含む。

12は土師器の鉢形土器。やや外屈する口縁部の外面には条線状の整形痕が、胴部外面には粗いヘラナデ整形痕

が認められる。口唇部から胴部にかけての内面にはヨコナデ整形が施されている。復元口径25.0cm、橙褐色を呈し、胎土に白色細粒を含む。残存率約2/5。13は須恵器の窯と思われる。外反する口唇部端が印溝み上げられ、やや膨らみを持つ胴部外面には格子の叩き目がみられる。復元口径は29.0cm、色調は橙褐色～暗褐色を呈し、残存率は図示範囲の約1/6。胎土に白色・透明粗粒、白色雲母粒を含む。14、15は土師器変形土器の底部破片で、両者とも底部に木葉痕を残し、胎土に白色・透明粗粒、白色雲母粒を含む。14は復元底径9.0cmで、胴部には磨きが施され、15は復元底径7.0cmで、胴部に削り整形が認められる。

16は鉄製品の刀子。17はメノウ製の石核で、打面の端部を剥離によって整え、一つの大きな作業面を残す。それ以外は自然面となっている。

以上の遺物のうち、4～6、8、9、13は、胎土に白色雲母粒を含むことから、新治窯跡群産の須恵器と思われる〔赤井・佐々木1996〕。

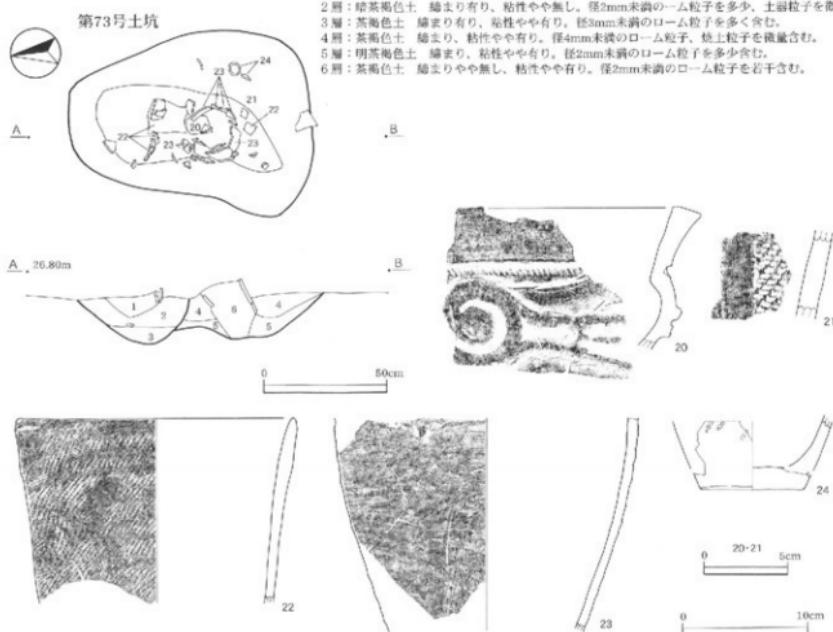
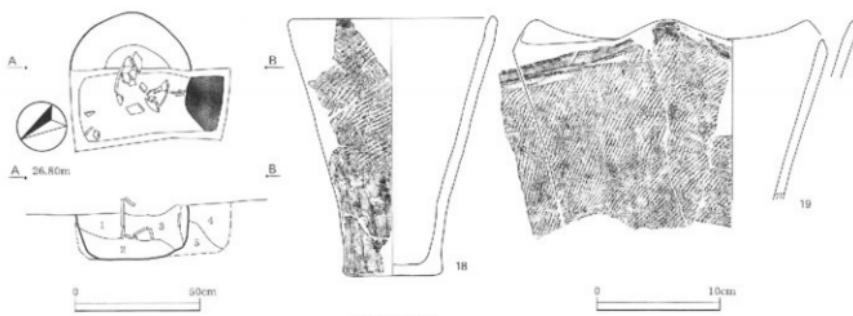
第25号土坑内の埋設土器（第36図）

遺構の規模と形態 本遺構はQ 11-a③グリッドに位置する第25号土坑の覆土上面において、縄文土器の埋設が確認されたもので、当初は土坑の一部と捉えていた。土器が半分かかるように、断ち割り調査を実施したところ、第25号土坑覆土中に掘り方方が設けられた別の遺構であることが明らかになった。

掘り方は径50cm、深さ20cmの円形を呈し、第25号土坑の埴土を多量に含む覆土（5層）を切るように掘り込まれていた。土器は掘り方底面に堆積する茶褐色土（2層）の上に設置されており、土器外部には暗茶褐色の充



写真27 第25号土坑土器埋設状況



第36図 A貝塚No.1 トレンチ検出遺構実測図及び出土遺物（第25・73号土坑）

埴土（1層）が、内部には明黒褐色土（3層）が堆積する。埋設された土器は破片に分かれており、接合の結果18, 19の2個体の土器に復元できた。ともに残存率は図示範囲の1/3程度であり、両土器の破片を組み合わせて円形に設置したものと思われる。両者とも埋設後の被熱の痕跡はみられない。

埋設土器 18は底部から口縁部へ直線的に開く器形をなし、口縁部から胴中部にかけてLRの縄文が施され、胴下部から底部にかけては、粗い撫で整形がみられる。復元口径17cm、底径8.0cm、器高21.2cm。19は3単位の綴い波状口縁を有する後期前葉の壠之内式土器で、胴下部以下を欠く。外削ぎ状の口唇部は撫でによる無文帶となっており、以下には無節Lの縄文が施されている。復元口径25cm。

第73号土坑（第36図）

遺構の規模と形態 本遺構は2基の埋設土器が重複したもので、Q11-b③グリッドに位置する。掘り方は第25号土坑の覆土を掘り込んでおり、2基あわせた長軸は98cm、短軸は75cmを測る。北側の新しい埋設土器の掘り方は、古い埋設土器の充填土を切る形で掘り込まれており、深さは20cmを測る。埋設された22の土器は茶褐色系土の覆土（2, 3層）中に設置され、土器の内部にあたる部分には明黒褐色土の1層がみられた。22の残存率は図示範囲の1/3程度で、全周しない。すでに検出時点で破片に割れており、位置が動いている破片もみられたことから、後世の攪乱を受けている可能性が高い。

南側の古い埋設土器の掘り方は深さ約18cmの皿状を呈し、底面に接して23の土器をやや傾けて設置していた。土器の周囲には4, 5層とした茶褐色系土が充填され、



写真28 第73号土坑土器埋設状況

土器の内部にはやや縮まりの無い茶褐色土（6層）が堆積する。23も破片に割れており、接合復元の結果、欠損部が多く認められた。

なお、20～21、24などの破片も掘り方内から検出されているが、これらは第25号土坑に包含されていたものが混入したものと思われる。

埋設及び出土土器 20～24は縄文土器。20は中期中葉の破片で、外肩する無文の口縁部の下位には、楔形の押し引き文を挟んで、隆線による文様が描かれている。21はR Lの縄文部と磨消部がみられる中期後葉の加曾利E式土器で、24の径6.1cmを測る底部も同時期のものと思われる。

22はLRの縄文が施された、直線的に開く深鉢形土器で、胴下部以下を欠く。復元口径23cm。後期前葉の土器と思われる。23は口縁部と底部を欠く土器で、口縁部側は擬口縁をなす。外面には横方向の粗い撫でが施されている。復元胴部最大径25cm。

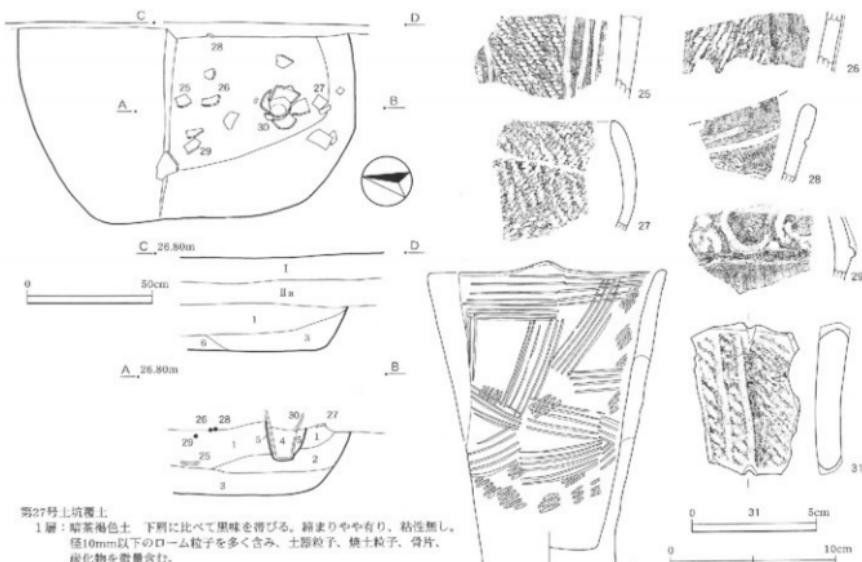
第27号土坑と埋設土器（第37図）

遺構の規模と形態 本遺構は土坑と埋設土器が重複したもので、Q11-a⑤グリッドに位置する。土坑の南西部は第26、28号土坑の覆土を掘り込んでおり、東側は調査区外に続く。確認できた南北長は1.35mを測る。土坑の確認面はa⑤グリッド付近にのみ存在していたIIa層下面で、平坦な底面までの深さは30cmを測る。覆土は3層に分かれ、上位の1層から確認面にかけて25～29の縄文時代中期後葉から後期前葉までの土器破片が出土している。後述する埋設土器の時期も考慮すると、本土坑の時期は縄文時代後期前葉以前が想定される。

埋設土器は、縄文時代後期前葉・壠之内式に該当す



写真29 第27号土坑土器埋設状況



第27号土坑覆土

1層：暗茶褐色土 下層に比べて黒味を帯びる。縮まりやや有り、粘性無し。
径10mm以下のローム粒子を多く含み、土砂粒子、燒土粒子、骨片、
炭化物を微量含む。

2層：暗茶褐色土 縮まり有り、粘性無し。径2~3mmのローム粒子を含み、
土砂粒子、炭化物も微量含む。

3層：暗茶褐色土 上層に比べて明るい色調をなし、縮まりが無い。粘性無し。径2mm
以下のローム粒子を含み、土砂粒子、炭化物も僅かに含む。

埋設土器覆土
4層：明黒褐色土 縮まり、粘性無し。径2mm以下のローム粒子を少々含む。

5層：暗茶褐色土 1層と同質だが、やや縮まりに欠ける。

第37図 A貝塚No.1 トレンチ検出遺構実測図及び出土遺物（第27号土坑）

る30の土器を、土坑の1, 2層中に正位の状態で埋設したもので、掘り方は径・深さとも17cm程度で、土器ぎりぎりに掘られている。土器の底面は掘り方の底面に接し、土器側面と掘り方との隙間にやや縮まりの無い暗茶褐色土（5層）が堆積する。一方、土器内には5層とは異なる明黒褐色土（4層）が堆積していた。なお、土器の口縁部は確認面より出ており、実際の掘り込み面はIIa層中と思われる。

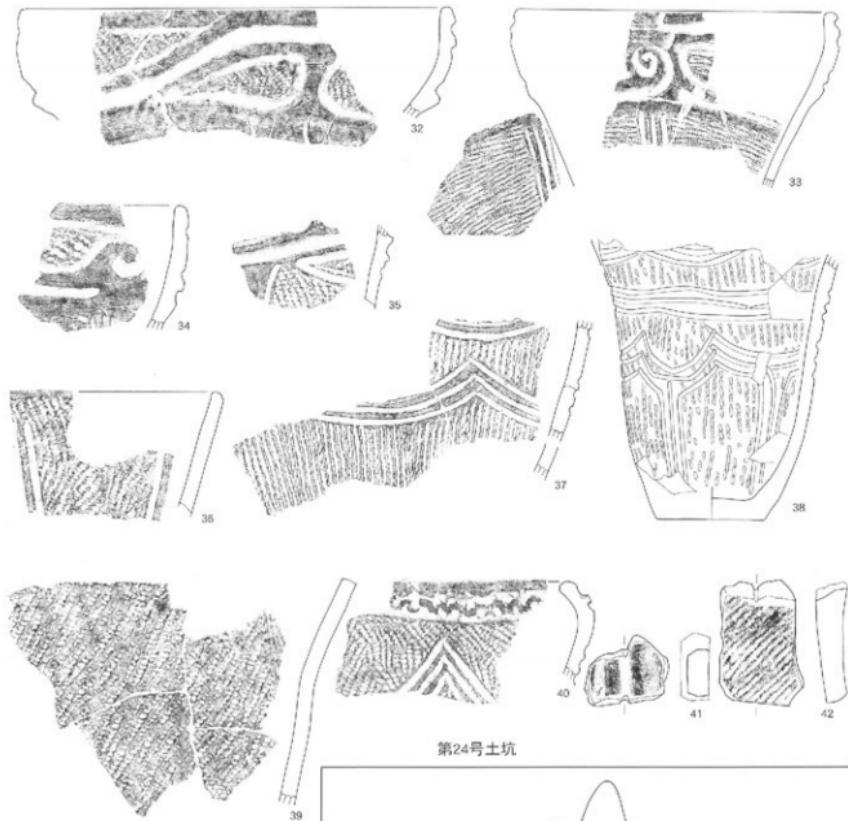
埋設及び出土土器 25~27は加曾利E式土器で、25にはL R Lの複節縄文と間を磨消した懸垂沈線が認められる。26はR Lの縄文部と無文部が微隆起線で区画された加曾利E IV式土器。27の縄文はR L。28は沈線間に櫛齒状工具による刺突が施された後期初頭の称名寺II式土器。29は降線とそれに沿った沈線で文様が描かれた、後期前葉・堀之内1式の壺形もしくは注口土器の破片。

埋設土器の30は底部から直線的に開く器形を呈し、口縁に突起が付く。L Rの縄文を地文に、6本齒の櫛齒状工具による集合沈線で文様を描いている。復元口径14.6cm、底径8.2cm、器高18.3cm、口縁~胴部の1/3程を欠く。後期前葉の堀之内1式土器。

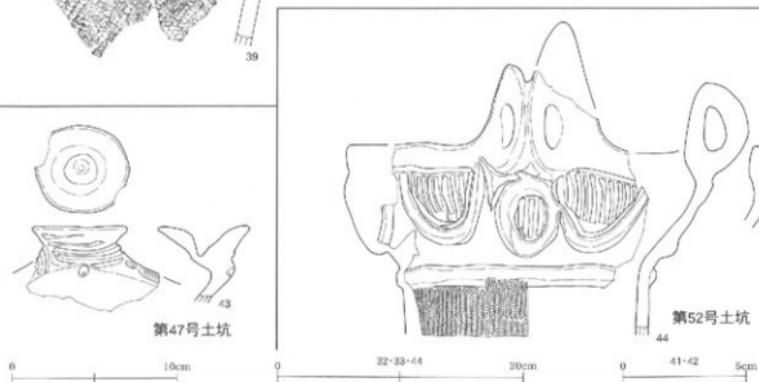
31は縄文地に単沈線が施された堀之内1式土器の破片を用いた土器片鍾。

第24号土坑

遺構の規模と形態（第34図） 本遺構はP 11~e②、③及びQ 11-a②。③グリッドに位置し、北部は調査区外にかかり、南部は第25号土坑と重複する。平面形は短軸1.7m程の橢円形を呈するらしい。覆土の発掘はおこなっていないが、確認面（=覆土上面）から縄文中期後葉の加曾利E II式に該当する大型破片が集中して検出



第24号土坑



第38図 A貝塚No.1 トレンチ検出遺構出土遺物（第24・47・52号土坑）



写真 30 第 24 号土坑土器出土状況

されており、土坑の時期も当該期以前が想定される。

確認面出土遺物（第 38 図）32～35 は口縁部に幅広の隆線と沈線によって渦巻きや枠状の文様が描かれた加曾利 E II 式と思われるもので、33、35 の縄文が施された胴部には、間が磨消された懸垂沈線がみられる。36 は口縁部文様帯が省略され、間が磨消された懸垂沈線だけが施されている。縄文は 32、33、36 が R L、34、35 が複節 LRL。復元できた口径は 32 が 34.6cm、33 が 25.6cm。37、38、40 はいわゆる連弧文土器で、いずれも 3 条を単位とする沈線で弧状のモチーフが描かれ、40 の口縁には交互刺突による小波状文もみられる。地文は 37 が L を用いた燃糸文、38 が R を用いた燃糸文、40 が単節 RL で、いずれも沈線間の地文は磨り消されている。38 の底部径は 6.5cm で、残存率は図示範囲の約 1/2。39 は R L の縄文が施された胴部破片。41、42 も覆土上面から出土した土器片錠で、41 には隆線が、42 には L R の縄文がみられる。

第 52 号土坑

遺構の規模と形態（第 34 図）本遺構は P 11-d ①、②、e ①、e ② グリッドに位置し、東部は調査区外にかかり、西部は第 10 号溝状遺構に接されている。覆土の発掘はおこなっていないが、確認面（= 覆土上面）から人骨・獣骨・鳥骨・魚骨・貝類と、縄文時代中期中葉の土器大型破片（44）が検出されている。骨類は骨格が揃っているものは無く、単一の部位や破片の状態で出土し、種も様々なものが混在していた。土坑の時期は 44 の土器から、中期中葉が想定される。

確認面出土遺物（第 34、38 図）第 34 図の B 番号が付された○及び△印は、骨類及び貝類の出土位置を示す。

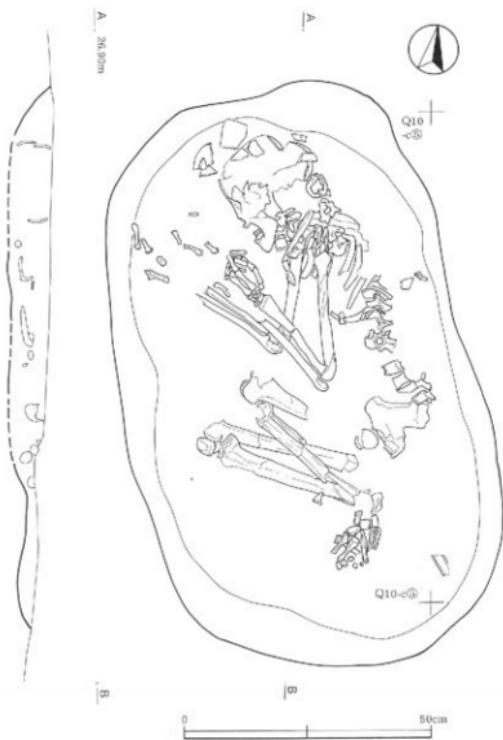
これらについては、橋泉岳二氏による同定結果を以下に記す。

- B 1：イノシシ 上腕骨 L 骨幹・未癒合骨端（遠位端）脱落 若齢
B 2：イノシシ 下頸骨 I2 L
B 3：哺乳類・同定不可 部位不明（長骨）幼
B 4：ノウサギ 下頸骨 L
B 5：哺乳類・同定不可 肋骨？ 破片
B 6：哺乳類・同定不可 破片
B 7：ヒト？ 部位不明（長骨）骨幹 2 点
B 8：鳥類？・同定不可 部位不明（長骨）骨幹
B 9：貝
B 10：イノシシ／シカ 椎骨 軸突起
B 11：哺乳類・同定不可 頭蓋骨 破片
B 12：哺乳類・同定不可 部位不明（長骨）骨幹 若
B 13：イノシシ 肩甲骨 L 肩甲棘 被熱
B 14：ハマグリ右殻 被熱
B 17：哺乳類・同定不可 部位不明 破片
一括：クロダイ属 第 2 脊鱗棘
一括：哺乳類・同定不可 部位不明（長骨）骨幹
一括：ヒト 下頸骨 破片 若齢
一括：ヒト？ 頭蓋骨 破片
一括：イタヤガイ？ 化石か？

第 38 図 44 は中期中葉の土器で、器形はキャリバー形を呈し、孔が開いた眼鏡状の把手が口縁に付く。隆帯で胴部と区切られた口縁部には、隆帯で枠状の区画が設けられ、その中に縦位の沈線を充填している。胴部には隆帯区画施文後に、R L の縄文を条か継に並ぶように施文している。ただし、施文単位が不明瞭なため、原体は軸に L を巻いた単軸絡条体の可能性もある。復元口径 29cm。



写真 31 第 52 号土坑土器出土状況



第39図 A貝塚No.1 レンチ検出遺構実測図（第53号土壌）

第53号土壌（第39図）

調査の経過 埋葬人骨が検出された本土壌は、現地で人骨のクリーニングをある程度実施し記録を採った後、獨協医科大学（当時）の馬場悠男氏の指導のもと、発泡ウレタンを用いて土壌ごと取り上げている。その後、室内で再度人骨のクリーニングと詳細な実測をおこない、分析のために、部位を記録しながら人骨を取り上げた。第39図に示した実測図は、断面図と遺構の平面形についてでは現地で記録したものであり、人骨については土壌取り上げ後再実測した図を合成している。

遺構の規模と形態 本遺構はQ 10-c⑤グリッドに位置する。土壌は長軸2.4m、短軸1.45mの楕円形の平面



写真32 第53号土壌人骨検出状況



写真33 第53号土壌取り上げ風景

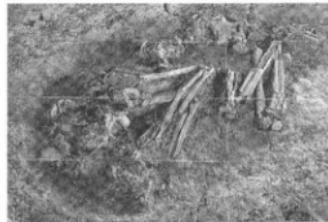


写真34 第53号土壌人骨クリーニング時状況

形を呈し、深さは約18cmで、断面形は皿状をなす。覆土は暗茶褐色の單一土で、地山であるⅢ層起源と思われるロームブロックを多く含むことから、人為的な埋め戻し土とも捉えられる。

検出された人骨 人骨は部分的に欠損している部位や箇所もあったが、ほぼ全身骨格が遺存しており、土壌底面直上に横臥屈葬の形で埋葬されていた。頭位は北-35度-西で、顔面は南西方向を向く。土壌の覆土中から縄文土器の小片が出土壤したため、当初は縄文時代の人骨と捉えていたが、馬場悠男氏・梶ヶ山真里氏による形態的分析の結果、古墳時代以降の人骨の特徴に合致する壮年後期～熟年の女性であると判断された。米田穂氏による

放射性炭素法による年代測定でも、約900年前（紀元11～12世紀）という年代が得られたため、当人骨と土壌の時期を平安時代と捉える。以上の人骨の分析結果の詳細は[馬場・梶ヶ山・米田2009]を参照されたい。

その他の遺構

第47号土坑 第38図の43は第47号土坑の確認面から検出された、縄文時代後期前葉・堀之内1式の鉢形土器の把手部である。円盤状の把手部から口唇部にかけて沈線や刺突が施されている。

第51号土坑 第51号土坑の確認面からは、図示しなかつたが、太沈線文と細沈線文及びD字状の刺突文が施された、縄文時代早期中葉・田戸下層式土器の小片が出土している。

第10号溝状遺構 中部に位置する本遺構は、現在地表に敷設されている道路にはば沿う形で検出されたもので、1.4m～1.85mの幅を持ち、南北方向は調査区外まで延びている。Q11-a①グリッドの北西隅にサブトレーンチを設定し調査したところ、垂直に立ち上がる東壁とともに、覆土中からビニール製品が検出され、現代の擾乱もしくは既掘坑であることが明らかになった。深さは未調査。

A貝塚の貝層（A貝塚No.1トレーニング西部・Q10-a列）

貝層の堆積（第34図） A貝塚の貝層の発掘は、西部のQ10-a列の北壁に沿って設定されたサブトレーンチと、a①とa②グリッドにまたがって1×1mの範囲で設定した深掘拡張において実施した。掘り出された貝層は、基本的に全てサンプルとして取り上げたが、取り上げ層位と、断面観察による最終的な層位とは、全て対応するわけではない。平面的な取り上げ区分としては、サブトレーンチでは小グリッド内をさらに東西各1mに分け、拡張区はひとつの単位としている。

表層には1～4層とした破碎貝を含む搅乱層が該当する。東部のa③、a④グリッドでは、搅乱層直下がローム層（Ⅲ層）となるが、部分的にⅢ層への漸移層であるⅡ層が薄く存在する。a②グリッド以西では、Ⅱ層とⅢ層は深くなり、搅乱層下には搅乱を受けていない貝層や土層の堆積が認められた。西端のa①グリッドでは搅乱貝層の可能性がある5層を挟んで6～8層としたハマグリを主体とする貝層が堆積し、a②グリッドの搅乱層下

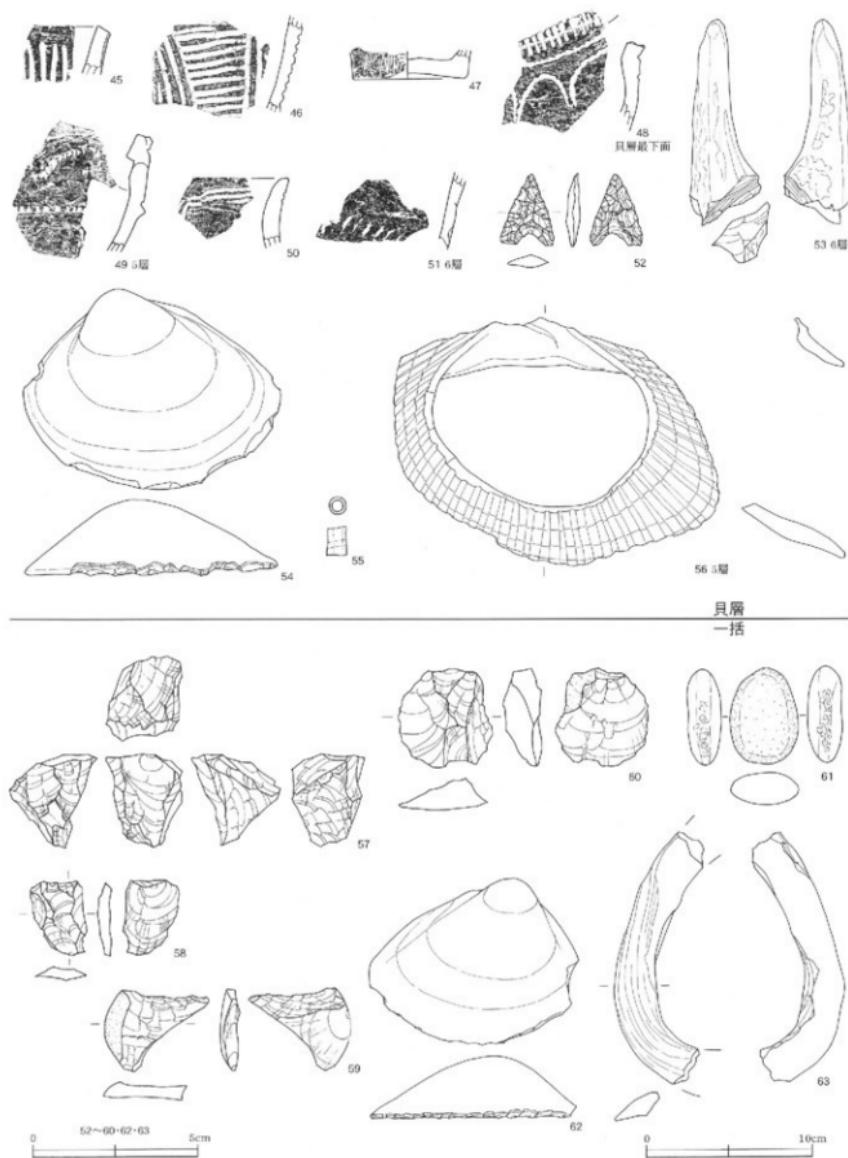
には、20層とした貝を含まない暗茶褐色土層がⅡ層の上位に認められた。a①とa②グリッドの境に位置する拡張区では、これら6～8層と20層を切って、土坑（第76号）が掘られており、その覆土上位の凹みに、ハマグリ主体の貝層と灰を含むブロック状の土層群（9～16、21層）が互層になって堆積していた。第76号土坑は径35cmの平らな底面からラッパ状に開く断面形態を呈し、最深70cmを測る。貝層からは、最も新しい土器として、第40図48、50、51といった縄文時代中期前葉の阿玉台I b式や同II式の破片が出土しており、貝層も当該期に形成された可能性が高い。

西部のQ10-a列から出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、土器片錐、土製円盤、石礫、石核、磨石、敲石、両極打法の剥離痕を残す石片、剥片碎片、骨角器、貝製品であるが、ここでは貝層出土遺物と、一括出土遺物（搅乱貝層等から出土した遺物）に分けて記述する。

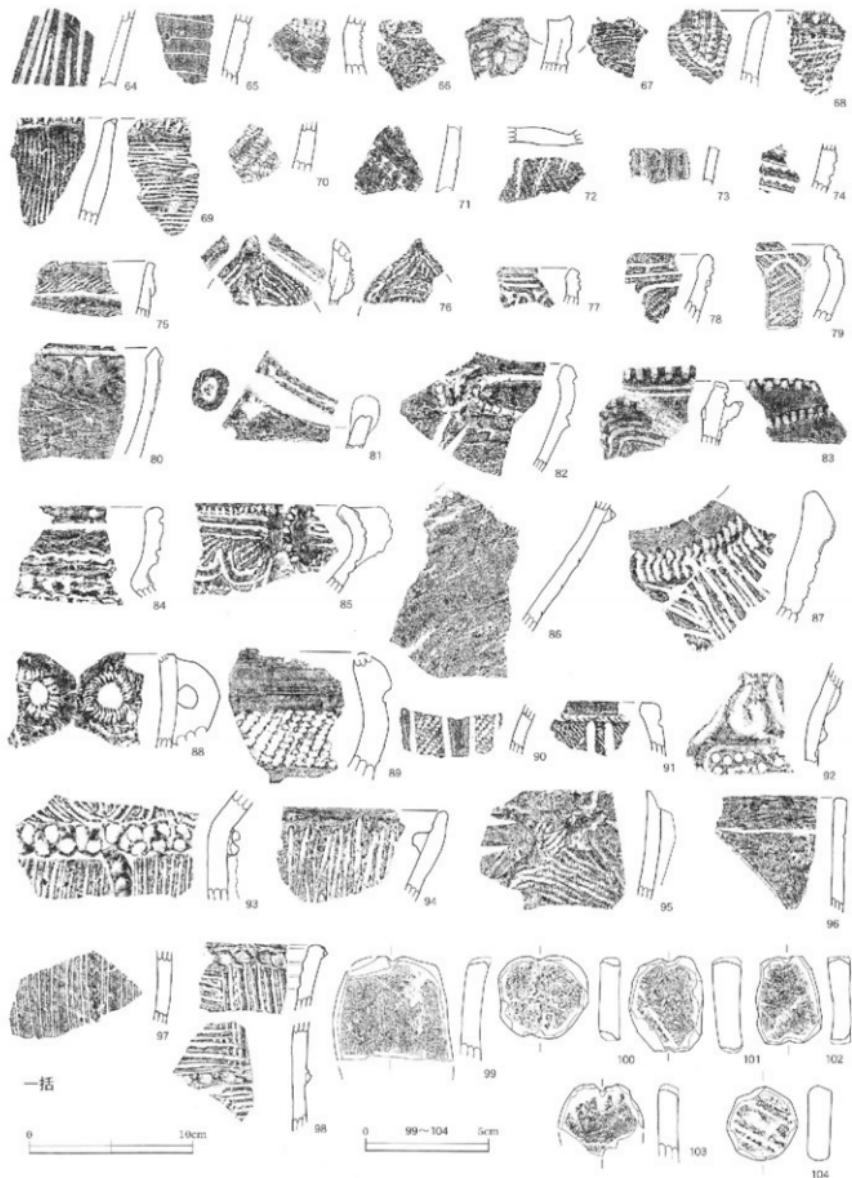
貝層出土遺物（第40図）45～51は縄文土器。45、46は太沈線文が施された早期中葉の田戸下層式土器。47は半截竹管状工具による平行沈線で縦長の格子状の文様が描かれた前期前葉の土器。胎土に纖維を含む。48は1列の角押文が施された中期前葉の阿玉台I b式土器。49も1列の角押文が施されているが、口縁が収支をなし口縁内面に貼付文がみられることから、中期初頭の阿玉台I a式土器に該当する。50は2列同時施文の角押文が施された中期前葉の阿玉台II式土器。51は刻目文がみられる阿玉台式の胴部破片。52はチャート製の凹基無茎燧。53は切断痕のある鹿角で、擦切りの後、打削している。54はハマグリ製の貝刀で、前背縁寄りを除く腹縁に刃が付けられている。55はツノガイの分割品だが、加工痕は明確でない。56はサトウガイ製の貝輪未成品で、研磨は



写真35 A貝塚No.1トレーニング西部・Q10-a列



第40図 A貝塚No.1 トレンチ西部 (Q 10-a列) 出土遺物 (貝層・一括)



第41図 A貝塚No.1 トレンチ西部 (Q 10-a列) 出土遺物 (一括)

みられない。

西部一括出土遺物（第 40、41 図）57 は角錐状の黒曜石製石核で、打面を転移しながら剥離を繰り返している。58 と 59 は両極打法の剥離痕を残す石片。黒曜石製の 58 は上端に細かい剥離痕を残し、裏のネガティブ面が最終剥離面となる。安山岩製の 59 は上縁に細かい剥離痕を残すが、側面の礫面を打面とする裏の剥離面はネガティブであり、分割した小礫を素材としたことをうかがわせる。また、折れは下端を打点とすることから両極打撃時に生じたものか。60 は黒曜石製の剥片。61 は楕円形の二側縁に敲打痕がみられる敲石。62 はハマグリ製の貝刃で、腹縁全体に刃が付けられている。63 はイタボガキ製の貝輪破損品で、研磨が施されている。

64～98 は縄文土器。64、65 は太沈線文と細沈線文がそれぞれ施された早期中葉の田戸下層式土器。66～70 は胎土に纖維を含む早期後葉の条痕文系土器。軸にしを巻いた絡条体の侧面压痕がみられる 70 は子母口式か。66 は格子口沈線に、刺突列と円形刺突を加えた鶴ヶ島台式土器。67、68 は角状の刺突列でモチーフを描いており、茅山下層式と思われる。71、72 は胎土に纖維を含む前期前葉の土器。71 には半截竹管状工具による押引文がみられ、72 の底部には貝殻復縁文が施されている。73 は波状貝殻文が、74 は三角文が施された前期後葉の浮島式土器。75 は口縁に輪積痕を残し、無飾の縄文が施されている。76 は口唇が内側に肥厚する口縁部破片で、波頂下に貼付文がみられ、内外面にベン先状工具による連続刺突文が施されている。75 とともに前期末葉の土器か。

77～79 は縄文地に文様を描く、中期初頭の五頭ヶ台Ⅱ式土器で、77 と 79 は沈線と三角形の彫刻文で、78 は角押文で装飾されている。78、79 の縄文は R L。80～82 も中期初頭の上器。80 は無地の土器の口縁部に三角形の彫刻文が施されたもので、阿玉台式直前段階に、I 列の角押文がみられ、又状の口縁が想定される。81、82 は阿玉台 I a 式に該当しよう。82 には粘土棒を芯とする突起もみられる。83～85 は施文単位 1 列の角押文が施された中期前葉の阿玉台 I b 式土器。85 は半截竹管状工具による平行沈線で区画文やモチーフを描き、その間に角押文を充填している。86～88、91 は中期中葉の土器で、86 には刻みの付いた隆線が施され、88 は刻みのついた円環状の把手である。89 は隆帯状の口縁に沿って爪形列が施された

阿玉台Ⅲ式土器で、沈線文もみられる。91 は内傾し肥厚する口縁を呈し、L R の縄文地にベン先状の連続刺突文と沈線文が施されている。

89、90、92、95 は中期後葉の加曾利 E 式土器。縄文は 89 が複節 R L R、90、95 が R L で、微降起線で区画された中に縄文を施した。95 は加曾利 E IV 式に相当する。口縁部から胴部にかけて太い条線を施す 93、94 は加曾利 E 式に併行する曾利式系の土器。93 では条線上に貼付けた隆線に交互押捺を加え、94 の口縁内面には峰帶がめぐる。96 は 4 本歯の櫛描文上に単沈線を施した後期の土器。97 は無地上に平行沈線でモチーフを描いた。後期前葉の堀之内 2 式土器。98 は縄文地に押捺を加えた紐線と平行沈線を施した後期中葉の粗製土器。

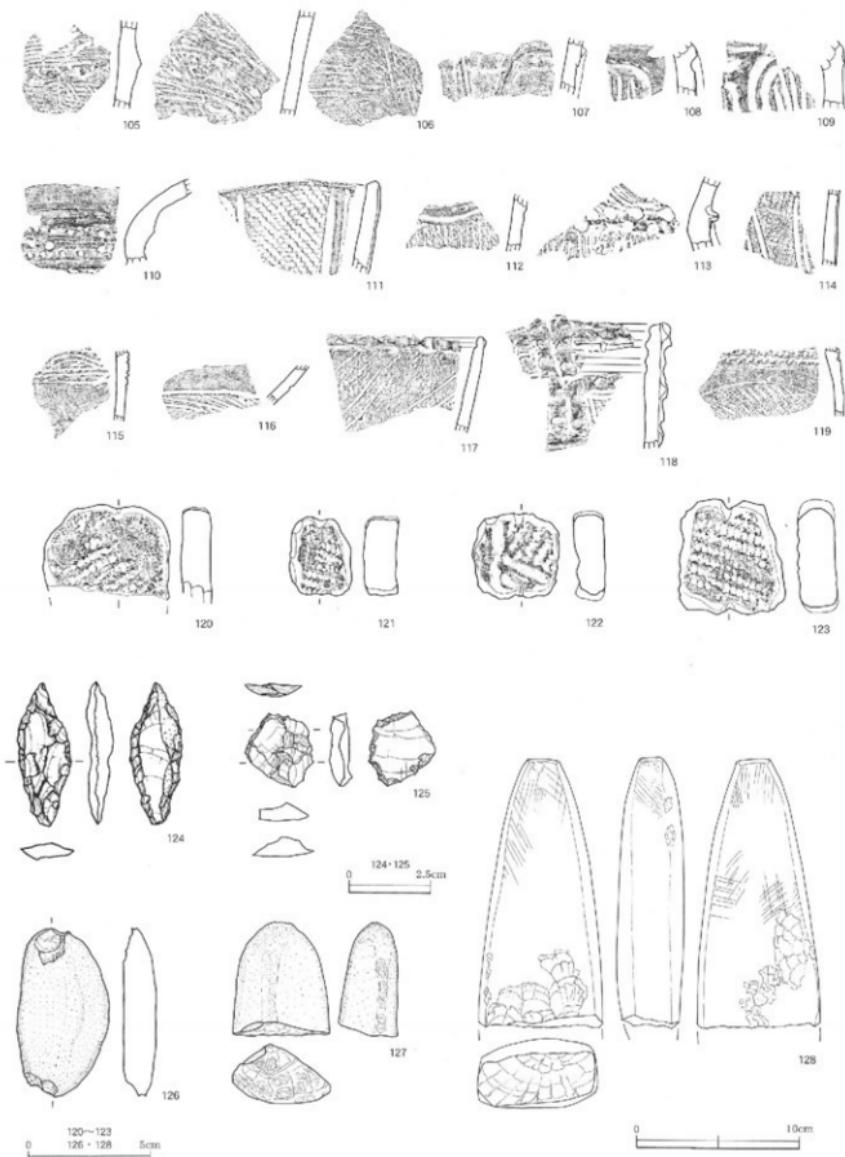
99～103 は土器片鉢で、99、102、103 には外面に輪積痕が、101 には波状文がみられる。104 は上型円盤で、細い沈線と刺突が施された土器を素材とする。

A 哉塚 No. 1 トレンチ中部出土遺物（第 42 図）

ここでは中部の表上層から出土した遺物を報告する。出土したのは、旧石器時代の槍先形尖頭器、縄文土器、土師器、土器片鉢、磨製石斧、敲石、石錘？、二次加工痕のある剥片、剥片碎片である。

105～119 は縄文土器。105、106 は胎土に纖維を含む早期後葉の条痕文系土器。105 の隆起線には刻みが付く。断面三角形の隆起線と輪積痕がみられる 107 は中期の阿玉台式土器。円形の刺突文が施された 110 は中期中葉の土器か。108、109、111、112 は中期後葉の加曾利 E 式土器。108、109 は降線による区画内に沈線を充填し、複節 L R L が施された 111 は、口縁部から間が磨消された懸垂沈線がみられる。112 は R を用いた櫛描文地に連弧状の文様が描かれる。曾利式系土器の 113 は、第 41 図 93 と同一個体か。縄文地に沈線が施された 114、115 は後期前葉の帆之内式土器で、単沈線で描かれた 114 は I 式に、平行沈線で描かれた 115 は 2 式に相当する。116～118 は後期中葉のもので、斜縞文がみられる 116 は加曾利 B 式である。縄文地に押捺を加えた紐線と沈線を施した 117 と 118 は粗製土器で、117 の沈線は半截竹管状工具による。列点と R L を用いた磨消縄文がみられる 119 は、後期後葉の安行 1 式の胴部破片か。

120～123 は縄文が施された土器片鉢で、112 には沈線



第42図 A貝塚No.1 トレンチ中部出土遺物

で区切られた磨消部が認められる。124は表上から出土した旧石器時代の槍先形尖頭器。一側縁に櫛面を残す安山岩製の縦長剥片を素材とし、周縁には両面から調整剥離を加えている。125は折断された剥片の一側縁に細かい剥離が認められる石器。126は扁平椎円盤の長軸両端の片面に剥離痕がみられるもので、石錐か。127は断面三角形の礫を分割した敲石で、礫面の稜部と分割面に敲打痕が残る。128は刃部を欠損する磨製石斧、全面に研磨が施され、平坦な側面との境は明瞭な稜をなす。この石斧には白色塗料で注記らしき記号が記されており、過去の調査時に遺棄された可能性がある。既掘坑とも思われる第10号溝状遺構と関係があるのかも知れない。

A貝塚No.1 トレント東部出土遺物 (第43～45回)

ここでは東部の表土層出土遺物と、第4号住居跡出土の縄文時代の遺物について報告する。該当する遺物は、縄文土器、土偶、土器片錐、土製円盤、有孔円盤、打製石斧?、敲石、両極打法の剥離痕を残す石片、剥片碎片である。

129～183は縄文土器。129は太沈線文が施された早期中葉の田戸下層式土器。131、132は条底文が施され、胎土に纖維を含む早期後葉の鶴ヶ島台式土器。131は細隆線と半截竹管状工具による平行沈線で区画された中に、同工具による平行刺突列を充填している。132は單沈線による区画内に縁分を充填する。両者の区画交点には円形刺突文もみられる。

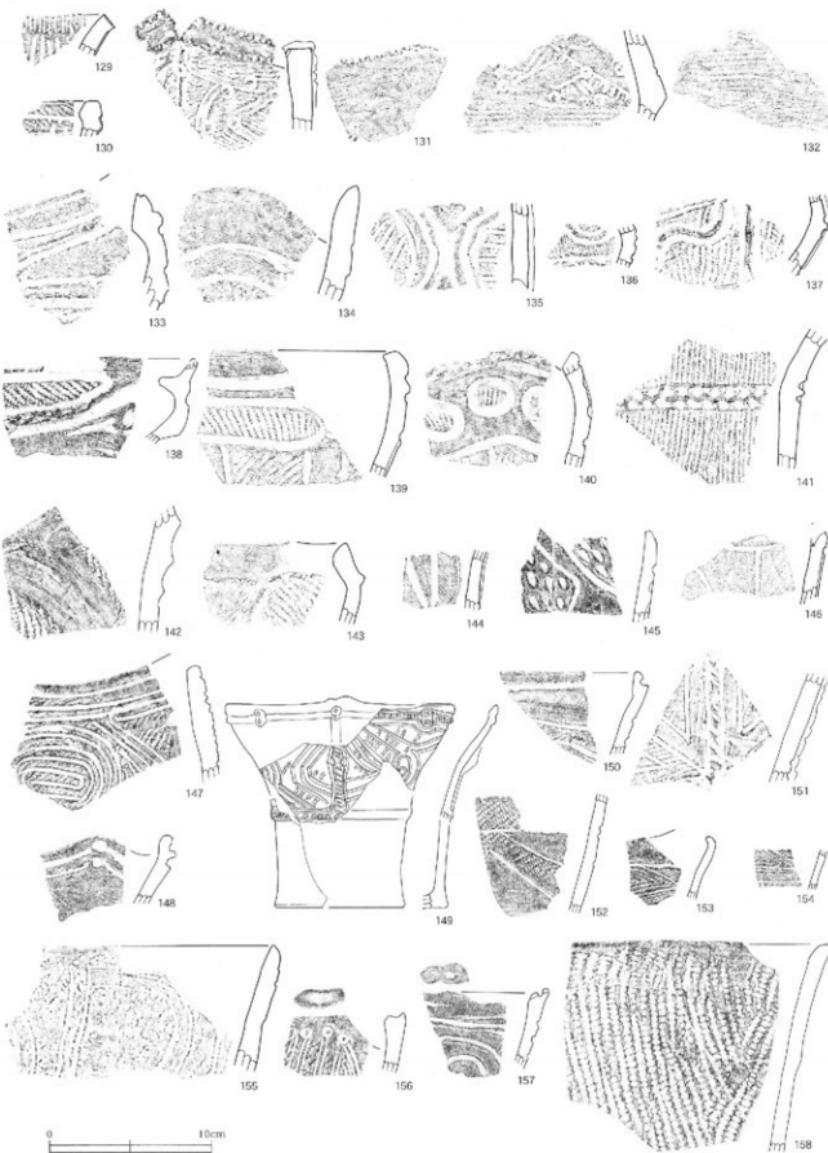
130は縄文地に縦衝状文を描く、中期初頭の五領ヶ台II式土器。133は隆起線に沿って1列の角押文が施された中期前葉の阿玉台I b式土器。134～136は中期中葉の土器。134は隆起線に沈線を付随させた阿玉台IV式で、135には沈線で分割された隆線を用いた区画内に沈線が充填される。136は条線地に交互刺突による小波状文と沈線文がみられる中葉式土器。137～143は中期後葉の加曾利II式土器。口縁部に隆線でモチーフを描く137はI式に、脣部に磨消縄文帯を有する139はII式に、口縁部文様帯が略された140と、縄文間に微隆起線でモチーフを描く142はIII式に、微隆起線で縄文部と無文部を区画した143はIV式に相当する。縄文は137、143がLR、138～140がRL、141がRを用いた撲糸文である。

144～146は後期初頭の称名寺式土器。沈線間にLRの

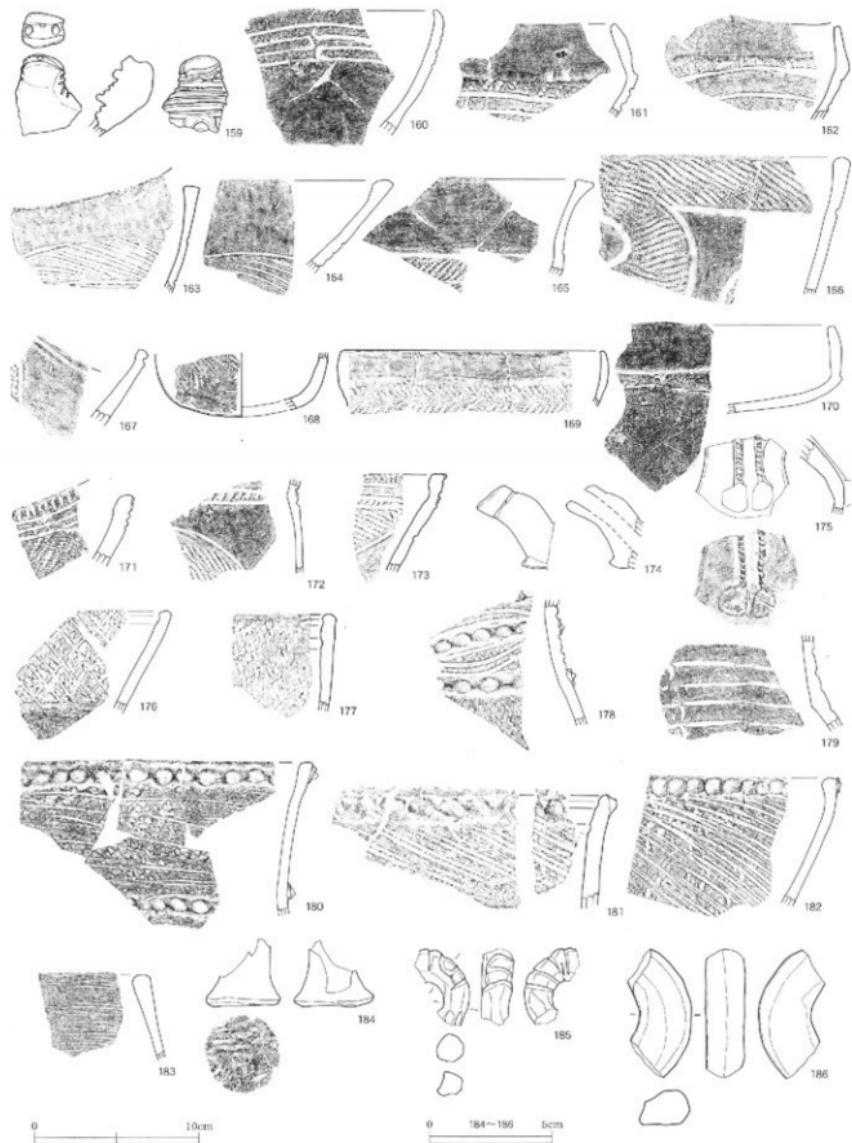
縄文を充填した144はI式に、列点を配した145、146はII式に該当する。147～157は後期前葉の堀之内式土器。縄文地に単沈線で文様が描かれた147、149や、口縁部に沈線や刺突による文様帯を有する148、149はI式に、沈線間に施された細文帯でモチーフを描く150～154や、縄文地に平行沈線で文様を描く155、156は2式に該当する。刻みの付いた隆線区画を有する149は、復元口径14.2cm、底径8.0cm、器高12.4cmである。152、153は同一個体で、149～154の縄文はLR。158はLRの縄文が施された土器。

159～182は後期中葉の上器。159は加曾利B式の突起部。平行線状の磨消縄文と区切り文がみられる鉢形上器の160～162や、斜線文が配された163、164、帯状の磨消縄文が施された165、166は加曾利B式に相当する。167～170は鉢形土器で、167には縦位の磨消縄文帯が、169にはRLの原体を回転方向を進めて表出した羽状縄文がみられる。171～173は沈線間に刻みを加えた文様と、磨消縄文部が認められる破片で、口縁部が内屈する173は曾谷式に相当する。174は注口土器の注口部。175は香炉形土器の破片で、U字状の把手部の剥離痕が認められる。176～182は粗製土器で、176は縄文地に格子目文が施され、178、180～182は縄文地に押捺を加えた縦線と沈線が施されている。179は重層する沈線と区切り文を持つ臺形の土器で、178とともに遠部第三類に該当する。縄文は、161、165がLR、162、166、168、171～173、176がRL。180は削厚、内傾する口縁部に条線が施された破片で、晩期の粗製土器と思われる。

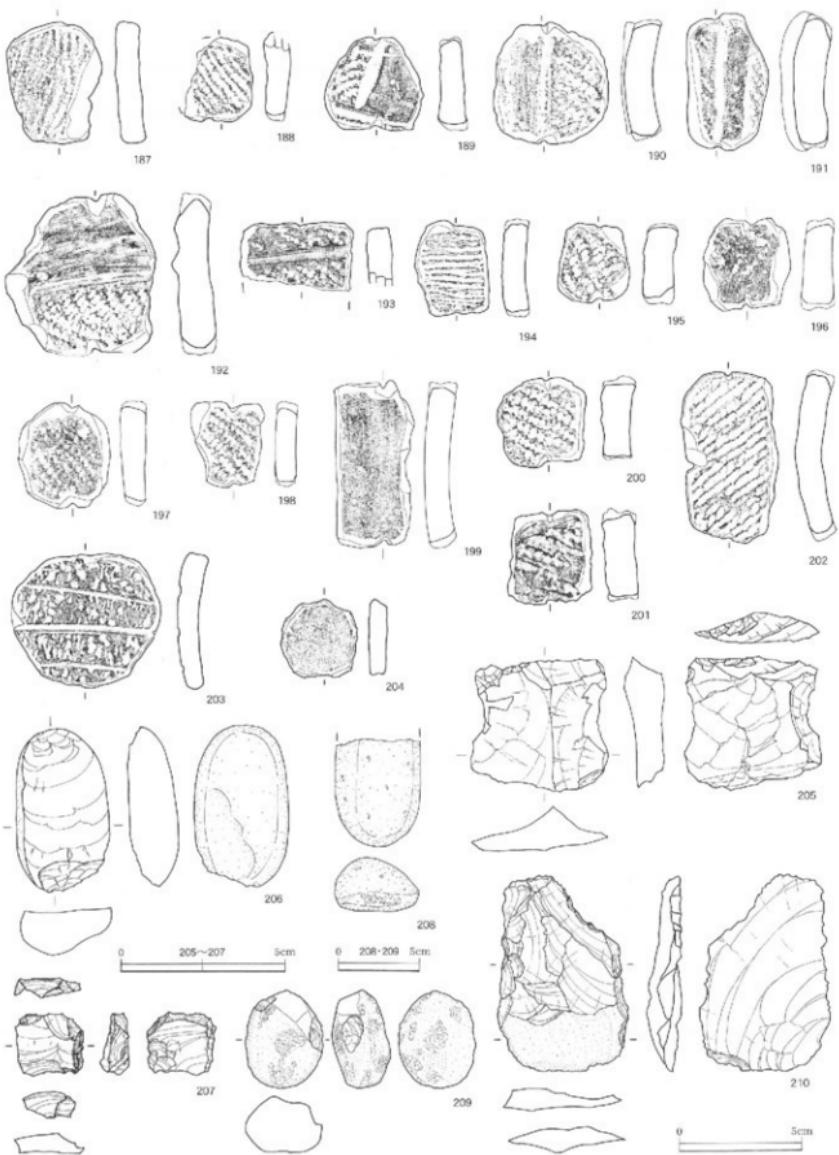
184は上偶の横部破片で、底面には網代痕がみられる。沈線が施された185は環状土製品か。186は土器の底部を利用した有孔円盤の破片で、穿孔部と副部との接合部が磨かれている。189～202は土器片錐で、158～192には沈線で区切られた磨消部が認められる。203、204は土製円盤で、203は縄文地に沈線が施された後期中葉の土器を利用していている。205は流紋岩製の板状剥片で、横長であった剥片の一側縁を折り取ったものか。206はチャートの凹穂を両極打法によって分割した石片。上下端に細かい剥離痕を残す。207は四辺が折り取られた剥片。208、209は円盤を使った敲石。210は打製石斧と思われる。背面の一部に櫛面を残す剥片を素材とし、その櫛面部を刃部とする。倒縁には調整剥離が施されている。



第43図 A貝塚No.1 トレンチ東部出土遺物（1）



第44図 A貝塚No.1 トレンチ東部出土遺物（2）



第45図 A貝塚No.1 トレンチ東部出土遺物（3）

B貝塚No.1 トレンチ

トレンチの設定と検出された遺構（第46図）

本トレンチは、B貝塚西部の台地縁辺部に相当するL15-a⑤～e⑤グリッド（L15-⑤列）と、K16-a①～e①グリッド（K16-①列）に設定された2つの調査区からなる。それ故南北10m×東西2mの規模を有する2つの調査区は、北東角と南西角が接し、長軸は貝塚が広がる斜面とほぼ直交する。地表面の状況は平坦であり、斜面側の北端（K16-a①グリッド）で標高25.80m、台地側の南端（L15-e⑤グリッド）で標高26.15mを測る。

L15-⑤列 厚さ約30cmの表土層（I①、I②層）を発掘した時点で、II層の上面が検出され、南部のd⑤、e⑤グリッドで竈を持つ住居跡1軒（第3号）と、下位に堆積する貝層の一部と思われる複数の貝ブロックが検出された。a⑥～d⑤グリッドの調査区東壁沿いに、幅30cm×長さ7mのサブトレンチを設定し、さらに掘り下げたところ、II層下から凹凸がみられる貝層上面が確認された。貝層上のII層は6層に細別されるが、基本土層には対応せず、上位からII①、②、④、⑥～⑧層と名付けている。II層中及び貝層上面からは縄文時代後期後葉以前の土器しか出土しておらず、その内で貝層の凹部上に堆積するII⑥層とII④層が、それぞれ縄文時代中期前葉の阿卡台Ib式期と中期後葉の加曾利E式期の包含層と捉えられた。

次にd⑤グリッドの北東部に1×1mの深掘溝を設け、貝層の調査を実施したが、貝層上面で深掘部外に延びる埋葬人骨が検出されたため、その発掘を取りやめ、北隣のc⑤グリッドに深掘箇所を移動した。貝層はサンプル採取しながら調査を進めた結果、貝層は中期初頭のもので、その下位にはII⑨、⑩層とした明褐色土層が堆積することが明らかになった。

第3号住居跡は、確認したのみで覆土の発掘は実施していないが、覆土上面から156、157の須恵器大型破片が検出され、平安時代の所産と捉えられる。

K16-①列 本調査区の調査は、L15-⑤列に引き続き実施された。厚さ約30cmの表土層（I①、I②層）を発掘した時点で、北部のa①、b①グリッドで貝層上面が、中部のc①グリッド付近で貝層を掘り込んだ竈を有

する住居跡1軒（第12号）が検出された。一方、南部のd①、e①グリッドでは、七層中に貝層がブロック状に分布する状態で、遺構の存在が予想されたことから、西壁に沿って、幅30cmのサブトレンチを設定した。十層をII層と捉え調査を進めたところ、焼土を多量に含む土層が検出され、その広がりを追ってサブトレンチをc⑤グリッド全域に拡張した。結果、縄文時代の重複する住居跡3軒（第13～15号）が確認され、II層としたものが、住居跡の覆土であることが判明した。

なお、北部で検出された貝層は上面観察により、混貝土層と混土貝層に分けられた。

L15-⑤列深掘部で検出された貝層（第47図）

d⑤グリッド部では、II④層下部から貝層上面にかけてヒトの下肢骨が検出されたが、深掘部外に続いているため、取り上げはせず、検出された状態で埋め戻している。

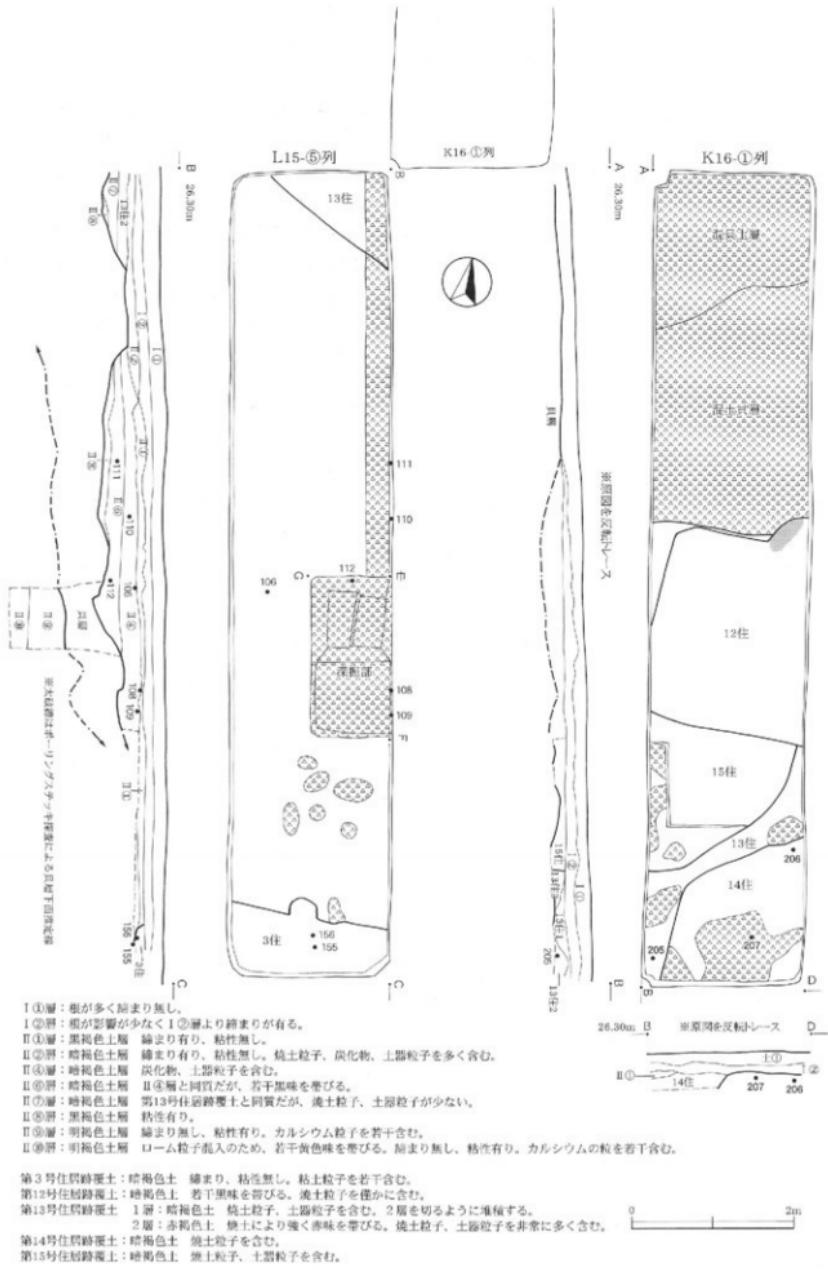
c⑤グリッド部では、II④層下にII⑥層がみられ、その下位に貝層が堆積していた。貝層は最厚70cmで、貝層下には無遺物層のII⑨層（厚さ約45cm）とII⑩層が堆積するが、貝層下面から70cm程度下げても、ローム層や粘土層は確認できなかった。

貝層は上層と下層に大別しサンプル採取を実施し、最終的な断面観察により、上層は1～5層に、下層は6、7層に細分している。各貝層は北西方への傾斜を持って堆積する。

上層はハマグリを主体とする混土貝層及び混貝土層と灰層が互層になって堆積しており、縄文時代中期初頭の阿玉台式直前段階の土器大型破片（129、130）や、阿玉台Ia式の大型破片（133）、それにイノシシの左下顎骨（残存位置[P2-M2(M3)-筋突起・関節突起]全歯残存）が検出された。

下層はハマグリを主体とする混土貝層であり、6層と7層では混入する土の色調が異なる。縄文時代中期初頭の五領ヶ台II式（140）と、阿玉台式直前段階（145）の土器大型破片が出土している。

上層、下層の形成時期について、出土した土器の型式に齟齬はない。ただし、両層とも異なる時期の土器型式を含んでおり、それを混在と捉え、新しい方の型式期の所産とするか、細別層単位では取り上げていないので、



第46図 B貝塚No.1トレンチ (L 15-⑤列・K 16-①列) 実測図

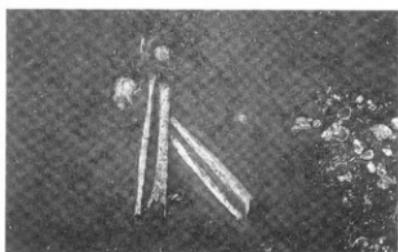
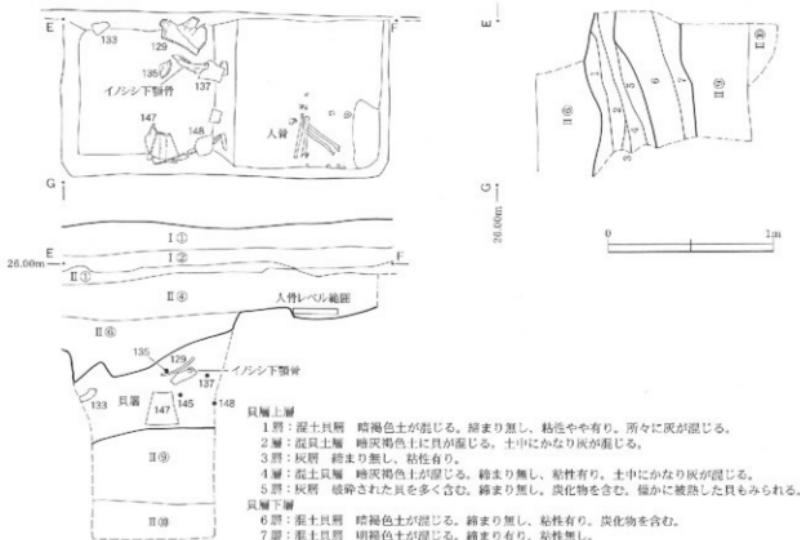


写真 36 B貝塚No.1 トレンチ深堀部人骨出土状況

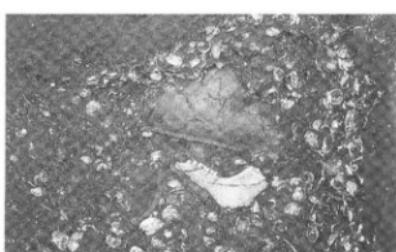


写真 37 B貝塚No.1 トレンチ深堀部貝層上層遺物出土状況

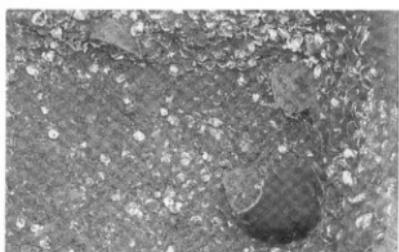


写真 38 B貝塚No.1 トレンチ深堀部貝層下層遺物出土状況



写真 39 B貝塚No.1 トレンチ深堀部東壁貝層断面

第 47 図 B貝塚No.1 トレンチ (L 15-⑤列) 深堀部実測図

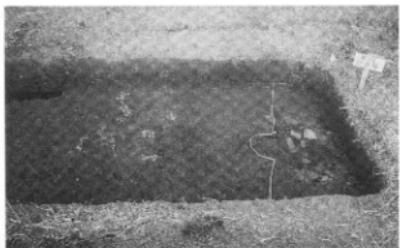


写真 40 第 3 号住居跡土器出土状況



写真 41 第 12 ~ 15 号住居跡検出状況



写真 42 第 14 号住居跡内貝層

形成期間を示すものと捉えるか判断が難しい。ここでは両者の可能性を含んだ意味で、上層を阿玉台式直前段階～阿玉台 I a 式期と、下層を五領ヶ台 II 式期～阿玉台式直前段階と表現しておく。

K 16 -①列で検出された住居跡群

第 12 ~ 15 号住居跡とした重複する 4 軒の住居跡は、貝層を掘り込んでつくられており、サブトレレンチによって第 13 ~ 15 号住居跡で一部を発掘した以外は、覆土の発掘は実施していない。覆土の平面観察による切り合い関係は、第 13 号住居跡 → 第 14・15 号住居跡、第 15 号住居跡 → 第 12 号住居跡である。

第 12 号住居跡は、隅丸方形の平面プランを有し、北壁に砂質粘土を構築材とし、煙道部が突出する竈を有する。西壁のラインはほぼ南北を指し、南北長は 2.35 m を測る。覆土上面から土師器片が出土しており、住居跡の時期は古代と捉えられる。

第 13 号住居跡の覆土は、焼土を多量に含むもので、サブトレレンチ内で部分的に検出された貝プロックも焼けていた。形態や規模は不明であるが、L 15-a ⑤ グリッドで南西端が確認されている。第 14 号住居跡はその北西部が確認されただけであるが、円形の平面プランを呈するらしく、住居跡内貝層と思われる貝プロックが、覆土上面で検出されている。第 15 号住居跡は東半分が調査区内にかかるており、長軸 4.3 m 程の楕円形の平面プランをなすらしい。サブトレレンチでは、約 20cm 覆土を掘り下げたところで、貝層が部分的に検出された。サブトレレンチ外で、ボーリングステッキによる探査をしたところ、同じく 20cm 程で貝層が確認されたため、これらの貝層上面は床面にあたる可能性がある。

第 13 号住居跡の確認面からは、205 の縄文時代中期中葉・阿玉台 III 式上器が、第 14 号住居跡の貝プロック上面からは、207 の中期・阿玉台式上器の胴部破片が出土している。また、3 軒の住居跡覆土に相当するサブトレレンチ内出土遺物は、中期後葉以前の縄文土器片が主体であり（後期初頭の土器小片 1 点あり）、以上から第 13 ~ 15 号住居跡の時期は、大よそ縄文時代中期の所産と捉えられる。

L 15 - ⑤列出土遺物

本調査区から出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、土偶、土器片錐、上製円盤、有孔円盤、石礫、石皿、磨石、敲石、櫛器、石核、剥片碎片、骨角器、貝刀である。

L 15 - ⑥列・I層出土遺物（第 48 ~ 50 図）1 ~ 59 は縄文土器。1 ~ 3 は胎土に纖維を含み、条痕文が施された早期後葉の土器で、円形刺突を伴う細隆線が施された 1, 2 は鶴ヶ島台式に、刺突列で文様が描かれた 3 は茅山下層式に相当する。4 ~ 9 は中期初頭の土器。RL の縄文地に沈線や彫刻文が施された 4, 5 は五領ヶ台 II 式である。6, 7 は口縁部が内側に肥厚し、その内面に沈線や角押文が施された阿玉台式直前段階の土器で、6 の外面には隆起線が、8 の口縁部外面と口唇部には角押文がみられる。父状の口縁をなし、施文単位が 1 列の角押文が施された 7, 9 は阿玉台 I a 式に該当し、7 は内面にも角押文が認められる。10 は半截竹管状工具による施文単位 2 列の角押文や波状文が認められる中期前葉の阿玉台 II 式土器。11 は口縁の突起部に渦巻状の隆縫を貼付けたもので、隆縫を沈線によって分割している。中期中葉の大木 8 a 式か。12 ~ 15 は中期後葉の加曾利 E 式土器。幅の広い峰帶と沈線で口縁部文様帶が表出された 12, 13 は II 式に、微隆起線で RL の縄文部と無文部が区画された 15 は IV 式に比定されよう。14 には RL の縄文間に、懸垂沈線で区画された磨消無文帯が認められる。

16, 17 は後期後葉の壙之内式 1 式土器で、16 は壙形もしくは注口土器と思われる。17 は RL の縄文地に単沈線で文様が描かれている。18 ~ 21 は壙之内式 2 式土器で、18 は沈線間に RL の縄文が施され、19 は縄文地に平行沈線でモチーフが描かれる。20 には RL の纏文と縄線、それには内面沈線が施され、無文の鉢形土器 21 の内面には沈線文が認められる。22 ~ 55 は後期中葉の土器。22, 23 は L, R の縄文を使った平行線状の磨消縄文が施された鉢形土器で、25 のいわゆるソロバン形土器の肩部には、弧線で区画された RL の磨消縄文がみられる。24, 26 ~ 34 (32 と 33 は同一個体か)、44 は斜線文が施されたもので、26, 31 ~ 35 の口縁や屈曲部には刻みが付されている。36, 37, 39, 40 は帶状の磨消縄文と沈線間に刻みを加えた文様がみられる土器で、40 は台部の破片である。纏文は 36, 39, 40 が RL、37 が LR。38 は異形台付土器の把手部破片。

41 ~ 43 は鉢形土器で、42, 43 は口唇部が内削ぎ状をなし、LR の纏文と口縁に沿う 2 条の沈線が認められる。46 ~ 55 は口縁内面に凹線がみられる後期中葉の粗製土器。46 ~ 49 は格子目文が施されたもので、47 ~ 49 には無文帯が、48 の地文には RL の纏文が認められる。50 ~ 52 は押捺が加えられた縄線を有し、纏文地に条線が施された土器。54 には RL の、55 には LR の纏文がみられる。

45, 56 ~ 58 は後期後葉の土器。45 は東北地方のいわゆる瘤付土器の壙形土器で、沈脇で弧線文が描かれ、薄く小さな瘤が付く。RL の纏文を用いた隆起した帯纏文と貼瘤がみられる 56 と、RL を使った対弧状の磨消縄文が施された 57 は安行 1 式に相当する。58 は縦位の条線と密な押捺を加えた薄い縄線がみられる粗製土器。59 は晚期の縄線が認められる粗製土器で、条線上に沈線による縱区画を設け、中を磨消している。

60 は黒曜石製の小型の石核で、片面に礫面を残す。61 は扁平精円鍬を素材にした石錐で、長軸上の両端に剥離によって抉りを付けている。62 は片面に礫面を残す剥片を素材とした櫛器、両面からの剥離によって刃部が作出されている。63 は円錐を使用した敲石で、表面と端部に敲打痕が残る。64 は平坦な一面が磨滅する石皿の破片。

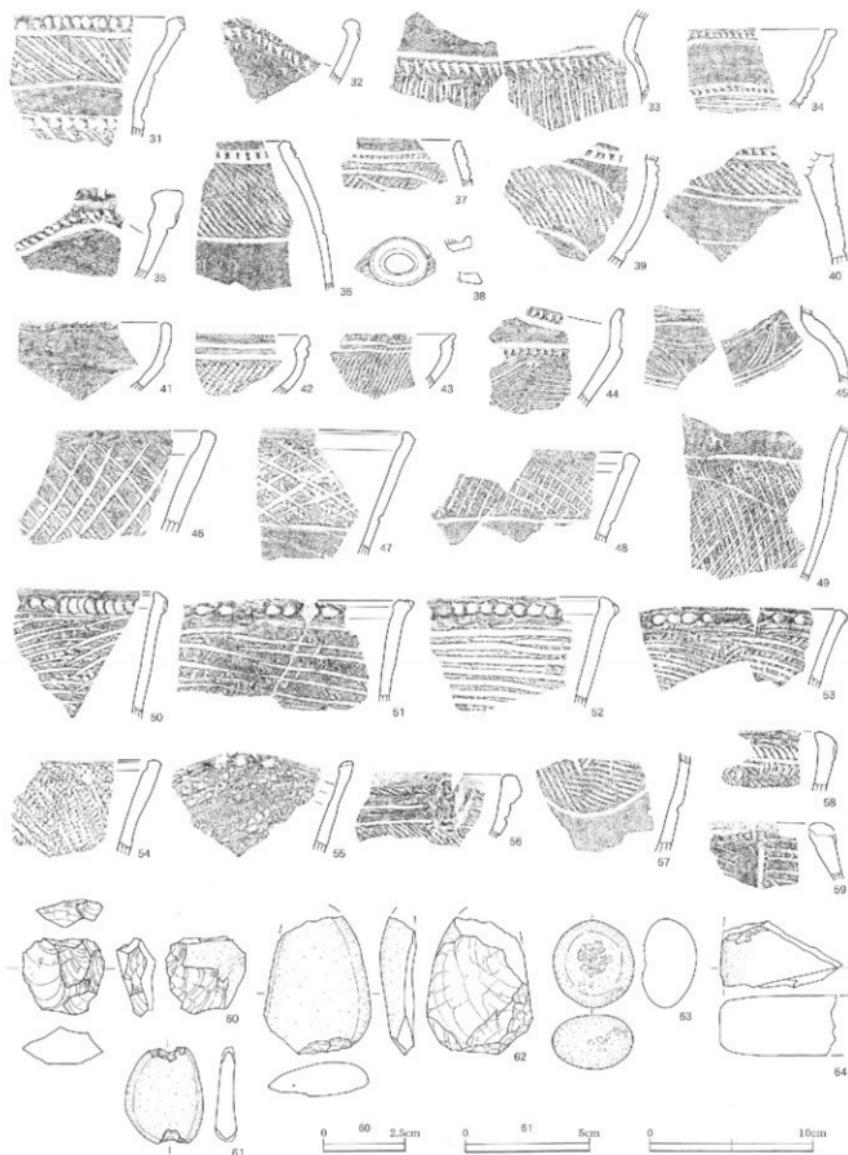
65 ~ 70 はいわゆる山形土偶の破片と思われる。胸部の破片である 65 には、沈線文とともに、乳房と垂下する隆縫の剥落痕が認められる。66, 67 は突き出た腹部の表現と、刻みのついた垂下隆縫がみられる腹～腰部の破片。66 は沈線文で、67 は RL の纏文と沈線文で装飾されている。68 ~ 70 は脚部破片で、脚中位と足首に沈線をめぐらし、その間に纏文を充填している。纏文は 68, 70 が LR, 69 が RL。70 の足先には刻みが認められる。

71 ~ 80 は土器片錐。刺突列と燃糸文が認められる 72, 73、纏文の磨消帯がみられる 74, 78、隆縫と沈線による区画が施された 75、微隆起線がみられる 76 は、中期後葉の加曾利 E 式の土器片を利用していると思われる。81 ~ 88 は土製円盤で、纏文地に斜位の沈線が加えられた 86, 87 と、格子目文がみられる 88 は後期中葉の粗製土器を素材としたものか。89 は纏文の付いた上器片を使用した有孔円盤の破片で、孔面と側面は磨られている。

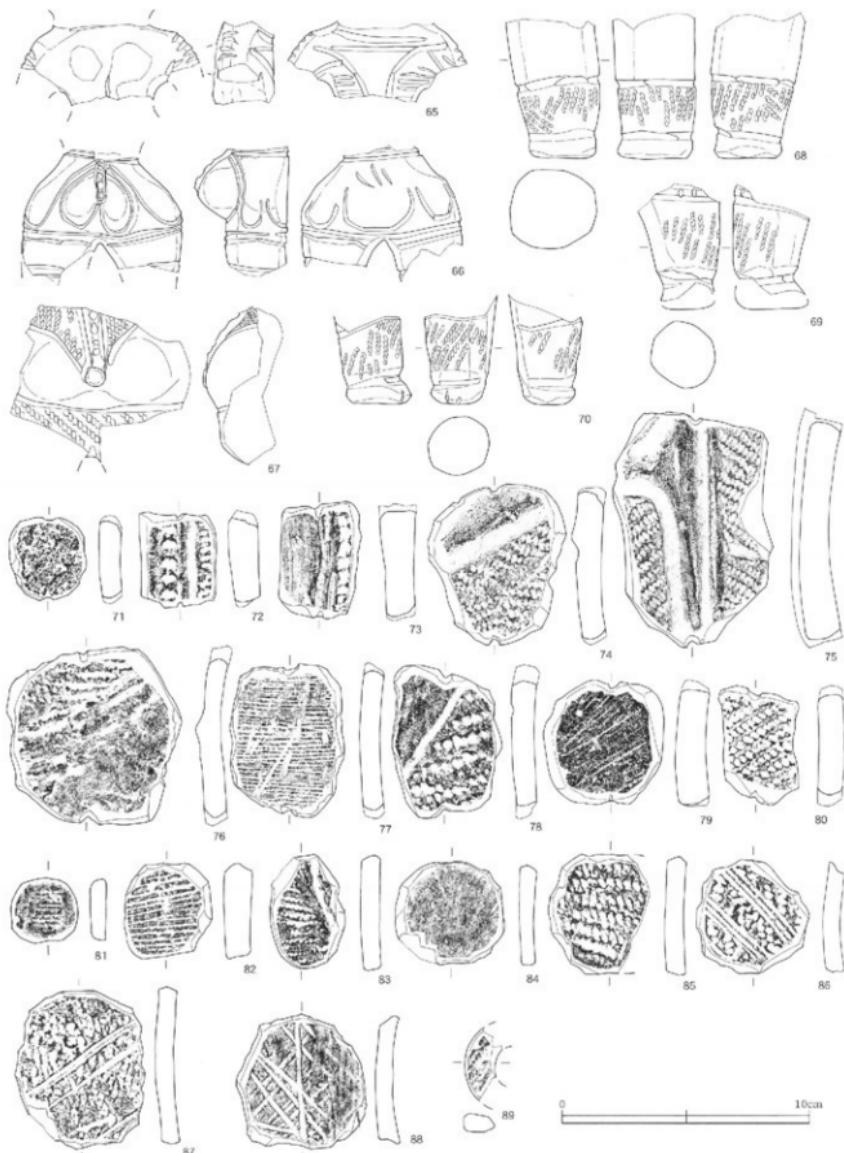
L 15 - ⑤列・II層出土遺物（第 51 図）ここでは II ① ②、⑦、⑧層中及びこれらの II 層に接する貝殻上面から出土した遺物を記述する。90 ~ 98 は纏文土器。90 ~ 96



第48図 B貝塚No.1トレンチ(L.15-⑤列)出土遺物(I層)



第49図 B貝塚No.1トレンチ(L.15-⑤列)出土遺物(I層)



第50図 B貝塚No.1 トレンチ (L 15-5列) 出土遺物 (1層)

は中期の阿玉台式上器。91, 93 ~ 96には施文単位が1列の角押文が施され、91, 92には粘土棒を芯とする突起がみられる。隆起線による狭い枠状区画を持つ90や、枠状区画が未発達な91は初頭の阿玉台I a式に相当するか。91の復元口径は30cm、93 ~ 96は角押文とともに、隆起線や波状文、襞編文、貼付文によって装飾された胴部破片で、前葉の阿玉台I b式に該当しよう。97, 98は後期中葉の加曾利B式土器。97にはRLの縄文を用いた帯状の磨消縄文がみられ、台部破片の98には斜線文と刻みの付いた隆線が施されている。

99 ~ 102は阿玉台式の破片を用いた土器片錠で、99, 100には輪積痕が、101には襞状文が、102には角押文と波状文がみられる。103 ~ 105は黒曜石製の剥片で、105の末端部は折り取られている。106は楕円彫を素材とした磨石で、表裏面が磨滅し、側面全周に敲打痕を残す。また、表裏面の中央に敲打による溝がみられる。107は先端と基部を欠く骨角器の刺突具で、シカの中手・中足骨を利用している。

L 15 -⑤列・II④層出土遺物（第51図）108 ~ 110は縄文時代中期後葉の加曾利E式土器。いずれもRLの縄文が施され、108, 109には間が磨消された懸垂沈線が、110には口縁に沿って四線がみられる。

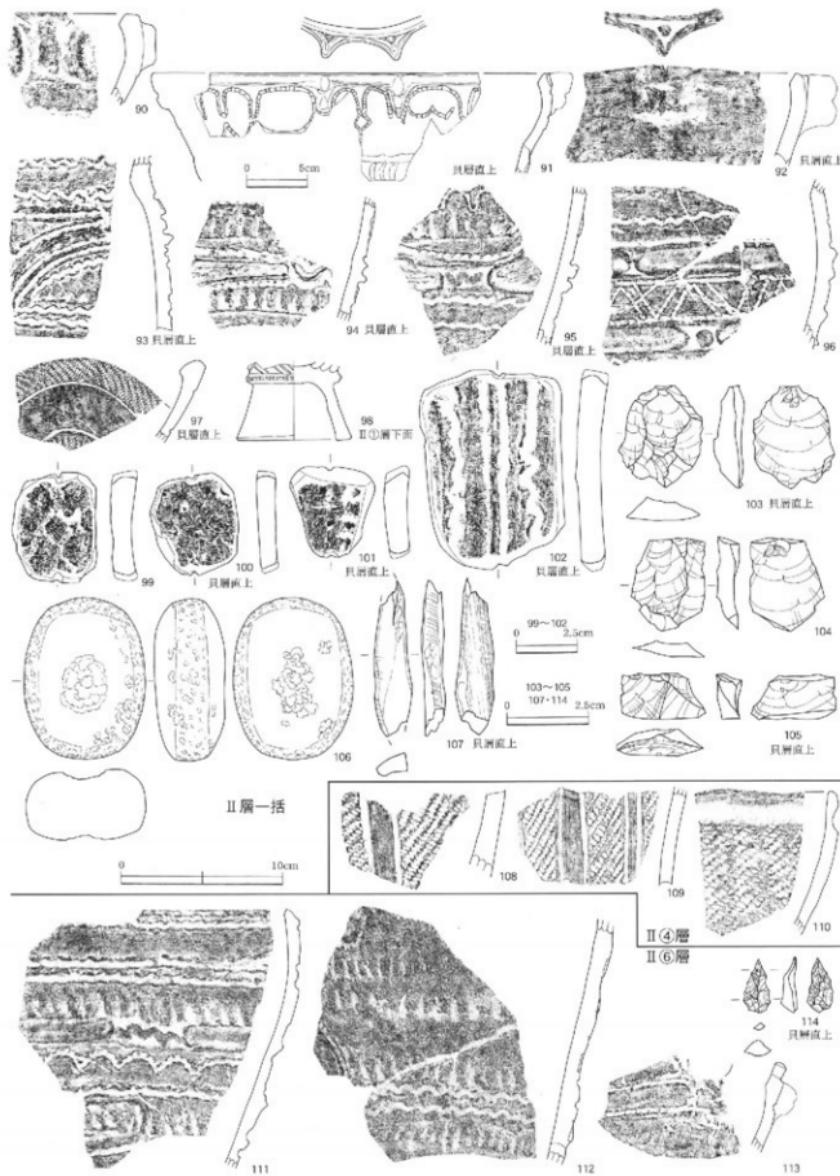
L 15 -⑤列・II⑥層出土遺物（第51図）111 ~ 113は施文単位が1列の角押文が施された縄文時代中期の阿玉台I式土器。隆起線や波状文、襞状文もみられる111, 112はI b式、又状の口縁を呈する113はI a式と思われる。114は黒曜石製の尖基無茎の石鎚。両面とも押圧剥離で覆われているが、厚みがある。

L 15 -⑤列深掘部貝層一括出土遺物（第52図）115 ~ 125は縄文土器。115は条痕文上に細隆線を配した、早期後葉の野島式上器。胎土に纖維を含む。116 ~ 125は中期初頭の土器。隆線区画を境に上位に綾文の沈線文が、下位にRLの縄文が認められる116は五領ヶ台II式か。RLの縄文と扁平な隆線が施された117も五領ヶ台II式に該当する。118 ~ 123は施文単位が1列の角押文が施された土器で、又状の口縁部内面に貼付文がみられる118は阿玉台I a式。124, 125は輪積痕をうっすら残す胴部破片で、124には断面三角形の隆起線が施されている。126はハマグリ製の貝刃で、前背縁寄りの一部を除く腹縁に刃が付けられている。

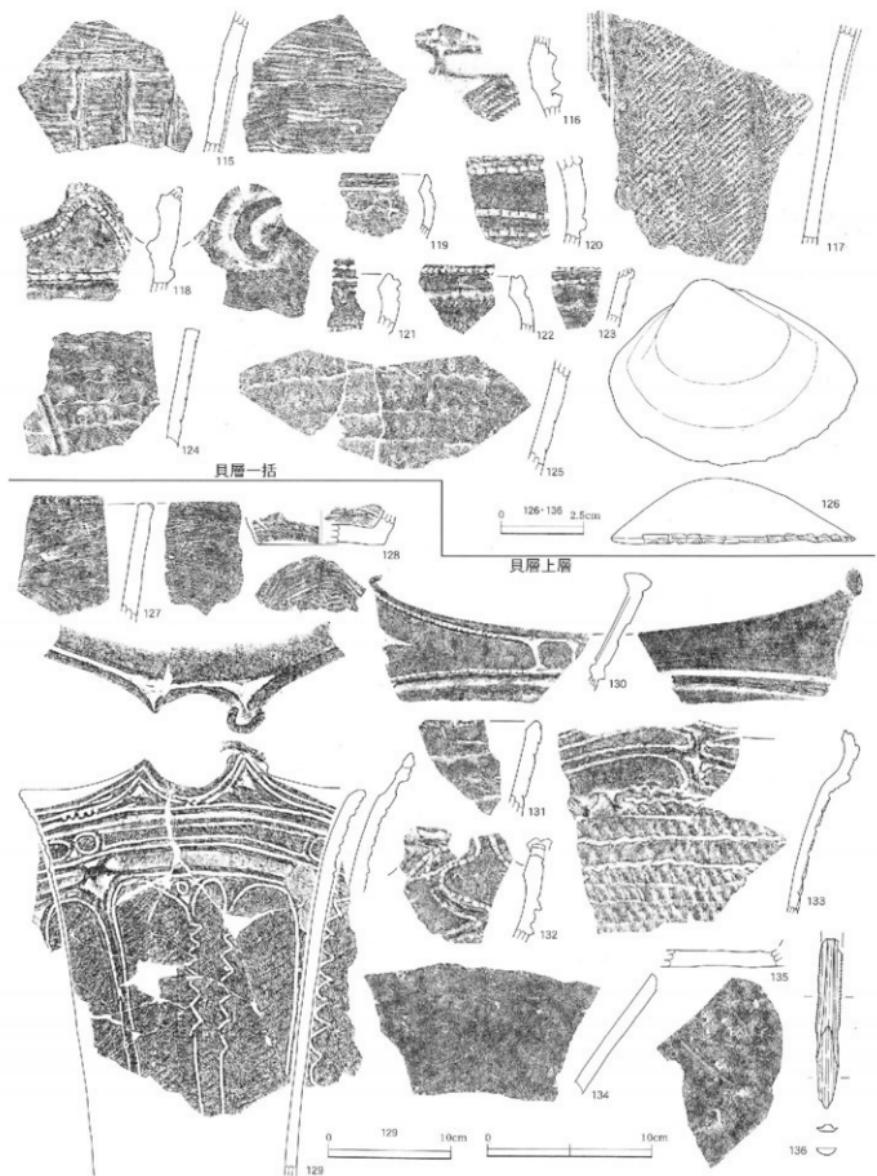
L 15 -⑤列深掘部・貝層上層出土遺物（第52図）127 ~ 136は縄文土器。127, 128は条痕文が施され、胎土に纖維を含む早期後葉の土器。128の平底外面にも条痕文が施され、127の口縁部には刻みが付く。129は外反気味に開く器形を呈し、復元口径28cmを測る。又状の口縁下には、沈線と三角形の彫刻文が施された狭い文様帯を有し、その下には沈線で円形や枠状のモチーフを描いた、やはり狭い文様帯がみられる。さらに下位の胴部には、中を削り込んだような枠状区画を挟んで、断面扁平の垂下する隆線と、沈線による逆U字状の文様が施されている。口縁部の文様帯には部分的に綾文状文が、胴部の逆U字状沈線の隙間にには三角形の彫刻文に囲まれた円形沈線文が認められる。また地文としてRLの縄文がみられる。本土器の時期認定は難しいが、又状の口縁を呈し、狭い口縁部文様帯部分が肥厚して、内面に沈線と三角形の彫刻文が施されていることから、阿玉台直前段階の土器と捉える。130も内外両側に肥厚する口縁部の内面に、沈線が施された土器で、阿玉台式直前段階に相当する。内面の沈線は横走するものと、波頂部から垂下するものが認められ、波頂部には貼付文が付く。外側は1列の角押文で区画した中に彫刻文が施されている。

132, 133は隆起線に1列の角押文が付随する阿玉台I a式土器。132の口縁は又状をなし、133の口縁部には隆起線と角押文が流水状に施され、不定形な狭い区画状文を形成している。また、123の胴部には襞状文と波状文がみられる。131, 134, 135は無文の破片で、135は底部破片である。口縁部の131には輪積痕がみられる。136は、エイ類の尾刺を使った刺突具で、基部を削ぐように加工している。

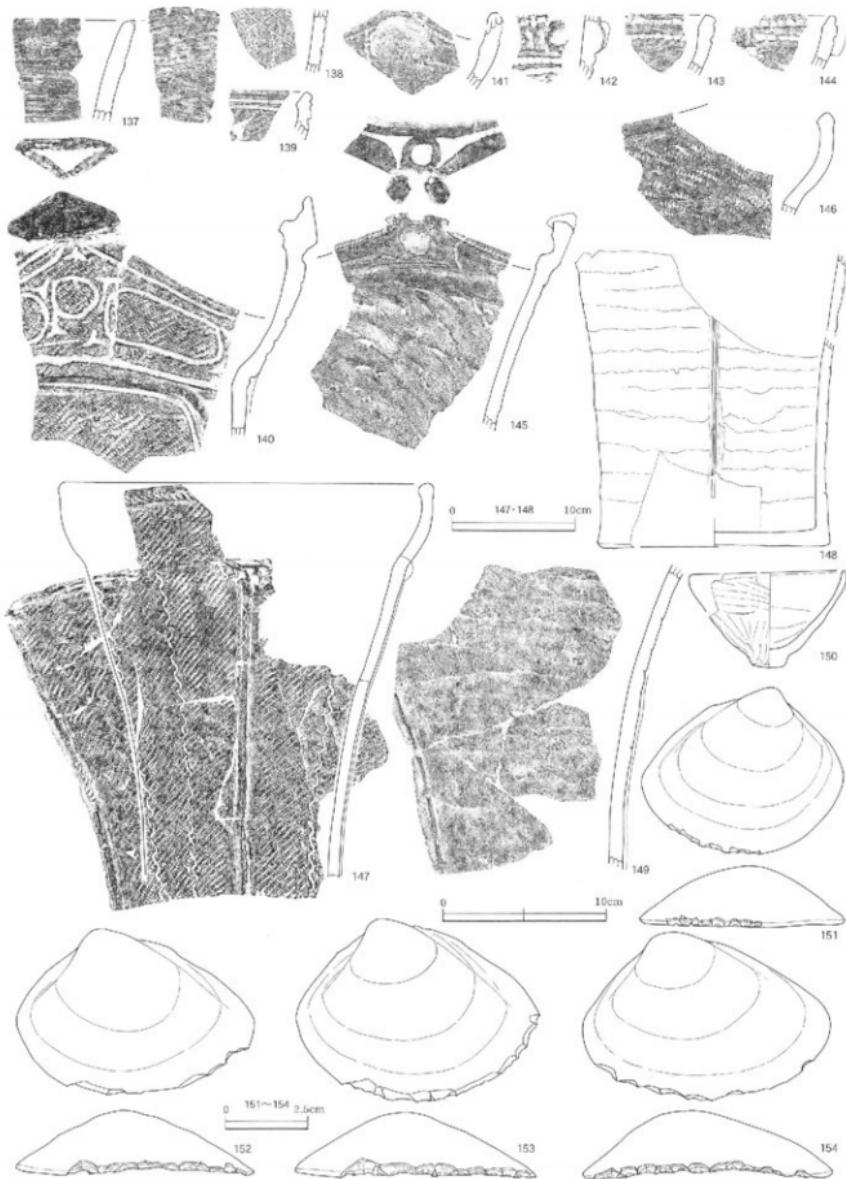
L 15 -⑤列深掘部・貝層下層出土遺物（第53図）137 ~ 150は縄文土器。137は条痕文が施され、胎土に纖維を含む早期後葉の土器で、口唇部には刻みが付く。138は波状貝殻文上に格子目の沈線を施した土器で、前期後葉のものか。139 ~ 149は中期初頭の土器と思われる。RLの縄文地に沈線や彫刻文を施した139, 140は五領ヶ台II式に相当する。140は外縁する頸部から、口縁部が内湾気味に立ち上がる器形を呈し、波頂部には内面が削られた三角形の突起が付く。口縁部は上端を沈線で区画し、その下に押し引きの単位が長い角押文で、円形や楕円形のモチーフを描いている。モチーフの間には二叉状の彫



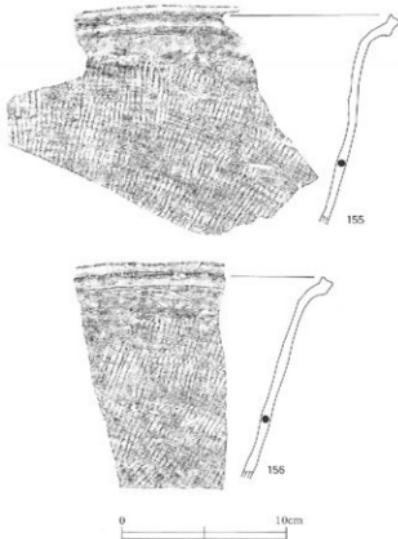
第51図 B貝塚No.1 トレンチ（L. 15-⑤列）出土遺物（II層）



第52図 B 貝塚No.1 トレンチ (L. 15-⑤列) 出土遺物 (深堀部貝層一括・貝層上層)



第53図 B貝塚No.1トレンチ(L.15-⑤列)出土遺物(深堀部貝層下層)



第 54 図 B 貝塚 No. 1 トレンチ
(1-15-5列) 出土遺物 (第 3 号住居跡)

刻文が配される。頸部には扁平な隆起線がめぐり、そこからY字状の隆起線が垂下している。隆起線には沈線が付随する。141～144は施文単位が1列の角押文が施された土器。141には馬蹄形をした貼付文の剥落痕が認められ、阿玉台式直前段階に位置付けられる。144にも貼付文の一部が残る。145も阿玉台式直前の土器で、帶状に肥厚した口縁部の外面に円形の貼付文の剥落痕が、内面に玉抱き三叉状の彫刻文がみられる。口唇部には1列の角押文が施され、波頂部は瘤狀の2つの貼付文が付けられている。無文の胴部には粗いナデ整形が認められる。

146, 147はR.L.の縹文が施された土器。どちらも屈曲した頸部から口縁部が内湾気味に立ち上がる器形を呈し、口唇部が隆線状に肥厚するが、146は平縁、147は波状の山線となる。147の胴部には、頸部の突起から垂下する4単位の扁平な隆起線がみられ、隆起線間の縹文部には結節縹文がみられる。復元口径 30.4cm。148, 149は粗く整形された輪輪痕と断面三角形の隆起線がみられる土器。

148の隆起線は2単位であり、底径は19cmを測る。150は口径 12.9cm、底径 2.5cm、器高 7.8cm の小型無文の鉢

形土器。底部は突出し、外面にはナデ整形が施されている。

151～154はハマグリ製の貝刃で、151は後背縁寄りの腹縁に152、153は前背縁寄りの一部を除く腹縁に、154は腹縁のほぼ全域に刃が付けられている。

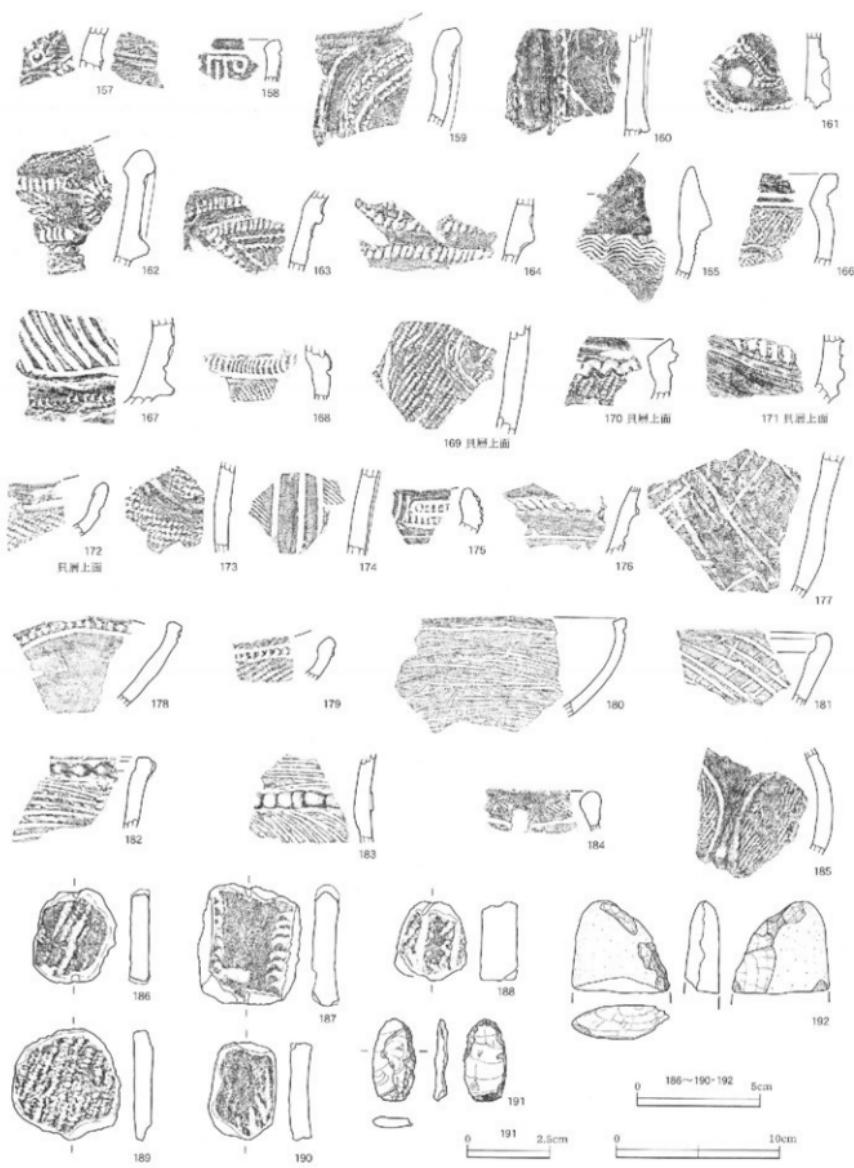
第3号住居跡出土遺物（第54図）155、156は須恵器の甕もしくは瓶の破片で、外面に格子状の叩目を残す。どちらも淡灰褐色を呈し、胎土に白色・透明粗粒と白色雲母粒を含む。

K 16-①列出土遺物

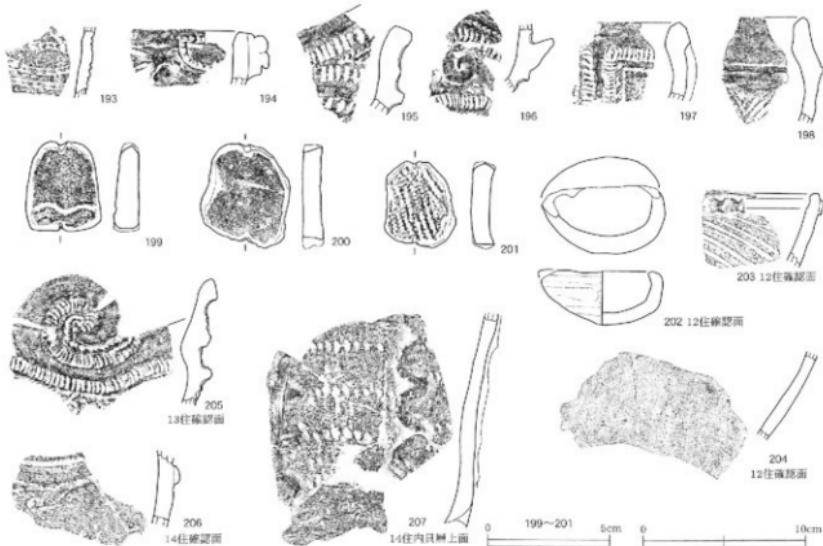
本調査区から出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、土器片錐、土製円盤、二次加工剥片、打製石斧？、剥片碎片である。

K 16-①列・I 層出土遺物（第55図） ここでは I 層中及び I 層に接する貝層上面から出土した遺物を記述する。157～185は縄文土器。157は円形刺突を伴う細隆線と刺突列が施された早期後葉の鰐ヶ島台式土器。地に条痕文がみられ、胎土に纖維を含む。158は無地に角押文が施された中期初頭の土器。159、160は隆起線に施し單位が2列の角押文を付随させた、中期前葉の阿玉台II式土器。161～171は中期中葉の土器。161は円形の隆起線に細かい横状の刺突列が施されている。162～164は半截竹管状工具の外側を使った爪形文を隆起線に沿って施した阿玉台III式土器。162には縄文もみられる。口縁の隆起下に櫛描文がみられる165も阿玉台III式か。隆起線に沈線を付随させた166、167は阿玉台IV式で、166には縄文もみられる。167の隆起線上には刻みが付き、隆起線下には無文帯となる。168は半截竹管状工具の内側を使った爪形文がみられる上器で勝坂式か。169は RL の縄文地に沈線が施された胴部破片。170は口縁の隆起線に沿って波状文が施され、RLの縄文もみられる。171には隆起線と沈線が施文されている。172、173は中期後葉の加曾利E式土器で、172は口縁に凹線を配し、以下に LR の縄文を施している。173は微隆起線の両側に LR の複雑縄文がみられる加曾利E式。

174は沈線間にLRの縄文を充填したもので、後期初頭の土器か。175～177は後期前葉の土器と思われる。内屈する口縁部に沈線文が施された175は堀之内I式に、刻みの付いた紐線と8の字状の貼付文がみられる176は



第55図 B目擇No.1 トレンチ(K-16-①列)出土遺物(1層)



第 56 図 B貝塚No.1 トレンチ (K 16-①列) 出土遺物 (第 12 ~ 13 号住居跡)

堀之内 2 式に該当する。177 は無地に平行沈線が施されている。178 ~ 183 は後期中葉の土器。178, 179 には口縁の沈線に沿って刻みが施され、179 には L.R の縄文もみられる。180 は口縁に 1 条の沈線がめぐり、以下に条線が施された鉢形土器。181 ~ 183 は粗製土器で、181 には格子目文が、182, 183 には縄文地に条線と押捺が加えられた紐線が施されている。184, 185 は後期後葉の安行 1 式土器。184 の肥厚した口縁には R.L の帶縄文と貼脂の剥落痕が、胸部破片の 185 には、R.L の縄文を用いた弧状の磨消縄文がみられる。

186 ~ 188 は土器片錠で、189, 190 は土製円盤である。191 は縁辺に細かい剥離痕が残る黒曜石の剥片。192 は扁平な梢円錐を素材にした石器の欠損品で、両面からの剥離で側縁を整形している。打製石斧の基部破片か。

K 16-①列・住居跡群出土遺物 (第 56 図) ここで記述するのは、第 12 ~ 15 号住居跡の確認面やサブトレンチ内覆土から出土した遺物である。193 ~ 198, 203, 205 ~ 207 は縄文土器。

193 は燃糸文地に半截竹管状工具による連続爪形文を施した前期後葉の浮島 Ia 式土器。194 は 1 列の角押文

と粘土棒を芯とした突起が認められる中期の阿玉台 I 式土器。195 ~ 197 は隆起線に爪形文を付随させた中期中葉の阿玉台 III 式土器。196, 197 には楔状の刺突列もみられる。198 は口縁部の無文帯と R.L の縄文部を微隆起線で区画した中期後葉の加曾利 EIV 式土器。199 ~ 201 は土器片錠で、199 には波状文が、201 には R.L の縄文が認められる。

202 ~ 204 は第 12 号住居跡の確認面で検出された上器。202 は卵形を呈する無文の小型丸底土器で、外面はナデで整形されている。長口径 7.6cm、器高 3.2cm。203 は縄文地に縦線と条線を施した後期中葉の粗製土器で、204 は無文の胴部破片。205 は第 13 号住居跡確認面出土の、中期中葉の阿玉台 III 式土器で、口縁上の突起に付けられた渦巻状の隆起線に付随して、半截竹管状工具の外側を使った爪形文が施されている。206, 207 は第 14 号住居跡の確認面から検出された土器で、207 は住居跡内貝層の上面出土である。206 は隆線に沿って沈線が施されている。207 は中期前葉～中葉の阿玉台式の胴部破片で、垂下する波状の隆起線と刻目文がみられる。

B貝塚No.2 トレンチ

土層の堆積と検出された貝層（第57図）

本トレンチは、B貝塚東部の台地縁辺部に位置する。当初、J 23-d⑤, e⑥, J 24-a⑤～c⑤グリッドに東西2m×南北10mの調査区を設定したが、途中で南側のJ 24-d⑤, e⑥グリッドにかけて、南北4m、東西1mの拡張区を追加している。トレンチの長軸はB貝塚が広がる斜面とほぼ直交する。地表面の標高は、斜面寄りの北端で25.85m、台地側の南端で25.55m、間のJ 23-e⑥付近で、26.30mを測る。J 23-e⑥付近が最も高いが、この高まりは表上層である客土によって形成されたものであり、本来はほぼ平坦であったと思われる。なお、トレンチ内は小グリッドを単位に平面区を設定したが、呼称については、小グリッド名を用いず、北から1～7区とした。

客土である表土層（I層）を発掘した時点で、土質がかわり、II層として調査を進めたが、結局、搅乱層（搅乱①層=遺物取り上げ層名「IIa層」、搅乱②層=遺物取り上げ層名「IIb層」）であることが判明した。北部の1、2区と南端の5区では、厚さ約10cmの搅乱②層下に貝層が検出されたが、その間には貝層は検出されなかった。そのため東壁に沿って、幅50cmのサブトレンチを設定し、掘り下げたところ、貝層が確認されなかた部分は、南北5m以上に及ぶ既掘坑であることが判明した。坑内には搅乱層が落ち込んでいたが、1m程下げても坑の底面が確認できなかたため、4区に1×1mの深掘部（深掘1）を設けてさらに掘り下げた。結果、既掘坑上面から約1.5mのところで、搅乱されていないハマグリを主体とする貝層を検出したが、貝層の厚さは20cm程度、すぐにローム層（III層、厚さ約20cm）と灰褐色粘土層（IV層）に移行した。

一方、貝層の台地側木端部を捉えるために、南側に調査区を拡張し（6、7区）、幅50cm、長さ3mの範囲を深掘りしたところ（深掘2）、I層下にIIa～c層（厚さ約1m）、III層（厚さ約10～20cm）、IV層が順に堆積していることと、I層下部からIIa層上部にかけて堆積する貝層の末端が確認できた。なお、深掘2の貝層末端部下面（IIa層上面）の標高は25.15mであるのに対し、深掘1における貝層下面（III層上面）は23.80mを測る。

地表面とは異なり、貝層形成以前の本地点はかなりの傾斜地であったことがわかる。

深掘1内の搅乱②層からは、ビニール製品が出土しており、既掘坑の掘削時期は現代にまで下る。既掘坑以外の貝層の上部及び上面から出土した上器は、縄文時代早期後葉2点、中期後葉34点、後期前・中葉7点であり、中期後葉の土器が主体を占める。一方、貝層の最下部にあたる深掘1の貝層からは、五領ヶ台式、阿玉台式が出土したという調査時の記録があるが、遺物取り上げ時ににおける搅乱②層との区別が不明瞭で、貝層出土土器を純粹に限定できない。深掘1内一括としては、縄文時代早期後葉9点、中期初頭5点、中期前葉13点、中期後葉8点が出土している。深掘2の貝層下のII層からは、五領ヶ台式の洞部と思われる土器大型破片64をはじめ、縄文時代早期中葉1点、早期後葉5点、中期初頭4点、中期前葉2点の土器が検出された。貝層下のII層の大型破片の在り方と、調査時の所見を踏まえて、本トレンチにおける貝層の形成開始を中期初頭の五領ヶ台式～中期前葉の阿玉台式期と捉え、上部には中期後葉の貝層が存在する可能性が高いことを指摘しておきたい。

出土遺物

本調査区から出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、土版、土器片鍾、土製円盤、有孔円盤、石織、磨石、刺片碎片、骨角器、貝刀である。

I層・搅乱出土遺物（第58～60図） 1～58は縄文土器。1～6は中期初頭の土器と思われる。無地に沈線を施した1, 2と、縄文地に沈線文がみられる3, 4は五領ヶ台式であろう。1の波頂部には三角形の突起が、2には軸齒状文が、4には角押文も付随する。5は口縁から角押文をY字状に施し、口縁との隙間に沈線で三角形の彫刻的文様を描く阿玉台直前段階の土器。1列の角押文を付隨させた降起線で幅の狭い区画状文を描く6は、阿玉台Ia式か。7～9は中期前葉の土器で、7には粘土棒を芯にした突起がみられる。8は施文単位が1列の角押文が、9は施文単位が2列の角押文が施されたもので、それぞれ阿玉台Ib式と同II式に相当する。

10～19は中期中葉の土器。陸上線に沿って爪形文が施された10は阿玉台III式である。11は突起部にベン先状の刺突列が認められ、12には三叉状の沈線文が、13には

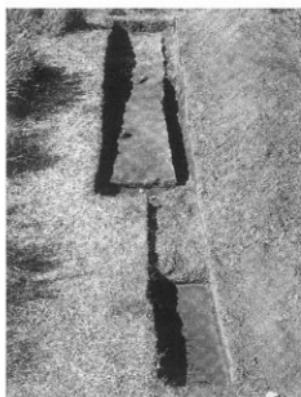


写真 43 B 貝塚No. 2 トレンチ全景

I 層：表土層

標高①：貝塚が樹木を受けたもの。

標高②：ボーリングした茶褐色土。

見附：紳貝層 ハマグリ、カガミガイ、アカニシなどの完形貝がみられる。

Ⅲ a 層：紳茶褐色土層 細粒有り。ローム粒子、炭化物を多量に含む。

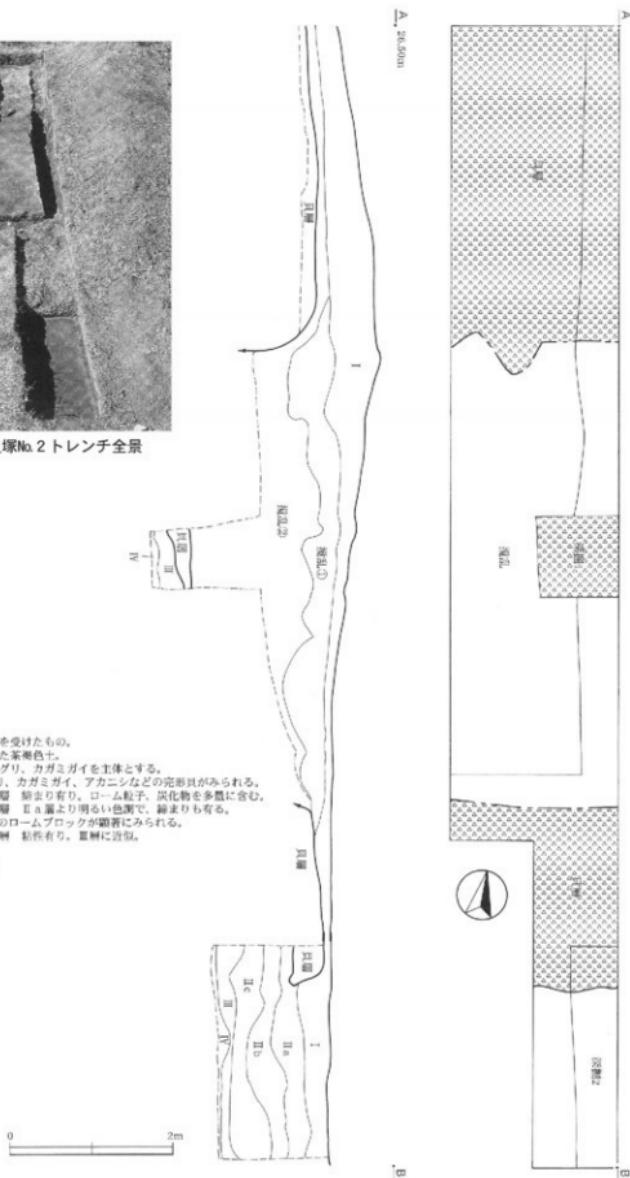
Ⅲ b 層：紳茶褐色土層 Ⅲ a 層より明るい茶色で、縞まりも有る。

径10mm程のロームブロックが顕著にみられる。

Ⅲ c 層：明茶褐色土層 粘性有り。直角に近似。

見附：ローム層

IV 層：灰褐色粘土層



第 57 図 B 貝塚No. 2 トレンチ実測図

縦位の隆線と鋸歯状と直線を交互に配した沈線文が施されている。14, 15は同一個体で、胴部にRL?の繩文が、無地の口縁部には刻みの付いた隆線と沈線がみられる。16は沈線で分割された隆線で波状の文様を描き、以下には繩文が施されている。17は沈線によって間を浮彫り状にした文様が認められる。以上のうち、12～15は勝坂式土器か。18, 19は浅鉢形土器と思われる破片で、18には隆線貼付による小波状文が、19には楕円形の沈線文が施されている。

20～26は中期後葉の加曾利E式土器。20～22の繩文が施された胴部には、間を磨消した懸垂沈線が認められる。20の口縁部は太い沈線で、21の口縁部は隆線主体で、渦巻や枠状の文様が描かれており、加曾利E II式に相当する。繩文は20, 21がRL、22が複節RL。繩文磨消部に蘇手状の沈線が認められる23と、微隆起線を貼付け、周囲にRLの繩文を配した24は加曾利E III式に該当する。25はLを巻いた撚糸文地に3条を単位とする沈線で連弧状の文様が描かれる。26は微隆起線貼付け後にLRの繩文を施し、無文部と区画した加曾利E IV式土器。

27～32は後期初頭の称名寺式土器。27～30は沈線間に繩文を充填したI式、31は櫛歯状工具による刺突文を充填したII式である。繩文は27, 28がLR、29, 30がRLで、球状の胴部を呈する27には円形の刺突列もみられる。32は無文の口縁部を微隆起線で区画し、以下に円形の刺突文を施している。33～37は後期前葉の土器。繩文地に単沈線で文様が描かれた32, 33と、沈線と刺突で口唇部文様帯を出した34は堀之内1式に、RLの繩文地に単沈線で幾何学的な文様を描く37は堀之内2式に相当する。繩文は33が無節R、35, 37がLR。38～43は後期中葉の土器。38はRLの繩文を用いた平行線状の繩



写真44 B貝塚2トレンチ深塗1断面

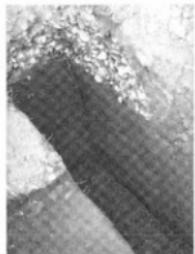


写真45 B貝塚2トレンチ深塗2断面

文帶と区切り文が認められる。39は内層する無文の口縁部下に条線が認められ、屈曲部には刻みが付く。40, 41は波状の口縁に沿った沈線間に刺突を施したもので、RLの繩文がみられる。42, 43は粗製土器で、42には繩文地に格子目文が、43には繩文地に紐線と条線が施されている。

44～46は後期後葉の安行1式土器。44, 45は隆起したRLの帶繩文がみられ、46にはRLを用いた弧状の磨消繩文が認められる。47～56は晩期の土器。RLの帶繩文と縦位の刻みが付いた薄い貼瘤を有する47は安行3a式土器。48～52は安行3b式と思われる土器で、49は沈線とLRの繩文で入り組み状の文様が描かれ、鉢形土器の50はLRの繩文が施された外層する口縁部を有する。51, 52は細密沈線が施された土器。沈線間に列点を充填した53は安行3c式に該当する。54～56は条線が施された粗製土器で、54, 55には間が磨消された沈線縦区画が、56には蛇行する懸垂沈線が認められる。56, 57は無文の土器で、57は復元口径23.2cm、58は復元口径21.4cm、復元底径14.8cm、器高26.2cm。外面の整形は57がナデ、58がヘラナデである。59は土師器の瓈形土器で、口唇部に押捺が加えられている。復元口径19.0cm。

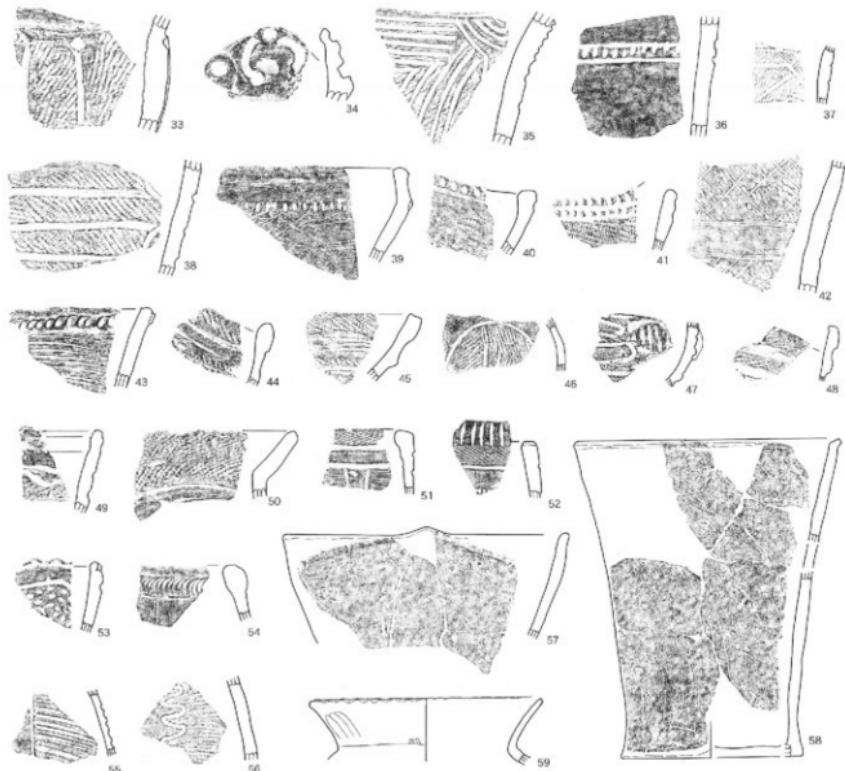
65は小判形の上版の破片で、沈線によって円文等が描かれている。66～73は土器片錐で、磨消繩文帯がみられる67, 70, 73は加曾利E式の破片と思われ、68には連続爪形文が認められる。74は土器片を利用した土製円盤。75, 76も土器片を使用した有孔円盤で、75には貫通孔が、76の裏面には未貫通の孔が、擦りによって穿たれている。77は焼成前に成形された土製円盤で、三角形の刺突列が施されている。

78～80は石鎚で、チャート製の78は尖基無茎鎚に、黒曜石製の79は凹基無茎鎚に、黒曜石製の80は尖基無茎鎚に分類される。81, 82は黒曜石製の、83は頁岩製の剥片で、81, 83の背面は多方向からの剥離面で構成され、83には穂面も残る。84は楕円錐を素材とした磨石の破片で、表面の一部に磨滅が認められる。85は骨角器の刺突具で、先端と基部が欠損する。シカの中手・中足骨を利用したものと思われる。86, 87はハマグリ製の貝刃で、腹縁全体に刃が付けられている。

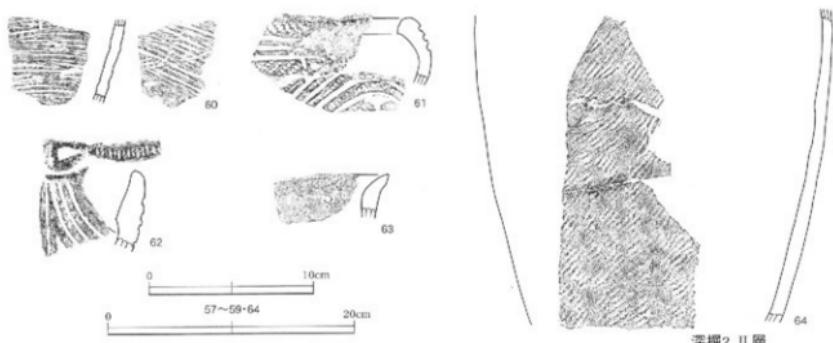
深堀2・II層出土遺物（第59図）60～64は繩文土器。60は内外面に条痕文が施され、胎土に纏維を含む早



第58図 B貝塚No.2トレンチ出土遺物(I層擾乱)

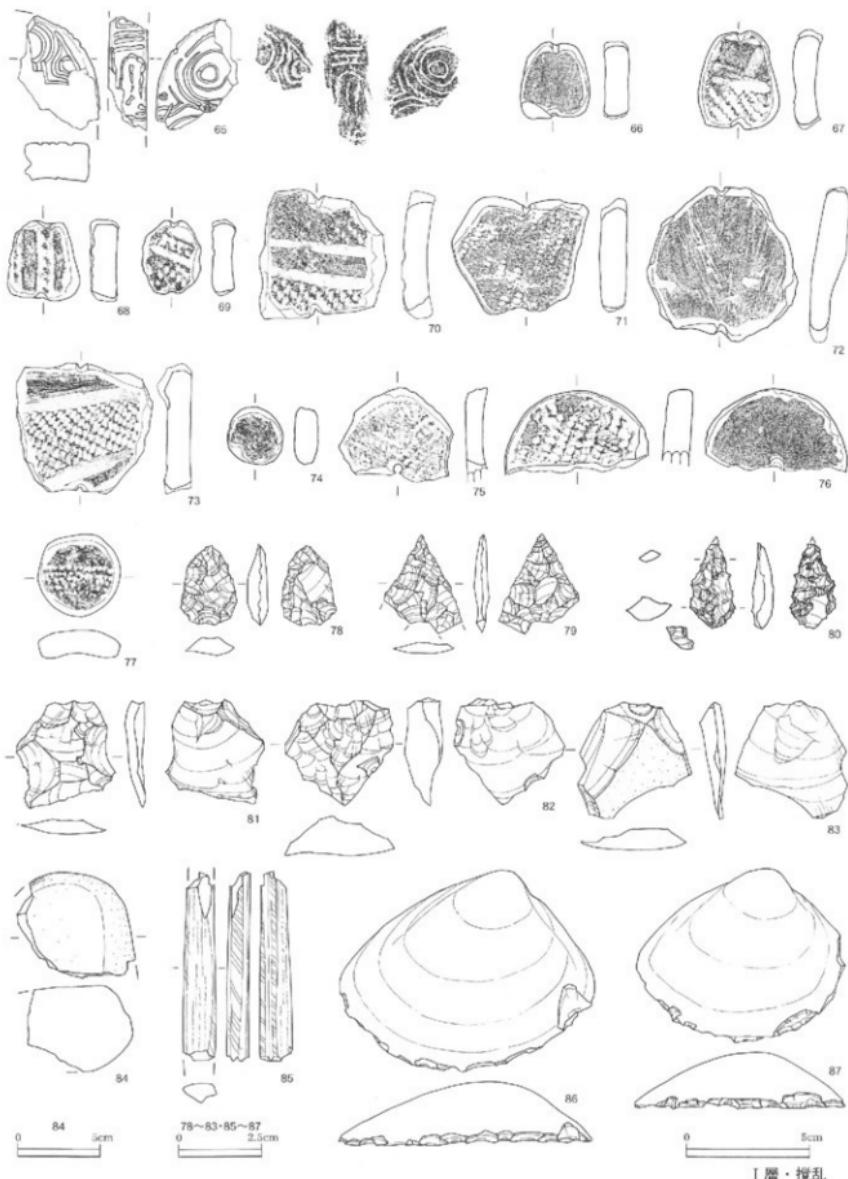


I層・攪乱

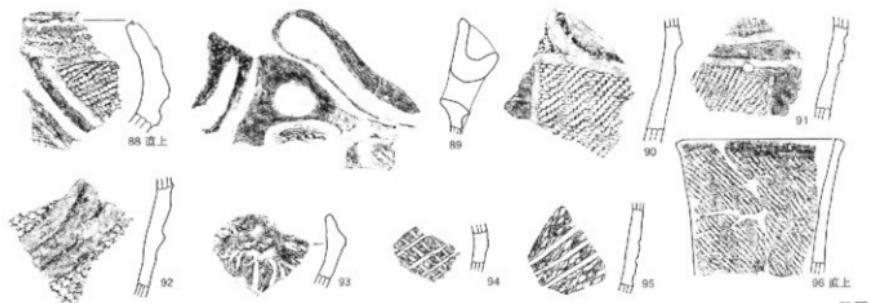


深掘 II層

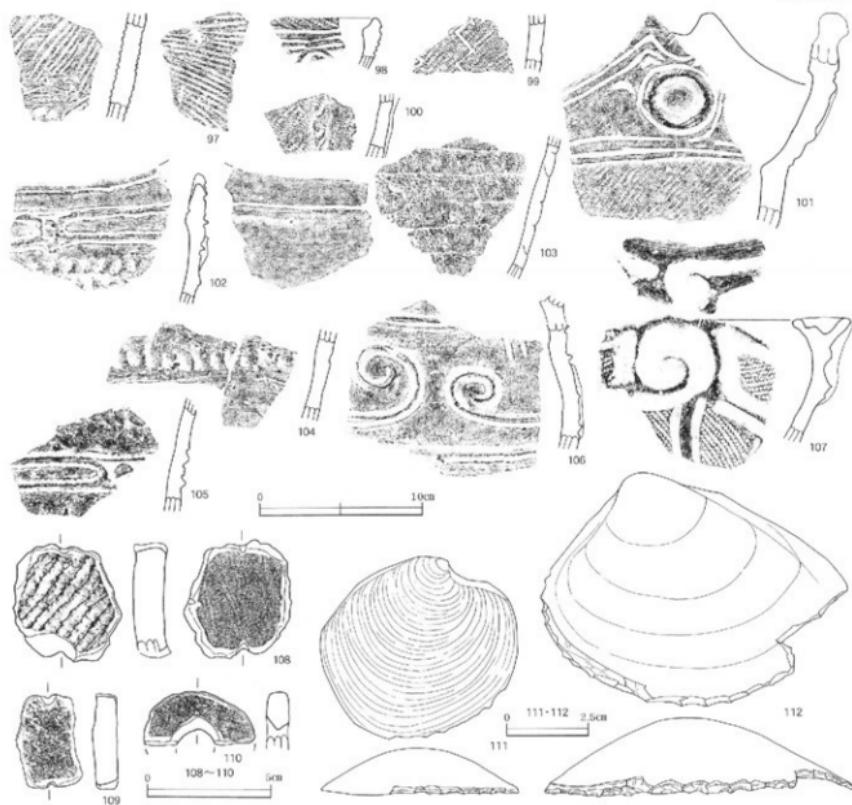
第59図 B貝塚No.2 トレンチ出土遺物 (I層攪乱・深堀2 II層)



第 60 図 B 貝塚No.2 トレンチ出土遺物 (I 層擾乱)



貝層



第 61 図 B 貝塚No. 2 トレンチ出土遺物（貝層・深堀 1 貝層）

期後葉の土器。61, 62は縄文地に沈線と彫刻文が認められる中期初頭の五領ヶ台II式土器。61の縄文はRL。63は無文の口縁部破片で、円形の刺突が1ヶ所みられる。64はRLの縄文が施された胴部破片で、曲線的な沈線が僅かに認められる。復元胴部最大径28.8cm。五領ヶ台式の胴部か。

貝層出土遺物(第61図) 深掘1以外の貝層から出土した遺物を記述する。88~96は縄文土器。88~92は中期中葉の加曾利E式土器。口縁部に隆線で文様を描き、RLの縄文を充填した88はT式に、微隆起線と複節LRLの縄文を配した92は加曾利E III式に該当する。90, 91は口縁部文様帶の下端が沈線で区画され、胴部にRLの縄文と磨消無文帯がみられる。外削ぎ状の口唇部を有し、沈線文が施された93は後期後葉の堀之内I式土器か。94, 95は後期中葉の粗製土器で、94は縄文地に格子目文を、95は斜位の沈線を施している。96は無節Lの縄文が施された土器で、口縁部が無文帯となる。復元口径13.6cm。

深掘1・貝層出土遺物(第61図) 前述したように深掘1の貝層出土とした遺物には、搅乱^②出土のものが混じっている可能性がある。97~107は縄文土器。97は内外面に条痕文が施され、胎土に繊維を含む早期後葉の上器。98~103は中期初頭の上器と思われる。RLの縄文地に沈線と彫刻文が認められる98, 101は五領ヶ台II式土器。101の内湾する口縁部の波頂下には、沈線が沿う円形の隆線文が貼付けられている。99はRLの縄文地に沈線文を、100は扁平な隆起線貼付後にRLの縄文を施している。102は隆起線に沿う1列の角押文と姿状文が施された阿玉台I a式土器で、内側に肥厚した口縁部内面には沈線がみられる。胴部破片の103には薄く消された輪積痕が認められる。104~106は中期前葉の阿玉台式土器。104には姿状文がみられる。105, 106は隆起線に付随して1列の角押文が施されたI b式土器。107は中期後葉の加曾利E II式土器で、降線と太い沈線それにLRの縄文で口縁部文様帶を表出し、同縄文が施された胴部には、間が磨消された懸垂沈線がみられる。

108, 109は土器片鱗で、108には縄文がみられる。110は土器片を利用して有孔円盤で孔面と側面が磨されている。111, 112は貝刃。カガミガイ製の111は腹縁の前背縁寄りに、ハマグリ製の112は腹縁全体に刃が付けられている。

D貝塚No.1 トレチ

トレチの設定と検出された遺構(第62図)

本トレチは、S 15-c②グリッドの南半部から、T 15-c②グリッドの北半部にかけて設定した、南北10m×東西2mの調査区で、D貝塚西部の台地上縁辺に位置する。トレチの長軸は貝塚が広がる斜面とほぼ直交する。トレチの地表面は、北端で標高26.35m、中央付近で標高26.55m、斜面側の南端で標高26.00mを測り、中央部が盛り上がり、斜面側の南端が若干低くなる。中央部の高まりは表土層がそこだけ厚いためで、下位の土層堆積には反映されていない。なお、トレチ内を2m四方の平面区に5分割したが、小グリッドとずれているため、北から①~⑤区と呼称した。

厚さ30~75cmの表土層(I層)を発掘した時点で、全域でII層(IIa層に相当すると想われる)が確認された。次に、トレチの東壁沿いに幅50cmのサブトレチを設定し、II層を掘り下げたところ、①~⑥区全てから貝層の上面が検出された。ただし、貝層の上面は凹凸がみられ、II層の厚さもそれに伴い5~70cmと山がある。続いて、貝層のサンプル採取をするために、④区南半部と②区北半部のサブトレチ内において貝層の発掘を実施した。貝層上面から約1mの深さまで発掘し、貝層をa~d層に大別してサンプル採取をおこなったが、貝層はさらに下位まで続いている。

II層~貝層上面からは、縄文時代中期後葉~後期中葉までの土器が多数出土したが、④区サブトレチ内のII層の最下部から古墳時代埴形土器57が出土しており、II層の下限は古代まで下ると思われる。サンプル箇所の貝層からは、時期が確定できる土器破片が27点程出土したが、内訳は縄文時代中期中葉が2点、中期後葉が9点、後期初頭が16点、後期中葉が1点で、後期初頭の称名寺式土器が主体を占める。また、称名寺式土器は各層から検出されているため、サンプル貝層全体の時期を縄文時代後期初頭と捉える。なお、称名寺式土器はI式とII式に細分され、II式はa, b層でのみ出土している。しかし、それがa, b層とc, d層の時期差を示すものかは、小片のため判断し難い。

他所の木掘貝層の時期については、明確に把握できないうが、II層~貝層上面での出土傾向をみると、④, ⑤区

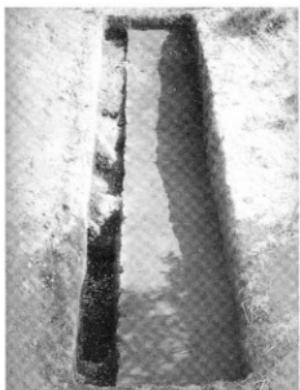
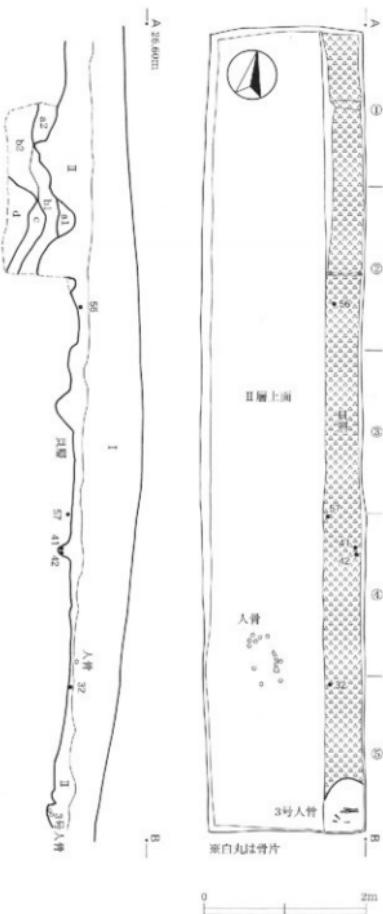


写真 46 D 目塚 No.1 トレンチ全景



写真 47 D 基塚 No. 1 トレンチ基層断面



1層:暗黃褐色土層 表土層。縮毛有り。ローム粒子（径1~2mm）を含み、赤色スコリア（径1mm程）を少量含む。白色のバミスを多量に含む。
2層:暗茶褐色土層 ローム粒子（径1~5mm）と赤色スコリア（径2~3mm）を多く含む。
貝層

四

- a 層：混じ土層
b 2層：混じ土層
b 1層：混じ土層
b 2層：混じ土層
c 層：混じ土層
d 層：純貝原
e 層：純貝原
f 層：純貝原
g 層：純貝原
h 層：純貝原
i 層：純貝原
j 層：純貝原
k 層：純貝原
l 層：純貝原
m 層：純貝原
n 層：純貝原
o 層：純貝原
p 層：純貝原
q 層：純貝原
r 層：純貝原
s 層：純貝原
t 層：純貝原
u 層：純貝原
v 層：純貝原
w 層：純貝原
x 層：純貝原
y 層：純貝原
z 層：純貝原

第 62 図 D 貝塚 No. 1 トレンチ実測図



写真48 D貝塚No.1 トレンチ④区人骨出土状況



写真49 D貝塚No.1 トレンチ第3号人骨出土状況
付近で、後期前葉の堀之内式や、後期中葉の加曾利B式土器が多く、斜面寄りの場所に、より新しい時期の貝層の存在が予想される。

一方、④、⑤区にまたがるⅡ層中と、⑥区のサブトレンチ内のⅡ層の落ち込み部から、人骨の一部がまとまって検出された。前者は破片が散在する状況で、頭蓋骨や上腕骨などの破片が含まれる。一方、後者は、埋葬人骨とも捉えられる状況を示し、落ち込み部も墓壙の可能性がある。調査区外にも続く様子であったが、拡張調査はおこなわず、確認途中に採取したものを除き、そのまま埋め戻している。採取資料には、距骨R、踵骨L、手根／足根骨、指骨が認められた。

出土遺物

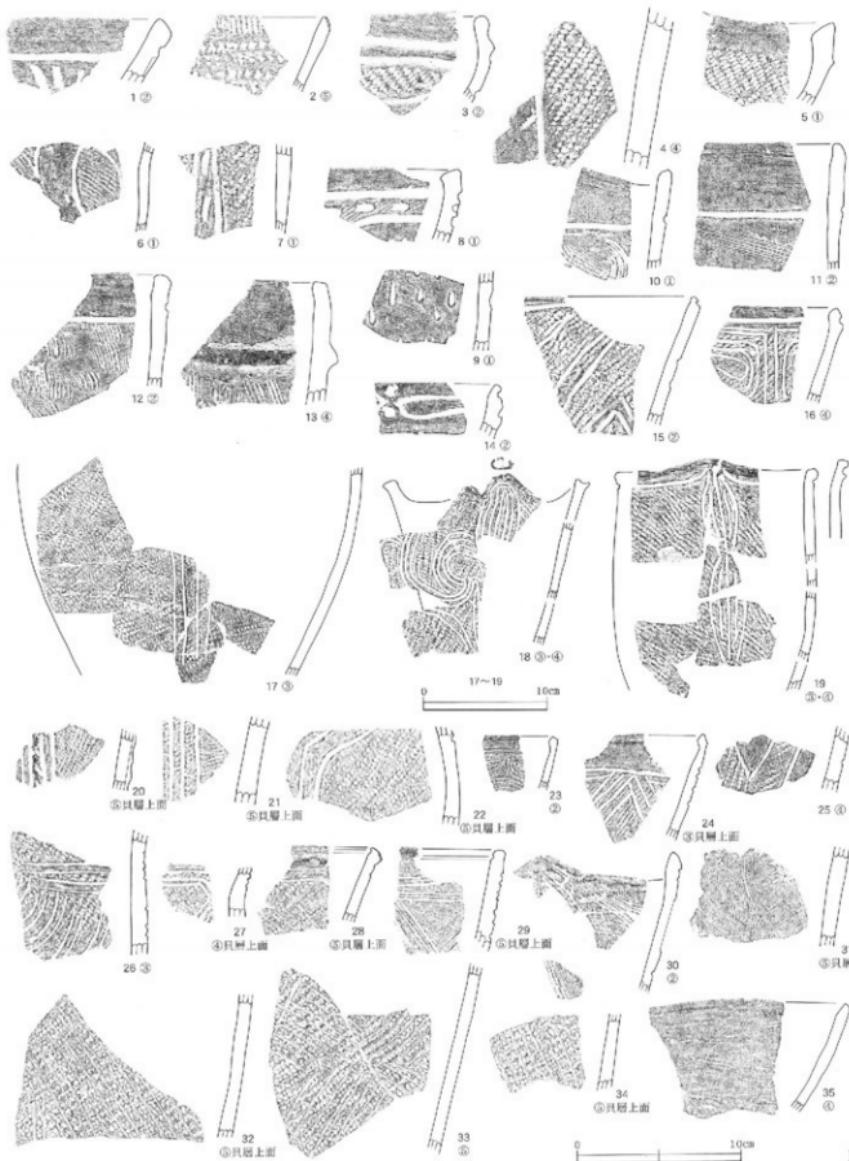
本トレンチから出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器類、土器片錐、磨石、敲石、凹石、剥片砂岩、貝刃、貝輪木成品、骨角器である。

II層出土遺物（第63、64図） 1～56は縄文土器。
1は太沈線文が施された早期中葉の田戸下層式土器。
2は三角文がみられる前期後葉の浮島III式土器。
3～5は

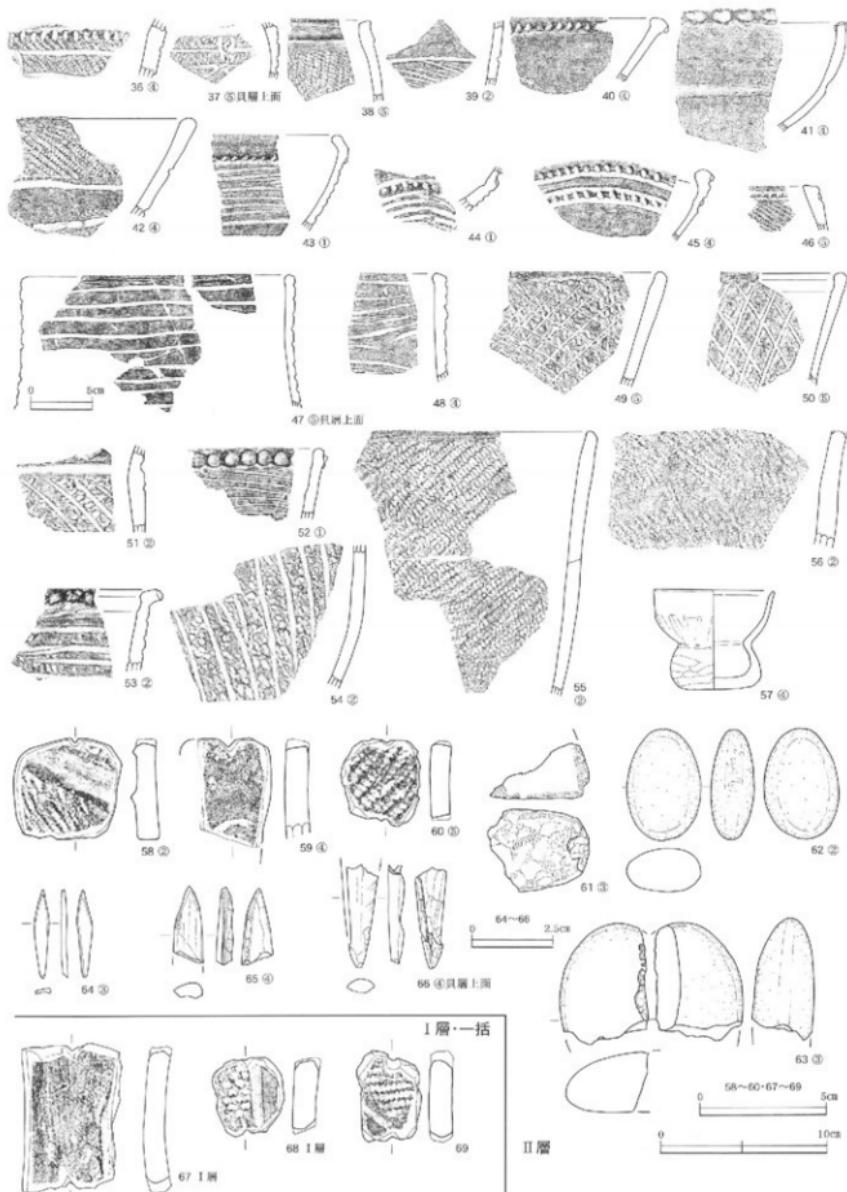
中期中葉の加曾利E式土器。3は隆線と沈線で枠状の文様が描かれた口縁部破片で、4の胴部破片には沈線で区切られた縄文部と磨消無文部が認められる。5は微降起線で口縁の無文部と縄文部が区画された加曾利EIV式土器。縄文は全てRL。6～9は沈線モチーフ間に縄文や刺突を施した後期初頭の称名寺式土器。LRの縄文が充填された6～8はI式に相当する。10～13は無文の口縁部下に櫛文が施された土器で、称名寺式期のものと思われる。10～12は口縁部を沈線で、13は隆線で区画している。

14～22は後期前葉の堀之内1式土器。14は沈線と刺突による口唇部文様帶を有し、15～22は縄文地に単沈線で文様が描かれている。縄文は15～18、20～22がLR、19が無節で、20には刻みの付いた隆線もみられる。17の胴部復元最大径28.0cm、18の復元口径16.8cm、19の復元口径16.6cm。23～34は後期前葉の堀之内2式土器。23、24は口唇が内屈する無文の口縁部を有し、以下にLRの縄文地に単沈線で文様を描く。25は沈線による幾何学的なモチーフ内にRLの縄文を施している。26～28、32～34はLRの縄文地に平行沈線で文様を描いており、28、32～34は同一個体と思われる。口縁部の28には押捺が加えられた細い組線と、細い内面沈線がみられる。29は無文地に平行沈線で、30、31は櫛文でモチーフを描く土器で、29の内面には細い沈線がめぐる。35は無文の鉢形土器。

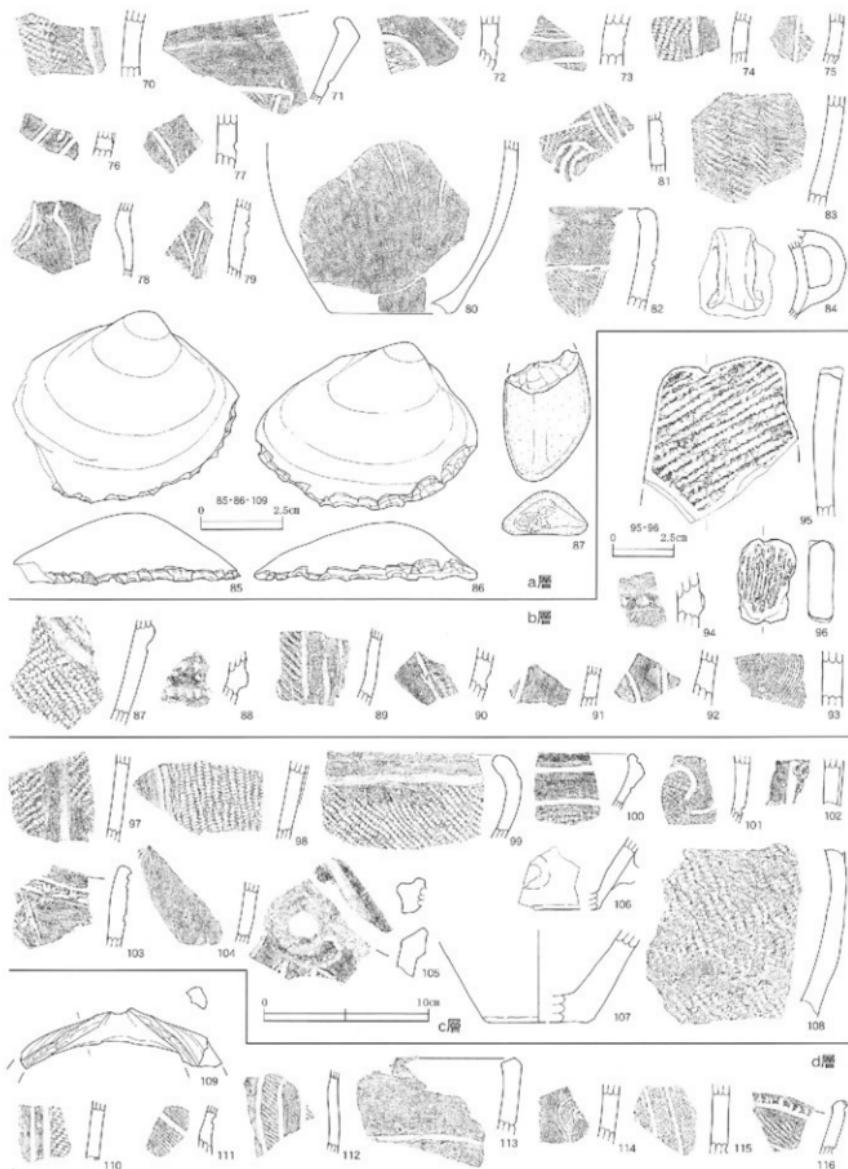
36～54は後期中葉の土器。36、37にはRLの縄文を用いた平行線状の磨消縄文と区切り文が認められる。38は口縁部に微降起線とLRの縄文が施された土器。39には斜線文がみられ、40の肥厚した口唇部には刻みが施されている。41は口唇部に押捺が加えられた鉢形土器。42はRLを用いた帯状の磨消縄文が施されている。43、44は鉢形の土器で、刻みの付いた扁曲部と条線がみられる。以上は加曾利B式に該当する。45、46は口縁に沿う沈線間に刻みが施されたもので、46にはRLの縄文がみられる。47、48は口縁～頸部に横走する沈線や弧状の沈線が施された壺形土器で、加曾利B式の遠部3類に相当する。47の復元口径は22.2cm。49～54は粗製土器。49～51、54は縄文地に格子目や斜位の沈線文が施された土器で、51には無文帶がみられる。52、53には押捺が加えられた組線が貼付けられている。55はLRの縄文が、56はRL



第63図 D貝塚No.1 トレンチ出土遺物（II層）



第64図 D貝塚No.1 トレンチ出土遺物 (II層・I層一括)



第 65 図 D 貝塚No.1 トレンチ出土遺物（貝層）

の縄文が施された土器。

57は土器師の好み土器で、整形は口唇部がヨコナデ、口縁部がナデ、胴部～底部が弱いミガキである。口径7.4cm、底径4.2cm、器高6.0cmで、口縁部の一部を欠く。

58～60は上器片錐で、微隆起線が認められる58は加曾利EIV式、無地に沈線が施された59は称名寺式の上器破片と思われる。61は表面に擦りによる窪みと磨滅面、側面に敲打痕がみられる凹石の破片であるが、敲石に転用されたらしく、破損面にも敲打痕が残る。62は梢円襍の一部に敲打痕を残す敲石で、表裏面には黒色に変色した部分が認められる。63は表裏面が磨面となる梢円襍を素材にした磨石の欠損品で、表裏面の一部に煤状の物質が付着する。64～66は骨角器の刺突具。64は全面研磨が施され、65はシカの中手・中足骨を利用したと思われるもので、先端は切断面も含め研磨されている。

I層・一括出土遺物（第64図）67～69は土器片錐で、懸垂状の磨消部が認められる68は加曾利E式、沈線内にL.Rの縄文が充填された69は称名寺式の土器破片か。

貝層a層出土遺物（第65図）70～84は縄文土器。70はL.Rの縄文と、間が磨消された懸垂沈線がみられる中期後葉の加曾利E式土器。71～80は後期初頭の称名寺式土器。71～75は沈線間に縄文が充填された称名寺I式土器で、74の縄文はR.L。76～80は無文地に沈線や刺突が認められる称名寺II式土器で、80の復元底径は7.8cm。81はL.Rの縄文地に3条の單沈線で文様を描いた土器。82は沈線で区画された無文の口縁部下に、櫛描文が施されている。83は無筋Lの縄文が施された銅部破片。84は耳状の把手部の破片。

85、86はハマグリ型の貝刃で、腹縁全体に刃が付けられている。87は梢円襍の端部に敲打痕を残す敲石の破損品。

貝層b層出土遺物（第65図）87～94は縄文土器。R.Lの縄文と隆線が施された87と、隆起線に付随して幅広の角押文がみられる88は中期中葉の上器。89はL.Rの縄文帯と、間が磨消された3条の懸垂沈線がみられる中期後葉の加曾利E式土器。90～92は後期初頭の称名寺式土器で、沈線間にL.Rの縄文が充填された90はI式に、無文地に沈線が描かれた91、92はII式に相当する。93には櫛描文が、94には刺突が加えられた隆線がみられる。

95、96は土器片錐で、95にはL.Rの縄文が、96には櫛描文がみられる。

貝層c層出土遺物（第65図）97～108は縄文土器。R.Lの縄文が施された97～99は中期後葉の加曾利E式土器。97には隆線が、99には沈線が施され、微隆起線で無文部を区画した99は加曾利E IV式に該当する。100～102は後期初頭の称名寺I式土器で、沈線間に縄文が充填されている。縄文は100、101がL.R、102がR.L。円孔の付いた貼付文がみられる105も称名寺式か。103は先端がさざぐれた工具で沈線が描かれ、同工具による刺突もみられる。104は櫛描文が、108はR.Lの縄文が施された土器。106、107は無文の底部破片で、106には把手の痕跡が認められる。107の復元底径は6.8cm。

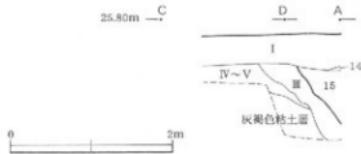
貝層d層出土遺物（第65図）109はベンケイ貝製の貝輪未成品の破片。110～116は縄文土器。110はL.Rの縄文帯と、間が磨消された3条の懸垂沈線がみられる中期後葉の加曾利E式土器。111、112は沈線間に縄文が充填された後期初頭の称名寺I式土器で、112の縄文はL.R.。113は沈線で区画された無文の口縁部下に、櫛描文が施されている。114は櫛描文が、115は細い沈線が認められる土器。116はR.Lの縄文を用いた帶状の磨消縄文と、口縁に刺突が施された後期中葉の加曾利B式土器。

D貝塚No.2トレンチ

トレンチの設定と検出された遺構（第66図）

本トレンチは、R 24-b②、c②、d②、e②グリッド及びS 24-a②グリッドにあたる東西2m×南北10mの調査区で、D貝塚東部の台地上縁辺に位置する。トレンチの長軸は貝塚が広がる斜面とほぼ直交する。地表面の状況は平坦であり、トレンチ北端で標高25.65m、斜面側の南端で標高25.55mを測る。なお、トレンチ内を小グリッドを単位に5分割したが、呼称については、小グリッド名を用いず、北から①～⑤区とした。

厚さ約35～60cmの表土層（I a, b層）を発掘した時点で、南部の③～⑤区で貝層の上面が、北部の①区でブロック状の粘土や遺構覆土と思われる暗茶褐色土が検出された。①～③区の東壁沿いに幅50cmのサブトレンチを設定し、さらに掘り下げたところ、③～⑤区の貝層（上部貝層）の下に潜り込む別の貝層（下部貝層）が確認さ



1a層：暗黃褐色土層 密土。縫まり有り、粘性無し。赤色スコリア（径1~2mm）を少星、白色のバミスを多量に含む。

1b層：暗黃褐色土層 旧表土層。縫まり有り、粘性無し。赤色スコリア（径1~2mm）、バミス、炭化物粒子（径2~3mm）を少量含む。

3層：暗黃褐色土層 縫まり有り、粘性やや有り。赤色スコリア（径1~2mm）を少星、バミスを多量に含む。

4層：黒褐色土層 縫まり、粘性有り。赤色スコリアと炭化物粒子を少量含む。

上面貝層：船上貝層 暗茶褐色の粘性の有る土が混じる。ハマグリ主体で、サルボ才も多い。

6層：黒褐色土層 縫まり、粘性有り。赤色スコリア、ローム粒子（径1~2mm）、炭化物粒子（径5mm程度）を少量含む。

7層：暗黒褐色土層 縫まり、粘性有り。赤色スコリアを少星、ローム粒子（径2~5mm）、炭化物粒子（径1~3mm）を多量含む。

下部貝層：船上貝層 赤色スコリアを少星、ローム粒子（径2~5mm）を多量に含んだ粘性の有る暗褐色土が混じる。ハイガイ、マガキが多く含まれる。

9層：暗黒褐色土層 縫まり有り、粘性やや有り。赤色スコリアを少星、ローム粒子（径1~3mm）を多量に含み、炭化物を少量含む。12層周辺には礁土粒子が少星含まれる。

10層：暗黃褐色土層 縫まり有り、粘性やや有り。径2~6mmの黄褐色ローム粒子が霜降りのように多量に含まれる。

11層：暗黃褐色土層 縫まり、粘性有り。黄褐色ローム粒子（径2~3mm）、赤色スコリア（径1~2mm）を含む。

12層：礁土ブロック

直層：赤褐色ローム層 縫まり、粘性有り。ハードローム層。

IV-V層：黄褐色粘土層 粘性有り。灰褐色と褐色の粘土が底に混じる。

灰褐色粘土層：褐色の鉄分が固まつたブロックを含む。IV-V層に比べて縫まりが無い。

第58号土坑覆土

14層：暗茶褐色土層 暗茶褐色土と暗黃褐色土が混じたもの。ローム粒子（径2~3mm）を多く含み、ロームブロック（径20~30mm）と炭化物を少量含む。

15層：暗茶褐色土層 ハードロームブロック（径20~30mm）、炭化物粘土ブロック（径5~6mm）を含む。

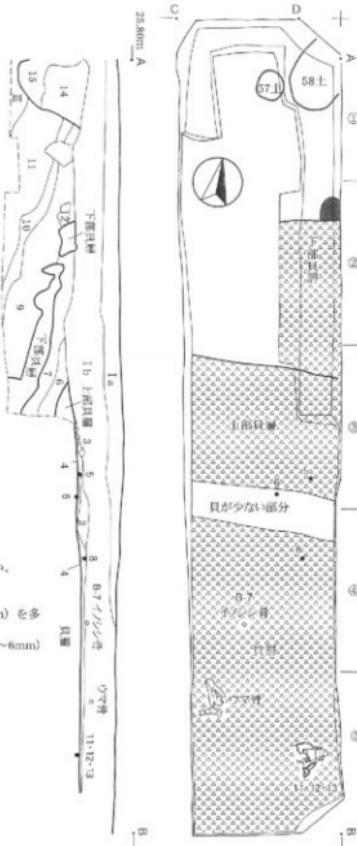


写真 50 D貝塚No.2 トレンチ全景

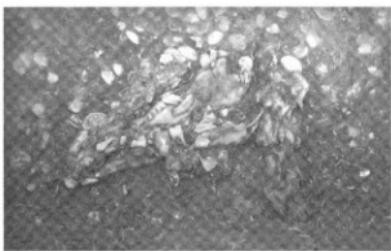


写真 51 D貝塚No.2 トレンチウマ骨出土状況

第66図 D貝塚No.2 トレンチ実測図

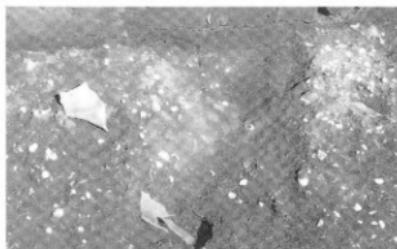


写真 52 D貝塚No.2トレンチ土器5,6出土状況

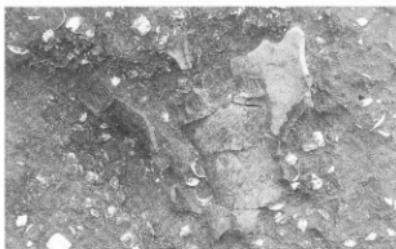


写真 53 D貝塚No.2トレンチ土器12出土状況

れた。ハマグリを主体とする上部貝層の上面はほぼ水平で、I層との間には暗黄褐色土層（3層）と黒褐色土層（4層）が薄く堆積していた。下部貝層はハイガイとマガキを主体とし、上部貝層との間には黒褐色系の上層（6, 7層）がみられ、下部貝層の下位には、暗黒褐色土層（9層）、暗黄褐色土層（10, 11層）が順に堆積し、ローム層であるⅢ層に至る。また、9層中には、下部貝層の下面に接して、ブロック状の焼土（12層）が認められた。

貝層以外の遺構としては①区で、1層下面を確認面とし、9層以下の上層群を掘り込んだ土坑2基（第57, 58号）が検出された。第58号土坑については、サブトレンチの発掘に伴い、覆土の調査を実施している。

一方、①区で検出された粘土の由来を調べるために、北壁に沿ってサブトレンチを設定したところ、粘土は台地の基盤を成す粘土層（IV～VI層相当？）であることが把握された。粘土層の南東側は崖状に急激に途切れしており、その崖面を覆うようにⅢ層が傾きを持って堆積していた。粘土層の浸食や崩落によって台地斜面の原形が形成され、上記した土層や貝層が順次斜面を埋める形で堆積した結果、現状の斜面際平坦部が形成されたことがわかる。

上部貝層の上面の観察では、③区と④区の境界付近に、幅50cm程の帶状に貝が少ない部分がみられたが、これは③区の貝層と④、⑤区の貝層とを分ける間層の可能性がある。③区の貝層上面からは、5, 6の阿玉台I b式土器の大型破片が出土しているのに対し、④区の貝層上面からは8～10の阿玉台II、Ⅲ式土器が出土し、さらに、⑤区の貝層上面からは、つぶれた状態で出土した土器12をはじめ、中期中葉の土器が検出されている。このことは、上部貝層が間層を挟んで③区と④、⑤区に分けられ

ることを傍証するとともに、斜面側に行くほど、貝層の時期が新しくなること示唆する。

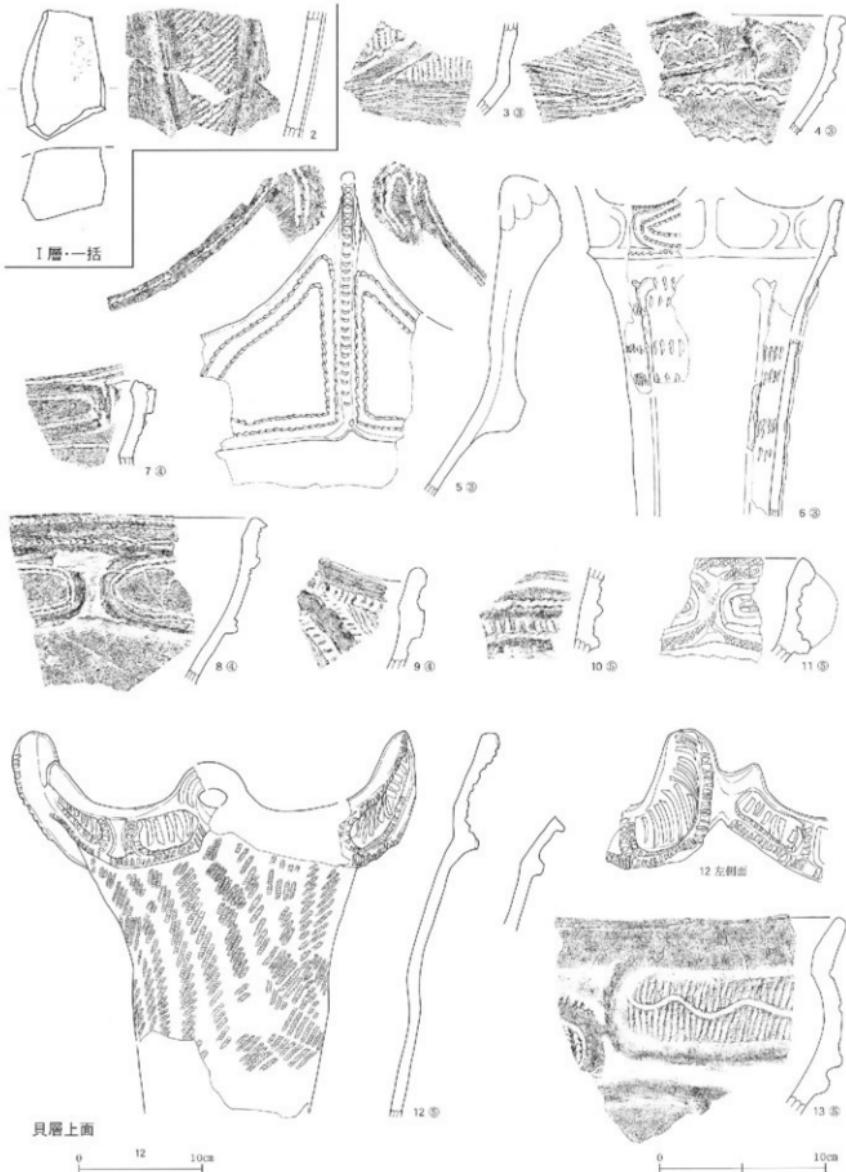
サブトレンチ内で検出された貝層は、サンブル採取している。上部貝層のサンブル箇所は③区にあたり、上記した上面出土土器からは、縄文時代中期前葉の阿玉台I b式期が想定される。貝層中から出土した土器も同期のものが最も新しい。6, 7層と下部貝層中からは、縄文時代早期後葉の条痕文系土器が主体的に検出され（6, 7層28点、下部貝層6点）、各層の形成時期も早期後葉と捉えられる。下部貝層からは早期中葉の沈線文系土器2点も出土している。なお、9層以下からの遺物の出土は無い。その他、④区の貝層上面からは、イノシシの寛骨（B7：寛骨臼、L）が、⑤区の4層上面からはウマの頸骨が検出された。ウマの頸骨については、取り上げていない。

出土遺物

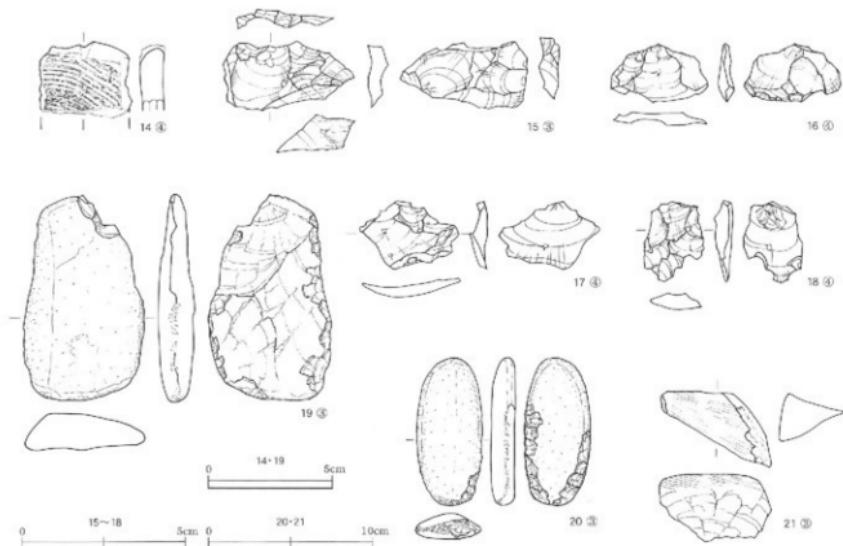
本トレンチから出土した遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器類、土器片錆、打製石斧？、磨石、敲石、砥石、石核、両極打法の剥離痕を残す石片、剥片碎片、貝刃である。

I層・一括出土遺物（第67図）1は磨石の破片で、磨面である表面に弱い敲打痕が残る。2は微隆起線でR Lの縄文部と無文部が区画された、縄文時代中期後葉の加曾利E IV式土器。

貝層上面出土遺物（第67, 68図）3～13は縄文土器。3は交点に円形刺突文を付けた細隆線区画内に沈線を充填した早期後葉の鶴ヶ島台式土器。外外面に条痕文がみられ、胎土に鐵維を含む。4～7は隆起線区画に付随して施文单位が1列の角押文が施された中期前葉の阿



第67図 D貝塚No.2トレンチ出土遺物（I層一括・貝層上面）



第 68 図 D貝塚No.2 トレンチ出土遺物（貝層上面）

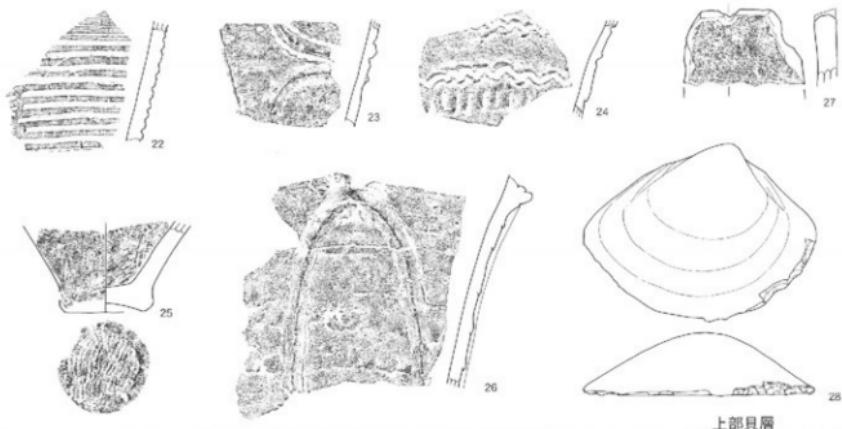
玉台 I b 式土器。6 は脇部に垂下する降起線と貝殻腹縁による刻目文を施す。復元口径（波底間）15.8cm。8 は中期前葉の阿玉台 II 式土器で、隆起線の区画内に半截竹管状工具の内皮側を用いた 2 列同時施文の角押文が施され、口縁部には同工具の外皮側を使った施文単位が 1 列の角押文がみられる。9～13 は中期中葉の土器。9 は隆起線に付随して爪形列が施された阿玉台 III 式土器。10 は隆線に沿って、ベン先状の連続刺突文と沈線列を施している。11 は LR の繩文が付された隆起線で区画した中に、交互刺突による小波状文と沈線を施した阿玉台 IV 式土器。

12 は胴中部が緩く括れ、口縁に向かって開く器形を呈する。隆線による楕円形の口縁部区画と一体となった耳状の把手と、円環状の突起がそれぞれ 2 単位認められ、それらの間の口縁は緩い波状をなす。楕円区画内には、刻みが加えられた下端を区切る隆線に沿って、幅広の角押文が施され、沈線が充填される。耳状の把手は楕円区画が縦にせり上がったもので、小さな山形突起と対になる。円環状の突起には孔があけられ、それに沿って沈線が施されている。胴部には楕円区画直下から、R L の原体を隙間を空けて縦方向に回転させた繩文がみられる。

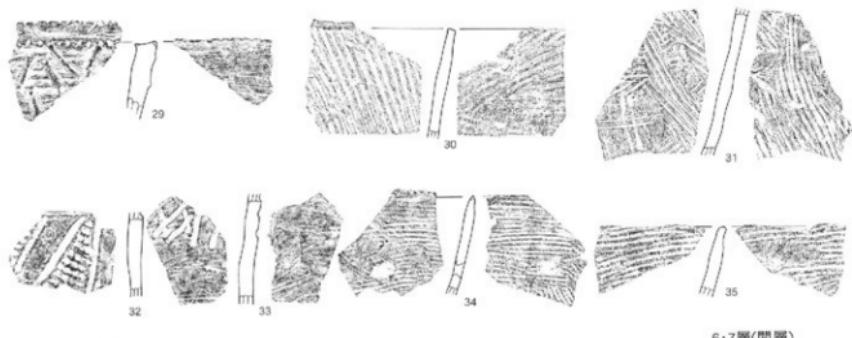
把手間の口径は 30.0cm。13 は無口の口縁部下に隆線による区画を設け、その中に R L の繩文やベン先状の連続刺突文を充填している。

14 は柳描文がみられる土器片錐。15 は黒曜石製の石核で、打面転移を繰り返している。16 は黒曜石の剥片を素材にした両極打法の剥離痕を残す石片で、表面に両極打法による剥離面が、裏面端部に細かい剥離痕が残る。17, 18 は黒曜石製の剥片。19 は片面に穂面を残す剥片を素材にした打製石斧？。剥離面の側縁には調整剥離が施され、刃部と側縁に弱い敲打痕がみられる。20 は扁平な楕円縫を素材にした敲石で、側縁の一部に調整剥離を施し、その側縁と下端部に敲打痕を残す。21 は分割された縫を素材とした砥石で、穂面と分割面の一部に研磨痕が認められる。

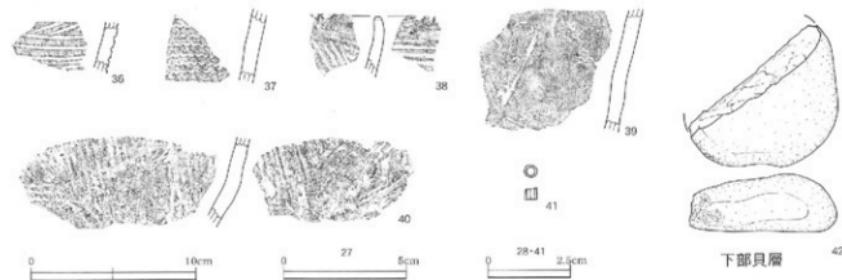
上部貝層出土遺物（第 69 図）22～26 は繩文土器。22 は太沈線文が施された早期中葉の田戸下層式土器。25 は早期後葉・条痕文系土器の底部破片。平底の底部も含めた内外面に条痕文が施され、胎土に纖維を含む。上底気味の底部径は 5.8cm。23～26 は中期の阿玉台式土器。23 には隆起線に 1 列の角押文が付隨し、24 には波状文と



上部貝層



6・7層(間層)



下部貝層

第 69 図 D 貝塚No.2 トレンチ出土遺物（貝層）

縦状文がみられる。26は胸部破片で、輪積痕を弱く消した上に断面三角形の隆起線を張り付けている。27は土器片錐の破片。28はハマグリの右殻を使った貝刀で、前背縁寄りの腹縁に刃が付けられている。

6. 7層出土遺物（第69図）29～35は条痕文が施され、胎土に纖維を含む縄文時代早期後葉の条痕文系土器。縁に刻みが付けられた幅のある口唇部を持ち、細隆線のみが施された29と、太い沈線で格子状の文様を描く33は、茅山下層式土器と思われる。32には沈線間に刺突列が充填され、34の口唇部には刻みが付く。

下部貝層出土遺物（第69図）36～40は縄文土器。細沈線文が施された36と、放射肋を持つ貝殻による腹縁文がみられる37は早期中葉の田戸下層式土器。38～40は胎土に纖維を含む早期後葉・条痕文系土器で、38、40の内外面と39の内面には条痕文がみられ、38の口唇部には刻みが施されている。41は分割されたツノガイだが、加工痕は明瞭でない。42は扁平縫を用いた嚴石の破損品。側縁角部に敵打痕が認められ、被熱による赤化が認められる。

E貝塚No.1トレンチ

トレンチの設定と検出された貝層・包含層（第70図）

本トレンチは、E貝塚に接する台地上縁辺から貝層のある斜面にかけて、グリッドとは別に任意に設定したもので、位置としてはZ 30とY 31グリッドにまたがり、長軸はグリッドの東西ラインと東→23度→北ずれる。当初は、地下レーダー探査の反応データの確認とE貝塚の範囲確認を目的として、幅2m×長さ10mのトレンチを、台地上縁辺に貝塚斜面と直交する形で設定した。この段階で、斜面側にあたるトレンチ東端で、土層の落ち込みが確認されたため、斜面にあたる東側に向けて、第70図のように8.5mトレンチを延長した。その結果、斜面の形成に関わる土層の堆積状況と、E貝塚の末端部を捉えることができた。さらにこの貝層の詳細な内容を把握し、サンプルを採取する目的で、トレンチ東端からさらにもう1m隔てて、1m四方の拡張区を設けている。

地表面の状況は、台地上にあたるトレンチ西部はほぼ平坦で、西端で標高26.50mを測る。台地縁辺直下は比較高差1～2m程の崖になっており、以後は約15度の緩斜

面となる。拡張区の東端で標高21.90mを測る。

本トレンチで確認された土層は、崩落土や二次堆積土などを含み、複雑な状況を呈していた。そのため、ここでは基本土層との対応はせず、基調となる土質の類似性によって、表土層群（H層）、暗褐色系土層（A層）、黒褐色系土層群（K層）、ローム系土層群（L層）、粘土系土層群（N層）、それに貝層（S層）に大別し説明する。

表土層群は植物の根の混入やそれを要因とする土壤化が著しい表層で、トレンチ全域で認められる。台地上のトレンチ西部では、表土層下にローム系土層（L 1層）が確認できたが、その上面で遺構は検出されなかった。崖部ではローム系土層（L 2層）下の台地基盤を成す粘土層群（N 2～4層）が急崖を成して途切れしており、崖地形の基本が、これらの粘土層の浸食や崩落によって形成されたことが分かる。粘土層群上には下から、ローム系土層（L 4, 5層）、黒褐色系土層（K 1層）、二次堆積と思われるローム系土層（L 12層）、暗褐色系土層（A層）、貝層（S 1～5層）が順に崖地形を埋める形で堆積し、崖下の緩斜面を形づくっている。また、崖部では、粘土層群の大きな塊（N 6～8層）を中心に、さまざまに上層（L 8～10層、K 2層など）がブロック状に乱れて堆積している様子が観察されたが、これはL 12層堆積以後に擾乱を受けた上層群と思われる。

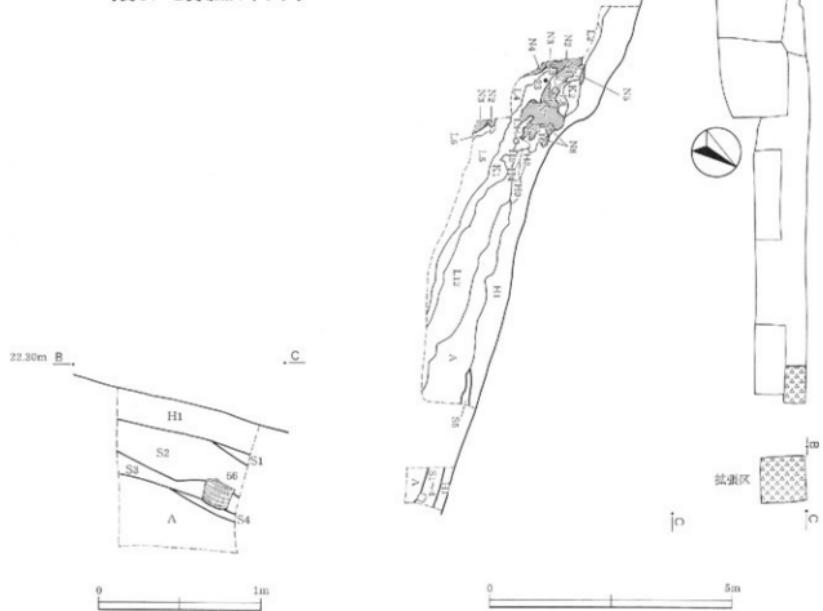
検出された貝層はE貝塚南側の末端部に相当する箇所にある。拡張区では表土層（H 1層）と暗褐色系土層（A層）の間に最厚約90cmのハマグリを主体とした貝層が確認され、4層に分層（S 1～4層）できた。

本トレンチから出土した土器は縄文土器のみである。緩斜面部に堆積したL 4, 5層からの遺物の出土は無く、K 1層から早期後葉の条痕文系土器が多数出土している。前期前葉の土器（29）も1点出土しているが、小片であることから、K 1層の堆積時期を早期後葉と想定し、崖を形づくった粘土系層群の浸食、崩落時期を縄文時代早期以前と捉える。また、K 1層の二次堆積と思われるK 2層にも多くの条痕文系土器が含まれており、上記の堆積時期を裏付ける。

K 1層より上位のL 12層とA層からは、最も新しい時期の土器として前期後葉のものが出土しており、当該期の堆積時期が想定される。型式が判別できる破片としては、L 12層では22の浮島I a式が、A層では20の浮島



写真 54 E貝塚No.1 トレンチ



第70図 E貝塚No.1 トレンチ実測図

表土層群

- H 1 層：褐色土層 表土層。上平に生根が多く入る。
H 2 層：黒褐色土層 H 1 層よりも黒味が強い粘土ブロック（径 30mm 程）が混ざる。土壤化の進んだ K 2 層か？ 植物生長多し。
H 3 層：褐色ローム土層 土壤化の進んだし H 2 層ないしは A 層か？
H 4 層：黒褐色ローム土層 線まり有り。径 1mm 以下の白色スコリアを含む。上層の影響で汚れている。
H 5 層：黒褐色土層 L 12 層が木の根によって土壤化が促進されたものか？ L 12 層と H 1 層ないしは H 2 層が混じったもの。

暗褐色系土層群

- A 層：暗褐色～黒褐色土層 黏性無し。径 1 ~ 2mm の黄色スコリアを多量に含む。酸化すると黒色を呈す。谷無谷有り。

黒褐色系土層群

- K 1 層：黒褐色土層 線まり、粘性無し。多量の黄色スコリア（径 1mm 以下）を含む。径 1mm 以下の橙色スコリアも極少量混ざる。
K 2 層：K 1 層に準ずる。

ローム系土層群

- L 1 層：褐色土層 線まり、粘性有り。径 1mm 以下のくすんだ黄色スコリアを含む。
L 2 層：褐色土層 茶色味が強い。径 1 ~ 2mm の白色スコリアが目立つ。黄色スコリアと黒色粒子（径 1 ~ 3mm）も含む。武藏野ローム対応か？
L 3 層：黒褐色ローム土層 径 1mm 程のくすんだ黄色スコリアを多く含む。微小の白色スコリアも若干含む。
L 4 層：黒褐色ローム土層 L 3 層に比べてやや粒度を増す。ただし、谷無へ行く程、漸次明るくなる。
L 5 層：黒褐色～褐色土層 谷側面。線まり、粘性有り。暗味は増す。
L 6 層：N 2 層との小ブロックが混じった L 5 層。
L 7 層：明褐色ローム土層 L 2 層に近似するローム土層。粘性やや有り。径 1mm 程の橙色スコリア、黒色スコリアが少量混じる。径 1mm 以下の白色スコリアも少量含む。
L 8 層：黒褐色土層 上部は K 2 層の、下部は N 6 層の影響を受ける。ローム系土層群に入れたが、むしろ K 2 層と N 6 層が混じりあった感じである。径 1 ~ 2mm の淡い黄色スコリアを多く含み、褐色スコリアも若干含む。径 1mm 以下の白色スコリアも含む。
L 9 層：黄褐色ローム土層 黄色スコリアを多量に含み、N 1 層上の小ブロックが混じる。L 3 層に近似。
L 10 層：黒褐色ローム土層 チョコレート色を呈す。線まり、粘性無し。L 2 層を母材とし、径 1mm 以下の白色スコリアを含む。
L 11 層：黄褐色ローム土層 ややチョコレート色を帯びる。線まり、粘性有り。L 2 層を母材とし、白色スコリア（径 1 ~ 2mm）、灰褐色粘土小ブロック（径 3mm 程）黒色スコリア（径 1mm 以下）を含み、径 2mm 程の褐色スコリアを極少量含む。
L 12 層：黄褐色土層 L 5 層に比べてやや暗色部が多く、暗色部が大きな斑状に入る。粘性有り。径 1 ~ 3mm の黄色スコリアを多量に含む。

粘土系土層群

- N 1 層：灰褐色粘土層 暗色部が斑に混じる。径 1mm 以下の白色粒子が目立つ。
N 2 層：灰色粘土層 径 1mm 以下の白色粒子を機で磨く。
N 3 層：灰白色粘土層 径 1mm 以下の白色粒子が粘土の半分以上を占め、そのため粉っぽい感じを呈する。
N 4 層：灰白色粘土層 部分的に径 10mm 程の橙色度や黒度がみられる。
N 5 層：くすんだ青灰褐色土層 くすんだ青灰色粘土が基調土で、H 1 層土と L 2 層が混じる。径 1mm 以下の淡い黄色または白色スコリアが多く混じり、径 1mm 程の褐色スコリアも若干含まれる。
N 6 層：汚れた灰褐色粘土層 N 3 層を母材とする。
N 7 层：灰褐色土層 N 4 层土を基調にする。径 1mm 以下の白色スコリアを多量に含み、3 ~ 5mm の橙色斑が点在する。
N 8 層：灰褐色粘土層 N 1 層の崩落ブロック。径 1mm 以下の白色スコリアを多量に含む。

貝層（S 1 ~ 4 層は拡張区検出の貝殻）

- S 1 層：泥質貝片 増殖色土が混じるが、S 2 層より貝片率が若干高い。縦まり有り。ハマグリを主体にオキシジミ、ウミニナ類が目立つ。破錆貝片が多い混じる。
S 2 層：泥質貝片 増殖色土が混じるが縦貝層に近い。縦まり有り。暗色殻がブロック状にまとまって混じる。ハマグリを主体に、シオフキ、オキシジミ、アサリ、カキ、アカニシ、イボニシ、クニニガメがみられる。破錆貝片を含む。
S 3 層：泥質貝片 増殖色土が混じるが、S 1 ~ 3 層の中でも最も貝片率が高い。縦まり有り。ハマグリ主体で、アサリ、オキシジミがみられる。
S 4 層：泥質貝片 増殖色土中に少量の貝、貝片が混じる。ハマグリ主体。貝は比較的頑固。
S 5 層：泥質貝片 増殖色土中に少量の貝、貝片が混じる。縦まりやや有り。ハマグリ主体。貝は比較的脆弱。



写真 55 E 貝塚No.1 トレンチ崖部土層断面



写真 56 E 貝塚No.1 トレンチ拡張区北壁貝層断面

I a式と21の諸磯b式が認められた。貝層からは前期後葉の浮島Ⅲ式土器の大型被片が複数出土しており(30, 37, 51, 52)、貝層の時期は同型式期と捉えられる。

なお、現地での遺物取り上げ時の層名及び注記は、K 1層が黒色土、K 2層が崖部分黒色土、L 12層が暗茶褐色土、A層が暗褐色土である。

出土遺物(第71, 72図)

出土した遺物は、縄文上器、土製抉状耳飾、敲石、研磨剥片、碎片、貝輪未成品である。

H層出土遺物(1~11) 1, 2は早期後葉の条痕文系土器で、胎土に纖維を含む。1は突起から垂下する隆線と横位に巡らされた隆線によって段を成す口縁部が区画された茅山下層式の破片で、区画内に単沈線、隆線上に刻みが施されている。3は前期前葉の植房式に相当し、胎土に纖維を含む。7本歯の櫛齒状工具で小波状文が描かれている。4は削り状の整形痕が残る無文土器の口縁部破片。5~8は前期後葉の土器。5にはL.Rの縄文上に平行沈線が描かれている。平行沈線で区画文と変形状の文様が描かれた6, 7は浮島I b式土器と思われる。7には区画文の後から施された波状貝殻文も施されている。変形爪形文B類で区画された中に、平行沈線が常に施された8は、浮島II式に該当する。9はL.Rの縄文が施された浮線文がみられる諸磯b式土器。10はR.L.Rの複節縄文と太い沈線が施された破片で、中期の加曾利E式か。11は両面に研磨痕を残す粘板岩製の薄い剥片で、周囲は折り取られている。

K 2層出土遺物(12~16) K 2層からは9点の早期後葉の条痕文系土器と1点の前期後葉の土器が出土した。12~15は条痕文系土器で、胎土に纖維を含む。12には刻みの付いた隆線がみられる。16は変形爪形文A類が3条みられる口縁部破片で、浮島I b式土器に相当する。

貝層上面出土遺物(17~19) 17, 18は前期後葉の浮島式土器で、R?を軸に巻いた撚糸文が施された17は浮島I式に相当し、18には輪積底と波状貝殻文がみられる。19は分割された円錐を素材にした敲石で、分割面の縁辺や端端部などに駆打痕が認められる。

A層出土遺物(20, 21) A層から出土した遺物は図示した前期後葉の土器片2点のみである。20はRを軸に巻いた撚糸文を地文に平行沈線とそれを継ぐ刺突文

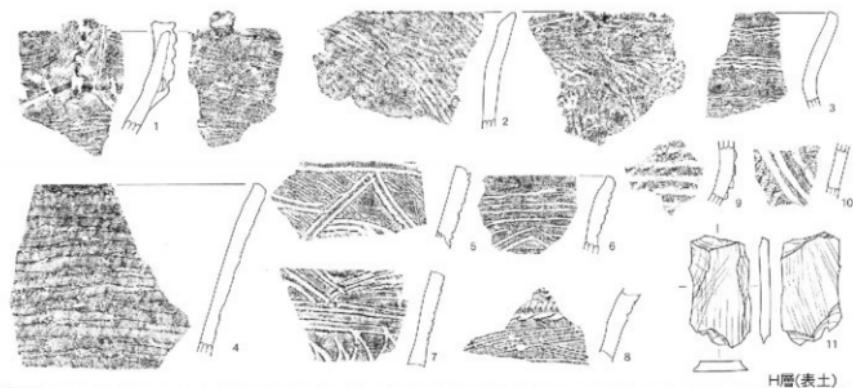
が施された浮島I a式土器。21はL.Rの縄文と浮線文が施された諸磯b式土器。

L 12層出土遺物(22~24) L 12層から出土した遺物は前期後葉の土器片5点のみである。22は連続爪形文が施された浮島I a式土器。23には平行沈線が、24にはR.Lの縄文がみられる。

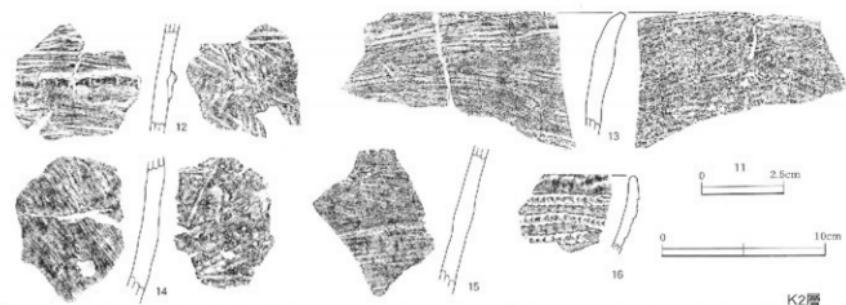
K 1層出土遺物(25~29) K 1層から出土した土器は、早期後葉が10点、前期前葉が1点、分類不明が2点である。25~28は胎土に纖維を含む条痕文系土器で、26には刺突が施された隆線が、27, 28には口唇部に刻みがみられる。29は前期後葉の黒浜式期の土器で、纖維を含み、平行沈線による肋骨状の文様と刺突が施されている。

貝層出土遺物(第72図30~56) 貝層からは早期後葉の土器7点、前期前葉の土器2点、前期後葉の土器89点が出土している。30はトレンチ延長部のS 5層から出土した前期後葉の浮島Ⅲ式土器。口縁部が外反する器形で、復元口径は32.2cm。外削状の口唇部に棒状工具による刻みがみられ、口縁部へ胴部には三角文が重層して施されている。31は貝層中出七で、変形爪形文B類間に斜めの刻み列がみられる浮島Ⅲ式と思われる破片。32, 33は拡張区のS 1層出土土器で、32は胎土に纖維を含み、附加条第1種附加1条のL.R+rとR.L+1の縄文が羽状に施された前期前葉の破片。33はRを附加した条縄文上に平行沈線がみられる前期後葉の浮島I式土器。

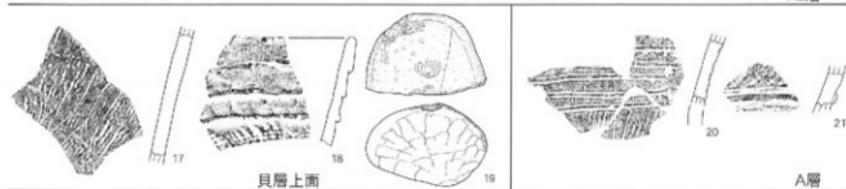
34~46は拡張区のS 2層出土遺物。34は胎土に纖維を含み、平行沈線で縦位の区画文と木の葉状の文様が描かれた土器。35は無文地に平行沈線が描かれ、36は有節平行線文間に横長の刺突列が施された土器で、两者とも前期後葉の浮島I b式と思われる。37は直線的に聞く、三角文が施された浮島Ⅲ式土器で、復元口径24.2cmを測る。口縁部に2段の輪積み痕を残し、条縁と凹文が施されている。38~42は前期後葉の浮島式土器。38, 39は同一個体の破片で、変形爪形文B類と放射肋を持つ貝殻による波状貝殻文がみられる。40, 42は波状貝殻文が施された胴部破片で、40が放射肋を持つ貝殻を、42が放射肋がない貝殻を使っている。41は直線的に聞く器形を呈し、口唇部に刻みが施され、以下に半截竹管状工具による平行沈線と刺突列がみられる。43は平行沈線に刺突を加えた爪形文で文様が描かれた前期後葉の諸磯b式土器で、胎土に小礫を含む。44, 45は土製抉状耳飾の破片。44は表



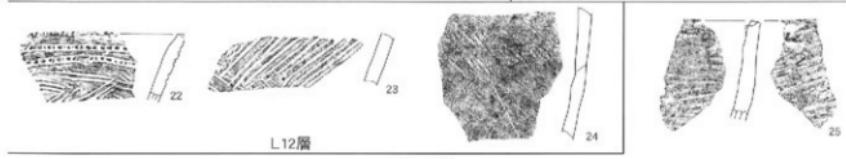
H層(表土)



K2_{mm}



A層

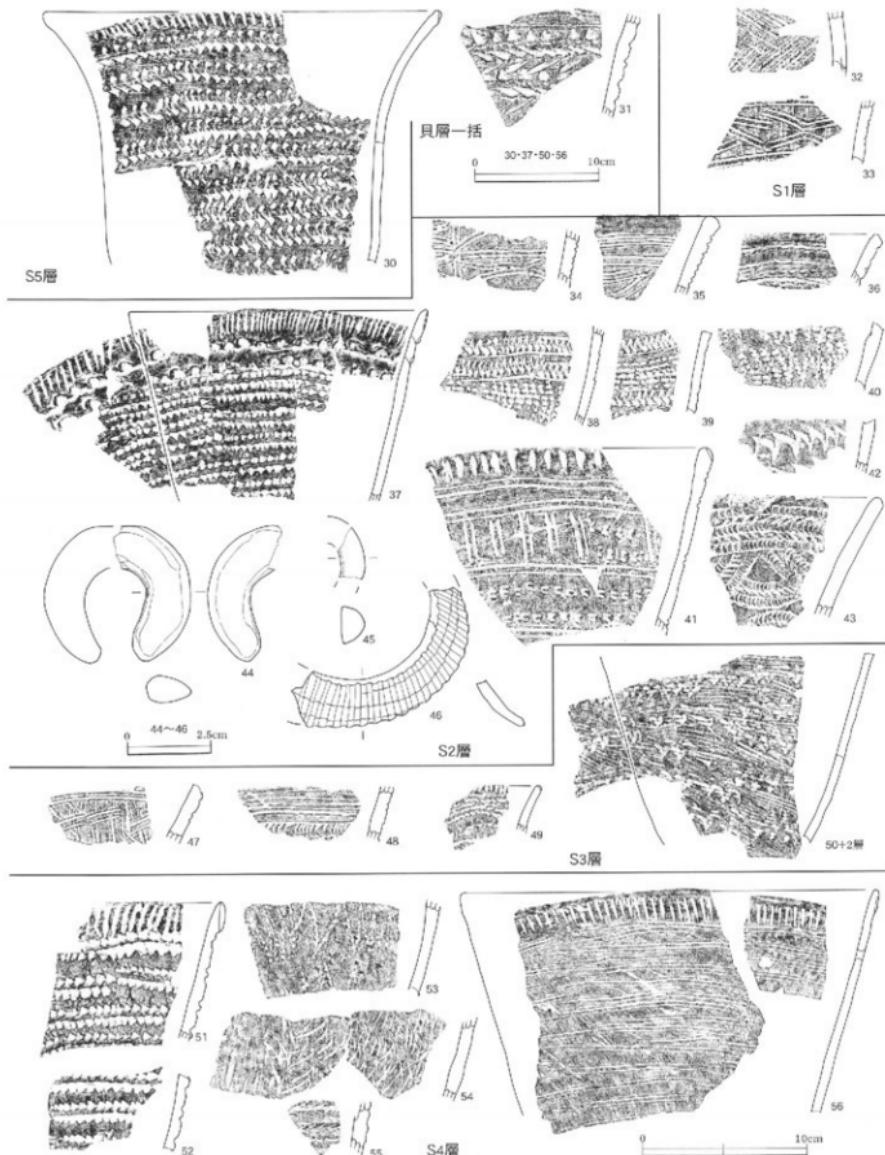


L12層



K1層

第 71 図 E 貝塚 No. 1 トレンチ出土遺物 (包含層)



第72図 E貝塚No.1 トレンチ出土遺物（拡張区貝層）

面が磨かれ、断面が扁平なのに対し、45の断面は厚みがありD字状を呈す。46はアカガイを素材とした貝輪未成品の破片で、研磨は認められない。

47～50は拡張区S3層出土の前期後葉の浮島式土器。47はLの撚糸文を地文に平行沈線文が描かれた浮島Ia式土器。48は変形爪形文B類と平行沈線文が施された浮島II式土器。49は口唇部の刻みと半裁竹管状工具による三角角（もしくは有節平行線文）がみられる浮島III式土器。50はS2層の破片と接合した深鉢形土器の胴部破片で、放射肋を持つ貝殻による条線施文後に、同貝殻による波状貝殻文が粗く施されている。

51～56は拡張区S4層出土の前期後葉の土器。51、52は三角文が施された浮島III式の同一個体破片で、口縁部に条線がみられる。53、54は波状貝殻文が施された浮島式土器で、53が放射肋を持つ貝殻を、54が放射肋が無い貝殻を使っている。55は刻みが施された浮線文がみられる諸磯I式土器。56は口が直線的に開く器形を呈する浮島式土器の大型破片で、復元口径34cmを測る。口縁部に条線が施され、以下は平行沈線が重層して描かれる。

G貝塚No.1トレーナー

トレーナーの設定と検出された遺物（第73図）

本トレーナーは、G貝塚が存在する斜面に接した台地平坦部東縁のK31グリッドに位置するが、貝塚斜面と直交させるために、グリッドとは別に任意に設定している。規模は幅2m×長さ6mで、長辺はグリッドの東西ラインとは東-30度-北ずれる。地表面は東端で24.55m、西端で25.25mを測り、斜面側の東へ向かい約6度の勾配で緩やかに傾斜している。

厚さ約10～30cmの表土（I層）を発掘した段階で、斜面側から順に、貝層、包含層（II層）、ローム層（III層）、灰褐色粘土層（IV層）が確認された。次に、トレーナー北壁に沿って幅約50cmのサブトレーナーを設定し、これらの上層群の堆積状況を調べたところ、下位からIV層、III層、II層、貝層の順に斜面を埋める形で各層が傾斜堆積している状況が把握された。III層とII層の層界の傾斜角は約30度、II層と貝層の層界の傾斜角は約20度である。

II層は基本土層の細分層に対応しなかったため、本トレーナー独自の細別層名をつけている。II①層は貝層上に

薄く堆積した土層で、II②～II④層はIII層と貝層の間に堆積した土層群である。貝層はG貝塚の台地側末端部に相当するハマグリを主体にサルボオが目立つ混土貝層であり、1～8層に分層できた。各貝層とも谷側に向かつて傾斜を持って堆積している。なお、6層は貝層間の土層であるが、土質がI層に近いため擾乱の可能性がある。

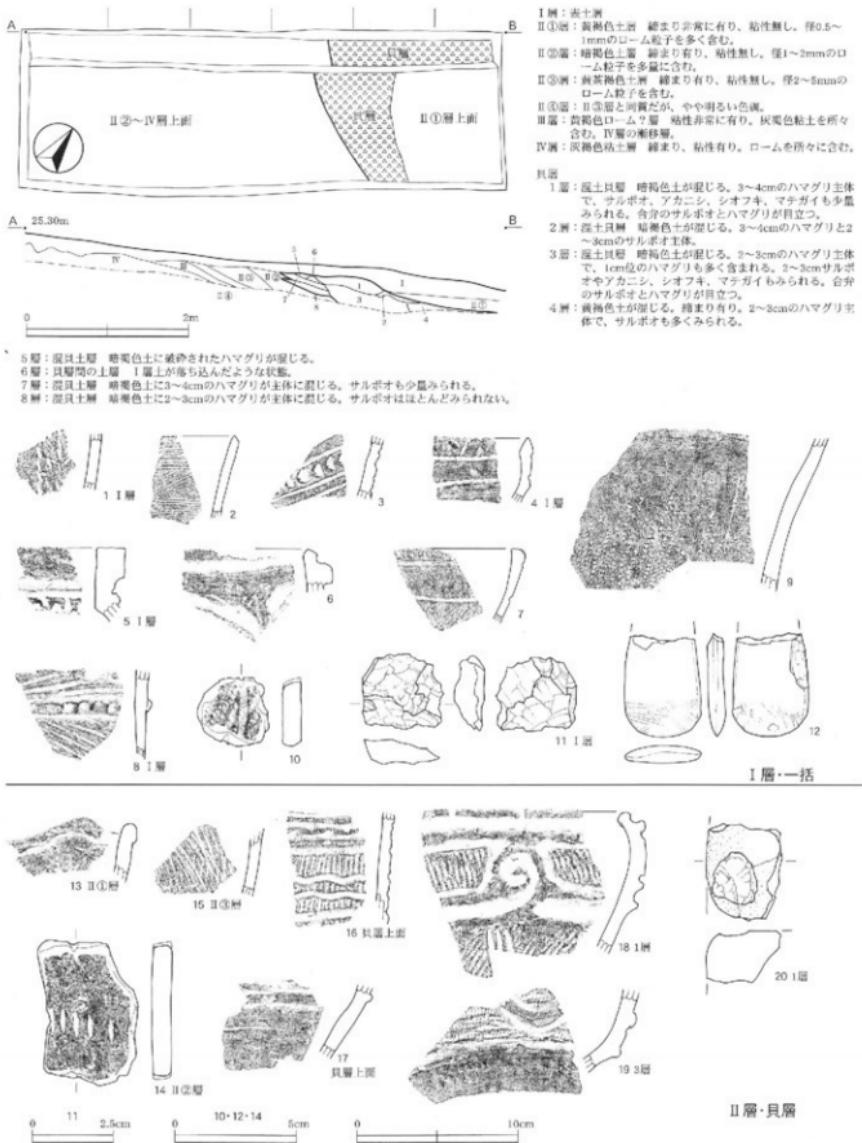
サブトレーナー内の土層、貝層については、現地で仮層名を付けて遺物の取り上げや貝層サンプルの採取を行っている。仮層名との対応は、II①層=仮1層、II②層=仮7層、II③層=仮3層、II④層=仮4層、貝層1層=仮2層、貝層3層=仮6層、貝層5～8層=仮5層である。

I層からは縄文時代早期の撚糸文系土器から陶磁器片までが出土している。貝層中からは、最上位の1層から18の中期後葉の加曾利E II式土器の破片が、3層から19の加曾利E I式の破片が出土し、それより新しい時期の土器は検出されていない。貝層より下位のII②～II④層では、最も新しい時期の土器として、図示していないが加曾利E式と思われる小片がII③層から出土している。以上の在り方から、貝層の時期を縄文時代中期後葉加曾利E I～II式期と捉える。なお、貝層より上位のII①層からは、縄文時代中期後葉の土器とともに、後期後葉の土器小片が出土している。

出土遺物（第73図）

出土した遺物は、縄文土器、須恵器、陶磁器類、土器片鉗、磨製石斧、石皿、両極打法の剥離痕を残す石片である。

I層出土及びトレーナー括遺物（1～12）1～9は縄文土器。1はRの撚糸を軸に巻いた撚糸文がみられる早期前葉の土器。2、3は早期中葉の沈線文系土器。2は口唇部が外削ぎ状を呈し、縄沈線文と貝殻腹線文によって鋸歯状の文様が描かれた土器で三戸式に、3には縄沈線文と刺突文が施されており出戸下唇式に比定される。4は中期の阿玉台I式土器で、隆起線に沿って1列の角押文がみられる。5は無文の口縁部下に沈線間を交互刺突することによって表出した小波状文がみられる破片で、中期中葉の浅鉢形土器と思われる。内外面に赤色塗彩の痕跡が残る。6は隆線と沈線によって口縁部に文様帯が描かれた中期後葉の加曾利E式の破片。7は後期中葉の



第73図 G貝塚No.1 トレンチ実測図及び出土遺物

加曾利B式土器で、口唇部下に1条の沈線と細かい刺みを施し、口縁部下は磨消繩文帯となる。8は同式の粗製土器で、太い条線と押捺が施された紐線文がみられる。9はRLの単節繩文が施された胴部破片。

10は小型の土器片錠で、多角形に整形され、側面が部分的に摩滅している。2ヶ所の切目を有し、文様としてはLRの繩文地に沈線が認められる。11はチャート製の両極打法の剥離痕の残る石片。剥離面は株面を除いてすべて凹面で構成されており、素材の形状は不明。片面に両極打法による上下からの最終剥離面が認められる。12は扁平な自然礫を素材にしたと思われる磨製石斧で、基部が欠損している。研磨は刃部の裏面のみにみられる。

II層・貝層出土遺物（13～20）13、15～19は繩文土器。13は口縁部に隆帯が施された中期中葉の破片で、隆帯上には繩文もみられる。胎土に白色雲母粒を含む。15は外面に条痕が施された早期後葉の土器で、胎土に纖維

を含む。16はLの撓糸文を地文に波状の沈線や交互刺突による小波状文が描かれた土器で、中期後葉の加曾利E式のいわゆる「連弧文土器」に該当する。17は隆起線がみられる破片。18、19は貝層中から出土した中期後葉の加曾利E式土器。括れの無い器形を呈する18は加曾利E II式に相当しよう。口縁部はRLの繩文施文後に隆線や沈線で文様が描かれ、胴部は口縁部の文様帶を区画する隆線施文後にRLの繩文と3条の沈線が施されている。19は加曾利E I式に該当し、口縁部にはLRの繩文と隆線が施され、隆線に沿って沈線状のナデがみられる。頭部は無文帯となる。

14は刻目文がみられる中期阿玉台式土器の胴部破片を用いた土器片錠で、珍しく切目が施された長軸を素材の土器の垂直方向にとっている。側面の摩滅はほとんど認められない。20は石皿の破片と思われる石器で、平坦な上面が磨滅面となっている。

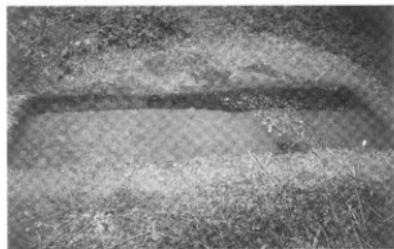


写真 57 G 貝塚No.1 トレンチ全景



写真 58 G 貝塚No.1 トレンチ貝層断面

IV. 貝層出土の動物遺体群の分析

1. 貝層の分析方法

貝層のサンプル採取

今回の試掘調査では、縄文時代早期後葉～後期初頭に及ぶ貝層が検出された。ひとつの遺跡でこれだけ多期にわたる貝層が確認された例は稀少であり、陸平貝塚の特徴ともいえる。検出された貝層については、その主な構成要素である貝類や骨類といった動物遺体群の在り方を定量的に分析するため、サンプル採取を実施した。

サンプル採取をおこなった貝層は、A貝塚No.1トレンチ西部のサブトレンチ内における中期前葉・阿玉台I b～II式期の貝層、B貝塚No.1トレンチの深掘部における中期初頭・五領ヶ台II式～阿玉台I a式期の貝層、D貝塚No.1トレンチのサブトレンチ内における後期初頭・称名寺式期の貝層、D貝塚No.2トレンチのサブトレンチ内における早期後葉と中期前葉・阿玉台I b式期の2つの貝層、E貝塚No.1トレンチの拡張区における前期後葉・浮島III式期の貝層、G貝塚No.1トレンチのサブトレンチ内における中期後葉の加曾利E式期の貝層である(Ⅲ-2参照)。

サンプル採取の取り上げ単位は、狭い範囲での平面的な発掘による採取のため、最終的な断面観察により把握された層位よりも概して大まかなものであり、地点によっては一部対応ができないサンプルもある。層位との対応も含めた各サンプルの詳細については、次節の表3に示した。

現地採集資料

貝層サンプルを採取した箇所以外の調査区内からも、多数の骨類(脊椎動物遺体)が検出され、現地で取り上げをおこなっている。これらの資料を現地採集資料と呼ぶ。

骨類が検出され、現地採集したトレンチは、貝層が検出されたA貝塚No.1トレンチ、B貝塚No.1トレンチ、B

貝塚No.2トレンチ、D貝塚No.1トレンチ、D貝塚No.2トレンチであり、出土層位は、貝層をはじめ表土層や包含層それに擾乱層に及ぶ。そのため現地採集資料の多くは厳密な時期を認定できない。本書では現地採集資料をトレンチ単位で掲載報告するが、時期については出土状況やトレンチ内で確認・想定された貝層の時期を参考に、A貝塚No.1トレンチ、B貝塚No.1トレンチ、B貝塚No.2トレンチ、D貝塚No.2トレンチの現地採集骨類を縄文時代中期?、D貝塚No.1トレンチの現地採集骨類を縄文時代後期?と、大まかに捉えておく。

なお、A貝塚No.1トレンチの第52号土坑と第4号住居跡、B貝塚No.1トレンチの住居跡群(第13～15号)から、まとまった骨類の検出がみられたが、第52号土坑は縄文時代中期中葉に、B貝塚No.1トレンチの住居跡群は縄文時代中期に該当する。一方、第4号住居跡は平安時代のものである。

動物遺体の選別と分析の対象

貝層サンプル採取時に目に着いた大型の土器や石器それに骨類などは、現地採集資料として個別に取り上げているが、貝層サンプル本体は取り上げ単位ごとにビニール袋に収納し、整理作業所に持ち帰った。サンプルは整埋作業所で袋から遺物収納箱に移し替え(一袋を複数の箱に分割したもの有り)、箱単位にサンプル整理番号を付け台帳を作成している。

まず、遺物収納箱で自然乾燥させた後、整理番号ごとに、収納箱の容積をもとに体積を算出した。次に、サンプルを乾燥状態のまま6mmメッシュの篩にかけ、貝類や骨類などの動物遺体、及び土器や石器などの遺物を選別した。この際、貝類については大まかな種別の分類をおこなった上、篩を抜けた土壤とともに、収納箱に入れ一旦保管している。

作業の再開にあたっては、まずサンプルの重量を計量

し、6mm メッシュの篩を通過したサンプル全てを対象に、改めて 5mm、2.5mm、1mm メッシュの篩を使った水洗選別をおこなった。この段階で、貝類と脊椎動物遺体については樋泉岳二氏に、微小貝については黒住耐二氏に分析を依頼することにし、対象とするサンプルを選定した。

具体的には、各地点・各層準ごとに 1 サンプルを選び分析対象としたが、A 貝塚 No.1 トレンチのサンプル群については層位の対応が不十分であり、同時期の貝層分析がすでに実施されていることから[美浦村教委 2004] 対象から除外している。また、G 貝塚 N.1 トレンチのサンプル群も層位が対応できるものが限られていたため、ひとつの層準のみ（1 層：加曾利 E II 式期）の分析に留めている。以上の分析対象サンプルのうち、貝類については、5mm メッシュ選別資料を、脊椎動物遺体は全メッシュ選別資料を、微小貝類は主に 2.5mm・1mm メッシュ選別資料を対象としている。さらに、脊椎動物遺体については、全サンプルにおける 6mm 及び 5mm メッシュ選別資料と、発掘中に調査区全域で現地採集されたも

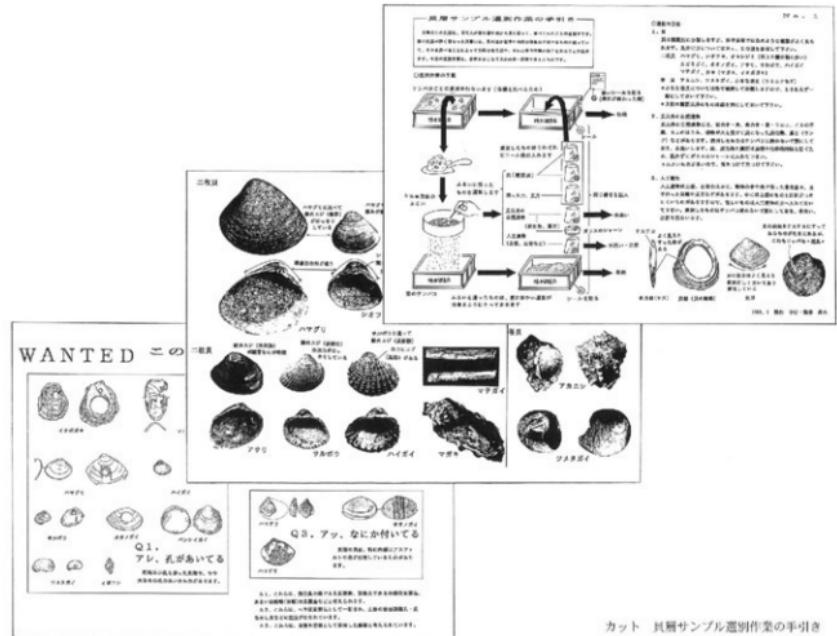
のも分析対象とした。なお、1mm メッシュ資料については、半量に分け、一つは脊椎動物遺体の、残り半分は微小貝の分析にあてている。

付記

今回の成果については、[中村 2008] でその一部を使用しているが、その中の「図 23」と、本書 IV-2 の樋泉氏報告（次節）で示された脊椎動物遺体の包含密度と魚類遺体組成について付記しておきたい。

まず、中村図では 5mm メッシュデータに、サンプル箇所から現地採集された資料を加算してあること、中村図の A 貝塚データが、今回の試験調査時のデータではなく、1997 年度調査時のものを使用していることの 2 点が樋泉氏報告と異なる。

また、中村図の 2.5mm、1mm メッシュを対象としたグラフでは、A 貝塚を除く 1mm メッシュデータが半量であることを計算し忘れている。同メッシュの包含密度と魚類遺体組成は樋泉氏のものが正しい。この場をかりてお詫びし訂正したい。



2. 貝類・脊椎動物遺体の分析

樋泉 岳二

陸平貝塚は茨城県美浦村、霞ヶ浦南岸のほぼ中央に位置する大規模な縄文貝塚である。本遺跡では1987年に実施された確認調査において、縄文時代早期後葉～後期初頭にいたる貝層から動物遺体（貝殻・骨類）が大量に採集された。ここではその分析結果を報告する。

分析資料と分析方法

分析資料

資料は採集方法によって、(1) 発掘現場において目視確認され手で拾い上げられた資料（以下「現地採集資料」。骨のみ）と、(2) 貝層サンプルの水洗によって採集されたもの（以下「水洗選別資料」）の2種類に分かれている。

水洗選別資料は、A貝塚No.1トレンチ（阿玉台I b～II式期=縄文I中期前葉）、B貝塚No.1トレンチ（五領ヶ台II式～阿玉台I a式期=縄文I中期初頭）、D貝塚No.1トレンチ（称名寺式期=縄文後期初頭）、同No.2トレンチ（下層：条痕灰土上器期=縄文早期後葉、上層：阿玉台I b式期=縄文I中期前葉）、E貝塚No.1トレンチ（浮島III式期=前期後葉）、G貝塚No.1トレンチ（加曾利E式期=中期後葉）の各貝層からサンプルとして採集された貝殻・骨類である。

貝層サンプルの詳細を表3に示した。サンプルの採取方法は調査区（トレンチ）によって異なり、多くの場合は貝層の各層準から任意にブロックサンプルが採取されているが、D貝塚No.1トレンチとE貝塚No.1トレンチでは貝層の上位から下位に向けて連続的なサンプルが採取されている（表3参考欄参照）。水洗に使用したメッシュは5mm、2.5mm、1mmの3種である。

分析方法

貝類は各地区貝層の各層準の貝層サンプルの中から、それぞれ1サンプルを抽出して分析した（表4）。ただし、A貝塚については1997年度調査においてすでに同時期の良好なサンプルを用いた分析結果〔中村編2004；樋泉2004〕が得られているため除外した。分析対象とし

た資料は5mmメッシュ上で分離された資料（以下「5mm資料」）で、二枚貝は殻頂、巻貝は種類に応じて殻口または殻軸を残す資料を抽出して同定・計数した。同定に際しては、黒住耐二氏（千葉県立中央博物館）のご教示を賜った。最優古種であるハマグリについては殻長を計測した。計測は方眼紙において1mm単位で行った。

脊椎動物遺体（骨類）については、現地採集資料と水洗5mm資料は全ての骨（擾乱層を除く）を分析対象とした。2.5mm・1mm資料については、貝類分析を実施したサンプル（表3の2.5mm・1mm骨重量の記載があるもの）に分析対象を限定した。これらの中から、魚骨では主上顎骨、前上顎骨、歯骨、角骨、方骨、椎骨の全資料およびその他同定可能な資料を抽出し、同定用資料とした。爬虫類、鳥類、哺乳類では部位の判定可能な資料を同定用資料とした。同定方法は現生標本との比較を原則とした。同定に用いた現生標本は、筆者の所蔵標本のほか、西木豊弘氏（国立歴史民俗博物館）の所蔵標本も参照させていただいた。

分析結果

貝類

同定結果の一覧を表4に示した。同定された分類群数（表2）。陸産貝を除く）は、腹足綱（巻貝類）17、掘足綱1、二枚貝綱19、頭足綱1である。また貝類以外の無脊椎動物としてカニ類の鉗脚が若干検出されている。以下、同定所見に注釈を要する種類について簡単に記載する。

ウミニナ類 各時代ともウミニナ、ホソウミニナ、イボウミニナが混じる。判別困難な資料はウミニナ類として括したが、その多くはウミニナかホソウミニナと思われる。

ハイガイ 早期後葉のD貝塚No.2トレンチ下部貝層から多産した。殻長30mm前後の小型個体が主体である。

マガキ 各時代とも殻長3～4cm程度の小型個体が多いが、早期後葉には最大6cm程度のやや大きめの個体

表2 陸平貝塚 1987年度調査で採集された動物遺体種名一覧。後葉貝は除外した。*を付したものは後葉に混入と思われる。

軟体動物門	Mollusca		脊椎動物門	Vertebrata
腹足綱	Gastropoda		軟骨魚綱(板鰓亞綱)	Chondrichthyes(Lamnibranchii)
スガイ	Turbo (Lunella) cornuta creensis		サメ類	Lamniformes ?
ヒロコウカノコ	Neritina (Dostia) cornucopia		アカコイidae	Dasyatidae
イシコガイ	Citharus retrospicula		裸骨魚綱(真骨亞綱)	Osteichthyes (Teleoste)
ウミニン	Batillaria multiformis		マツリidae	Serranidae melanostictica
ウミコニナ	B. cumingi		サッパ?	Sardinella canalis ?
イボコニナ	B. zonalis		コノシロ	Konosirus punctatus
フレーナタリ	Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum		カタクチイシ	Engraulis japonicus
ヘナダリ	C. (Cerithidea) cingulata		ウナギ科	Anguilla sp.
カワアイ	C. (C.) iijimairants		コイ科	Cyprinidae
ツメコガイ	Glossula didyma		ダツ科	Belontidae
ハナツメタ	G. reticulata		サリモ	Hypseleotris sp.
カゴコガイ	Bedeva berleffi		ボウズ	Megabalanus sp.
イボニシ	Thais (Ethisha) clavigera		スズキ属	Lateslabrax japonicus
アカニシ	Rapana venosa		キス属	Silago sp.
マルテンスツマツムシ	Murex (Inkostrella) martensi		ブリ属	Seriola sp.
アラシムシ	Nothia livescens		マアジ?	Trachurus japonicus ?
ヒメゾボラ	Nephtyina (Barbenomia) arthritica		ニベ科	Sciaenidae
腹足綱	Scaphopoda		コショウダイ属	Plectoptychus sp.
ヤガタコノガイ	Dentalium (Paradentalium) octangulatum		マダイ	Pagrus major
二枚貝綱	Bivalvia		クロダイ属	Acanthopagrus sp.
アカガイ	Scapharaea brachionii		ワミタラゴ科	Embionidae
サルボワ	S. legumenensis		サバ属	Scomber sp.
ハイガイ	Tegillarca granosa		サウラ属	Scomberomorus sp.
ナミコガシワ	Anomia chinensis		ハゼ科	Gobiidae
イタコガキ	Ostrea donovaniellae		ギンボウ類	cf. Enedias nebulosa
マガキ	Crassostrea gigas		フサカサゴ科	Scorpacidae
イタコガイ	Pecten albicans		オニオコゼ科	Synanceidae ?
インガイ科	Ucionidae		アイナメ属	Hexagrammos sp.
バカガイ	Macraea chinensis		コチ	Platycephalus indicus
シオフキ	M. veneriformis		ヒラ科	Paralichthyidae
イチナウシラトリ	Pristis capensis		カレイ科	Pleuronectidae
ヒシヅラトリ	Macoma incongrua		フグ科	Tetradontidae
ムラサキガイ?	Solestella digna?			
マダガイ	Solan striatus		爬虫綱	Reptilia
カガガイ	Phaceloma japonicum		ヘビ類	Opida
アサリ	Ruditapes philippinarum			
ハマグリ	Meretrix lusoria		鳥綱	Aves
オキシジミ	Cyclina sinensis		カラス道奇鳥	Corvidae sp.
オノリガイ	Mya (Arenomya) arenaria ostengai		ブリオ科	Sittidae sp.
頭足綱	Cephalopoda		カサリ類	Anatidae (small)
コウイカ科	Sepiidae		キジ科	Phasianidae spp.
節足動物門	Arthropoda			
カニ綱	Brachyura		哺乳綱	Mammalia
(右段につづく)			木本類	Murinae
			ノクチギ	Lepus brachyrhinos
			イヌ	Canis familiaris
			ウマ*	Equus ferus *
			イノシシ	Sus scrofa
			シカ	Cervus nippon
			ウシ*	Bos taurus *
			イルカ科	Cetacea (small)
			ヒト	Homo sapiens

もみられる。左殻の付着痕を観察した結果、早期後葉には巻貝や棒への付着痕を示す資料がみられなかったのに對し、前期後葉以降はウミニナ類に付着したもの（またはその痕跡を残すもの）が高頻度で認められた。また、細い棒状のもの（アシ？）への付着痕を示すものも確認された。以上から、早期後葉のマガキはカキ礁のような群衆を成していた可能性があるに対し、前期後葉以降のマガキの多くは砂泥質干潟に生息していたものと推定される。前期後葉のE貝塚No.1トレントではマガキとウミニナ類がともに比較的高い頻度を示すが、これはウミニナ類の多くがカキ殻に付着して持ち込まれたためと推定される。

ハマグリ 殻長分布（表5、第75図）をみると、ハマグリの少ない早期後葉を除き、各時代とも約20～50mm

程度の小～中型個体が主体となる点では共通している。ただし、前期後葉では30mm前後の小型個体が多く、55mm以上の大型個体が少ない。中期初頭のB貝塚No.1トレントでも、上層と下層の差が大きいものの、全体としては前期後葉と同傾向と思われる。中期後葉のG貝塚No.1トレントと後期初頭のD貝塚No.1トレントでは30～35mm程度の個体が主体となり、55mm以上の大型個体がコンスタントにみられるようになるなど、前期前葉に比べてやや大型化する傾向が認められる。

組成の変遷（第74図）をみると、早期後葉ではハイガイとマガキが優占しており、ハマグリとオキシジミも普

表3 陸平貝塚 1987年度調査で採集された貝層サンプル一覧

「-」はデータなし、1mmメッシュ試料は半量（重合比）のみを分析、1mm骨重量は同定対象部位のみ。

備考欄の↑印は取上げ時にサンプル番号をつけたもの（印が無いものは任意）。

整理番号	地区	年代	層番	サンプル名	サンプル純量		骨の重量(g)		備考
					体積(cm ³)	乾重量(kg)	5mm	2.5mm	
56	A貝塚N11番地	中期前葉	5層	Q10-a①東サブトレC層	12.87	12.80	13.00	-	-
57	A貝塚N11番地	中期前葉	5層	Q10-a②西サブトレC層(1)	30.03	25.15	29.50	-	-
58	A貝塚N11番地	中期前葉	5層	Q10-a③西サブトレC層(2)	30.03	3.00	3.50	-	-
60	A貝塚N11番地	中期前葉	6層	Q10-a④西サブトレC層(1)	30.03	25.90	33.50	-	-
61	A貝塚N11番地	中期前葉	6層	Q10-a⑤西サブトレC層(2)	12.87	11.95	16.05	-	-
12	A貝塚N11番地	中期前葉	6層	Q10-a⑥東サブトレC層	30.03	28.20	15.75	-	-
48	A貝塚N11番地	中期前葉	20層	Q10-a⑦東サブトレA層(1)	30.03	24.65	12.00	-	-
49	A貝塚N11番地	中期前葉	20層	Q10-a⑧東サブトレA層(2)	7.51	5.85	2.00	-	-
50	A貝塚N11番地	中期前葉	挖丸	Q10-a⑨西サブトレH層	6.44	4.85	11.00	-	5mm骨未分析
51	A貝塚N11番地	中期前葉	挖丸	Q10-a⑩西サブトレH層	8.58	9.35	-	-	5mm骨未分析
52	A貝塚N11番地	中期前葉	挖丸	Q10-a⑪東サブトレH層(1)	30.03	24.65	-	-	5mm骨未分析
53	A貝塚N11番地	中期前葉	挖丸	Q10-a⑫東サブトレH層(2)	8.58	9.25	-	-	5mm骨未分析
54	A貝塚N11番地	中期前葉	挖丸	Q10-a⑬西サブトレE層	10.73	12.75	-	-	5mm骨未分析
65	A貝塚N11番地	中期前葉	挖丸	Q10-a⑭東サブトレE層	30.03	26.05	-	-	5mm骨未分析
29	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a⑮西サブトレC層	12.87	14.60	18.05	-	-
63	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a⑯東サブトレD層	23.60	21.60	1.35	-	-
64	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a⑰西サブトレD層(1)	30.03	24.50	9.40	-	-
65	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a⑱西サブトレD層(2)	10.73	9.10	0.95	-	-
66	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a⑲西サブトレD層	8.58	7.40	0.25	-	-
67	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a⑳東サブトレE層	17.16	13.35	1.45	-	-
68	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a㉑東サブトレF層	6.44	5.60	-	-	-
69	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a㉒西T層	8.58	4.95	0.70	-	-
1	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a㉓列サブトレ松原C層(1)	30.03	6.80	12.55	-	-
136	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a㉔列サブトレ松原C層(2)	9.65	10.65	6.15	-	-
-	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a㉕列サブトレC層(3)	-	-	-	-	-
130	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-a㉖C層	15.02	16.75	9.40	-	-
135	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-b㉗泥上貝層	2.15	2.80	-	-	-
9	A貝塚N11番地	中期前葉	一括	Q10-b㉘東C層	30.03	7.35	5.45	-	-
A貝塚N11番地	中期前葉	合計			495.50	381.15	203.20	-	-
20	B貝塚N11番地	中期初頭	上層	L15-c,d⑤寒暖貝層上層(1)	30.03	22.00	2.55	-	-
21	B貝塚N11番地	中期初頭	上層	L15-c,d⑥寒暖貝層上層(2)	30.03	22.60	6.15	-	-
22	B貝塚N11番地	中期初頭	上層	L15-c,d⑦寒暖貝層上層(3)	30.03	22.95	3.85	-	-
23	B貝塚N11番地	中期初頭	上層	L15-c,d⑧寒暖貝層上層(4)	30.03	23.30	7.25	7.25	0.70
24	B貝塚N11番地	中期初頭	上層	L15-c,d⑨寒暖貝層上層(5)	30.03	22.55	5.30	-	-
25	B貝塚N11番地	中期初頭	上層	L15-c,d⑩寒暖貝層上層(6)	30.03	22.25	2.70	-	-
26	B貝塚N11番地	中期初頭	上層	L15-c,d⑪寒暖貝層上層(7)	21.45	16.80	2.80	-	-
3	B貝塚N11番地	中期初頭	上層	L15-c,d⑫寒暖貝層上層(8)	30.03	10.10	5.60	-	-
6	B貝塚N11番地	中期初頭	上層	L15-c,d⑬寒暖貝層上層(9)	30.03	8.40	2.70	-	-
2	B貝塚N11番地	中期初頭	下層	L15-c,d⑭寒暖貝層下層(10)	30.03	5.65	3.20	-	-
27	B貝塚N11番地	中期初頭	下層	L15-c,d⑮寒暖貝層下層(1)	30.03	19.75	4.39	-	-
28	B貝塚N11番地	中期初頭	下層	L15-c,d⑯寒暖貝層下層(2)	30.03	19.00	2.35	-	-
29	B貝塚N11番地	中期初頭	下層	L15-c,d⑰寒暖貝層下層(3)	30.03	17.20	2.35	3.70	0.10
30	B貝塚N11番地	中期初頭	下層	L15-c,d⑱寒暖貝層下層(4)	30.03	17.35	0.10	-	-
31	B貝塚N11番地	中期初頭	下層	L15-c,d⑲寒暖貝層下層(5)	19.73	8.95	0.55	-	-
5	B貝塚N11番地	中期初頭	下層	L15-c,d⑳寒暖貝層下層(6)	30.03	11.50	2.50	-	-
10	B貝塚N11番地	中期初頭	下層	L15-c,d㉑寒暖貝層下層(7)	30.03	11.20	1.75	-	-
4	B貝塚N11番地	中期初頭	下層	L15-c,d㉒寒暖貝層下層(8)	30.03	10.75	0.15	-	-
8	B貝塚N11番地	中期初頭	下層	L15-c,d㉓寒暖貝層下層(9)	30.03	10.65	0.20	-	-
83	B貝塚N11番地	中期初頭	下層	L15-c,d㉔寒暖貝層下層(10)	12.87	11.55	0.10	-	-
7	B貝塚N11番地	中期初頭	一括	L15-c,d㉕寒暖層	30.03	9.55	3.00	-	-
129	B貝塚N11番地	中期初頭	一括	L15-c,d㉖寒暖貝層(下層巻きじり)	25.74	18.30	10.50	-	-
B貝塚N11番地	中期初頭	合計			611.33	342.65	70.25	10.95	0.80
84	D貝塚N11番地	後期初頭	a層	DN11-l②サブトレ北c層(1)	-	23.60	15.45	-	↓
85	D貝塚N11番地	後期初頭	a層	DN11-l②サブトレ北c層(2)	-	21.45	12.25	26.05	5.05
86	D貝塚N11番地	後期初頭	a層	DN11-l②サブトレ北c層(3)	-	19.90	16.35	-	↓
87	D貝塚N11番地	後期初頭	b層	DN11-l②サブトレ北c層(1)	-	21.00	12.75	-	↓
88	D貝塚N11番地	後期初頭	b層	DN11-l②サブトレ北c層(2)	-	21.25	13.10	15.15	3.30
89	D貝塚N11番地	後期初頭	b層	DN11-l②サブトレ北c層(3)	-	7.25	7.05	-	↓
90	D貝塚N11番地	後期初頭	c層	DN11-l②サブトレ北c層(1)	-	18.55	9.90	-	↓
91	D貝塚N11番地	後期初頭	c層	DN11-l②サブトレ北c層(2)	-	20.30	10.85	-	↓
92	D貝塚N11番地	後期初頭	c層	DN11-l②サブトレ北c層(3)	-	24.00	17.75	12.45	1.05

(次ページへつづく)

表3(つづき)。

整理番号	地区	年代	層序	サンプル名	サンプル總量		骨の重量(g)		備考
					体積(ℓ)	乾重量(kg)	5mm	2.5mm	
93	D貝塚N.11シナ	後期初期	c層	DNa.1レ②サブトレ北d層(4)	-	23.15	13.50	-	-
94	D貝塚N.11シナ	後期初期	d層	DNa.1レ②サブトレ北d層(1)	-	18.50	9.50	-	-
95	D貝塚N.11シナ	後期初期	d層	DNa.1レ②サブトレ北d層(2)	-	17.10	4.90	-	-
96	D貝塚N.11シナ	後期初期	d層	DNa.1レ②サブトレ北d層(3)	-	17.35	7.45	-	-
97	D貝塚N.11シナ	後期初期	d層	DNa.1レ②サブトレ北d層(4)	-	16.90	8.90	9.25	0.80
98	D貝塚N.11シナ	後期初期	d層	DNa.1レ②サブトレ北d層(5)	-	16.90	9.15	-	-
99	D貝塚N.11シナ	後期初期	d層	DNa.1レ②サブトレ北d層(6)	-	16.45	6.15	-	-
100	D貝塚N.11シナ	後期初期	d層	DNa.1レ②サブトレ北d層(7)	-	1.50	1.10	-	-
101	D貝塚N.11シナ	後期初期	a層	DNa.1レ①サブトレ南a層	21.45	19.40	10.95	-	-
102	D貝塚N.11シナ	後期初期	b層	DNa.1レ①サブトレ南b層(1)	-	21.60	9.85	-	-
103	D貝塚N.11シナ	後期初期	b層	DNa.1レ①サブトレ南b層(2)	-	10.05	5.90	-	-
104	D貝塚N.11シナ	後期初期	c層	DNa.1レ①サブトレ南c層(1)	-	26.25	12.00	-	-
105	D貝塚N.11シナ	後期初期	c層	DNa.1レ①サブトレ南c層(2)	-	5.30	2.55	-	-
106	D貝塚N.11シナ	後期初期	一括	DNa.1レ①サブトレ北真露上層	-	14.30	10.25	-	-
107	D貝塚N.11シナ	後期初期	一括	DNa.1レ①サブトレ北真露上層	-	19.40	26.65	-	-
108	D貝塚N.11シナ	後期初期	一括	DNa.1レ④サブトレ南真露上層	-	15.05	25.50	-	-
109	D貝塚N.11シナ	後期初期	一括	DNa.1レ④サブトレ南真露上層	-	9.55	4.40	-	-
	D貝塚N.11シナ	後期初期	合計		-	146.35	283.25	62.90	10.20
81	D貝塚N.2レジ	早中期層	下部真層	DNa.2レ①下部真層(1)	30.03	20.05	4.00	-	-
82	D貝塚N.2レジ	早中期層	下部真層	DNa.2レ①下部真層(2)	30.03	19.70	4.85	7.30	0.29
11	D貝塚N.2レジ	早中期層	下部真層	DNa.2レ①下部真層(3)	30.03	11.45	4.35	-	-
	D貝塚N.2レジ	早中期層	合計		90.09	51.20	13.20	7.30	0.29
110	D貝塚N.2レジ	中期前葉	上部真層	DNa.2レ③上部真層(1)	-	18.20	14.40	-	-
111	D貝塚N.2レジ	中期前葉	上部真層	DNa.2レ③上部真層(2)	-	15.30	28.95	7.95	0.10
112	D貝塚N.2レジ	中期前葉	上部真層	DNa.2レ③上部真層(3)	15.02	14.60	8.65	-	-
	D貝塚N.2レジ	中期前葉	合計		506.85	361.65	85.45	10.70	-
40	E貝塚N.11シナ	前期後葉	1層	ENa.1レ強グリッド板1層(1)	5.36	5.25	0.20	-	-
41	E貝塚N.11シナ	前期後葉	1層	ENa.1レ強グリッド板1層(2)	30.03	21.83	5.55	3.30	0.10
42	E貝塚N.11シナ	前期後葉	1層	ENa.1レ強グリッド板1層(3)	30.03	20.00	0.60	-	-
43	E貝塚N.11シナ	前期後葉	1層	ENa.1レ強グリッド板1層(4)	21.45	18.45	2.15	-	-
32	E貝塚N.11シナ	前期後葉	2層	ENa.1レ強グリッド板2層(1)	30.03	20.85	2.35	-	-
33	E貝塚N.11シナ	前期後葉	2層	ENa.1レ強グリッド板2層(2)	30.03	19.05	4.60	-	-
34	E貝塚N.11シナ	前期後葉	2層	ENa.1レ強グリッド板2層(3)	21.45	16.20	1.90	-	-
35	E貝塚N.11シナ	前期後葉	2層	ENa.1レ強グリッド板2層(4)	30.03	18.75	4.00	1.85	0.10
36	E貝塚N.11シナ	前期後葉	2層	ENa.1レ強グリッド板2層(5)	30.03	17.55	3.10	-	-
37	E貝塚N.11シナ	前期後葉	2層	ENa.1レ強グリッド板2層(6)	30.03	18.95	3.65	-	-
38	E貝塚N.11シナ	前期後葉	2層	ENa.1レ強グリッド板2層(7)	30.03	18.80	0.55	-	-
39	E貝塚N.11シナ	前期後葉	2層	ENa.1レ強グリッド板2層(8)	30.03	18.90	2.30	-	-
44	E貝塚N.11シナ	前期後葉	3層	ENa.1レ強グリッド板3層(1)	21.45	14.85	0.45	-	-
45	E貝塚N.11シナ	前期後葉	3層	ENa.1レ強グリッド板3層(2)	23.60	18.60	1.90	1.20	0.35
46	E貝塚N.11シナ	前期後葉	3層	ENa.1レ強グリッド板3層(3)	-	7.35	0.55	-	-
47	E貝塚N.11シナ	前期後葉	4層	ENa.1レ強グリッド板4層	19.31	15.35	1.20	0.55	0.15
149	E貝塚N.11シナ	前期後葉	一括	ENa.1レ強グリッド板4層清掃(1)	-	-	-	-	-
133	E貝塚N.11シナ	前期後葉	一括	ENa.1レ強グリッド壁面清掃(2)	17.16	14.20	0.10	-	-
131	E貝塚N.11シナ	前期後葉	一括	ENa.1レ④壁面清掃(3)	20.38	17.80	0.55	-	-
132	E貝塚N.11シナ	前期後葉	一括	ENa.1レ④壁面清掃(4)	16.09	9.50	0.80	-	-
	E貝塚N.11シナ	前期後葉	合計		436.51	312.25	36.50	6.90	0.70
70	G貝塚N.11シナ	中期後葉	1層	GNa.1レサブトレ-板2層(1)	12.87	15.89	12.45	-	-
71	G貝塚N.11シナ	中期後葉	1層	GNa.1レサブトレ-板2層(2)	25.74	29.16	9.50	-	-
72	G貝塚N.11シナ	中期後葉	1層	GNa.1レサブトレ-板2層(3)	30.03	21.35	8.90	7.40	0.20
73	G貝塚N.11シナ	中期後葉	1層	GNa.1レサブトレ-板2層(4)	2.15	2.75	0.55	-	-
74	G貝塚N.11シナ	中期後葉	1層	GNa.1レサブトレ-板5層	10.73	8.00	-	-	-
75	G貝塚N.11シナ	中期後葉	3層	GNa.1レサブトレ-板6層	12.87	10.85	4.85	-	-
76	G貝塚N.11シナ	中期後葉	3層	GNa.1レサブトレ-板6層	4.29	4.50	4.30	-	-
77	G貝塚N.11シナ	中期後葉	1層	GNa.1レサブトレ-板8層	6.44	6.90	1.35	-	-
78	G貝塚N.11シナ	中期後葉	1層	GNa.1レサブトレ-板8層	6.44	5.15	0.75	-	-
79	G貝塚N.11シナ	中期後葉	1層	GNa.1レサブトレ-板9層	21.45	15.75	2.40	-	-
80	G貝塚N.11シナ	中期後葉	1層	GNa.1レサブトレ-板10層	12.87	16.85	3.40	-	-
-	G貝塚N.11シナ	中期後葉	一括	GNa.1レ壁面清掃(1)	-	-	-	-	-
134	G貝塚N.11シナ	中期後葉	一括	GNa.1レ壁面清掃(2)	25.74	18.30	14.15	-	-
	G貝塚N.11シナ	中期後葉	合計		171.60	146.30	62.60	7.40	0.20
137	不明	不明	不明		21.45	19.50	-	-	-
138	不明	不明	不明		19.31	18.50	-	-	-

表4 陸平貝塚 1987年度調査で貝層サンプルから検出された貝類遺体の同定結果

トレンチ名	サンプル	層位	殻形(種類)(個数)	殻形別												測定範囲				
				アコウガイ	イシマキガイ	シオフキ	タコガイ	カニガイ	カニ	カニ	カニ	カニ	カニ	カニ	カニ	カニ	カニ	カニ	カニ	
D貝塚No.2	下部 貝層	R2 (R2.25)	30.05 2 4	4 50 2	34 30 2	20 20 2	162 111 2	13 11 2	8 11 2	48 40 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	
	1層	41 R.05	30.03 6 2	4 50 2	34 30 2	20 20 2	162 111 2	13 11 2	8 11 2	48 40 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	7 10 2	
E貝塚No.1	下部 貝層グリッド	3層	30.03 4 6	31 11 2	6 14 2	14 20 2	236 149 2	9 11 2	16 11 2	57 49 2	1 10 2	1 10 2	1 10 2	1 10 2	1 10 2	1 10 2	1 10 2	1 10 2	1 10 2	
	4層	47 (R.25)	23.60 1 1	4 11 2	3 11 2	3 11 2	20 11 2	2 11 2	2 11 2	10 11 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	
	計	102.97 61.75	12 11 2	6 0 2	49 87 12	43 20 2	57 20 2	406 230 2	25 11 2	27 11 2	115 111 2	1 1 2	0 1 2	8 20 2	22 240 25	9 0 2	5 0 2	0 0 2	10 0 2	5 0 2
D貝塚No.1 (L15~L55) c. d. 層厚	上層	23 R.30	30.03 3 2	3 3 2	5 3 2	1 1 2	6 2 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	3 1 2	2 1 2	6 1 2	2 1 2	5 1 2	6 1 2	9 1 2	9 1 2	71 16	
	下層	29 (R.39)	30.03 3 2	5 3 2	1 1 2	2 1 2	6 2 2	1 1 2	1 1 2	6 1 2	1 1 2	1 1 2	6 1 2	1 1 2	3 1 2	11 1 2	9 1 2	1 1 2	1 1 2	
	計	60.66 40.51	6 0 0 10	0 0 0 4	5 1 1 7	1 1 2 5	5 1 2 5	15 0 0	1 0 0	1 0 0	4 4 11	4 4 11	3 2 2 265	12 2 2 2	2 0 0 0	8 8 0 2	20 0 0 0	0 0 0 0	71 10	
D貝塚No.2	上部 貝層	111 (R.20)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
G貝塚No.1	1層	72 R.35	30.03 2 2	3 3 2	3 3 2	1 1 2	10 10 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	3 1 2	8 8 2	6 6 2	10 10 2	5 5 2	3 3 2	1 1 2	1 1 2	1 1 2	
D貝塚No.1 ②アブレ 北	a層	85 R.35	1 1 1	2 1 1	3 1 1	2 1 1	2 1 1	2 1 1	17 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	
	b層	88 R.35	— 1	1 1	1 1	3 1 1	4 1 1	12 1 1	1 1 1	1 1 1	14 1 1	2 1 1	4 4 1	2 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	
	c層	92 R.39	— 1	1 1	1 1	8 7 4	10 4 4	6 5 5	38 15 15	1 1 1	101 102	27 27 1	6 4 1	1 1 1	4 4 1	12 1 1	3 3 1	2 2 1	4 4 1	
	d層	97 R.40	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	— 1	
	計	— 82.69	4 4 2	2 1 2	3 1 2	11 6 5	16 6 5	12 2 2	70 27 27	2 1 1	182 182 182	0 0 0	2 2 2	0 0 0	68 2207 21	12 1 1	1 1 1	4 4 1	2 2 1	
	合計	— 242.29	24 24 32	2 1 1	9 3 3	168 73 22	65 55 35	58 51 144	517 42 42	29 29 29	221 221 221	8 8 8	1 1 1	3 3 3	108 3423 61	37 1 1	11 1 1	14 1 1	2 2 1	

通である。これに対し前期後葉にはハイガイがまれとなり、マガキも激減する一方、ハマグリが急増する。以後ハマグリは後期初頭に到るまで一貫して最優占種となる。

ただし前期後葉におけるハマグリ以外の種類の組成は時代変化が大きく、前期後葉にはウミニナ類、アサリ、オキシジミ、シオフキが優占するが、中期初頭～前葉にはウミニナ類が減少し、シオフキがやや増加する。中期後葉～後期初頭にはサルボウの増加とアサリの減少が明らかであり、オキシジミは減少傾向を示す。少數種の中でもフトヘナトリは前期後葉と後期初頭の特定層帶では多いが、他ではまれである。バカガイは中期後葉以降にコンスタントな出現を示す。コウイカは中期後葉以降に出現する点で特徴的である。

主要貝類の生息環境をみると、全時代を通じて内湾干潟の生息主が優占するが、早期後葉には泥質干潟の生息種（ハイガイ、マガキ、オキシジミ）が圧倒的多数を占めるのに対して、前期後葉以降は内湾砂泥質干潟の生息種（ハマグリ、シオフキ、アサリ、サルボウ、ウミニナ・ホソウミニナなど）が卓越する。そのほか、少數ながら

岩礁性的スガイ、潮間帯上部のアシ原に生息するフトヘナトリ、汽水性のイシマキガイがみられ、中期後葉以降には外洋水の影響の強い水域を好むバカガイがやや増加する。

骨類の出土量と全体的組成

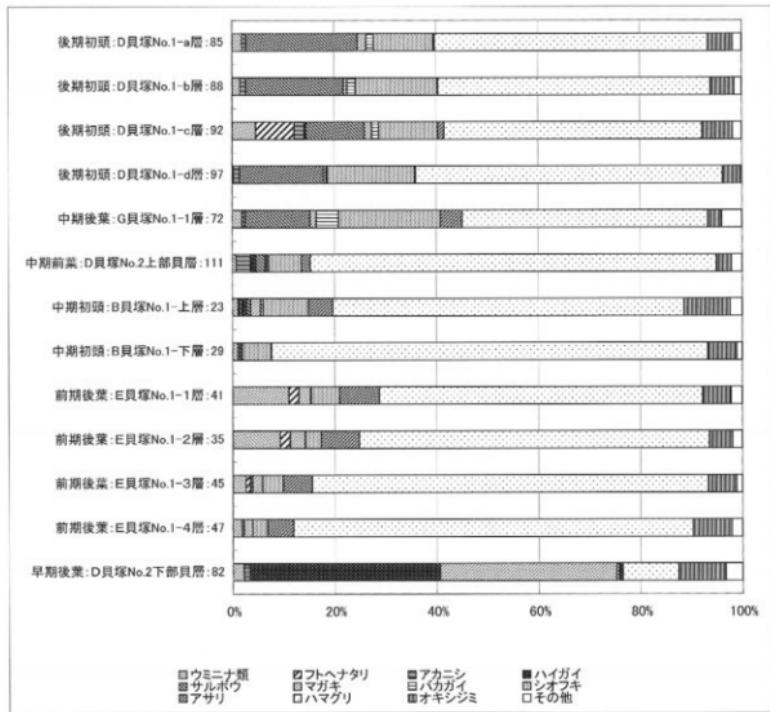
現地採集資料 各地区から現地採集された骨の数をみると（表7、第76図）、B貝塚No.1トレンチ（中期？）が最も多く、A貝塚No.1トレンチ（中期？）、D貝塚No.1トレンチ（後期？）がこれに次ぐ。52号土坑（中期中葉）と14号住居跡（中期）からもやまとまた出土がみられた。他にD貝塚No.2トレンチ（中期？）、中期と思われる一部の住居跡からも若干の資料が得られている。なお、現地採集資料は、同一トレンチ内でも個々に出土層位が異なるため、時期は大まかな表記とした。出土数の多いB貝塚No.1トレンチ、A貝塚No.1トレンチ、D貝塚No.1トレンチについて骨類の組成をみると（第76図）、B貝塚No.1トレンチではシカ、イノシシを中心とする鳥獣骨が多くみられるが、A貝塚No.1トレン

サルゴウ シリ	マサキ シリ	骨質組成												他に属 する物 質	合計				
		ツガキ	バカガイ	シオブキ	シラク シリ	ツバメ シリ	ツバメ シリ	アサリ	ハマグリ	オキシジ ン	オキシジ ン	その他							
L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R						
1		101 ¹	113 ¹	1	2 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	30 ¹	35 ¹	3 ¹	2 ¹		610				
1		105 ¹	107 ¹	1	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	31 ¹	37 ¹	20 ¹	21 ¹		385				
1		43 ¹	56 ¹	2 ¹	4 ¹	122 ¹	125 ¹	1 ¹	1 ¹	2 ¹	9 ¹	17 ¹	169 ¹	1534 ¹	1421				
1		80 ¹	71 ¹	6 ¹	16 ¹	263 ¹	277 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	101 ¹	85 ¹	208 ¹	210 ¹	3298 ¹	8557			
1		82 ¹	86 ¹	1 ¹	2 ¹	91 ¹	85 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	12 ¹	6 ¹	219 ¹	209 ¹	1961 ¹	5379			
1		101 ¹	122 ¹	1 ¹	15 ¹	171 ¹	189 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	136 ¹	71 ¹	286 ¹	244 ¹	4488 ¹	11011			
1		13 ¹	23 ¹	1 ¹	1 ¹	41 ¹	48 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	7 ¹	7 ¹	62 ¹	66 ¹	847 ¹	2204			
1		22 ¹	22 ¹	1 ¹	1 ¹	82 ¹	102 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	67 ¹	64 ¹	66 ¹	1081 ¹	1296 ¹	4725			
1		5 ¹	2 ¹	1 ¹	1 ¹	94 ¹	7 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	31 ¹	1 ¹	103 ¹	14 ¹	210 ¹	218 ¹			
1		41 ¹	2 ¹	1 ¹	1 ¹	104 ¹	9 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	27 ¹	2 ¹	87 ¹	10 ¹	2804 ¹	322 ¹			
0	0	0	113 ¹	167 ¹	21 ¹	6 ¹	272 ¹	266 ¹	0 ¹	2 ¹	0 ¹	21 ¹	31 ¹	23 ¹	465 ¹	478 ¹	4447 ¹		
0	0	0	208 ¹	719 ¹	61 ¹	31 ¹	5381 ¹	577 ¹	0 ¹	2 ¹	0 ¹	0 ¹	1 ¹	1 ¹	3651 ¹	2489 ¹	32034 ¹		
51	9	3 ¹	211 ¹	19 ¹	51 ¹	63 ¹	93 ¹	97 ¹	1 ¹	1 ¹	21 ¹	11 ¹	441 ¹	62 ¹	7331 ¹	749 ¹	931 ¹	99 ¹	
471	62	22 ¹	22 ¹	11 ¹	31 ¹	181 ¹	205 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	21 ¹	21 ¹	31 ¹	31 ¹	25881 ¹	2478 ¹	1981 ¹	6076	
21	5	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	711 ¹	7 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	21 ¹	6 ¹	21 ¹	21 ¹	11091 ¹	1193 ¹	701 ¹	76 ¹	
241	37	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1491 ¹	182 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	341 ¹	73 ¹	21 ¹	29081 ¹	3028 ¹	1861 ¹	151 ¹		
71	14	8 ¹	211 ¹	19 ¹	31 ¹	6 ¹	1641 ¹	116 ¹	0 ¹	0 ¹	0 ¹	21 ¹	4 ¹	34 ¹	6 ¹	461 ¹	18621 ¹	1942 ¹	
621	29	22 ¹	22 ¹	11 ¹	21 ¹	3299 ¹	389 ¹	0 ¹	2 ¹	0 ¹	0 ¹	1 ¹	1 ¹	25	32 ¹	5416 ¹	5506 ¹	3544 ¹	
31	5	11 ¹	11 ¹	1 ¹	14 ¹	16 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	3 ¹	54 ¹	6 ¹	234 ¹	216 ¹	34 ¹	8 ¹	11 ¹	
11	11	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	25 ¹	25 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	25 ¹	21 ¹	21 ¹	25 ¹	442 ¹	442 ¹	44 ¹	11 ¹	
151	181	1 ¹	51 ¹	48 ¹	23 ¹	2384 ¹	225 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	11 ¹	151 ¹	20 ¹	1 ¹	50 ¹	38 ¹	361 ¹	872 ¹	
755	603	2 ¹	21 ¹	19 ¹	125 ¹	102 ¹	202 ¹	21 ¹	1 ¹	1 ¹	31 ¹	31 ¹	5 ¹	1 ¹	36 ¹	2228 ¹	2293 ¹	2188 ¹	1158
263	257	1 ¹	21 ¹	19 ¹	18 ¹	17 ¹	120 ¹	140 ¹	1 ¹	2 ¹	1 ¹	1 ¹	2 ¹	4 ¹	638 ¹	641 ¹	871 ¹	58 ¹	
1838	889	1 ¹	114 ¹	42 ¹	27 ¹	26 ¹	222 ¹	336 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	2 ¹	2 ¹	2558 ¹	2389 ¹	1842 ¹	1555 ¹	
209	243	9 ¹	8 ¹	21 ¹	18 ¹	204 ¹	177 ¹	1 ¹	51 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	666 ¹	678 ¹	54 ¹	59 ¹	
887	884	12 ¹	12 ¹	43 ¹	22 ¹	287 ¹	390 ¹	1 ¹	3 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	2288 ¹	2258 ¹	(4%)	129 ¹	
153	147	4 ¹	20 ¹	15 ¹	13 ¹	19 ¹	151 ¹	145 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	3 ¹	17 ¹	678 ¹	719 ¹	77 ¹	11 ¹	
644	575	11 ¹	67 ¹	20 ¹	8 ¹	27 ¹	242 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	3 ¹	9 ¹	6 ¹	16 ¹	2775 ¹	2922 ¹	172 ¹	149 ¹	
241	213	2 ¹	8 ¹	7 ¹	2 ¹	231 ¹	253 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	3 ¹	2 ¹	1 ¹	1 ¹	881 ¹	867 ¹	45 ¹	53 ¹	
140	321	2 ¹	28 ¹	19 ¹	11 ¹	62 ¹	618 ¹	1 ¹	1 ¹	1 ¹	2 ¹	2 ¹	2 ¹	2 ¹	3588 ¹	3589 ¹	120 ¹	138 ¹	
986	860	7 ¹	38 ¹	20 ¹	53 ¹	57 ¹	729 ¹	714 ¹	1 ¹	0 ¹	0 ¹	1 ¹	1 ¹	24 ¹	2863 ¹	2900 ¹	235 ¹	61 ¹	
435 ¹	3258	17 ¹	171 ¹	104 ¹	79 ¹	88 ¹	1692 ¹	1698 ¹	1 ¹	0 ¹	0 ¹	2 ¹	2 ¹	2 ¹	28	10287 ¹	10436 ¹	252 ¹	589 ¹
1020	1030	13 ¹	299 ¹	364 ¹	113 ¹	103 ¹	1417 ¹	1398 ¹	1 ¹	3 ¹	8 ¹	13 ¹	19 ¹	27 ¹	37 ¹	582 ¹	599 ¹	1093 ¹	10512 ¹
533 ¹	3971	41 ¹	468 ¹	586 ¹	221 ¹	224 ¹	2770 ¹	2897 ¹	1 ¹	4 ¹	5 ¹	8 ¹	408 ¹	379 ¹	600 ¹	28240 ¹	28827 ¹	1607 ¹	1636 ¹

チ、D貝塚 No.1 トレンチでは魚骨が主体で、鳥獣骨は少ない。なお 52 号土坑は歯骨（イノシシ、ノウサギ）のみで、魚骨がみられない点で他と傾向が異なる。

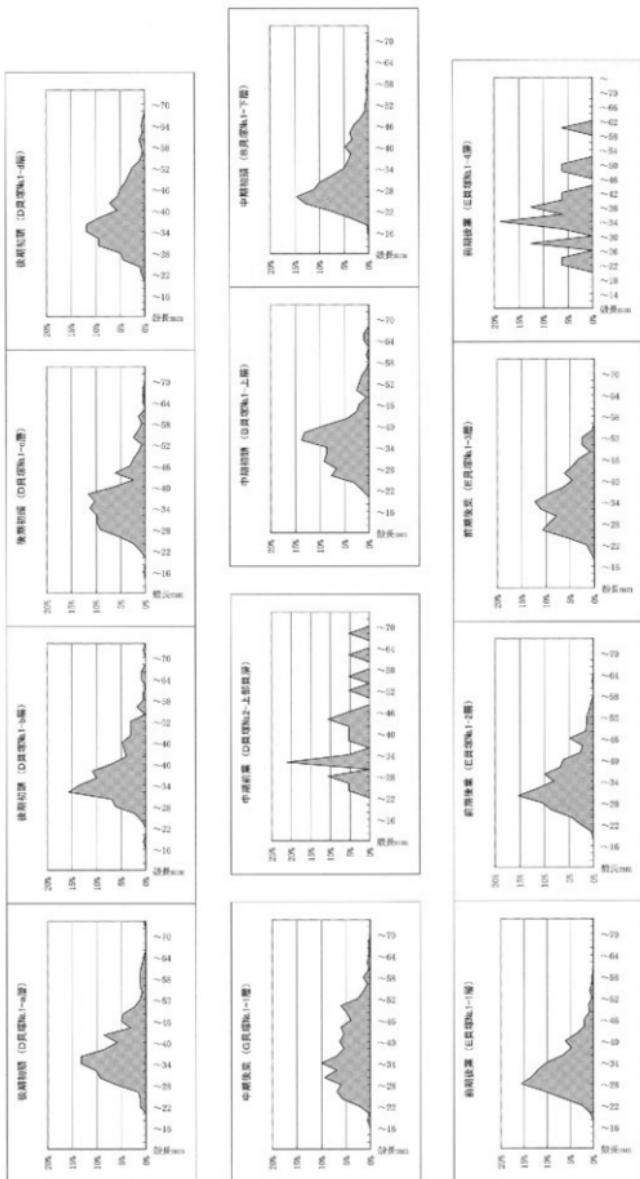
水洗選別資料 貝層サンプルにおける骨類の包含密度（サンプル 10kg 当りの同定標本数 (NISP)）を第 78 図で、骨類の包含密度の変遷をみると、魚類は早期後葉でやや高く、前期後葉に低下し、中期初頭以降はおむね増加傾向を示すようになる。ただし、これは限られたサンプルからの結果なので、明確な時代差といえるかは微妙である。2.5mm・1mm 資料はほとんどが魚骨で占められる。魚骨の包含密度（第 79 図）では鳥獣骨もみられるものの、魚類が圧倒的に多い。包含密度の変遷をみると、魚類は早期後葉でやや高く、前期後葉に低下し、中期初頭以降はおむね増加傾向を示すようになる。ただし、これは限られたサンプルからの結果なので、明確な時代差といえるかは微妙である。2.5mm・1mm 資料はほとんどの魚類が魚骨で占められる。魚類の包含密度（第 80 図）では鳥獣骨もみられるものの、魚類が圧倒的に多い。魚類の包含密度の変遷をみると、魚類は中期後葉でやや高く、後期初頭に急増する。

現地採集資料の同定結果を表 6、水洗選別資料の同定結果を表 8～表 10 に示した。同定対象となった資料数



第74図 陸平貝塚 1987年度調査で得られた貝類組成の変遷

表5 陸平貝塚 1987年調査で得られたハマグリの殻長計測結果（単位はmm）。



第75図 陸平貝塚 1987年度調査で得られたハマグラ稚長分布の変遷

表6 陸平貝塚 1987年度調査で採集された脊椎動物遺体（現地採集資料）。コウイカ類も併せて示した。

左方のあらわしは左/右を表示。既存言葉と例文。* 先行、p. 近傍。a. 皆等、d. 他者。f. 僕等。(p.) - (d.) 未開音節のみ。(g.) - (h.) 未審音節。*(g.) - (d.) 骨組欠損。

(次ページへつづく)

表6 (つづき)

注1:前頭骨完存+角(角座のみ)、注2:[P2-M2(M3)-歯次起・關節突起]全面残存

科、ヒラメ科・カレイ科、フグ科も目立つ。時期的変化は明確でないが、スズキ属は前期後葉～中期初頭に多く、中期後葉には減少する。ヒラメ科は中期前葉～後葉にや目立つ。

2.5mm・1mm 資料（第 81 図）では時期的変化が比較的明瞭である。すなわち、早期後葉にはスズキ属が最も多く、エイ・サメ類（おそらく主にエイ類）、ニシン科、ウナギ属も普通である。前期後葉～中期初頭にはエイ・サメ類とスズキ属がやや減少する一方、ウナギ属が増加し、ハゼ科も普通となる。中期前葉にはエイ・サメ類とウナギ属が減少する。サヨリ属はこの時代のみで優占するが、サンブル数が少ないので偶然のかたよりの可能性もある。中期後葉にはスズキ属が激減する一方、ニシン科が増加して最優占種となる。ウナギ属も再び増加する。スズキ属が減少する点は 5mm と同様である。後期初頭にはウナギ属が一気に増加し、組成の大半を占めるようになる。この時代の魚骨包含密度の増大は、主にこのウナギの増加によるものである。ハゼ科は比率を維持するが、他種は相対的に減少する。

生息環境別にみると、主要種であるクロダイ属、スズキ、ボラ科、ヒラメ科、ニシン科、ハゼ科などをはじめ、同定された種の大部分は内湾性種または内湾に多く来遊する表層回遊魚で占められる。その他では淡水域から内湾沿岸域まで広く生息するウナギ属が多く、ハゼ科にも淡水～汽水生種が含まれる可能性が強い。外洋性種としては、少数ではあるが表層回遊魚のサワラ属や岩礁またはその付近を好むマダイ、コショウダイ属もみられた。

爬虫類・鳥類・哺乳類

爬虫類では水洗選別資料からヘビの椎骨が検出された。前期後葉では 81 点が検出されているが、これらは同一個体の骨の可能性がある。その他では数点以下である。いずれも自然遺骸の可能性が高いが、前期後葉については人為的な利用の可能性も否定できない。

鳥類ではカラス近似種（カラス現生標本と同形だがごく小型のもの）、フクロウ科、カモ類、キジ科が同定されたほか、若干の木本同定標本がある。カモ類が最も多く、早期後葉を除く各期の資料からそれぞれ数点が検出されている。キジ科は 14 号住居跡の現地採集資料および中期初頭と後期初頭の水洗選別資料から各 2 点が検出された。

フクロウ科は、中期初頭の水洗選別 5mm 資料から 5 点（および詳細な同定困難だがフクロウの可能性のある鳥骨 10 点）が集中的に検出されており、すべて同一個体と推定される。

哺乳類ではネズミ科、ノウサギ、タヌキ、イヌ、イノシシ、シカ、ウシ、ウマ、イルカ科が同定された。ネズミ科は水洗選別資料のみから若干検出されたのみであり、自然遺骸と推定される。ウシとウマは縄文時代より後代のものと推測される。全資料の NISP 合計値による組成は、イノシシが 39 点（現地採集 32 + 水洗選別 7）と最も多く、シカ 16 点（現地採集のみ）、イヌ 13 点（現地 10 + 水洗 3）、ノウサギ 5 点（現地 3 + 水洗 2）がこれに次ぐ。資料数が少ないため時代ごとの特徴は明確でないが、現地採集資料では B 貝塚 No.1 トレンチでイノシシとシカが多いのに対して、A 貝塚 No.1 トレンチと D 貝塚 No.1 トレンチではイノシシが多く、シカはまれである。なお D 貝塚 No.1 トレンチでは散乱人骨がやまとまって採取されている。

考察

今回の分析によって、縄文時代早期後葉から後期初頭にいたる陸平貝塚の動物遺体群の内容が明らかとなった。本遺跡の重要な意義のひとつは、單一遺跡で長期間にわたる動物遺体の変遷を追跡できる点にある。ここでは上記の分析結果をもとに、縄文早期後葉から後期初頭にいたる周辺の自然環境および動物資源利用（貝塚採集・漁労、狩猟）の変遷について予察する。なお、2008 年の発掘調査では後期前葉（壇之内式期）の貝層が確認されており、動物遺体についても現在報告を作成中である。最終的な考察はその結果も踏まえた上で改めて行うこととした。

陸平貝塚周辺の古環境の変遷

貝類組成の変遷をみると、早期後葉には泥質干潟に生息するハイガイ、マガキ、オキシジミが主体であるのにに対し、前期後葉～後期初頭には、構成比に時代的な変化はあるものの、ハマグリを中心とする内湾砂泥質干潟の生息種が一貫して主体をなしている。このことから本遺跡周辺では、早期後葉には純文海進によって遺跡周辺の谷

表7 陸平貝塚 1987年調査で採集された脊椎動物遺体（現地採集資料）の組成

分類群	同定標本数(NISP)										最小個体数(MIN)							
	13号住居			14号住居			15号住居			K-16	①判	その他	D貝塚No.1	D貝塚No.1	合計	B貝塚No.1	A貝塚No.1	D貝塚No.1
	半類	中類	中類	半類	中類	中類	中類	中類	中類				中類?	中類?	中類?			
サメ類	1	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	5	1	1	0	—	—
板鰓類	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	5	—	—	—	—	—
ニシン科	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0
ボラ科	0	2	0	2	0	0	0	0	7	0	0	0	11	0	2	0	0	0
スマズキ属	0	1	1	2	2	0	0	0	2	0	1	1	11	1	1	1	1	1
シロハタダイ属	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2	0	1	1	1	1
マダラ	0	3	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	7	1	0	0	1	1
クロダイ属	1	2	2	11	6	0	0	0	8	1	13	44	3	2	4	—	—	—
タカチ	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	—	0	—	0	0
サツキ属	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	0	0
コブ科	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3	0	1	1	1	1
ヒラメ科	0	0	0	0	1	0	0	0	5	0	0	0	6	1	1	0	0	0
ウグイ科	0	1	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	7	2	1	1	1	1
肩背骨・胸骨	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	—	—	—	—	—
高齢骨・胸腔不可	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	—	—	—	—
カサ指	0	0	0	0	3	0	0	0	6	0	3	0	6	1	0	2	—	—
ヒジ科	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0
鳥類・水辺	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0
鳥類・同定不可	0	0	0	0	2	1	0	0	1	0	0	1	5	—	—	—	—	—
ノウゼンギ	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	5	1	1	0	—	—
イヌ	0	0	0	0	4	0	0	0	5	0	1	0	16	1	1	1	—	—
シカ	0	0	0	0	13	0	1	1	9	0	1	0	16	2	1	1	1	1
イノシシ	0	1	1	2	18	3	0	4	1	1	1	0	32	3	1	1	1	1
イノシシ/シカ	0	0	0	0	13	1	0	0	0	0	0	0	17	—	—	—	—	—
イルカ	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0
ウシ	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3	0	0	0	0	0
ウマ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0
初乳屋・同定不可	0	0	0	0	2	4	0	0	0	0	0	0	6	—	—	—	—	—
ヒト	0	0	0	0	6	1	3	0	0	0	0	0	10	14	1	0	1	1
合計	2	12	4	19	77	13	4	50	5	42	227	20	15	16	—	—	—	—

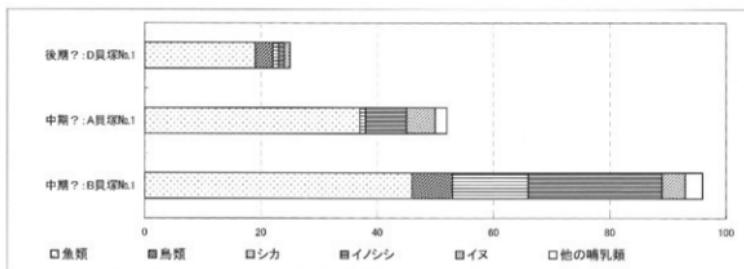
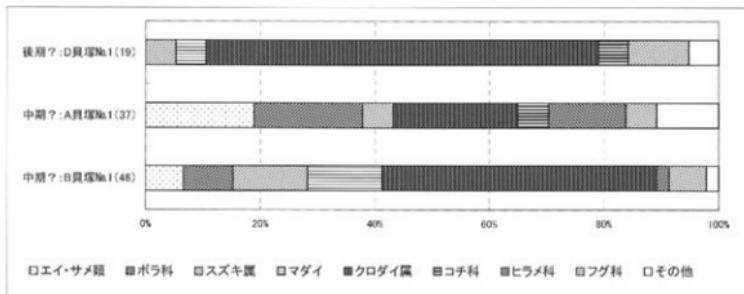
図76 図 陸平貝塚 1987年度調査で採集された脊椎動物遺体（現地採集資料）の出土数と組成（NISP）
哺乳類の種同定不可資料およびウマ・ウシ・ヒトは除外した。

図77 図 陸平貝塚 1987年度調査で採集された魚類遺体（現地採集資料）の組成（NISP比）

陸平貝塚 1987年調査の貝殻サンプル 5mm 試料から検出された脊椎動物遺体、表8

表 8 (つづき).

表9 陸平目塚 1987年度 調査の具属サンプル 2.5mm 試料から検出された脊椎動物遺体。

表 10 陸平貝塚 1987 年度調査の貝層サンプル 1 mm 試料から検出された脊椎動物遺体

表 11 陸平貝塚 1987 年度調査の貝層サンプル 5mm 試料から検出された脊椎動物遺体の組成。カニ類も併せて示した。

分類群	密度標本数(NISP)						最小個体数(MNI)									
	DⅡ埋 No.2下	F貝塚 No.1	B貝塚 No.1	AⅣ埋 No.1	D貝塚 No.2上	G貝塚 No.1	D貝塚 No.1	DⅡ埋 No.2下	E貝塚 No.1	B貝塚 No.1	AⅣ埋 No.1	D貝塚 No.2上	G貝塚 No.1	D貝塚 No.1		
	系名文	浮島	上原山 河内沖	阿玉古	阿玉古	加那	称名ラ	系名文	浮島	五重石 河内沖	阿玉古	阿玉古	加那	称名寺		
サメ類	0	0	1	3	0	1	1	6	0	0	1	1	0	1	4	
エイ目	0	0	4	2	0	0	5	11	0	0	1	1	0	0	3	
板鰓類	0	1	0	0	0	0	3	4	-	1	-	-	-	-	1	
ウナギ類	0	0	0	0	0	2	6	7	0	0	0	0	2	1	3	
ダツ科	0	0	0	1	0	0	1	2	0	0	1	0	0	1	2	
ボラ科	2	1	19	16	2	1	81	95	1	1	2	2	1	1	9	17
スズメ鳥	1	9	21	11	3	2	12	59	1	2	5	1	1	1	2	13
アジ科	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1
ブリ属	0	0	0	0	0	1	4	5	0	0	0	0	0	1	1	2
ルバ科	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1
コシラクサギイ属	0	0	0	0	0	0	6	6	0	0	0	0	0	0	2	2
マダラ科	0	1	0	2	1	0	0	4	0	1	0	1	1	0	0	3
クロダイ属	7	4	3	16	3	11	52	96	3	1	1	4	1	2	9	21
タイ科	1	2	0	4	0	0	10	17	-	-	-	-	-	-	0	0
ザバク属	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	1	1	2
サワラ属	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	1
フサカサゴ科	0	0	1	0	0	1	6	8	0	0	1	0	0	1	1	3
オニオゼリ科	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	1
コチ	0	4	4	17	0	9	17	31	0	1	1	2	0	2	3	9
ヒラクサギ	2	1	2	29	3	8	12	37	1	1	1	3	1	1	3	11
カレイ科	0	1	0	2	0	5	8	16	0	1	0	1	0	1	1	4
ダツ科	0	7	0	2	0	1	21	31	0	1	0	1	0	1	2	8
真分類・同定不可	0	4	3	16	0	1	24	48	-	-	-	-	-	-	0	0
ヘビ類	0	0	1	0	0	0	1	2	0	0	1	0	0	0	1	2
カラス近似種	0	1	0	0	0	0	1	2	0	1	0	0	0	0	1	2
フクダウチ	0	0	5	0	0	0	0	5	0	0	1	0	0	0	0	1
カキ類	0	1	2	1	1	1	3	9	0	1	1	1	1	1	1	6
キジ科	0	0	2	0	0	0	2	4	0	0	1	0	0	0	2	3
鳥類・同定不可	0	1	11	3	0	1	1	17	-	-	-	-	-	-	0	0
ネズミ科	0	1	0	1	0	0	0	2	0	1	0	1	0	0	0	2
ノワガマ	0	0	0	1	0	1	0	2	0	0	0	1	0	1	0	2
タクチ	0	1	1	0	0	0	0	2	0	1	1	0	0	0	0	2
イス	0	0	1	2	0	0	0	3	0	0	1	1	0	0	0	2
インシ	1	0	0	2	1	2	1	7	1	0	0	1	1	1	1	5
イソシジンカ	0	0	0	0	0	0	1	1	-	-	-	-	-	-	0	0
ヒト	9	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1
哺乳類・保留	0	1	1	0	0	0	0	2	-	-	-	-	-	-	0	0
カニ類	0	0	1	2	0	6	7	16	-	-	-	-	-	-	0	0
合計	14	43	74	138	14	57	256	595	7	13	15	25	6	18	41	137

貝層サンプル(5mmメッシュ) NISP

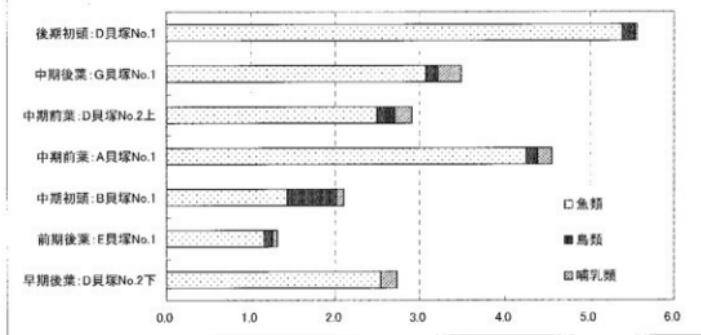
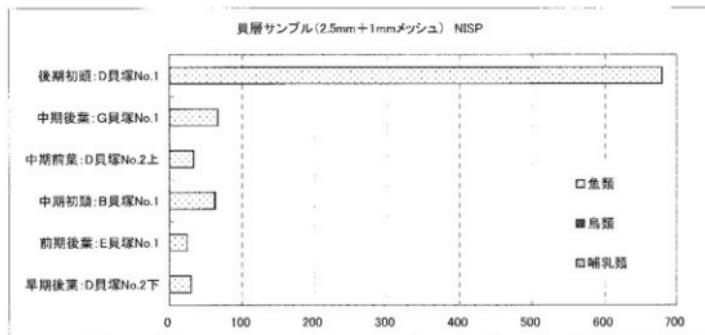
第78図 陸平貝塚 1987 年度調査貝層サンプル 5mm 試料における脊椎動物遺体の包含密度 (サンプル 10kgあたりの NISP)。
自然遺骸と思われるものの (ネズミ科) は除いた。

表 12 陸平貝塚 1987 年度調査の貝層サンプル 2.5mm 試料から検出された脊椎動物遺体の組成。カニ類は併せて示した。未登録の魚・鰐は除外した。

分類群	固定標本数 (NBP)										最小標本数 (MBP)									
	D 貝塚 No.2 下	E 貝塚 No.1	F 貝塚 No.2 上	G 貝塚 No.1	H 貝塚 No.2	I 貝塚 No.3	合計	D 貝塚 No.2 下	E 貝塚 No.1	F 貝塚 No.2 上	G 貝塚 No.1	H 貝塚 No.2	I 貝塚 No.3	合計						
柔軟虫	浮游	底生	底生	底生	底生	底生	6	6	6	6	6	6	6	1	1	1	1	1	1	
二イ日	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	
板鰓類	3	2	6	1	3	10	25	1	1	1	1	1	1	1	4	4	4	4	4	
ニシノ科	0	5	12	1	7	33	58	0	1	1	1	1	1	1	5	5	5	5	5	
ウナギ属	1	4	9	0	2	694	710	1	1	1	0	1	1	6	10	10	10	10	10	
ダツツメ	0	0	0	1	1	2	2	0	0	0	0	1	1	1	2	2	2	2	2	
サワガニ属	0	1	3	2	0	49	55	0	1	1	1	1	1	0	4	4	4	4	4	
ボウケツ	0	4	0	3	1	13	21	0	1	0	1	1	1	1	4	4	4	4	4	
スマツ属	13	7	24	5	0	42	91	1	1	1	1	0	0	3	7	7	7	7	7	
キス属	0	5	0	0	1	0	6	0	1	0	0	1	0	0	2	2	2	2	2	
アジ科	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	
クロダイ属	2	1	0	0	1	2	6	1	1	0	0	1	1	1	4	4	4	4	4	
タイ科	0	3	1	0	0	2	6	—	—	1	—	—	—	—	1	1	1	1	1	
ウミタコゴ科	1	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	
サハク属	0	0	1	0	0	2	3	0	0	1	0	0	0	1	2	2	2	2	2	
ハゼ科	0	6	0	0	0	0	18	18	0	0	0	0	0	0	2	2	2	2	2	
ボラ属	0	0	0	0	0	0	23	23	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	
フナカラゴ科	0	0	0	0	0	0	14	14	0	0	0	0	0	0	2	2	2	2	2	
アワビ属	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	
コマツ	0	1	0	0	3	4	8	0	1	0	0	1	1	1	3	3	3	3	3	
ヒラクサ科	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
カレイ科	1	1	2	0	2	1	7	1	1	1	1	0	1	1	5	5	5	5	5	
ブリ科	0	1	0	0	0	5	6	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	
魚骨類・同定不可	0	0	0	1	0	1	2	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	
鳥骨類・保留	0	0	0	0	0	0	3	3	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	
鳥骨類・同定不可	3	2	3	2	2	2	53	53	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	
ヘビ類	0	7	3	0	1	1	12	0	1	1	0	1	1	1	4	4	4	4	4	
鳥類・同定不可	0	0	4	0	0	1	5	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	
ネズミ科	0	1	0	1	0	0	2	0	1	0	1	0	0	0	2	2	2	2	2	
イヌ科	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	
哺乳類・復讐	0	0	0	1	0	0	1	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	
哺乳類・同定不可	0	0	0	0	0	0	1	1	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	
カニ類	0	0	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計	24	45	68	18	21	971	1150	6	13	9	6	10	29	73	73	73	73	73	73	

表 13 陸平貝塚 1987 年度調査の貝層サンプル 1mm 試料から検出された脊椎動物遺体の組成。脊椎類の魚・鰐は除外した。

分類群	固定標本数 (NBP)										最小標本数 (MBP)									
	D 貝塚 No.2 下	E 貝塚 No.1	F 貝塚 No.2 上	G 貝塚 No.1	H 貝塚 No.2	I 貝塚 No.3	合計	D 貝塚 No.2 下	E 貝塚 No.1	F 貝塚 No.2 上	G 貝塚 No.1	H 貝塚 No.2	I 貝塚 No.3	合計						
柔軟虫	浮游	底生	底生	底生	底生	底生	6	6	6	6	6	6	6	2	2	2	2	2	2	
板鰓類	1	1	0	0	10	19	31	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3	
イソギン	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	
サザエ科	0	0	0	0	1	2	2	0	0	0	0	1	1	1	2	2	2	2	2	
コノシロ科	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	1	1	1	3	3	3	3	3	
ニシノ科	5	15	17	6	28	41	112	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3	3	3	
カタクチイシノ科	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	
ウナギ属	2	24	29	1	12	1819	1887	1	1	1	1	1	1	1	20	20	20	20	20	
ニホンサメ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	1	
サメ属	0	1	4	4	1	23	33	0	1	1	1	1	1	1	5	5	5	5	5	
ボラ属	0	1	0	0	0	0	14	15	0	1	0	0	0	0	1	2	2	2	2	
スマツ属	1	3	2	1	1	24	34	1	2	1	1	1	1	1	3	9	9	9	9	
キス属	1	2	0	0	0	2	5	1	0	0	0	0	0	0	1	3	3	3	3	
アマモクサ科	1	1	0	0	0	0	10	12	1	0	0	0	0	0	1	3	3	3	3	
ウニ科	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
カレイ科	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
サワガニ属	1	0	+	+	0	0	0	1	0	1	1	1	1	0	4	4	4	4	4	
ハゼ科	1	5	15	2	7	186	216	1	1	1	1	1	1	1	19	19	19	19	19	
ギンガム科	0	0	0	0	0	47	47	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	
フナカラゴ科	0	0	1	0	0	0	16	17	0	0	1	0	0	0	2	3	3	3	3	
アワビ属	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	
コマツ	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	1	
鳥骨類・保留	0	0	0	0	0	0	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
鳥骨類・同定不可	4	12	17	3	0	115	150	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	
ヘビ類	1	74	2	0	0	3	90	1	1	1	0	0	0	1	4	4	4	4	4	
ネコザメ科	0	2	0	0	0	0	1	3	0	—	—	—	—	—	0	2	2	2	2	
小甲殻乳歯	0	3	0	0	0	0	3	—	—	—	—	—	—	—	0	0	0	0	0	
合計	18	149	97	17	59	2264	2704	8	12	11	6	9	32	98	98	98	98	98	98	



第79図 陸平貝塚 1987年調査貝層サンプル 2.5mm+1mm 試料における脊椎動物遺体の包含密度 (サンプル 10kgあたりの NISP)。

1mmメッシュ資料は半量のみの分析のためNISPを2倍にして集計した。

真骨鯨の歯・鱗、自然遺骸と思われるもの（ヘビ脚・ネズミ科）およびヒトは除外した。

に海水が浸入し、溺れ谷と泥質干潟が形成されたのに対し、前期後葉には海面低下あるいは土砂による埋積によって泥質干潟の縮小と砂泥質干潟の拡大が進行し、そうした環境が後期初頭まで比較的安定して存在したことが示唆される。

縄文海進期に本遺跡周囲の谷が溺れ谷となっていたことは、谷内のボーリング調査と冲積層の珪藻分析によつて確認されている〔赤澤・中村編 2009〕。また近隣の前期貝塚の貝類組成をみると、前期前葉（岡山式期）の虚空蔵貝塚〔大川・大島 1978〕ではハマグリ、ハイガイ、オキシジミ、前期中葉（植房式期）の大谷貝塚〔黒住 2009〕ではアサリ、ハマグリが主体であることから、溺れ谷と泥質干潟の衰退は縄文前期前葉ころに進行した可能性がある。

魚類組成の変遷をみると、早期後葉～中期後葉には内湾性種が優占しており、後期初頭もウナギ属とハゼ科を除けば内湾性種が主体となる点は同様である。このことから、早期後葉～後期初頭にかけて本遺跡の周辺海域には比較的安定した内湾環境が存在したことが示唆される。

いっぽう淡水～汽水域に多いウナギ属は、前期後葉～中期初頭に一次的な増加期があり、後期初頭に至って爆発的な増加を示す。のことから、本遺跡の周辺水域では前期後葉～中期初頭に短期的な淡水化の進行があり、さらに後期初頭には淡水域が一気に拡大した可能性が考えられる。ただし、ウナギ属は内湾域にも生息可能である。

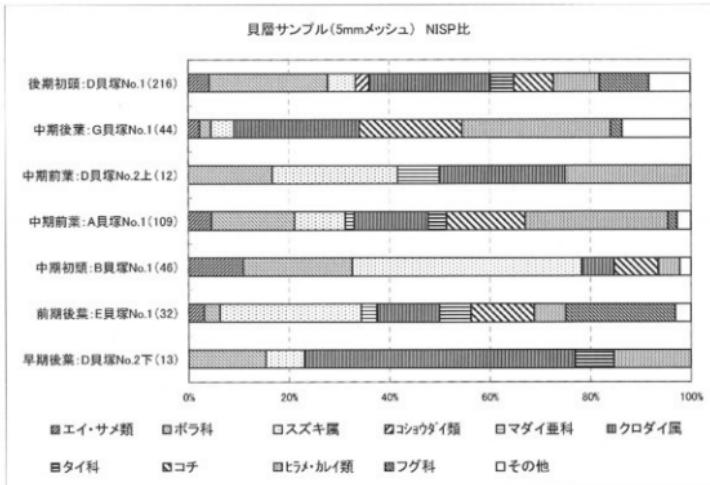
ること、後期初頭の増加が著しく急激であること、他の淡水～汽水生魚貝類の増加が認められないことから、人為的な選択性の変化（嗜好の変化やウナギ漁に適した漁法の開発など）に起因する文化的現象の可能性についても考慮する必要があろう。なおウナギ属の増加は震ヶ浦東岸、本遺跡の対岸に位置する下貝塚の中期末～後期初頭層準でも確認されていることから〔加藤ほか編 1992〕、この時代の震ヶ浦沿岸においてある程度広範囲にわたって生じた現象である可能性がある。

陸平貝塚における動物資源利用の変遷

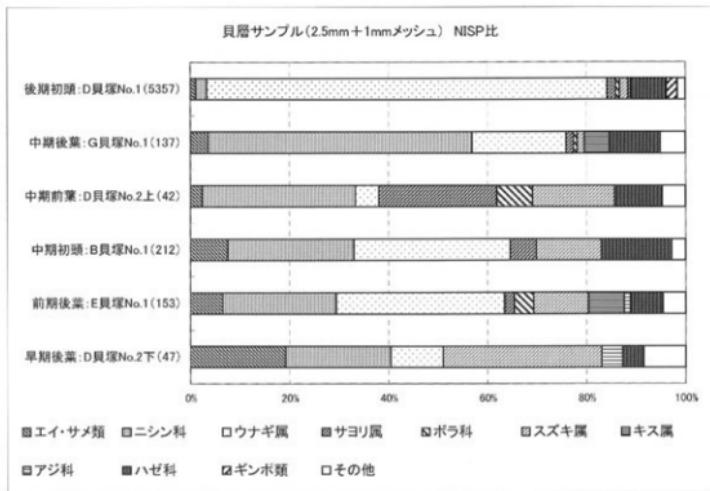
貝類採集 主な捕獲対象種は、早期後葉はハイガイとマガキ、前期後葉以降はハマグリを中心とする砂泥質干潟の貝類であり、種類に時期的な変化はあるものの、ほとんどが遺跡周辺の海岸干潟で捕獲されたと推定されるものである。周辺の地形条件および古環境調査の結果〔赤澤・中村編 2009〕からみて、これらは遺跡から1～2km圏内で充分に捕獲可能であったと考えられる。

魚類利用 今回の分析資料から検出された骨類は、全時代を通じて魚骨が大半を占めた。のことから、本遺跡では魚類の利用が一貫して活発であったと推定される。また魚骨の大半は水洗選別 2.5mm+1mm 資料であり、5mm 資料と現地採集資料は少ないと、とくに比較的小型の魚類が高い比重を占めていたと推定される。

魚類の内容をみると、現地採集資料や水洗選別 5mm 資



第80図 陸平貝塚 1987年度調査の貝層サンプル 5mm 試料から検出された魚類遺体組成の変遷 (NISP 比).



第81図 陸平貝塚 1987年度調査の貝層サンプル 2.5mm+1mm 試料から検出された魚類遺体組成の変遷 (NISP 比).

1mmメッシュ試料は半量のみの分析のためNISPを2倍にして集計した。

真骨類の骨・鱗、自然迷骸と思われるもの（ヘビ骨・ネズミ骨）およびヒトは除外した。

料にみられる比較的大型の魚では、各時代ともクロダイ属、スズキ属、ボラ科、コチ科、ヒラメ科といった内湾性種が主体であり、時期的な変化に乏しい。魚骨の包含密度にも大きな時代変化は認められない。

水洗選別 2.5mm・1mm 資料にみられる小型魚類は、早期後葉～中期後葉には魚骨の包含密度は比較的低く、ニシン科（マイワシ・サッパ・コノシロ）、スズキ属（若魚）、ウナギ属、ハゼ科などの内湾性～淡水性の多様な魚種が利用されている。これに対して後期初頭にはウナギ属が急増し、これに伴って魚骨の出土量もおびただしくなることから、この時代にウナギ漁が急激に活発化したことわかる。ただし、先述のとおり、その原因を環境変化に求めるか、文化的要因に求めるかは今後の課題である。

以上から、本遺跡の漁撈は、早期後葉～中期後葉には遺跡周辺の内湾域における各種魚類の漁と遺跡近隣の干潟での貝類採集を主力としており、さらに後期初頭にはこれらに加えて近隣の淡水～汽水域？におけるウナギ漁の重要度が飛躍的に高まると推定される。

狩獵 鳥獣骨の出土数は全時代を通じて少なく、鳥獣獣の低調さは本遺跡の一貫した特徴と考えられる。B貝塚 No.1 トレンチの現地採集資料（中期？）では例外的にシカ、イノシシを中心とする鳥獣骨がやや多いが、これがこの時代の様相を代表しているかはさらに検討を要する。

鳥類と哺乳類の比率をみると、水洗選別 5mm 資料では各時代とも両者がおおむね拮抗した状況にあり、鳥獣の比重の高さ（とうよりも陸獣類の比重の低さ）が目立つ。

時代ごとの特徴は資料数が少ないので明確でない。鳥類ではカモ類が前期後葉～後期初頭、キジ科が中期初頭、後期初頭の貝層から検出されており、これらが主な捕獲対象となっていたと推定される。哺乳類では、イノシシが各時代の資料から検出されているのに対して、シカは B貝塚 No.1 トレンチの現地採集資料（中期？）でやや多くみられる以外はない。のことから、本遺跡での陸獣類はイノシシ類が主力であったと推定される。

謝辞 分析に際して西本豊弘氏（国立歴史民俗博物館）、黒佐耐一氏（千葉県立中央博物館）からは多くのご教示・ご助力を賜った。水洗選別資料からの骨の抽出に際しては、大津則子、島田裕子、宮下聰史、阿部きよ子の各氏より協力を賜った。厚く御礼申し上げる。

参考文献

- 赤澤 威・中村哲也編 2009『陸平貝塚 調査研究報告書3』美浦村教育委員会
大川 清・大島秀俊編 1978『茨城県美浦村・虚空貝塚』図工舎
大学文学部考古学研究室
加藤晋平・茂木雅博・森嶋編 1992『下貝塚発掘調査報告書』麻生町教育委員会
黒住耐一 2009『大谷貝塚の上層サンプルから得られた貝類遺体（予報）』『大谷貝塚』茨城県教育財団
橋泉岳二 2004『貝層出土の動物遺体』『陸平貝塚 調査研究報告書1』
中村哲也編 2004『陸平貝塚 調査研究報告書1』美浦村教育委員会

3. 陸平貝塚から得られた微小貝類遺体

黒住 貴二

陸平貝塚は、霞ヶ浦に面した茨城県稻敷郡美浦村に存在する縄文時代早期から後期までの貝塚を有する国指定史跡である。今回、1987年の確認調査によって、様々な時代の貝塚から得られた微小貝類遺体を検討することができたので、ここに報告したい。報告に先立ち、検討する機会を与えて頂き、種々お世話いただいた美浦村教育委員会・早稲田大学の樋泉岳二の両氏に御礼申し上げたい。

方法

今回は、A・B・D・E・Gの5つの貝塚の様々な層位から得られた貝層サンプルから抽出された微小貝類を検討の対象とした。これらは、2.5および1.0mmメッシュを用いた水洗選別残渣から抽出された遺体を対象とした。ただ、陸産貝類に関しては、5.0mmメッシュ上の種も検討に加えた。なお、A貝塚のサンプルは、以前に報告した1997年度調査のデータ[黒住・樋泉, 2004]を示した。なお、食用種を中心とした貝類遺体に関しては、樋泉[2004]や樋泉[本報告書]および中村[2008]を参照されたい。

結果および考察

今回の調査で得られた微小貝類遺体の分類学的位置と生息場所を表14に、出土の詳細を表17に示した。少なくとも陸産貝類9科25種、海産貝類21科31種が確認され、淡水産貝類は抽出できなかった。

以下、陸産貝類と海産貝類に分けて議論したい。

陸産貝類

陸平貝塚の組成 各種を時代と各貝塚では層序および生息場所類型ごとに分け、その最少個体数を表15に示した。300個と最も多かったE貝塚No.1トレンチのサンプル番号41から、1個体のみのD貝塚No.1トレンチの81と111まで変化していた。その出土個体数の傾向は、必

ずしも時代に伴う変化を示さず、またいくつもの時代のサンプルの存在したD貝塚では層により出土数に大きな違いがあり、貝塚の位置によっても大きな相違は認められないようであった。

本貝塚の優占種として、全体で10個体以上得られたサンプル中で、10%以上を占めていた開放地生息種のヒメコハクガイ類似種(以下ヒメコハクガイ類)、ホソオカチヨウジ・ヒメベッコウ類似属、林縁生息種のヒカリギセル、林内生息種のヒメギセル・イブキゴマガイガイを認めた。その時代ごとの変化を第82図に示した。ただ、表17に示したものの中、種の特徴の現れなかったキセルガイ類について、キセルガイ中形をヒカリギセル、キセルガイ小形をヒメギセルとして集計してある。

早期後葉のサンプルでは、個体数が少ないものの、ヒメコハクガイ類が大部分を占めていた。その後、前期後葉のサンプルでは、イブキゴマガイの優占する割合が一挙に増加し、キセルガイ2種も多い。中期初頭からイブキゴマガイが減少し、中期前葉に見られなくなる。同様に、キセルガイ類も前葉には極めて少くなり、ヒメベッコウ類似属の割合が40%程度を占めていた。中期後葉から後期初頭にかけては、イブキゴマガイが僅かに認められ、キセルガイ類の割合も小さく、ホソオカチヨウジが優占し、ヒメベッコウ類似属やヒメコハクガイ類も比較的多いパターンとなっていた。

陸産貝類の生息場所を林内・林縁・開放地の3類型に区分し、その組成変化を示したのが第83図である。ただ、1個体しか得られなかった2サンプルに関しては結果を示していない。優占種の組成を反映して、早期後葉の開放地生息種の優占するものから、前期後葉の林内生息種が80%程度にもなる組成へと変化した。その後、中期になり、林内生息種が減少していく、林縁生息種および開放地生息種の割合が増加していた。中期後葉から後期初頭にかけては、林内生息種が10-20%と少なく、林縁生息種が開放地生息種が大半を占めるものとなっていた。

陸産貝類の優占種組成(第82図)と生息場所類型組成(第83図)から、陸平貝塚周辺の景観は、

表 14 陸平貝塚の土壌サンプルから得られた貝類遺体リスト.

ア) 早期後葉の灌木林が混じる可能性のあるものの、草地的な環境。

イ) 前期後葉には森林的な環境、

ウ) 中期初頭から前葉までは、また草地的な環境

工) 中期後葉から後期初頭にかけては、林と草地的な環境。

に変化したものと推測された。

ア) からイ) への変化は、貝塚周辺への人間の干渉が極めて少ない想定され、報告者は森林の発達によるものと考える。もちろん、有用樹木の植林／育成ということも想定される。しかし、前期後葉に優占していたイブキゴマガイや僅かに確認されたチュウゼンジギセルは、現在人為的擾乱の極めて低い自然度の高い森林にのみ生

息する種であり、これらの種が確認されたということは、貝塚周辺に成立していた森林には人間が伐採等を行うようなタイプのものではなかったと思われることから、自然な森林の発達と捉えている。

イ) からウ) の変化は、上記とは逆に、人間による森林の伐採ではないかと考えられよう。中村[2008]も、伐採の可能性を想定している。

ウ)からエ)では、森林の僅かな回復があったのではないかと想定される。しかし、中期後葉から後期初頭のサンプル中からも、少數ながら前述のイブキゴマガイとチュウゼンジギセルが確認されていることから、林床の環境はまだ比較的悪性だったと推測され、森林の利用形態も大きくなれば変化しなかったと思われる。つまり、本貝

表 15 陸平目塚から得られた微小陸産貝類の最少個体数組成。

塚では、前期後葉と中期の陸産貝類の比較から、人間による森林伐採が明確になったと考える。

中期前段のA貝塚からのみ焼けたキセルガイ類が得られており、これらの焼けたキセルガイ類は薪と一緒に炉などに運ばれたものと考えた[黒住・樋泉、2004]。このような焼けた陸産貝類の例は、東京都の繩文後期／豊沢貝塚で、「灰塙」に関係すると想定された土坑内貝層[加納、2001]以外には、ほとんど知られていないと思われる。陸平貝塚の各貝塚でも、やはり、焼けた陸産貝類は確認できなかった(表17)。

霞ヶ浦周辺の貝塚との比較 今後、詳細な比較検討を行いたいが、霞ヶ浦周辺で微小陸産貝類の組成が知られている貝塚として、大谷貝塚[黒住, 2009]、於下貝塚[加納, 1992]、上高津貝塚[黒住, 1994]がある。ここでは、簡単に陸平日塚とこれらの貝塚の比較を行ってみたい。

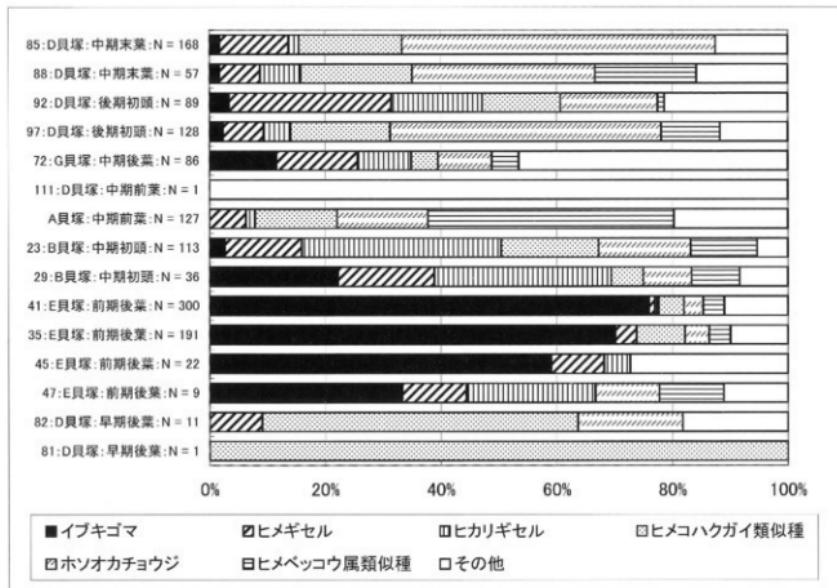
大谷貝塚では、前期中葉と中期後葉の時期が認められ、林内生息種のイブキゴマガイが得られず、逆に林内のスジケシガイと林縁のヒダリマキゴマガイが比較的多かった。前期中葉から中期後葉にかけて林内生息種のミジンコ・ヤマタニシの減少等が、中期後葉の下部で林縁生息種のヒダリマキゴマガイの増加が認められ、中期後葉上部の純貝層では林内生息種のヒメギセルが増加していた。ただ、生息場所類型組成では、前期では、林内生息種と開放地生息種がそれぞれ約40%が占め、中期後葉下部に林縁生息種が増加し、またその上部で前期と同様な組成と

なっていた。大谷貝塚と陸平貝塚では、両者の種組成は少し異なっていたことや、前期から中期にかけて同じく林内生息種の割合が減少していたという点が認められた。ただ、大谷貝塚では、純貝層では林内のものが優占していたことは、陸平貝塚との相違と考えられよう。

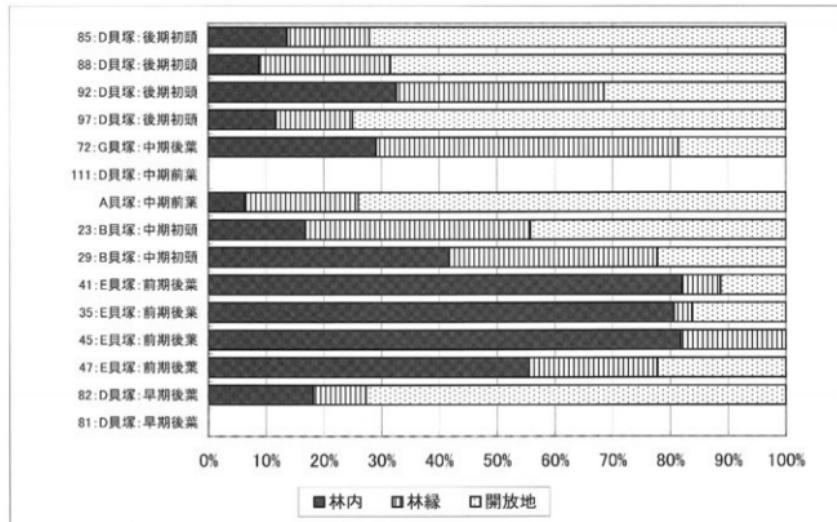
中期後半から後期初頭の於下貝塚では、大谷貝塚と同じく林内生息種のイブキゴマガイが確認されず、林縁生息種のオオタキコギセルが比較的多く得られている。全体として、林縁生息種が優占し、一方、開放地生息種が僅少であったという点が特徴的なのかもしれない。その時代の中で、陸平貝塚の前期から中期に認められた生息場所類型組成の明瞭な変化を示さないようであった。これは、もしかすると、図 82 に示した陸平貝塚の中期後発から後期初頭の林内生息種が少なく、林縁か開放地のどちらかが優占するというパターンと同様なものかもしれない。

後期前葉の上高津貝塚では、陸平貝塚と同様にイブキゴマガイが多く、林内生息種のヒメギセルも比較的高頻度であった。この貝塚では、斜面上部と中部での種組成が異なっており、中部より上部で開放地生息種の割合が高いことが示されている。ただ、全体として、林内生息種が半数以上を占めており、大谷貝塚の中期後葉上部の種組成と同様な状況に合った可能性も想定される。

このように各貝塚ごとに微小陸産貝類の種組成は異なり、花粉分析等のように、近接した地域でも単純には同



第 82 図 陸平貝塚における陸産貝類の優占種組成の変化



第 83 図 陸平貝塚における陸産貝類の生息場所類型組成の変化

表 16 陸平貝塚から得られた海産微小貝類

一に取り扱えないことも改めて示されたと考えられる。しかし、このことは、やはり林内生息種のイブキゴマガイの出現にみられるように、微細な景観の相違を示しており、このゴマガイ類の存在はより自然度の高い植生を表しているのであろう。一方、巨視的には、前述した陸平貝塚で示した早期末から後期初頭までの変化と、他の3つの貝塚の示した生息場所類型組成やその変化は、同調しているようにも捉えられる。つまり、前期から中期への林内生息種の減少や中期前半の比較的開けた状況等である。その後、中期後半から後期にかけては、森林的な環境に貝塚が作られていたようにも考えられる。今後、霞ヶ浦沿岸に立地する諸貝塚の微小陸産貝類組成が明らかになることで、一般的な傾向が認められるのか、また微視的な各貝塚の特徴は何かなど、明らかになっていくものと考えられる。

海產貝類

今回確認された海産貝類には、様々な山來のものが含まれていた。サルボオ類・カキ類・シオフキ・マルズダレガイ目等は食用種の殻頂部破片であり、一部に焼けているものも認められた。食用種以外にも、これまで報告されている海草（アマモ）や海藻上に生息するシマハマツボ等の種や枯死したアシと共に遺跡に持ち込まれたカワザンショウガイ類[例えば黒住, 1994; 加納, 2001 等]、時に食用となるウミニナ類、食用貝類の死殻中に生息するタマキビ等の幼貝や砂泥中のクチキレモドキ類等、混獲されたアラムシロ等、貝製品素材の可能性のあるカノコガイ類等のものが認められた。以下、表 16 に示す出来

ここにコメントを加え不向きない

葉上性巻貝類 アマモや他の海藻上に生息する葉上性種として、シマハマツボ・ウネハマツボ・マルテンスマツミ・マキミゾスズメハマツボの4種が挙げられる。しかし、マキミゾスズメハマツボは、得られた個体のはほとんどが磨滅の認められた死殻であったことから、後述する砂浜中の砂泥に由来する可能性が高い。

他の3種は、一部に焼けている個体も認められた。時に多数のシマハツボ等が焼けた状態で得られ、「製塙」を示すものと考えられている[例えば加納, 2001]。しかし、同時に報告されたウズマキゴカイ類の焼けた殻は、本貝塙からは全く得られておらず、「製塙」に関しては不明瞭といわざるを得ない。ただ、中期初頭のサンプルから葉上性種が比較的安定して得られていることから、海草／海藻の利用は存在した可能性が高いと思われる。

枯死したアシの利用 このカテゴリーに含めたのは、カワザンショウガイ・クリイロカワザンショウ・ヨシダカワザンショウ?・キヌカツギハマシノミ?・カワグチツボの5種である。キヌカツギハマシノミ?は、1個体の幼貝のみの確認であり同定が多少不確実であり、また死殻由来の可能性もある。カワグチツボは、アシ原に生息する種ではないが、これまでに報告してきたよう¹に[黒住, 1994; 黒住・種泉, 2004]、カワザンショウガイ類と同様な出土様式・焼けているパターンから、アシ原前面の泥干潟に生息していた本種の死殻が打ち上げられ、枯死したアシに付着して、カワザンショウガイ類と共に持ち込まれたと考えている。その用途は不明ながら、報告者は“埴”に関係したものではないかと想定している。

本貝塚では、一部で焼けた個体の多いサンプルも認められたが（A貝塚）、必ずしも多くが焼けている訳ではなかった。

葉上性およびアシ由来の種の確認時期 本遺跡では、早期後葉という古い時代から微小貝類を確認することができた。早期後葉のサンプルからは、葉上性およびアシ由来の両タイプは確認できなかった。この状況は、報告者の検討できた千葉県印旛沼周辺の早期木の炉跡内貝層でも同様であった〔黒住、2003, 2005〕。アシ原の群は、前期後葉から認められ、中期前葉には焼けた個体も確認できた。葉上性種は中期初頭から認めることができた。

両タイプの微小種の確認時期に関して、福島県浦尻貝塚の前期末から晩期中葉にわたるサンプルにおいて、報告者は、ア）アシ原の群は前期末から晩期中葉まで得られ、この時期に焼けた個体も確認された、イ）外海に生息するチャツボ類等は中期前葉から晩期中葉まで連続して認められ、焼けているものも含まれていた、ウ）シマハマツボ等の内湾葉上性種は後期前葉のサンプルのみから確認された、等の結果を報告した〔黒住、2008〕。

本遺跡と浦尻貝塚の比較から、アシ原のものの利用は陸平貝塚ではより早く前期後葉には存在していたことと、内湾葉上性種の利用も陸平で中期初頭と少し早く認められたことを明らかにすることができた。

ただ、実際に得られた両タイプの個体数はかなり少ないので、時期差を検証するためにはより多くのサンプルを処理する必要があろう。この海南微小種に関して、これを海草／海藻の「食用利用」や「製塩」の「文化」として捉えるならば、その起源と伝播は興味深い課題である。今後とも、着実にデータの蓄積が不可欠である。

ウミニナ類 下渴やアシ原に生息するウミニナ科やヘナタリ科・オニノツノガイ科の6種は、前期後葉を中心に多数得られており、焼けている個体も多くの時期で確認された。本種の出土に関して、近接した大谷貝塚でも議論したが〔黒住、2009〕、食用のものとマガキの付着基質〔樋泉、2004 も参照〕等が含まれている。食用貝類遺体の組成〔樋泉、2004 等〕から、本遺跡でも前期のものはマガキの付着基質の可能性が高く、中期以降のものは食用のものを多く含むようである。ウミニナ類生貝の上にのみ生息するツボミガイが後期初頭から得られている点も、前述の想定に合うものである。

本遺跡でかなり特徴的であったことに、食用にも付着基質にもならないウミニナ類の幼貝が比較的多く得られていることがあった。この幼貝の一部は食用種死殻に由来すると考えられるが、今後、その由来を検討することも必要であろう。

製品の素材の可能性 今回のサンプル中には、製品素材の可能性のある種として、ヒメカノコが確認された。前期後葉のサンプルから得られた本種の殻頂部は欠落しており孔となっていた（写真図版I）。報告者にはこの孔が人為的な穿孔かどうか不明であったが、磨滅のほどんど認められない個体であったので、自然に殻頂部が欠落した可能性は低いと思われた。この科の貝殻内部は単一の空洞となっており（螺層の内部は自ら溶かされる）、殻頂部に穿孔すると、殻口から殻頂まで比較的容易に紐等を通して考えられる。ヒメカノコは、後期初頭からも得られている。また、この種と同様な殻形態を持つイシマキと考えられる種も確認されている。ただ、これらの種でも、死殻中に生息していた可能性もある。近接した大谷貝塚でも、両種が確認されている〔黒住、2009〕。

混獲種と死殻中の種 従来から知られているように、アラムシロやカゴメガイは食用貝類採集時に混獲されたものと考えられ、イボニシ・タマキビ等も幼貝が死殻中やカキの間にすんでいたものとも考えられる。前述したマキミゾズメハマツボやクチキレモドキ類・シマモツボ等は、5mm程度の微小貝で、これらは東京湾沿岸の磯文貝塚から比較的多く得られ、食用種死殻中の砂泥に含まれていた死殻と考えられている。ただ、今回のサンプルには、ウミニナ類と同様に死殻でがら焼けている個体（表16のBd）も認められ、何故焼けるのか、そのプロセスを検討することも必要であろう。

小形二枚貝類の少なさ 東京湾沿岸の磯文貝塚からは、1.5cm程度の小形巻貝／イボキサゴが極めて大量に得られることが知られており、ダン的に利用された可能性が指摘されている〔例えば西野、1999〕。時代と環境は異なるが、琉球列島の先史時代遺跡においても、同様なサイズのアマオブネ科2種の間で殻の破損頻度が異なり、破損のないアマオブネが、また小形二枚貝のリュウキュウヒバリやミドリアオリが、それぞれダン的に用いられたと考えている〔黒住、1995〕。

陸平貝塚では、イボキサゴの生息環境の少なさに起因

すると考えられるが、この種はほとんど得られていない〔植泉, 2004 等〕。また今回のサンプル中には、小形の一枚貝は極めて少なかった(表 17)。同定不可能な殻頂部は、溶けたものであり、小形個体でないと考えられた。陸平貝塚では、一部で想定されているような、ダシ的に利用された特徴的な貝類は認められなかつたと考えられる。当然、通常の食用貝類がダシ的に利用されていた可能性も想定される。つまり、遺跡周辺の貝類の生息環境と密度に起因するものであろうが、ダシ的に利用される種の存在が異なると考えられる。食用貝類の解析時に、このような利用法を想定することも意義があるのかもしれない。

その他の遺体 今回のサンプル中には、僅かではあつたが、カニやウニが確認された。カニの場合、貝塚からの出土は多くなく、出土する場合も焼けたハサミやツメの一部のみが出土する場合が大半であり、溶けていることが多いと考えられる。ウニも、東京湾沿岸の貝塚からカシバン類の破片を除くと、北海道や外海に面した遺跡以外から得られることは少ない。これらの利用頻度は当然低いことは確実であるが、逆に利用に関して集団の相違、つまり“これらの多くの遺跡で優先することのない動物を食用として利用する文化”という観点から、これらの出土を検討することも意味があると思われる。

今回報告した“石灰質チューブ”は、動物が作り出したものではあるが、その動物を特定することはできなかった。マガキに穿孔したゴカイ類によるもの可能性もある。

温暖種の確認 今回のサンプル中には、貝塚形跡期に、現在の分布域より北に生息していた数種の温暖種が確認された。松島[1984]で詳細に検討されたヒメカノコとコゲツノブ工の2種であり、幼貝のため同定が不確実であるがキヌカツギハマシイノミも含まれよう。霞ヶ浦沿岸の遺跡において、ヒメカノコは上高津貝塚[黒住, 1994; カノコガイの一種として報告], 両種とも大谷貝塚[黒住, 2009]から確認されている。また、コゲツノブ工は、最近、千葉県九十九里平野の繩文中期貝塚/貝貝塚から報告された〔西野・黒住, 2008〕。このように、縄文海進期の温暖種の一部は、これまで知られたよりも犬吠崎を越えて霞ヶ浦にまで分布していたことが明らかになってきた。逆に微小種では、現在の分布が主に犬吠崎以北の北方系

種は確認できなかつた。

引用文献

- 加納信哉, 1992. 貝類. In 加藤吉平・茂木耕博・真鍋(編), 於下
貝塚発掘調査報告書, pp. 102-132, pls. 22-26. 麻牛町教育
委員会, 茨城.
- 加納信哉, 2001. 微小動物遺存体の研究, 227 pp. 国學院大學大
学院研究長書, 文学研究7, 国學院大學大学院, 東京.
- 黒住耐二, 1994. 柱状サンプルから得られた微小貝類遺存体. In
佐藤孝雄・大内千(編), 上高津貝塚A地盤, 鹿島灘塾大学文
部省民族学・考古学研究室小報, (9):291-317, 3 pls.
- 黒住耐二, 1995. 貝類遺存体. In 中山清美(編), 用見崎遺跡, 等
利町文化財調査報告, (20): 34-43.
- 黒住耐二, 2003. 繩文時代早期の龍水寺裏遺跡の穴内貝冠から得
られた微小陸産貝類. In 酒井弘志(編), 龍水寺裏遺跡貝類,
(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書, (208):181-182.
- 黒住耐二, 2005. 千葉県太田長作遺跡の土坑内貝冠から得られた微
小貝類. In 宇井義典(編), 太川長作遺跡(第2次), (財)印旛
郡市文化財センター発掘調査報告書, (222):196-200.
- 黒住耐二, 2008. 微小貝類. In 川田強・植泉岳二(編), 浦貝貝塚 3,
第2分冊—自然遺物編, 南相馬市文化財調査報告書,
(11):137-152.
- 黒住耐二, 2009. 大谷貝塚の土屢サンプルから得られた貝類遺体
(予報). In 成島一也・駒澤悦郎・作山哲彦(編), 大谷貝塚, 茨
城県教育財團文化財調査報告, (317):578-590.
- 黒住耐二・植泉岳二, 2004. 11区2層から得られた微小貝類につ
いて, In 中村哲也・阿部芳郎・植泉岳二(編), 霞平貝塚, 陸
平研究所叢書, (1):69-70.
- 西野雅人, 1999. 縄文中期の大型貝塚と生産活動—有吉貝塚の分
析結果—, 千葉県文化財センター研究紀要, (19):135-150.
- 西野雅人・黒住耐二, 2008. 貝類. In (財)山武都市文化財センター
(編), 墳貝塚・山の台遺跡・仙台台遺跡・兼部田古墳, (財)
山武都市文化財センター発掘調査報告書, (101), 第1分冊,
pp. 274-279, 283.
- 松島義章, 1984. 日本列島における後水期の浅海性貝類群集—特に
環境変遷に伴うその時間・空間的変遷—, 神奈川県立博物館研
究報告(自然科学), (15): 37-109.
- 中村哲也, 2008. 霞ヶ浦の縄文景観, 霞平貝塚, 新泉社, 東京.
- 植泉岳二, 2004. 貝類出土の動物遺体. In 中村哲也・阿部芳郎・
植泉岳二(編), 霞平貝塚, 陸平研究所叢書, (1):44-70.

表 17 勝平目擇から得られた微小貝類遺体の詳細

本项目由成熟、有潜力、有特色的、急需扶持的种苗生产、繁育、加工、流通企业组成。

表 17 陸平貝塚から得られた微小貝類遺体の詳細 (つづき - 2) .

セグメント番号 幼虫および成虫	29 B真珠貝科 (L-S, dS) 深海貝科 (中等度)			23 B真珠貝科 (L-S, dS) 深海貝科 (中等度)			A真珠 中等度	111 B真珠貝科 (L-S, dS) 上層貝科 (中等度)			72 B真珠貝科 (L-S, dS) 中等度 (中等度)		
	時代 メランシイサズ (mm)	5	2.5	1	5	2.5	1	2.5	1	5	2.5	1	
地質学的特徴 Terrestrial analysis													
ヤマトシラカビ													
ミジンコヤシナシ													
ヒダリマツガガイ													
イヌマキモツガイ													
ヒカラミガイ	3a	1a, (1a), 3a				1a, 2a							
キラクガイ科	3ab, 3e	3ab, 2e			1a, 7ab	3ab, 21/b							
ヒメゼル					1a, 1e	2a							
キセカイガイ科		1a, 2e				2ab	25a, 3a/b, 7a	21(B)					
チラムガイ科							(a), 2a, 3a, 1ba, 7a	4(3D)					
チラムガイモツガイ科		1ab											
キセカイガイ													
ホツカモツガイ科													
オカラカモツガイ													
オカラカモツガイ科													
サツカモツガイ													
サツカモツガイモツガイ													
新オカラカモツガイ科													
ハリココロガイ科?													
カサギゼリ													
ハリココロゼリ													
ヒメカタツビ?													
キドカタツビ													
ヒメカタツウカ													
ヒメカタツウカ科													
ウラカモツウカ													
ハクサンヒメカタツウカ													
ヒメカタツウカ科													
ヒメカタツウカモツガイ													
ヒメカタツウカモツガイ科													
海産魚群 Marine maluscs													
ブルボンガイ													
スガメガイ													
スガメ (フツ)													
ヒメカタツウカモツガイ													
コゲツノブ													
マキシラソメスメハマツメ													
シマツメスメハマツメ													
ウネニマツメ													
ヘナツリ													
フタバカタツウカ													
ホシニミニ													
ウミコナ													
イモチニニ													
ウミコナ稚													
シマツボ													
タマコヒ													

表 17 陸平貝塚から得られた微小貝類遺体の詳細 (つづき - 3) .

セグメント番号 地点および深度	29 B真珠貝科 (L-S, dS) 深海貝科 (中等度)			23 B真珠貝科 (L-S, dS) 深海貝科 (中等度)			A真珠 中等度	111 B真珠貝科 (L-S, dS) 上層貝科 (中等度)			72 B真珠貝科 (L-S, dS) 中等度 (中等度)		
	時代 メランシイサズ (mm)	5	2.5	1	5	2.5	1	2.5	1	5	2.5	1	
地質学的特徴 Terrestrial analysis													
カワクチガイ													
カワクチモツガイ													
クリオカワクチモツガイ?													
イモチニニ													
カワムカイ													
マルクシヌマツムシ													
ノミコロ													
クチキレモドキ虫													
カゴクモツガイ													
キヌカワクチモツガイ? ミミ?													
海産魚骨標 (海産骨頭)													
マルクシヌマツムシ													
シオコナ													
シオコナアリ													
ウニコナ (定常不動)													
海産魚骨 others (Marine)													
フジワラガイ													
ウニコナ													
右浜貝テューブ													

表 17 陸平貝塚から得られた微小貝類遺体の詳細（つづき - 4）

表 17 陵平目塚から得られた微小目類遺体の詳細（つづき - 5）

V. まとめと課題

今回の成果として、陸平貝塚の規模の大きさや、周囲の地形を含めた景観が良好に残されていることが改めて確認され、それが保存範囲の策定と、国の史跡指定の大きな根拠となったことを、まずはあげなければならない。

遺跡の性格に関わる成果としては、縄文時代早期後葉から後期初頭に及ぶ、複数の時期の貝層が検出されたことと、貝塚に囲まれた台地平坦部において、縄文時代の、つまり貝塚を残した人たちの居住に関わる遺構群が確認されたことが注目される。

同一遺跡における、複数の時期にわたる斜面貝眉の形成は、霞ヶ浦沿岸では多くみられる現象であるが、早期、前期、中期、後期の多期に及ぶ貝眉が存在する遺跡は、管見の限り関東地方では知られていない。このことは陸平貝塚の特異性といえるものであり、研究対象としては、同一遺跡において漁撈文化の通時的变化を把握できる貴重な事例と捉えられる。

今回得られた早期後葉～後期初頭の貝層サンプルの分析（IV参照）では、縄文海進による溺れ谷や泥質干潟の形成が進んだ早期ではハイガイやマガキが主体であるのに対し、海面低下や土炒による埋積が進む前期以降は一貫して砂泥質干潟に生息するハマグリが安定して主体をなすこと、魚類については、当時内海であった霞ヶ浦の環境を反映して、早期～中期では内湾性種が優占し、後期初頭になるとウナギ属やハゼ科が急増すること、さらに、微小貝類の分析を通して、前期から中期にかけて貝塚周辺が森林地から草地的環境に変化することなどが明らかになった。ただし、存在が確実視される後期前葉と霞ヶ浦沿岸で漁撈文化が最も栄えるといわれる後期中葉の貝層サンプルが得られておらず、今後これらの時期のサンプルを探取し同様な分析を行う必要がある。

一方、居住に関わる遺構としては中期と思われる住居跡が1軒検出され、埋葬人骨（B貝塚No.1 トレンチ深掘部のII④層検出「中期後葉？」）の存在や、4基確認された後期前葉の埋設土器なども、住居を示唆する遺構群と捉えられよう。これらの遺構群は、いずれも台地縁辺部にあたる場所に位置し、中期～後期前葉の居住域が、斜面貝塚に隣接もしくは接する区域に残される傾向が指摘

できる。以前の調査でも、A貝塚の台地上縁辺部から中期後葉と後期前葉の住居跡が確認されており〔庄司1981、美浦村教委2004〕、この傾向を裏付ける。

しかし、居住に関してはいくつかの課題もある。ひとつは、複数の地点に貝塚が形成され、大戸の貝が残される縄文時代中・後期でも、東京湾東岸の大規模貝塚でもみられるような100軒を超えるような住居跡の存在が想定しにくいことである。今回の調査は部分的なもので、遺構群の全貌を把握できたものではないが、それでも貝塚の規模に比べて住居跡の密度が低い印象はぬぐえない。さらに、斜面貝眉が確認されている早期後葉と前期後葉にいたっては、炉穴と思われる土坑群が検出された他、住居跡等の目立った遺構は検出されなかった。現在までに霞ヶ浦沿岸の早・前期の斜面貝塚遺跡で住居跡が確認された事例が無いことも考慮すると、霞ヶ浦沿岸地域における斜面貝塚形成と居住の在り方を、地域性のあるものとして今後検証していく必要がある。なお、現状では貝層の形成が確認されていない後期後葉～晩期についても、量は少ないものの土器等の遺物が台地中央寄りからまとまって検出されており、漁撈が衰退した以後の活動を示す痕跡として興味深い。

居住と貝塚形成の在り方を探るには、陸平貝塚のみならず、後期の粗製土器が大量に遺棄されていた陣屋敷低湿地遺跡や、晩期の製塙遺跡である法堂遺跡を含む周辺の陸平遺跡群や、興津貝塚、虚空蔵貝塚、大谷貝塚など発掘によってデータが蓄積されている村内高橋川流域の貝塚群との比較も視野に入れていかなければならぬだろう。

以上の課題を受けて、2008年度（平成20年度）から、新たな確認調査が、再び住民参加のもと10ヶ年計画で開始された。今後、その成果を踏まえた上で、霞ヶ浦沿岸の縄文時代貝塚群の性格と、その中における陸平貝塚の特異性を位置付けていきたい。

二十数年前の調査をまとめるには忘却していることが多すぎたが、それを教えてくれたのは、当時の学生達の日誌であった。学生をはじめ当時の調査を支えていただいた多くの方々の若き情熱に感謝する。

引用・参考文献（I～IV-1, V）

- 赤井博之・佐々木義則 1996 「新治糞跡群須恵器坏A 1類の変化」 貝良岐考古 18 姫良岐考古同人会
- 赤星 直忠 1935 「横須賀市田戸先史時代遺跡調査」 史前学雑誌 7-6 史前学会
- 赤星 直忠 1936 「古式土器の一形式としての三戸式土器について」 考古学 7-9 東京考古学会
- 赤星 直忠 1947 「神奈川県野島貝塚」 考古学集刊 1 東京考古学会
- 赤星直忠・岡本勇 1957 「茅山貝塚」 横須賀市博物館研究報告(人文科学) 1
- 我孫子昭二 1974 「第6章第3節 繩文中期前半の土器」「貫井南」 小金井市貫井南遺跡調査会
- 阿部 芳郎 1996 「第4章 調査の成果と課題 調文後期のサヌカイト製石器群にみられる剥離面構成と技術」「津島岡大遺跡 7」 関山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 阿部 芳郎 1998 「堀之内 2 式土器の構成と地城性」 繩文時代 9 繩文時代文化研究会
- 阿部 芳郎 2001 「遠部第3類土器の系譜と変遷」 繩文時代 12 繩文時代文化研究会
- 池上 啓介 1937 「千葉県印旛郡白井町遠部石器時代遺跡」 史前学雑誌 9-3 史前学会
- 巾川 紀行 1987 「縄文人と美浦ロマン」 陸平通信創刊号 陸平調査会
- 茨城 県 1979 「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」
- 今村 啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(上)(下)」 考古学雑誌 63-1,2 日本考古学会
- 大川清・大島秀俊編 1977 「茨城県美浦村 虚空貝塚」 美浦村教育委員会
- 大野 雲外 1896 「常陸國霞力浦沿岸旅行談」 東京人類学会雑誌 121 東京人類学会
- 大村 哲 1987 「所謂「五領ヶ台式直後型式」研究の現状について」 下総考古学 9
- 陸平調査会 1989 「1987年度陸平貝塚周辺調査概報および周辺地域A地区分布調査報告」
- 陸平調査会 1990 「1988年度陸平貝塚周辺調査概報および概要」
- 陸平調査会 1992 「茨城県稻敷郡美浦村 陣屋敷遺跡」
- 陸平調査会 1992 「茨城県稻敷郡美浦村 根本遺跡」
- 岡本 勇 1961 「三浦市鶴が島台遺跡」 横須賀市博物館研究報告(人文科学) 5
- 鹿島薰・阪口豊 2009 「陸平遺跡周辺のいくつかの小規模な谷底低地における沖積層の特徴と縄文海進に伴う海域の変遷」「茨城県稲敷郡美浦村 陸平貝塚一調査研究報告書3・自然科学分野調査の成果一」 美浦村教育委員会
- 金子 直行 1996 「加曾利E式土器」「日本土器事典」 雄山閣
- 金子 浩昌 2009 「研究編」「東京国立博物館所蔵 肢角器集成」 東京国立博物館
- 金子 裕之 1979 「茨城県佐貫貝塚出土の後、晚期縄文式土器」 考古学雑誌 65-1 日本考古学会
- 瓦吹 堅 1984 「過去からのメッセージ 1陸平貝塚」 荘次波創刊号 荘次波の会
- 小杉 康 1990 「陸平貝塚の保存と調査—遺跡群の再認識と広域調査の可能性—」 貝塚史学 79
- 駒澤 悅郎 2009 「茨城県教育財團文化財調査報告 第317集 大谷貝塚」 茨城県教育財團
- 酒詰 伸男 1951 「茨城県陸平貝塚」 日本考古学年報 1 (昭和 23 年度) 日本考古学協会
- 酒詰 伸男 1959 「日本貝塚地名表」 土曜会
- 下総考古学研究会 1976 下総考古学 6
- 庄司 克 1981 「茨城県陸平貝塚発見の縄文土器」 貝塚博物館紀要 6 千葉市加曾利貝塚博物館
- 常総台地研究会 1975 「陸平貝塚」
- 鈴木 公雄 1963 「千葉県山武郡横芝町姥山 山武姥山貝塚の晚期縄文土器に就いて」 史学 36-1 三田史学会
- 鈴木 公雄 1963 「真福寺遺跡泥炭層出土の土器に就いて」 史学 39-2 三田史学会
- 鈴木 素行 1990 「Ⅲ-2 縄文時代の造構と遺物」「武田Ⅲ」 勝田市文化振興公社
- 谷井彪・宮崎朝雄・大塚孝司・鈴木秀雄・青木美代子・金子直行・細田勝 1982
「縄文中期上器群の再編」 研究紀要 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 寺門 義範 1964 「陸平遺跡における阿玉台式土器の在り方」 常総台地 2 常総台地研究会
- 戸沢充則・半田純子 1966 「茨城県法堂遺跡の調査」 貝塚史学 18
- 戸沢 充則 1979 「陸平貝塚」「茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代」 茨城県
- 戸沢 充則 1991 「陸平・動く貝塚博物館構想」 歴史手帖 19-5 名著出版
- 戸沢 充則 1993 「陸平貝塚の保存と活用—「動く博物館構想」の基礎—」「論苑考古学」 天山谷
- 戸沢充則編 1994 「縄文時代研究事典」 東京堂出版
- 中村 哲也 2008 「霞ヶ浦の縄文景観 陸平貝塚」 新泉社
- 中村 哲也 2009 「貝ケ庭貝塚出土の浮島 I 式土器」 茨城県考古学学会誌 21
- 西村 正漸 1957 「千葉県香取郡植房貝塚出土の土器」「学术研究」 6 早稲田大学教育学部

- 西村 正衛 1961 「千葉県成田市荒海貝塚（予報）」『古代』35 早稲田大学考古学会
- 西村 正衛 1966 「茨城県稻敷郡浮島貝ヶ窟貝塚」『学術研究』15 早稲田大学教育学部
- 西村 正衛 1967 「茨城県取手町向山貝塚」『学術研究』16 早稲田大学教育学部
- 西村 正衛 1968 「茨城県稻敷郡興津貝塚（第1次調査）」『学術研究』17 早稲田大学教育学部
- 西村 正衛 1972 「阿玉台式土器編年研究の概要」『早稲田大学大学院 文学研究科紀要』18 早稲田大学大学院文学研究科
- 西村 正衛 1984 「石器時代における利根川下流域の研究」早稲田大学出版部
- 馬場悠男・米田耕・梶ヶ山真里 2009 「陸平貝塚遺跡出土平安時代人骨」『茨城県稻敷郡美浦村 陸平貝塚－調査研究報告書3・自然科学分野調査の成果－』美浦村教育委員会
- 藤森 茂一 1965 『井戸尻』中央公論美術出版
- 美浦村教委 2001 『茨城県稻敷郡美浦村 美浦村遺跡分布調査報告書および美浦村遺跡分布図』美浦村教育委員会
- 美浦村教委 2004 『茨城県稻敷郡美浦村 池端遺跡』美浦村教育委員会
- 美浦村教委 2004 『茨城県稻敷郡美浦村 陸平貝塚－調査研究報告書1・1997年度発掘調査の成果－』美浦村教育委員会
- 美浦村教委 2006 『茨城県稻敷郡美浦村 陸平貝塚－調査研究報告書2・学史関連資料調査の成果－』美浦村教育委員会
- 美浦村教委 2009 『茨城県稻敷郡美浦村 陸平貝塚－調査研究報告書3・自然科学分野調査の成果－』美浦村教育委員会
- 山内 清男 1939～1941 『日本先史土器図譜』先史考古学会
- 山内 清男 1964 「網紋式土器・続論」『日本原始美術I』講談社
- 山内 清男 1979 『日本先史土器の繩紋』先史考古学会
- 吉田 格 1960 『横浜市称名寺貝塚』東京都武藏野郷土館調査報告書第1冊
- 和田 哲 1973 『浮島系土器の諸問題』『古和田台遺跡』船橋市教育委員会
- LIUIMA,C.SASAKI 1883 「OKADAIRA SHELL MOUND AT HITACHI」『AN APPENDIX TO MEMOIR VOL I ,PART I OF THE SCIENCE DEPARTMENT,TOKYO DAIGAKU,(UNIVERSITY OF TOKYO)』

表 18 出土土製品観察表

長さ・幅・厚さはcm、重さはg。欠損品破片は残存部の値。

土器片鱗の長さは、切目を通る軸方向。

図版番号	出土:トレンチ	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	種類	備考	分類
第12回 7 8 9 10	P 12-a列	I層	—	足2.5	足3.6	43	土偶	脚部破片	I b
			6.5	4.6		43			II b
			5.6	6.8		53	土器片鱗	破片	II b
第13回 39 40 41 42		II a層	—	4.6		19			I b
			7.8	6.2		67			a
			8.2	—		94	土製円盤	欠損品	b
第14回 50	P 14-a列	II b層	3.3	3.0		12			a
			2.4	2.6		7			b
			6.5	3.8		37	土器片鱗	欠損品	I b
第15回 13 14	P 14-a列	3住	—	5.0		21			I c
第17回 7 8	P 16-a列	I層	—	—		10	土製円盤		b
			1.6	1.6	孔径0.5	14	土器片鱗	破片	I n
			—	—		4	土器片鱗		
第18回 7 8	P 18-a列	6住1層	—	—		18			
			—	—		49	管状土鱗	破片	
			6.4	2.6	孔径0.6	26			
第19回 11 54 55		7住1層	—	—	2.9	66	I偶	脚～腰部破片	
			—	—		63		脚部？破片	
			—	—					
未図化 20	P 26-a列	一括	1.2	1.4	孔径0.2	2	球状土鱗		
			—	—		19	管状土鱗	破片	
			3.5	孔径1.0		29	土器片鱗		
第27回 21 22	M 17-(5)列	II b層	5.2	3.8		24			I b
			4.1	4.4		18			II b
			—	—		17	土器片鱗	欠損品	II b
第28回 70	O 17-(5)列	II b層	—	3.8		17			I a
			5.3	3.5		24			b
			4.8	4.6		25			b
第29回 86 87 88	N 17-(5)列	II b層	6.4	6.6		54			I c
			—	—		20			b
			—	3.3		10	土器片鱗	欠損品	I b
107 108 109	M N O 17 —(5)列	—括	2.9	2.6		8			II c
			—	—					
			—	—					
第35回 99	A 貝塚N 1	4住 I層	—	2.7	孔径0.4	16			
			3.1	3.4	孔径0.6	38			
			6.3	4.4		39			
第37回 31		27 I	3.0	3.4		13			I c
			5.2	3.4		22			II b
			—	5.0		28			I b
第38回 41 42		24土	3.4	3.6		13			II b
			3.9	3.0		19			I b
			3.6	2.6		11			II b
第41回 99 100 101 102 103 104		西部	—	3.4		10			II b
			3.0	2.8		16	土製円盤		b
			—	5.2		29			
第42回 120 121 122 123		中部	3.2	2.5		14			I a
			3.5	3.5		18			I b
			4.7	4.4		43			I b
第44回 184 185 186		東部	—	足3.0	足3.3	17	土偶	脚部破片	
			—	1.1	4.3	7	土器片鱗	破片	
			—	—		19	有孔円盤	破片	a
第45回 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204		東部	5.1	3.9		21	土器片鱗	破片	n
			3.5	—		11			
			3.9	4.1		20			
195 196 197 198 199 200 201 202 203 204		東部	5.1	4.6		37			I b
			5.7	3.4		32			I b
			6.6	6.2		68			I b
205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 249 250 251 252 253 254 255 255 256 257 257 258 258 259 259 260 261 262 263 264 264 265 265 266 266 267 267 268 268 269 269 270 270 271 271 272 272 273 273 274 274 275 275 276 276 277 277 278 278 279 279 280 280 281 281 282 282 283 283 284 284 285 285 286 286 287 287 288 288 289 289 290 290 291 291 292 292 293 293 294 294 295 295 296 296 297 297 298 298 299 299 300 300 301 301 302 302 303 303 304 304 305 305 306 306 307 307 308 308 309 309 310 310 311 311 312 312 313 313 314 314 315 315 316 316 317 317 318 318 319 319 320 320 321 321 322 322 323 323 324 324 325 325 326 326 327 327 328 328 329 329 330 330 331 331 332 332 333 333 334 334 335 335 336 336 337 337 338 338 339 339 340 340 341 341 342 342 343 343 344 344 345 345 346 346 347 347 348 348 349 349 350 350 351 351 352 352 353 353 354 354 355 355 356 356 357 357 358 358 359 359 360 360 361 361 362 362 363 363 364 364 365 365 366 366 367 367 368 368 369 369 370 370 371 371 372 372 373 373 374 374 375 375 376 376 377 377 378 378 379 379 380 380 381 381 382 382 383 383 384 384 385 385 386 386 387 387 388 388 389 389 390 390 391 391 392 392 393 393 394 394 395 395 396 396 397 397 398 398 399 399 400 400 401 401 402 402 403 403 404 404 405 405 406 406 407 407 408 408 409 409 410 410 411 411 412 412 413 413 414 414 415 415 416 416 417 417 418 418 419 419 420 420 421 421 422 422 423 423 424 424 425 425 426 426 427 427 428 428 429 429 430 430 431 431 432 432 433 433 434 434 435 435 436 436 437 437 438 438 439 439 440 440 441 441 442 442 443 443 444 444 445 445 446 446 447 447 448 448 449 449 450 450 451 451 452 452 453 453 454 454 455 455 456 456 457 457 458 458 459 459 460 460 461 461 462 462 463 463 464 464 465 465 466 466 467 467 468 468 469 469 470 470 471 471 472 472 473 473 474 474 475 475 476 476 477 477 478 478 479 479 480 480 481 481 482 482 483 483 484 484 485 485 486 486 487 487 488 488 489 489 490 490 491 491 492 492 493 493 494 494 495 495 496 496 497 497 498 498 499 499 500 500 501 501 502 502 503 503 504 504 505 505 506 506 507 507 508 508 509 509 510 510 511 511 512 512 513 513 514 514 515 515 516 516 517 517 518 518 519 519 520 520 521 521 522 522 523 523 524 524 525 525 526 526 527 527 528 528 529 529 530 530 531 531 532 532 533 533 534 534 535 535 536 536 537 537 538 538 539 539 540 540 541 541 542 542 543 543 544 544 545 545 546 546 547 547 548 548 549 549 550 550 551 551 552 552 553 553 554 554 555 555 556 556 557 557 558 558 559 559 560 560 561 561 562 562 563 563 564 564 565 565 566 566 567 567 568 568 569 569 570 570 571 571 572 572 573 573 574 574 575 575 576 576 577 577 578 578 579 579 580 580 581 581 582 582 583 583 584 584 585 585 586 586 587 587 588 588 589 589 590 590 591 591 592 592 593 593 594 594 595 595 596 596 597 597 598 598 599 599 600 600 601 601 602 602 603 603 604 604 605 605 606 606 607 607 608 608 609 609 610 610 611 611 612 612 613 613 614 614 615 615 616 616 617 617 618 618 619 619 620 620 621 621 622 622 623 623 624 624 625 625 626 626 627 627 628 628 629 629 630 630 631 631 632 632 633 633 634 634 635 635 636 636 637 637 638 638 639 639 640 640 641 641 642 642 643 643 644 644 645 645 646 646 647 647 648 648 649 649 650 650 651 651 652 652 653 653 654 654 655 655 656 656 657 657 658 658 659 659 660 660 661 661 662 662 663 663 664 664 665 665 666 666 667 667 668 668 669 669 670 670 671 671 672 672 673 673 674 674 675 675 676 676 677 677 678 678 679 679 680 680 681 681 682 682 683 683 684 684 685 685 686 686 687 687 688 688 689 689 690 690 691 691 692 692 693 693 694 694 695 695 696 696 697 697 698 698 699 699 700 700 701 701 702 702 703 703 704 704 705 705 706 706 707 707 708 708 709 709 710 710 711 711 712 712 713 713 714 714 715 715 716 716 717 717 718 718 719 719 720 720 721 721 722 722 723 723 724 724 725 725 726 726 727 727 728 728 729 729 730 730 731 731 732 732 733 733 734 734 735 735 736 736 737 737 738 738 739 739 740 740 741 741 742 742 743 743 744 744 745 745 746 746 747 747 748 748 749 749 750 750 751 751 752 752 753 753 754 754 755 755 756 756 757 757 758 758 759 759 760 760 761 761 762 762 763 763 764 764 765 765 766 766 767 767 768 768 769 769 770 770 771 771 772 772 773 773 774 774 775 775 776 776 777 777 778 778 779 779 780 780 781 781 782 782 783 783 784 784 785 785 786 786 787 787 788 788 789 789 790 790 791 791 792 792 793 793 794 794 795 795 796 796 797 797 798 798 799 799 800 800 801 801 802 802 803 803 804 804 805 805 806 806 807 807 808 808 809 809 810 810 811 811 812 812 813 813 814 814 815 815 816 816 817 817 818 818 819 819 820 820 821 821 822 822 823 823 824 824 825 825 826 826 827 827 828 828 829 829 830 830 831 831 832 832 833 833 834 834 835 835 836 836 837 837 838 838 839 839 840 840 841 841 842 842 843 843 844 844 845 845 846 846 847 847 848 848 849 849 850 850 851 851 852 852 853 853 854 854 855 855 856 856 857 857 858 858 859 859 860 860 861 861 862 862 863 863 864 864 865 865 866 866 867 867 868 868 869 869 870 870 871 871 872 872 873 873 874 874 875 875 876 876 877 877 878 878 879 879 880 880 881 881 882 882 883 883 884 884 885 885 886 886 887 887 888 888 889 889 890 890 891 891 892 892 893 893 894 894 895 895 896 896 897 897 898 898 899 899 900 900 901 901 902 902 903 903 904 904 905 905 906 906 907 907 908 908 909 909 910 910 911 911 912 912 913 913 914 914 915 915 916 916<br									

表 18 (つづき)

分類標凡例 I類：切目を通る軸を土器の水平方向にとるもの。II類：切目を通る軸を土器の垂直方向にとるもの。a類：側面序れ b類：側面割れ・擦れ c類：側面剥れ (III-1 参照)

図版番号	出土トレンチ	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	種類	備考	分類
第50回	B 貝塚No.1 L.15-⑤列	I層	3.3	3.1		13	土器片鱗		I a
			3.8	3.1		19			I b
			4.8	3.3		32			I b
			6.6	5.6		53			I b
			9.6	6.4		115			I b
			7.2	7.0		60			I b
			6.2	4.6		36			I b
			6.2	4.5		36			II b
			5.0	4.9		39			I a
			4.9	3.3		22			II b
			2.7	2.7		6			a
			4.0	3.5		21			b
			4.6	3.0		15			b
			4.2	4.5		12			b
			4.8	-		23		欠損品	b
			4.7	4.6		21			c
			6.5	5.2		55			c
			5.6	5.3		32			c
			-	-		3	土製円盤	有孔円盤 破片	a
第51回	貝殻直上	II層	4.6	3.5		21			I a
			4.2	3.6		16			II b
			3.7	3.5		15			I b
			8.2	5.9		68			I b
宋國化		I層	-	3.4		22	土器片鱗	一部欠損 阿玉台式	I b
			-	4.5		27		一部欠損 繪文	II b
			-	4.0		11		破片	I b
			4.2	4.2		24		上製円盤 加賀利E式	b
			3.9	3.4		15			II b
			4.9	4.2		22			I b
第55回	B 貝塚No.1 K.16-①列	I層	3.2	2.8		14	土器片鱗	一部欠損	II b
			4.5	4.4		19			b
			4.0	2.8		13		一部欠損	a
			3.6	3.1		12			II a
第56回	199 200 201	住居群	4.2	3.7		17	土器片鱗		I b
			3.5	2.9		13			I b
			-	-	1.6	21		上版 破片	b
第60回	65 B 貝塚No.2	I層・擾乱	3.2	2.8		12	土器片鱗		II a
			4.1	3.3		16			I a
			3.3	2.9		12			I b
			3.0	2.4		9			I b
			5.3	5.2		29			I b
			4.8	5.5		31			II b
			6.4	6.2		50			II b
			5.4	5.5		40			I c
			2.4	2.1		6		土製円盤	b
			-	4.6 孔径0.3		16		有孔円盤 欠損品	c
			-	5.7		26		有孔円盤 欠損品	a
			3.4	3.4	1.1	12		土製円盤 手捏ね	
			4.8	4.3		33			I c
			3.9	2.6		11			b
第61回	106 109 110	深堀1貝層	4.5	孔径1.6	9	4.5	土器片鱗	有孔円盤 欠損品	a
			-	-	5.0	16		破片 加賀利E式	II b
			-	-	7.3	33		破片 加賀利E式	II c
			-	-	6.0	37		破片 繪文	I c
			-	-	5.7	31		破片 繫文	II b
			-	-	5.0	16		破片	I a
本國化		I層・擾乱	-	-	7.3	33	土器片鱗		II b
			-	-	6.0	37			II c
			-	-	5.7	31			I c
			-	-	5.0	16			II b
			-	-	6.0	37			II c
			-	-	5.7	31			I c
第62回	58 D 貝塚No.1	II層	4.1	4.2		24	土器片鱗		I a
			-	-		18			I b
			3.6	3.2		12			I b
			6.2	4.1		35			I c
			3.2	2.9		13			II b
			3.7	2.7		13			I b
第65回	95 96	貝殻b層	-	6.2		43	土器片鱗	欠損品	II b
			3.4	2.4		12			II b
未國化		I層	-	4.5		17	土器片鱗	破片 繪文	II b
			-	3.3		13		欠損品 繪文	II b
第68回	14 D 貝塚No.2	(4)貝層上面	-	3.6		14	土器片鱗	欠損品 繪文	I c
			-	4.8		17		欠損品 繫文	I c
第69回	27	上部貝層	-	-	5.5	25	土器片鱗	破片 繫文	II b
			-	-	5.0	25		破片 繪文	II b
第72回	44 E 貝塚No.1	S 2層	5.5	-	1.1	15	块状耳飾	破片	
			-	-	1.5	4		破片	
第73回	10 G 貝塚No.1	I(2)層	-	2.8	3.0	8	土器片鱗		II b
			-	6.0	4.0	25			II b

表 19 出土石器観察表

長さ・幅・厚さはcm、重さはg。欠損品破片は残存部の値。

開拓番号	出土トレンチ	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	種類	石材	備考
第12回 11	P12-a列	I層	8.9	8.4	5.3	540	磨石	安山岩	
第14回 51		Bb層	1.6	3.3	1.0	5	両極打法石片	チャート	
未図化		黒曜石剥片碎片(Ⅰ層2、Ⅱa層1)							
第15回 15	P14-a列	Ⅲa	2.0	3.6	1.4	10	石核	チャート	
16		I層	2.3	3.2	0.3	3	研磨剥片	粘板岩	
第17回 9	P16-a列	I層	4.0	7.0	1.3	29	剥片	黑色安山岩	
10		I層	5.7	8.2	4.7	270	磨石	流紋岩	破損品
11		IIa層	4.3	4.3	2.0	64	磨製石斧	鈍紋岩	破片
未図化		黒曜石剥片碎片(Ⅰ層1、Ⅱa層1) 安山岩剥片碎片(Ⅰ層1) メノウ剥片碎片(一括1、Ⅱa層1)							
第19回 34	P18-a列	IIa層	2.1	2.5	0.6	2	剥片	鷺岩	
第20回 56		I層	8.2	5.0	4.4	195	石皿	安山岩	破片
57		6住	3.0	2.2	0.9	4	二次加工剥片	黒曜石	
58		6.7住	3.5	2.6	1.8	9	石核	黒曜石	
59		6住	4.0	2.9	1.5	11	両極打法石片	黒曜石	
60		6住	2.0	1.5	0.8	2	両極打法石片	黒曜石	
未図化		磨石片(Ⅱa層1) 黒曜石剥片碎片(6住1、7住1) メノウ剥片碎片(6住1) チャート剥片碎片(6住2)							
第22回 8	P22-a列	I層	1.8	1.0	0.7	1	石鏃	チャート	欠損品
9		I層	2.4	2.2	0.9	5	両極打法石片	チャート	
第23回 3	P24-a列	I層	2.2	1.3	0.5	1	石鏃	チャート	欠損品
4		I層	2.4	2.3	1.9	14	火打石	石英	
第24回 1	P26-a列	I層	2.4	2.7	1.0	6	剥片	チャート	
3		I層	5.7	3.4	2.2	49	磨石	安山岩	破片
未図化		黒曜石剥片碎片(Ⅰ層1) 石英剥片碎片(Ⅰ層2)							
第25回 12	P28-a列	貝層上面	6.0	7.6	4.2	550	磨石	安山岩	欠損品
未図化		黒曜石剥片碎片(Ⅰ層3、貝層一面1) メノウ剥片碎片(Ⅱ層1)							
第27回 23	M17-⑤列	一括	2.6	1.7	0.6	3	二次加工剥片	黒曜石	
24		一括	2.6	1.8	0.9	3	剥片	黒曜石	
第28回 71	O17-⑤列	一括	9.2	3.3	3.3	56	敲石	ホルンフェルス	
第29回 89	N17-⑤列	一括	1.6	2.3	0.6	2	両極打法石片	黒曜石	
90		一括	1.9	1.9	0.7	3	剥片	黒曜石	
91		一括	7.6	4.7	3.9	192	敲石	砂岩	
110	MNO17 -⑤列	一括	6.0	5.7	3.1	143	磨石	安山岩	
111		一括	7.3	8.0	3.4	240	磨石	安山岩	欠損品
112		IIb層	9.0	6.7	1.3	56	磨石	凝灰質砂岩	
第31回 10	H28-①列	I層	4.0	4.0	1.6	32	石核	珪質頁岩	
未図化		石英剥片碎片(Ⅰ層1)							
第32回 1	H30-①列	I層	3.1	1.7	0.4	4	磨製石斧	綠泥片岩	刃部欠損
第35回 17	A貝塚No.1	II住下層	4.3	5.7	5.3	133	石核	メノウ	
第40回 52		西部貝層	2.2	1.2	0.4	1	石鏃	黒曜石	
57		西部	2.8	2.2	2.7	13	石核	黒曜石	
58		西部	2.3	1.7	0.4	2	両極打法石片	黒曜石	
59		西部	2.5	3.2	0.6	5	両極打法石片	黑色安山岩	
60		西部	3.0	2.9	1.2	8	剥片	黒曜石	
61		西部	5.8	4.0	2.1	72	敲石	流紋岩	
未図化		磨石片(西部1) 黒曜石剥片碎片(西部7)							
第42回 124		中部	4.1	1.7	0.8	5	搶先形尖頭器	黑色安山岩	旧石器
125		中部	2.3	2.1	0.7	3	二次加工剥片	黒曜石	
126		中部	6.9	3.8	1.4	53	石鏃?	流紋岩	
127		中部	7.0	6.0	3.6	181	敲石	砂岩	
128		中部	11.0	5.0	3.3	290	磨製石斧	流紋岩	
未図化		黒曜石剥片碎片(中部1)							
第45回 205		東部	4.1	4.1	1.3	23	剥片	流紋岩	
206		東部	5.0	2.8	1.6	29	両極打法石片	チャート	欠損品
207		東部	1.9	2.1	0.9	4	両極打法石片	黒曜石	
208		東部	6.7	5.2	3.3	170	敲石	安山岩	
209		東部	6.0	5.6	3.6	91	敲石	凝灰岩	
210		東部	6.0	4.0	1.1	25	打製石斧?	ホルンフェルス	
未図化		黒曜石剥片碎片(東部14) 流石剥片碎片(東部1)							
第49回 60	B貝塚No.1	I層	2.2	2.5	1.2	6	石核	黒曜石	
61	L15-⑤列	I層	4.0	3.2	0.8	16	石鏃	流紋岩	
62		I層	8.3	6.1	2.2	150	鍛器	ペグマタイト	
63		I層	5.4	4.9	3.3	108	敲石	凝灰岩	
64		I層	4.1	7.0	3.7	151	石皿	妙岩	破片
第51回 103		II層	3.1	2.6	1.0	6	剥片	黒曜石	
104		II層	2.9	2.3	0.7	3	剥片	黒曜石	
105		II層	1.4	2.6	0.7	3	剥片	黒曜石	
106		II層	9.9	7.3	4.1	470	磨石	安山岩	
114		II⑥層	1.7	0.8	0.5	1	石鏃	黒曜石	
未図化		黒曜石剥片碎片(Ⅱ層12、Ⅱ⑥層3、深堀貝層下層1)							
第55回 191	B貝塚No.1	I層	2.5	1.3	0.4	2	二次加工剥片	黒曜石	
192	K16-①列	I層	3.8	3.9	1.4	24	打製石斧?	ホルンフェルス	破片
未図化		黒曜石剥片碎片(Ⅰ層2、貝塚1、15f層面1、15g層1)							

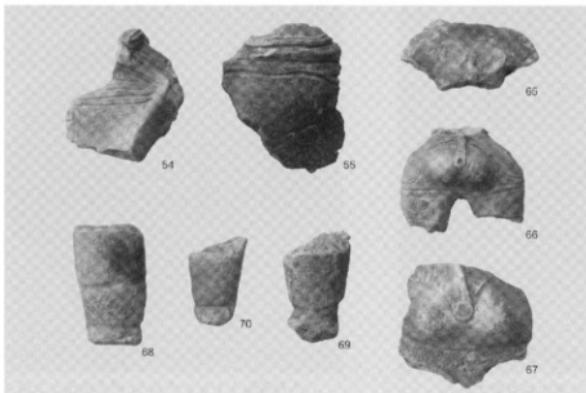
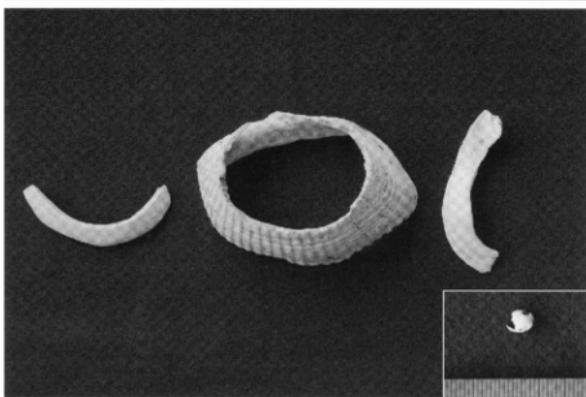
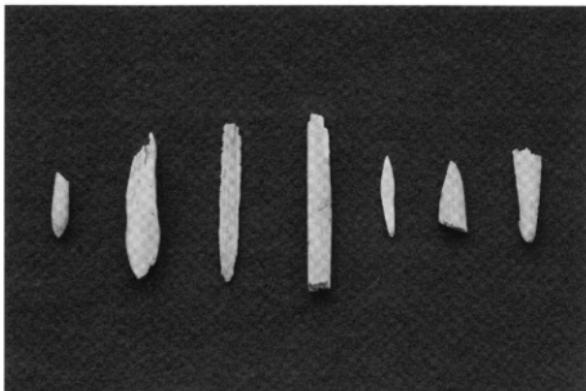
表 19 (つづき)

図版番号	出土トレンチ	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	種類	石材	備考
第60図	B 貝塚No.2	I 層・擾乱	2.5	1.7	0.6	3	石礫	チャート	
78		I 層・擾乱	3.0	2.4	0.4	2	石礫	黒曜石	一部欠損
79		I 層・擾乱	2.6	1.4	0.7	2	石礫	黒曜石	
80		I 層・擾乱	3.3	3.0	0.6	5	剥片	黒曜石	
81		I 層・擾乱	3.3	3.3	1.1	11	剥片	黒曜石	
82		I 層・擾乱	3.6	3.5	0.7	7	剥片	黒曜石	
83		I 層・擾乱	6.5	7.2	5.2	310	磨石	流紋岩	
84		黒曜石剥片碎片 (I 層・擾乱)							
未図化									
第64図	D 貝塚No.1	II 層	5.0	6.2	3.4	81	圓石	砂岩	破片
61		II 層	6.8	4.5	2.6	96	圓石	凝灰岩	
62		II 層	7.4	5.3	3.7	194	圓石	流紋岩	欠損品
63		貝塚A層	8.1	5.3	2.7	133	圓石	流紋岩	欠損品
第65図	E 貝塚	黒曜石剥片碎片 (II 層 1・貝塚 C 層 1)							
87		活	8.0	5.2	4.3	250	磨石	砂岩	破片
第67図	D 貝塚No.2	Ⅱ層	2.1	4.0	1.2	7	石核	黒曜石	
1		③貝層上面	1.8	3.0	0.5	2	両極打打法片	黒曜石	
15		④貝層上面	2.1	3.1	0.5	2	剥片	黒曜石	
16		④貝層上面	2.5	2.0	0.5	2	剥片	黒曜石	
17		⑤貝層上面	8.4	4.9	1.5	78	打製石斧	ホルンブッシュ	
18		⑥貝層上面	9.0	4.0	1.5	88	磨石	流紋岩	
19		⑦貝層上面	4.6	6.7	4.2	77	砥石	泥岩	
20		下部貝層	8.6	8.8	3.6	270	砥石	石英粗面岩	
第69図	G 貝塚	安山岩磨石 (II 層 1) 黒曜石剥片碎片 (上部貝層 1) 研磨剥片碎片 (下部貝層 1)							
42		H 層	3.5	1.9	0.3	3	研磨剥片	粉岩岩	破片
11		貝層上面	5.0	7.4	5.0	210	磨石	安山岩	破片
未図化									
第71図	E 貝塚	I 層	4.2	3.1	0.7	15	研磨石斧	流紋岩	欠損品
11		貝層上面	5.9	4.6	3.2	99	石器	砂岩	破片
19		黒曜石剥片碎片 (H 層 1)							
第73図	G 貝塚	I 層	2.3	2.5	0.9	6	両極打打法片	チャート	
11		一括	4.2	3.1	0.7	15	研磨石斧	流紋岩	欠損品
12		貝層I層	-	-	-	-			
20		貝層II層	-	-	-	-			

表 20 出土骨角器・貝製品観察表

長さ・幅・殻長・殻高・厚さはcm。重さはg。欠損品破片は残存部の値。

図版番号	出土トレンチ	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	種類	素材	備考
第40図	A 貝塚No.1	西部貝層6層	6.4	2.2	1.7	12	切断痕のある鹿角		
53		西部貝層	6.2	7.3	30	貝刃	ハマグリ右殻		
54		西部貝層	0.9	0.6	9	瓶飾品	ツノガイ		
55		西部貝層5層	7.6	9.9	68	貝輪未成品	セトウガイ左殻		
56		一括	5.1	6.3	21	貝刃	ハマグリ右殻		
62		一括	7.7	2.7	8	貝輪	イタボガキ	破片	
63		擾乱	-	-	7	貝刃	ハマグリ	破片	
未図化									
第51図	B 貝塚	I 層一括	4.8	1.2	0.7	2	刺突具	シカ中手・巾足骨	
107		深掘貝層一括	5.6	7.4	25	貝刃	ハマグリ左殻		
126		深掘貝層上層	5.3	0.7	0.2	1	刺突具	ツイ殻尾棘	先端欠損
126		深掘貝層下層	5.1	6.2	15	貝刃	ハマグリ右殻		
151		深掘貝層下層	5.7	7.5	26	貝刃	ハマグリ左殻		
152		深掘貝層下層	5.6	7.4	19	貝刃	ハマグリ左殻		
153		深掘貝層下層	7.3	9.3	41	貝刃	ハマグリ左殻		
154		深掘貝層下層	5.2	7.5	21	貝刃	ハマグリ左殻		
第60図	B 貝塚	I 層・擾乱	5.8	1.0	0.7	4	刺突具	シカ中手・巾足骨	
85		I 層・擾乱	6.1	7.8	35	貝刃	ハマグリ右殻		
86		I 層・擾乱	5.4	6.4	19	貝刃	ハマグリ右殻		
87		深掘貝層上層	5.6	6.0	21	貝刃	カガミガイ右殻		
111		深掘貝層上層	5.3	6.0	21	貝刃	ハマグリ左殻		
112		深掘貝層上層	5.2	7.5	21	貝刃	ハマグリ左殻		
112		貝層A層	5.9	6.9	25	貝刃	ハマグリ右殻	一部欠損	
112		貝層A層	5.2	6.7	19	貝刃	ハマグリ右殻		
109		貝層A層	1.1	6.1	6	貝輪未成品	ベンケイガイ	破片	
第66図	D 貝塚	I 層	2.7	0.5	0.2	0.2	刺突具	シカ中手・巾足骨	
69		I 層	2.4	0.5	0.5	1	刺突具	シカ中手・巾足骨	
70		I 層	3.2	1.2	0.5	1	刺突具	シカ中手・巾足骨	
71		I 層	5.5	7.0	19	貝刃	ハマグリ右殻		
第69図	D 貝塚	上部貝層	0.4	0.4	0.04	0.04	瓶飾品	ツノガイ	
28		下部貝層	6.3	5.3	8	貝輪未成品	アカガイ	破片	
41		貝層2層	-	-	-	-			
第72図	E 貝塚	I 層	-	-	-	-			
46		貝層No.1	-	-	-	-			



写真図版 II



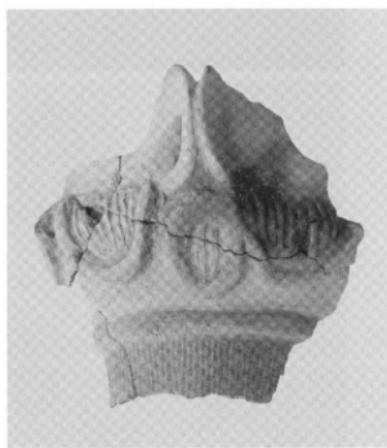
P 16-a トレンチ出土土器 22



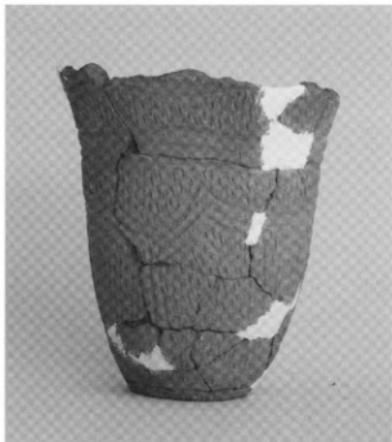
P 16-a トレンチ出土土器



A貝塚No.1 トレンチ第 27 号土坑埋設土器 30



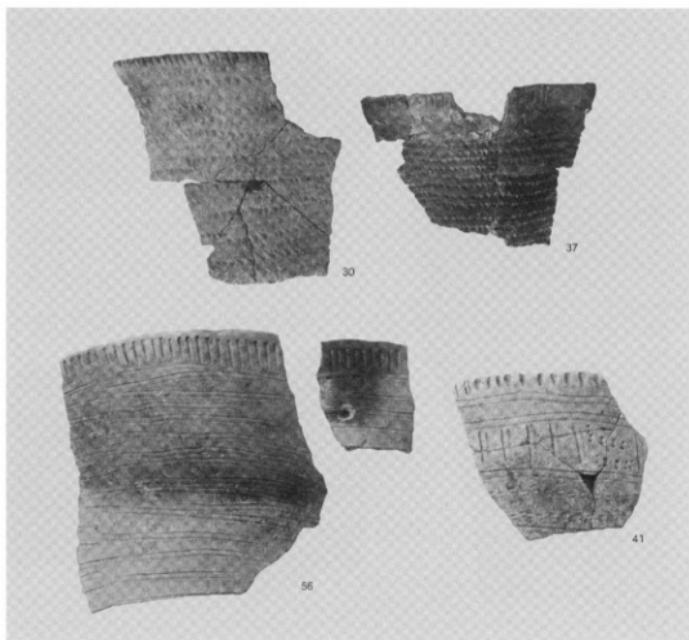
A貝塚No.1 トレンチ第 52 号土坑出土土器 44



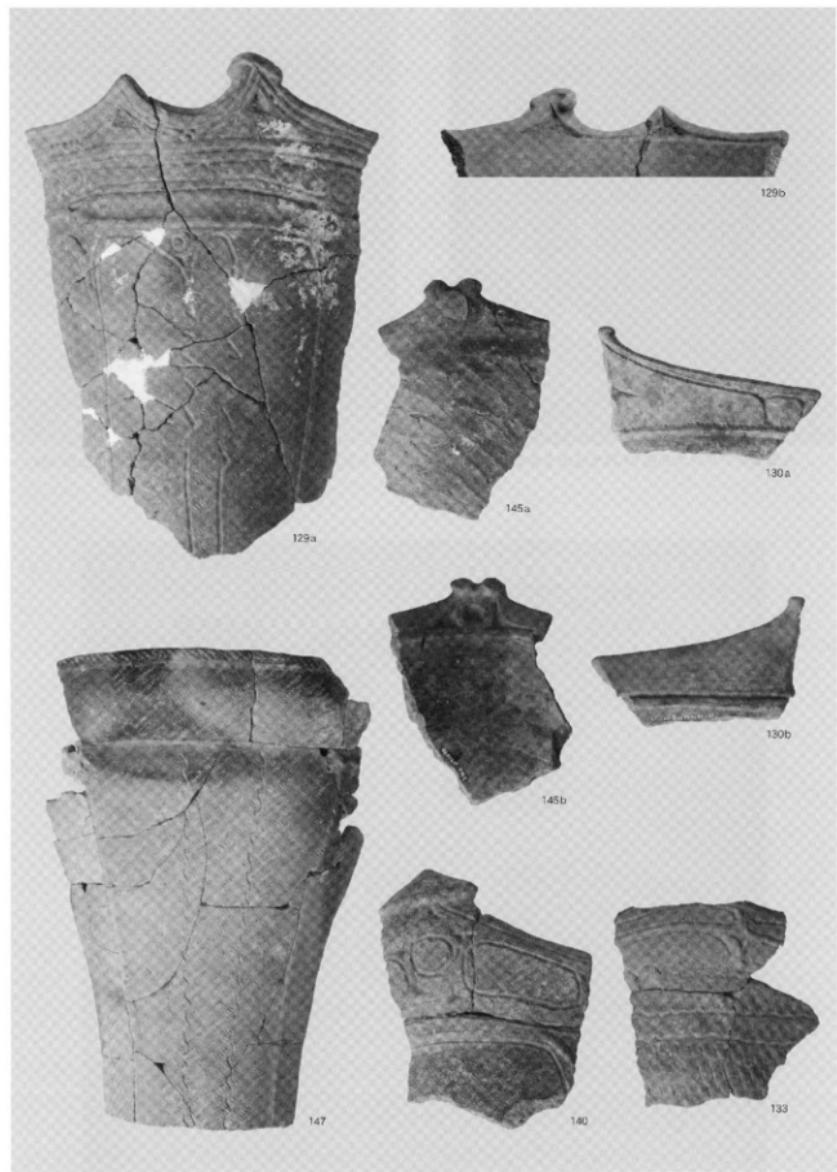
A貝塚No.1 トレンチ第24号土坑出土土器 38



B貝塚No.1 トレンチ深堀部貝層下層出土土器 148



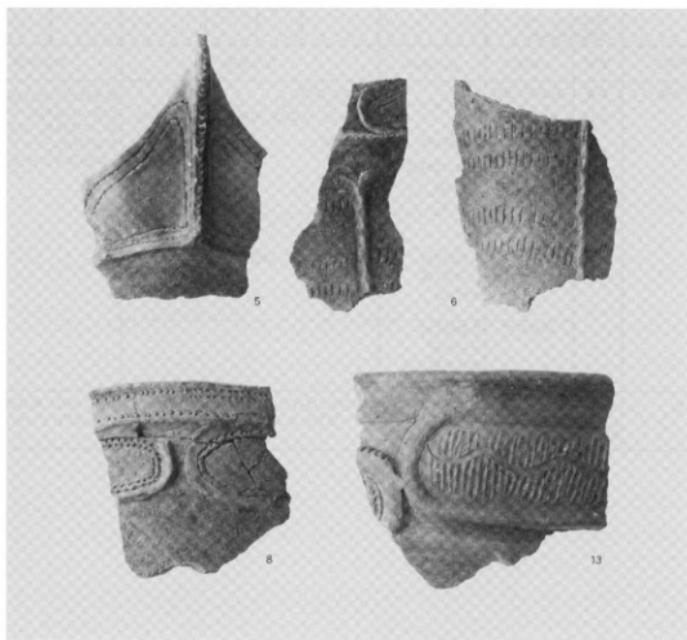
E貝塚No.1 トレンチ貝層出土土器



B貝塚No.1 トレンチ深堀部貝層出土土器



D貝塚No.2 トレンチ出土土器 12



D貝塚No.2 トレンチ出土土器

報告書抄録

ふりがな	おかだいらかわづか							
書名	陸平貝塚							
副書名	調査研究報告書4・1987年度確認調査の成果							
シリーズ名	陸平研究所叢書							
シリーズ番号	5							
編著者名	中村哲也、樋原岳二、黒住耐二							
収集機関	美浦村教育委員会							
発行機関	美浦村教育委員会							
発行機関所在地	〒300-0404 茨城県稟敷郡美浦村土浦2359番地 美浦村文化財センター							
発行年月日	西暦2010年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
おかだいらかわづか 陸平貝塚	いせききんぱくごうち 茨城県稟敷郡 みやまちのむらみやまざか 美浦村大字土浦 みやまむらとよ	084425	001	36度 00分 50秒	140度 21分 03秒	19870806 ~ 19870904	約592.5m ²	保存のための 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
陸平貝塚	貝塚 集落	旧石器時代		槍先形尖頭器			縄文時代早期後葉、前期 後葉、中期初頭、中期前葉、中期後葉、後葉初期の 貝層検出し、サンプルによる動物遺体分析実施。	
		縄文時代	貝層 住居跡4軒 埋設土器4基 土坑3基	縄文土器、土製品、石器、骨角器、貝製品、 動物遺体				
		弥生時代		弥生土器				
		古墳時代 ~平安時代	住居跡9軒 土壙墓1基 土坑1基	土師器、須恵器、陶器類、土製品、石製品、 鉄器				
		時期不明	住居跡6軒 土坑80基 溝状遺構10条					
要約	今回の調査で、周囲の自然景観も含め遺跡が良好に遺存していること、貝塚に囲まれた台地平坦部に集落跡が展開していることが確認された。また、縄文時代早期～後葉に及ぶ複数の時期にわたって貝層が形成されていることも判明した。							

陸平研究所叢書 5

茨城県稲敷郡美浦村 陸平貝塚 — 調査研究報告書4・1987年度確認調査の成果 —

発行年月日 平成22(西暦2010)年3月31日

編集・発行 美浦村教育委員会 〒300-0404 茨城県稲敷郡美浦村大浦2359

美浦村文化財センター(陸平研究所) Tel.029-886-0291



Ibaraki, Okadaira Shell Mound

Miho Village Board of Education 2010